熊本県文化財調査報告第 321 集

託麻弓削遺跡群
中江遺跡

―白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)―

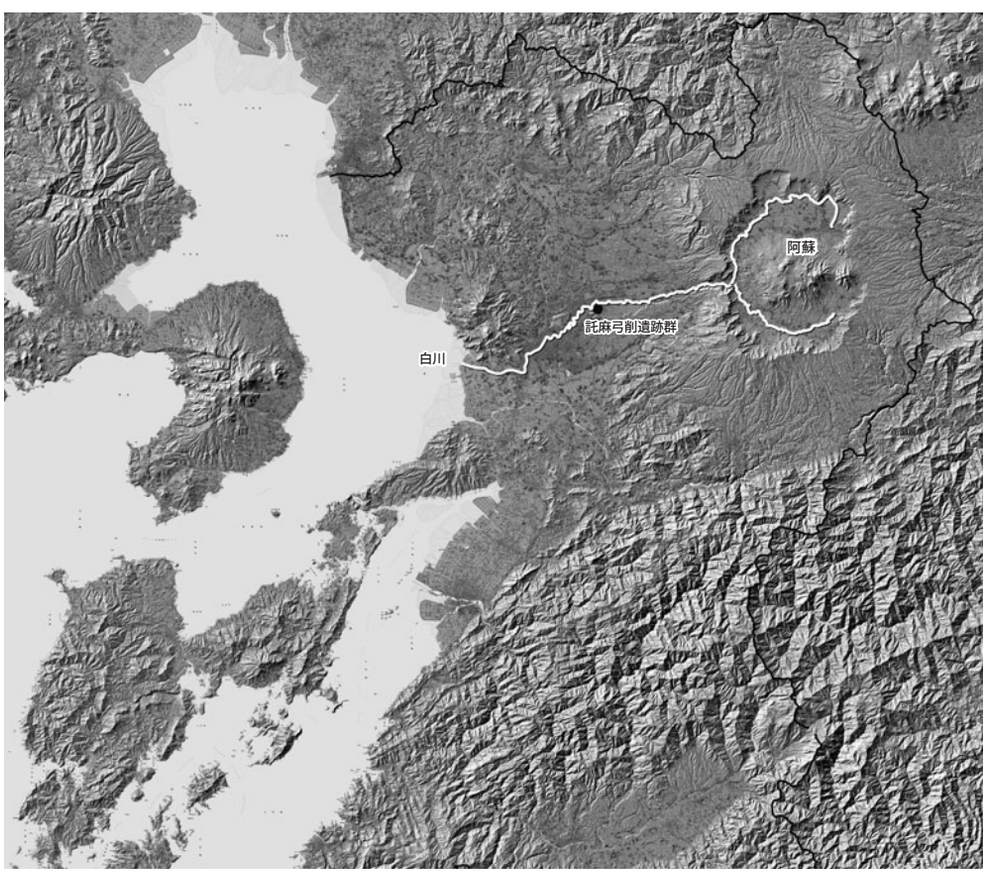
2016.3

熊 本 県 教 育 委 員 会

熊本県文化財調査報告第 321 集

託麻弓削遺跡群
中江遺跡

―白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)―



2016.3

熊 本 県 教 育 委 員 会

調査区全景　3 区より白川下流側を望む

3 区より白川上流側を望む

１－１区(左)・１－２区（右）　全景

２区　全景

２区　全景

２区　ＳＩ０１　焼土検出状況

３－１区　全景

３－２区　全景

序　　文

平成 24 年 7 月 12 日に熊本県を襲った熊本広域大水害は、甚大な被害をもたらしました。熊本県教育委員会では、その災害復旧事業に伴い、予定地内の文化財発掘調査を実施しています。

今回報告する託麻弓削遺跡群・中江遺跡ともに、正式な埋蔵文化財発掘調査は今回が初めてです。調査の結果、縄文時代から奈良・平安時代までの建物跡などが検出されました。その他江戸時代の染付なども見つかっており、縄文時代から現在まで延々とこの地で暮らしていたことがわかりました。２つの遺跡はともに、白川左岸に隣接した場所に立地しているので、縄文時代から現在まで、何千年という時の中で、何度か洪水等の災害にも見舞われたことだと思います。それでも人々は災害を乗り越え、この地で暮らしています。調査した場所は遺跡のごく一部分ですが、遺跡の内容の一端が明らになった意義は大きいと思われます。

本書が郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化向上の手助けとなり、またこの災害の記憶を次世代へ伝えることの一助となれば幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査の円滑な実施にご理解、ご協力をいただきました地元の方々をはじめ関係機関に対して心より感謝申し上げます。

平成２８年３月２５日

熊本県教育長　田　崎　龍　一

例　言

1　本書は、白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、記録保存を目的として実施した、熊本県熊本市東区弓削町に所在する託麻弓削遺跡群及び熊本市東区中江町に所在する中江遺跡の発掘調査報告書である。
2　現地調査は、熊本県央広域本部熊本土木事務所の依頼を受け、平成２６年度に、熊本県教育庁総務局文化課が行った。なお、託麻弓削遺跡群３区は民間調査組織である株式会社イビソク九州支店に調査を委託した。
3　国土座標軸による測量基準杭の設定は、託麻弓削遺跡群１区２区は株式会社十八測量設計、中江遺跡は八洲開発株式会社に委託した。座標はいずれも世界測地系を用いている。
4　遺構実測は調査担当者がおこなっているが、託麻弓削遺跡群２区の一部を株式会社有明測量開発社に委託した。
5　遺構等の写真撮影は調査担当者が行い、空中写真撮影は、九州航空株式会社熊本営業所に委託した。
6　整理・報告書作成は平成２７年度に行った。
7　本書の大扉の地図は、カシミールで作成した。周辺遺跡地図で使用した地図は、熊本県・市町村電子自治体共同運営協議会作成の地図を利用した。
8　遺物実測及び製図は、春川香子、中川治、嵐英隆、園田智子、濵﨑清子、丸山勉、渡邊いわ子、山本邦子が行った。
9　遺物写真撮影は、村田百合子、松本智子、佐藤典子、春川、古城史雄が行った。
10　本書の執筆は、古城が行った。
11　本書の編集は、古城を中心に行い、春川、中川、嵐、園田、濵﨑、丸山、渡邊、山本が補助した。
12　本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡　例

1　本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
2　報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。
3　須恵器については、断面を黒で塗色、土師質の須恵器はグレーで塗色し、その他のものは白抜きにした。
4　土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帖」（財団法人日本色彩研究所：2004）に準拠した。
5　写真の縮尺は任意である。
6　遺構名称は、竪穴建物をSI、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、その他の不明遺構をSXで表記している。

本文目次

序文
例言・凡例
託麻弓削遺跡群
第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査及び整理の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第３節　調査と整理の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２章　託麻弓削遺跡群の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第２節　基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　第３節　１区の調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第４節　２区の調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
　第５節　３区の調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第４章　総括
　第１節　託麻弓削遺跡群の性格 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
　第２節　竪穴建物について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
遺物観察表 ・・・ 97
写真図版

中江遺跡
Ⅰ　調査の経過 ・・・157
Ⅱ　中江遺跡の地理的・歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
Ⅲ　調査の成果 ・・・161
Ⅳ　総括 ・・・164
遺物観察表 ・・・165
託麻弓削遺跡群・中江遺跡　参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
写真図版

報告書抄録

託麻弓削遺跡群挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第２図　基本土層及び１－２区土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３図　２区基本土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第４図　３－１区西壁・東壁土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第５図　１－１区遺構配置図及び出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第６図　１－２区遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第７図　１－２区 SI01・SI02 平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第８図　１－２区 SI01・SI02・Ｐ１・Ｐ２断面図及び SK01 実測図 ・・・・・・・・・・・・・ 13
第９図　SI01(2)、SI02(3 ～ 9) 出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第 10 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第 11 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第 12 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (3) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第 13 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第 14 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (5) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第 15 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (6) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第 16 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (7) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第 17 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (8) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第 18 図　１－２区包含層等出土遺物実測図 (9) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第 19 図　２区縄文時代遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第 20 図　２区遺構配置図 (SI01 を除く) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
第 21 図　２区 SI01 焼土・炭化物範囲図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第 22 図　２区 SI01 実測図及び遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第 23 図　２区 SI01 出土遺物実測図 (1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第 24 図　２区 SI01 出土遺物実測図 (2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第 25 図　２区 SI01 出土遺物実測図 (3) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第 26 図　２区 SI01 出土遺物実測図 (4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第 27 図　２区 SI01 出土遺物実測図 (5) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第 28 図　２区包含層等出土遺物実測図 (1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第 29 図　２区包含層等出土遺物実測図 (2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第 30 図　２区包含層等出土遺物実測図 (3) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第 31 図　２区包含層等出土遺物実測図 (4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第 32 図　２区包含層等出土遺物実測図 (5) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第 33 図　２区包含層等出土遺物実測図 (6) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第 34 図　２区 SI02 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第 35 図　２区 SI03 実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第 36 図　２区 SI04 実測図 及び出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
第 37 図　２区 SI05 実測図・遺物出土状況 及び出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・ 45
第 38 図　２区 SI06 実測図及び遺物出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

第 39 図　２区 SI06 出土遺物実測図 (1)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 40 図　２区 SI06 出土遺物実測図 (2)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第 41 図　２区 SI07 実測図 及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第 42 図　２区 SI08 実測図・遺物出土状況 及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 43 図　２区 SI09 実測図 及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第 44 図　２区 SI10 実測図 及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第 45 図　２区 SB01 実測図 及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第 46 図　２区 SB02 実測図 及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第 47 図　２区 SB03 実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第 48 図　２区 SB04 実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 49 図　２区柱列実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第 50 図　２区 SK01・02・03 実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 51 図　２区 SD01・02 実測図及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第 52 図　２区 SX01 実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 53 図　３－１区遺構配置図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 54 図　３－１区包含層等出土遺物実測図 (1)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 55 図　３－１区 SI01 実測図及び遺物出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第 56 図　３－１区 SI01 出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第 57 図　３－１区 SI02・SK03 実測図及び遺物出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第 58 図　３－１区 SI02 出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第 59 図　３－１区 SI02(13 ～ 16) 及び SK03(17) 出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第 60 図　３－１区 SK01 実測図及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第 61 図　３－１区 SK02 実測図及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第 62 図　３－１区 SD01 実測図及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 63 図　３－１区 SD02 出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
第 64 図　３－１区 SX01 実測図及び遺物出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第 65 図　３－１区 SX01 出土遺物実測図 (1)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第 66 図　３－１区 SX01 出土遺物実測図 (2)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第 67 図　３－１区 SX01 出土遺物実測図 (3)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第 68 図　３－１区 SX02・SD03 実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
第 69 図　３－１区 SX03 実測図及び遺物出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第 70 図　３－１区 SX03 出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第 71 図　３－１区 SX04 実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第 72 図　３－１区 SX05 実測図及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第 73 図　３－１区包含層等出土遺物実測図 (2)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第 74 図　３－１区包含層等出土遺物実測図 (3)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第 75 図　３－２区遺構配置図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
第 76 図　３－２区 SI01 実測図・遺物出土状況及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
第 77 図　３－２区 SI02・SK01 実測図・遺物出土状況及び出土遺物実測図　・・・・・・・・・・・・ 89
第 78 図　３－２区 SX01・02・03 実測図及び遺物出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

第 79 図　３－２区 SX01(76 ～ 79)･02(80 ～ 84) 出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91
第 80 図　３－２区 SX03 出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第 81 図　託麻弓削遺跡群調査区配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

託麻弓削遺跡群表目次

表１　周辺遺跡一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
表２　遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97

託麻弓削遺跡群写真図版目次

図版１　１－１区完掘状況 北→
１－２区西壁断面状況 東→
１－２区北壁断面状況 南東→
図版２　１－２区 SI01・SI02 完掘状況 東→
１－２区 P1 完堀状況 南→
１－２区 P2 完堀状況 東→
図版３　１－２区 SK01 完堀状況 東→
１－２区完掘状況 南→
図版４　２区 北端部断面状況 南東→
２区 杭 2-4・2-5 断面状況 南東→
２区 SI01 遺物出土状況 南東→
図版５　２区 SI01 完掘状況 南東→
２区 SI02 完掘状況 南西→
２区 SI03 完掘状況 南東→
図版６　２区 SI04 完掘状況 南西→
２区 SI05 完掘状況 北西→
２区 SI06 完掘状況 南東→
図版７　２区 SI07 完掘状況 北東→
２区 SI08 完堀状況 東→
２区 SI09 完堀状況 南西→
図版８　２区 SI10 完堀状況 東→
２区 SB01 南西→
２区 SB02 南西→
図版９　２区 SB03 南西→
２区 SB04 東→
２区 SK01 完掘状況 東→
図版 10　２区 SK02 完堀状況 南→
２区 SD01・SD02 完堀状況 南東→
２区 SX01 完堀状況 西→
図版 11　３－１区西壁土層断面状況
３－１区調査区東壁土層断面状況
３－１区 SI01a － a' ベルト土層断面状況
図版 12　３－１区 SI01 遺物出土状況
３－１区 SI01 完堀状況
３－１区 SI02 完堀状況
図版 13　３－１区 SK01 遺物出土状況
３－１区 SD01 完堀状況
３－１区 SX01 検出及び遺物出土状況
図版 14　３－１区 SX01 完堀状況
３－１区 SX02・SD03 完堀状況
３－１区 SX03 遺物出土状況
図版 15　３－１区 SX03 完堀状況
３－１区 SX04 完掘状況
３－１区 SX05 完掘状況
図版 16　３－２区 SI01 完掘状況
３－２区 SI02 硬化部分土層断面状況
３－２区 SX01・02・03 検出及び遺物出土状況
図版 17　１区出土遺物（１～１５）
図版 18　１区出土遺物（１６～２８）
図版 19　１区出土遺物（２９～４４）
図版 20　１区出土遺物（４５～６２）
図版 21　１区出土遺物（６３～７３）
図版 22　１区出土遺物（写１・７４～８１）
図版 23　１区出土遺物（８２～８６）
図版 24　２区出土遺物（１～１８）
図版 25　２区出土遺物（１９～３６）
図版 26　２区出土遺物（３７～５５）
図版 27　２区出土遺物（５６～７３）
図版 28　２区出土遺物（７４～９１）
図版 29　２区出土遺物（９２～１０９）
図版 30　２区出土遺物（１１０～１２６・１２９）
図版 31　２区出土遺物（１２７・１２８・１３０～１４２）
図版 32　２区出土遺物（写１～写４）
図版 33　３区出土遺物（１～１８）
図版 34　３区出土遺物（１９～３６）
図版 35　３区出土遺物（３７～５１・５３）
図版 36　３区出土遺物（５２・５４～７０）
図版 37　３区出土遺物（７１～８７・写１）

中江遺跡挿図目次

第１図　中江遺跡１区・２区・３区平面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・158
第２図　中江遺跡１区平面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・159
第３図　中江遺跡２区・３区平面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・160
第４図　中江遺跡１区土層断面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
第５図　中江遺跡出土遺物実測図 (1)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
第６図　中江遺跡出土遺物実測図 (2)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・163

中江遺跡表目次

遺物観察表　・・165

中江遺跡写真図版目次

図版１　１区西壁土層断面状況
　　２Ｔ・３Ｔ礫出土状況
　　１区　全景
図版２　２区・３区完掘状況
　　２区・３区全景
　　２区　完掘状況
図版３　出土遺物（１～１７）
図版４　出土遺物（１８～２８）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

調査の原因は平成24年７月12日に発生した熊本広域大水害の復興事業によるものであり、詳細な経緯は、「新南部遺跡群（10次・11次）・吉原遺跡　白川河川激甚対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（熊本県文化財調査報告第320集）を参照されたい。

今回報告する託麻弓削遺跡群については、平成25年８月６日の試掘確認調査を皮切りに計８回の試掘確認調査を実施している。その結果、今回の調査区内において、縄文時代から古代にかけての遺構と遺物の存在を確認した。また従来の遺跡の範囲より南西側に広がることも明らかとなった。この調査結果について平成26年４月６日付け教文第83号で熊本土木事務所に通知した。併せて「熊本県遺跡地図」の修正を行い、熊本市教育委員会に通知した。

その後平成26年４月14日付け央土災対４号の２熊本県知事名で文化財保護法94条第１項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成26年４月16日付け文振発000040号で熊本市教育長から熊本県教育長あて進達された。工事内容と試掘確認調査の結果を照らし合わせた結果、発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を教文第284号で熊本市教育長、熊本県知事あて通知した。また平成26年５月22日付け央土災対22号の２で発掘調査の依頼通知が提出された。なお、３区については民間調査組織を導入している。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

１　発掘調査の組織（平成26年度）

調査責任者　手島伸介（文化課長）
　　西住欣一郎（課長補佐）
調査総括　　岡本真也（主幹兼文化財調査第２係長）
調査事務局　廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）松尾康延・有馬綾子（参事）天草英子（主任主事）
調査担当　　１区　中村幸弘（参事）、土野雄貴、菰田博隆、柴田拓実（非常勤職員）
　　２区　尾崎潔久（文化財保護主事）、多賀晴司、大坂亜矢子（非常勤職員）
　　３区　株式会社イビソク九州支店　主任調査員　阿比留士朗　調査員　宮城毅
　　調査技師　仲座琢磨　監理技師　栃原正美

調査作業員

１区　石田重敬、石淵勝子、井手春代、緒方範子、岡本勝吉、奥村信博、川上薫、神﨑博、木林忠司、住永佐由利、関根龍子、辰島正徳、鶴本雄司、富永俊房、中村孝昭、西山雅廣、増村富貴子、松川良一、右田正範、山下民生、渡邉捷紀

２区　石田美知子、井手美幸、稲本桂子、上村久子、牛丸数政、緒方正明、木村崇、熊谷邦彦、坂梨學、椎葉仁美、島田健一郎、髙本勝美、田中鳴美、谷口実知子、塚本勇、永井健一、中村洋三、中村義博、春野宗敏、平田健治、藤原英敏、松井昭子、松本直美、宗村裕、山中康彦、渡邉由佳利、石村義則、関律子、松山誠一、後藤まや

２　整理の組織

整理責任者　手島伸介（文化課長）
　　村崎孝宏（課長補佐）
整理総括　　岡本真也（主幹兼文化財調査第２係長）

整理事務局　廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）・有馬綾子・天草英子（参事）・坂井田端志郎（主任学芸員）
竹馬牧子（主事）

整理担当　古城史雄（主幹）・春川香子・中川治・佐藤淳子・橋口冬美（臨時整理補助員）

整理作業員

嵐英隆、井王直厳、石田敦子、伊藤智治、井上秀子、内田孝子、内村尚美、近藤広子、白木はる乃、園田智子、田中洋子、溜淵俊子、西田法子、濵﨑清子、原口美和子、平岡賢、福島典子、府内博子、松本直枝、松本裕子、丸山勉、吉岡直子、渡邊いわ子、上野栄子、松原泰子、山本邦子、結城あけみ、河津洋伶

調査指導及び協力者（順不動・敬称略）

網田龍生、林田和人、師富国博、後藤愛弓（以上熊本市観光文化交流局文化振興課）

清田純一（熊本市塚原歴史民俗資料館）、金田一精（熊本城調査研究センター）

髙木正文

第３節　調査と整理の経過

１　調査の経過

各調査区とも先行して平成 26 年５月から６月にかけ表土を剥いでおり、ここに記述する調査期間は表土剥ぎ後の期間である。

１区調査の経過

１区の調査は平成 26 年７月 23 日から同じく平成 26 年 12 月９日までの約５カ月であった。調査 1―1 区と１－２区は同時並行で調査をおこなっている。特記するような事項はないが、11 月 16 日に現場公開を行い、62 名の参加者がある。また最終日の 12 月９日に空中写真撮影をおこなっている。

２区調査の経過

２区の調査期間は平成 26 年７月 14 日から同年 12 月 24 日までの約６か月弱の期間であった。

８月 21 日（木）に託麻小学校教職員、供合地域農地・水・環境保全組織職員の方が地域理解研修の一環で来跡される。遺跡説明の後、発掘体験を実施する。

９月９日　委託した遺構実測図作成を開始

９月 12 日　航空写真撮影

11 月６日　S014（現 SI01）を確認

11 月 16 日　くまもと教育の日　秋の現場公開を実施。参加者 66 名。

12 月９日　航空写真撮影

12 月 24 日　調査終了

３区調査の経過

３区の調査期間は平成 26 年９月２日から平成 27 年３月３日までの約６か月であった。２月 21 日に空中写真撮影を行い、３月３日に調査を終了している。

２　整理の経過

整理は、託麻弓削遺跡群及び中江遺跡を一括して行っている。

平成 27 年４月 20 日より整理作業を開始した。１次整理は、まず遺物の洗浄から注記までをセットとして、まず託麻弓削遺跡群１区を完了させ、順に２区・３区と行っていった。中江遺跡は遺物量が少ないため１区から３区まで一括して行った。次に遺物の接合及び石膏入れを行ったが、同様に託麻弓削遺跡群１区から始め完了させた後に、２区・３区、中江遺跡と移っていった。一方２次整理作業は、図面の検討から行い、検討終えた後に製図作業に移っていった。図面の検討に手間取り製図作業は８月になってしまった。また製図作業と並行して、石膏入れまで終了した遺物の実測図を作成していった。

第２章　託麻弓削遺跡群の位置と環境

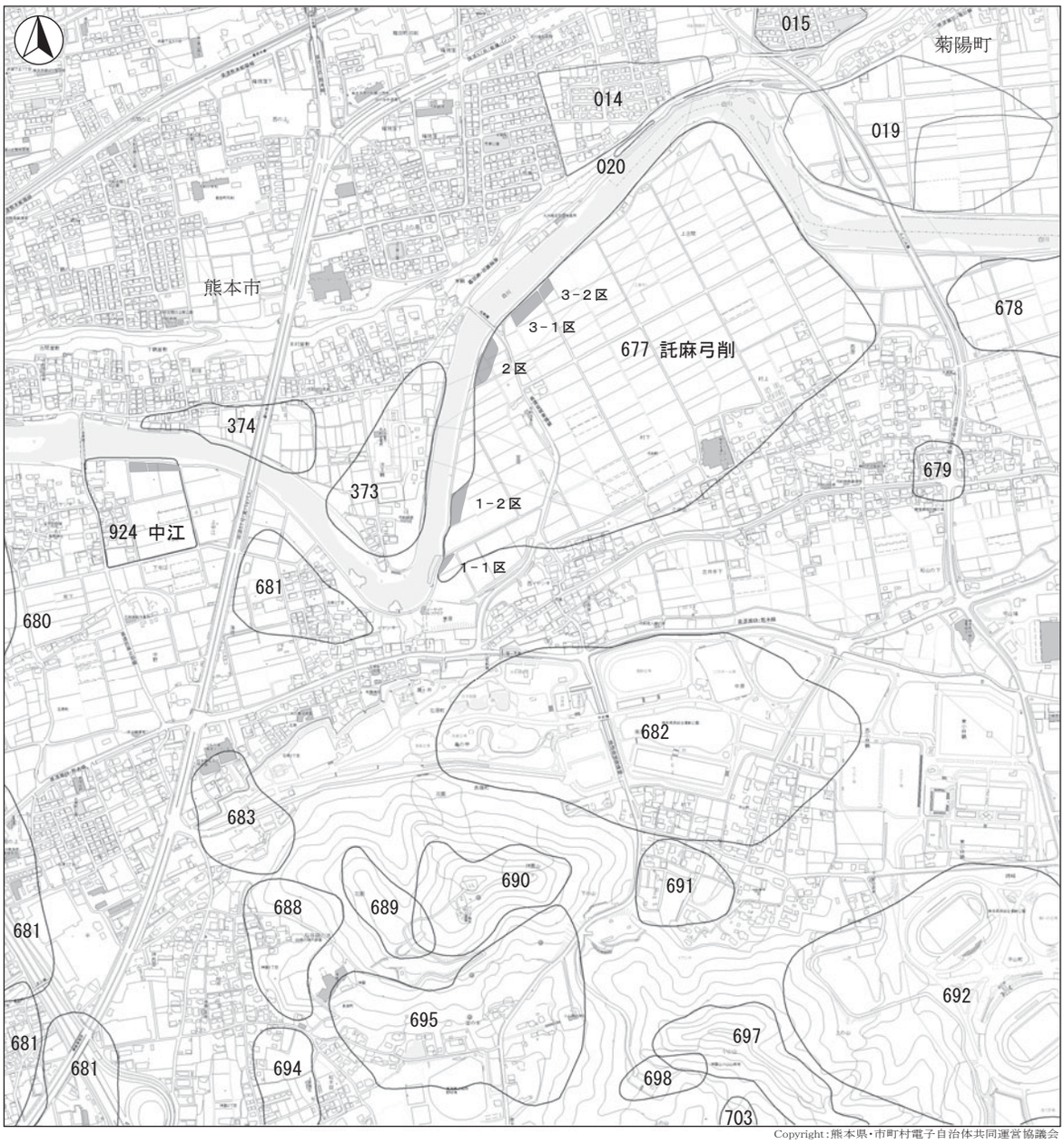
遺跡の所在する熊本市東部の白川流域の地理的環境、歴史的環境については、既に「新南部遺跡群（10 次・11 次）・吉原遺跡　白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（熊本県文化財調査報告第 320 集）に記載されているので、ここでは託麻弓削遺跡群と中江町遺跡周辺に限って遺跡の立地を中心として記述する。

阿蘇カルデラを源流とする白川は、西南西にむかって蛇行を繰り返しながら有明海に注ぐ。その流れが中途でやや南寄りに角度が変わる箇所に託麻弓削遺跡群、中江町遺跡が存在する。この箇所を詳細にみれば、西南西に流れていた白川が、一旦大きく北に流れを変え、その後南西方向に向かう箇所の左岸に託麻弓削遺跡群が位置し、その後再度北に流れを変え、その後南西に向かう箇所の左岸に中江遺跡が位置する。このような河川の蛇行により形成された張り出し部には他にも多くの遺跡が存在している。

その中の張り出した河岸段丘一帯が託麻弓削遺跡群の範囲である。昭和 48 年３月 31 日刊行の「熊本市東部地区文化財調査報告」では、上流側が弓削上古閑遺跡（更にトンノマエ（天神林）遺跡、イデミゾ遺跡に分けられる）、下流側が弓削宮原遺跡とされていた。その後両遺跡の中間地点でも遺物が出土するので、一つの遺跡群として捉えられるようになり、昭和 56 年の「熊本市内遺跡地図」では託麻弓削遺跡群と名称が変更になっている。

昭和 49 年 11 月 20 日から 12 月 30 日にかけてほ場整備事業に先立ち分布調査及び試掘確認調査が行われている。その包含層の深さを参考に工事の設計が行われているので、遺跡はほとんど影響を受けていないようである。しかしその時の試掘確認調査の内容については、不明である。これまでに正式な発掘は行われておらず託麻弓削遺跡群として知られている遺物の多くは表面採集資料である。縄文時代前期、後期、晩期の土器や石器・土偶の他、弥生時代の土器や甕棺などがある。また土師器も出土している。

今回の調査では、下流側の１区は暗渠排水が縦横に廻っており、その水路の底からは石に混じって布目瓦や墨書土器などが出土している。また石帯も出土している。いずれも原位置を保っているものはないが近接地に古代の公的な機関の存在が想定される。また２区では主に縄文時代後期・晩期の遺構と遺物や古代の遺構と遺物が確認され、３区では主に弥生時代後期の遺構と遺物が確認されている。関連する周辺の遺跡としては、左岸の上流には、縄文時代後・晩期の遺物、弥生時代後期の竪穴建物が検出されている鹿帰瀬遺跡、下流には縄文時代後・晩期の遺物が採集されている石原町遺跡がある。遺跡の背後には、託麻三山の一つの神園山に所在する瓦窯跡が存在する神園山遺跡群がある。また弥生時代後期の遺構が検出されている山尻遺跡群などがある。一方対岸には弥生時代中期から後期前半の竪穴建物や甕棺が検出されている梅ノ木遺跡や弥生時代後期の竪穴建物が検出されている法王鶴遺跡がある。



Copyright：熊本県・市町村電子自治体共同運営協議会

第１図　周辺遺跡分布図

熊本県（43）熊本市（201）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
373	法王鶴	北区龍田町	縄文・弥生	包蔵地
374	弓削前畑	北区龍田町弓削小坂屋敷	縄文～中世	包蔵地
677	託麻弓削遺跡群	東区弓削町	縄文	包蔵地
678	鹿帰瀬	東区鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地
679	弓削廃寺跡	東区龍田町弓削	中世	寺社
680	吉原	東区吉原町殿田	縄文～平安	包蔵地
681	石原町	東区石原町	縄文～中世	包蔵地
682	山尻遺跡群	東区龍田町弓削山尻	弥生	包蔵地
683	石原瀬々井	東区石原町瀬々井	縄文	包蔵地
686	供合松ノ上	東区上南部町	縄文～中世	包蔵地
687	神園	東区長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵地
688	神園桜井	東区長嶺町	縄文～中世	包蔵地
689	神園山西麓	東区長嶺町下の山	古代	包蔵地
690	神園山城跡	東区長嶺町下の山	中世	城
691	平山居屋敷	東区平山町	古代・中世	包蔵地
692	平山石ノ本	東区平山町	旧石器～縄文	集落
694	神園田淵屋敷	東区小山町、長嶺町	平安・中世	包蔵地
695	神園山遺跡群	東区長嶺町、小山町	奈良・平安	包蔵地
697	小山城跡	東区小山町	中世	城
698	小山上の山	東区小山町	縄文～中世	包蔵地
703	楳谷寺瓦窯跡（小山瓦窯跡群）	東区小山町	奈良・平安	生産
924	中江	東区中江町	縄文～古代	包蔵地

熊本県（43）菊陽町（404）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
014	今石	津久礼　今石	縄文～中世	包蔵地
015	今石城跡	津久礼　今石	中世	城
019	梅ノ木	津久礼　梅の木	弥生	包蔵地
020	今石横穴群	津久礼　今石	古墳	古墳

表１　周辺遺跡一覧表

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

１　調査の方法

調査区の名称は、白川の下流側から、１区・２区・３区としている。１区の調査区は、既存道路を挟んで２箇所に分かれるため、南側の調査区を１―１区とし、北側の調査区を１―２区とした。３区も調査区は既存道路を挟むため　西側を３―1 区、東側を３―２区としている（第１図）。

各調査区内に１辺 10 mの正方形のグリッドを平面直角座標系に合わせて設定した。各グリッドの中心からみて北東側のＸ軸、Ｙ軸の交点の数値を、Ｘ座標の百の位と十の位、つづいてＹ座標の百の位と十の位を並べて表示し、そのグリッドの名称としている。

調査は重機により表土を剥ぎ、次いで人力による遺構確認のための清掃作業、遺構検出、遺構掘削という手順で調査を進めた。その間に、随時土層断面図・遺構配置図・遺構実測図の作成や写真撮影をおこなっていった。

２　整理の方法

各調査区ともに、遺構には先頭にＳをつけた番号で表示されていた。個別に平面図・断面図が作成されているもので、その後調査担当者が遺構ではないと判断したもの以外は掲載している。しかしほとんどの遺構についてその性格が書かれていなかったので、竪穴建物や不明遺構など、遺構の性格については、整理担当者が判断し、ＳＩ（竪穴建物）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＫ（土坑）、ＳＤ（溝）、ＳＸ（その他不明遺構）など遺構記号で表記した。なお、竪穴建物より規模が小さく、方形や円形などの遺構をＳＫとし、不定形でその性格が不明な遺構をＳＸとした。ピットについてもすべてＳ番がつけられていたがピットについては掘立柱建物や柵列以外の並ばないものについては除外し、遺構配置図にのみ掲載した。その他近現代のものと思われるものについても、遺構配置図にのみ掲載している。

一方遺物については、遺構出土の遺物を優先して選んでいる。そのため遺構から小片のみが出土している場合は、図化できるものは掲載した。一方包含層等出土の遺物は、時代ごとにまんべんなく掲載できるよう心掛け選定した。そのため撹乱から出土の遺物も掲載している。

第２節　基本土層

託麻弓削遺跡群の中でも今回の３箇所の調査区は白川に隣接している地点であり、平成 24 年の水害による土砂の堆積をはじめ昭和 28 年６月 26 日の水害の洪水層が堆積している地点が存在するなど、過去の洪水による土砂の堆積も随所に見られる。その堆積状況は一様ではなく、数メートル離れるだけで土層の状況が変わってしまうので、３箇所の調査区の基本土層を対比させるのは困難であった。そこで予備調査時の 21 本のトレンチの土層を参考にほぼ全域に共通する土層模式図（以下、基本土層とする）を作成し、この基本土層図と各調査区の土層と対比させることとした。３箇所の調査区にすべて共通する層は、遺構確認面としている基本土層６層（黄褐色土）だけである。

予備調査の結果を元に作成した託麻弓削遺跡群基本土層は、第２図上段のとおりである。

１層　平成 24 年の熊本広域大水害時の洪水層であり、ほぼ全域にわたり存在していた。

２層　現在の耕作土である。

３層　昭和 49 年頃のほ場整備時の客土である。場所によっては、昭和 28 年６月 26 日水害の洪水層が存在する場合もある。

1　表土(洪水層)

2　耕作土

3　客土等
　場所によっては、昭和49年頃のほ場整備時の客土がある。
　また昭和28年6.26水害の洪水層が残存している場合もあり、
　その場合はその下に旧耕作土がある。

4　黒褐色土
　場所により、暗褐色・茶褐色の表現　砂質が弱い場所・強い場所がある
　古代から弥生遺物包含層とされているが、出土量はすくないようである。

5　暗褐色土(遺物包含層)
　場所により砂質が弱い場所・強い場所がある
　弥生遺物包含層

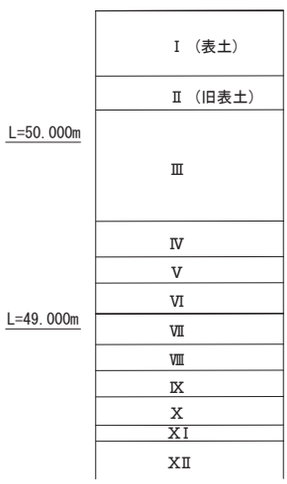
6　黄褐色土
　他に表現は、褐色土にぶい黄褐色、明褐色、灰褐色などの表現がある。
　砂質が弱い場所・強い場所がある。
　この層が地山となる場合もある。
　遺構検出面　縄文後晩期遺物包含層と考えられている。

7　硬質砂質土
　すべての地域で存在するわけではない。
　堆積が厚いところ、薄い所がある　ブロックで存在する場合もある。

8　褐色砂質土
　他に明黄褐色砂質土の表現
　縄文遺構検出面だが、地山の場合もある。

9　砂礫層
　地山

託麻弓削遺跡群基本土層（スケール任意）



Ⅰ　現表土
　平成24年7月の九州北部豪雨による洪水層　砂層だが部分的に礫混じる

Ⅱ　10YR3/4暗褐色土
　旧表土　水害以前の表土　しまり強　粘性あり　Ⅰ層との境にアスファルト残る箇所あり

Ⅲ　7.5YR3/4暗褐色土
　しまりあり　粘性あり　旧表土下の造成土か場所によっては砂礫が大量に混じることも
　また下方にしまりない耕作土のような部分もみられるが同一層だとしている
　マンガンや酸化鉄が沈殿して黒ずんでいる

Ⅳ　7.5YR4/2灰褐色土
　ややしまりあり　粘性あり　断面 2・3にはない層
　かなり乱れた層で青灰色粘土、マンガン粒、鉄分の沈殿層が
　入り混じっている
　礫が多く部分的に入り込んだ洪水堆積層か、Ⅲ層と同様の造成土であろう

Ⅴ　10YR3/3暗褐色砂質土
　ややしまりあり　粘性あまりなし　基本砂(質)層だがラミナ状に粘土層が見られる
　所々かなり硬くなっており調査開始時の検出面に残っているところもある

Ⅵ　10YR2/3黒褐色砂質土
　しまりなし　粘性あまりなし　土質はⅤ層に類似　こちらはしまりがなく細砂が主である
　Ⅴ層Ⅵ層とも土層のような洪水堆積層か

Ⅶ　10YR4/1褐灰色粘質土
　ややしまりあり　粘性あり　酸化鉄が筋状に入る　水田の床土のような層だが床土になるかは不明
　1-2区に南北に走る段の下で主に堆積している　現代のゴミが混じるのでこの層までは現代か

Ⅷ　10YR4/3にぶい黄褐色土
　あまりしまりなし　やや粘性あり細砂を少し含んでおり少し砂質である
　Ⅶ層との境にはマンガン粒が沈殿しており黒ずんでいる

託麻弓削遺跡群１－２区西壁土層断面図1/40

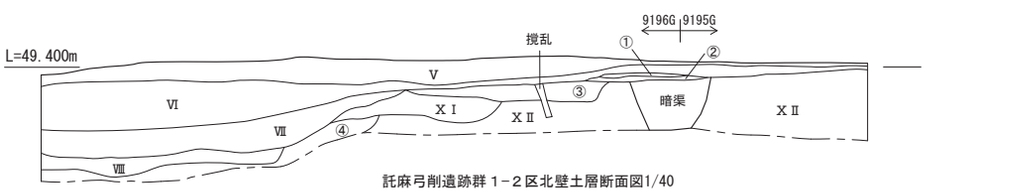
Ⅸ　10YR4/2灰黄褐色土
　土質はⅧ層に類似するがこちらの方が粘性がある
　上方はマンガン粒の沈殿で少し黒く下方は灰褐色粘土ブロックが混じりやや灰色がかっている

Ⅹ　10YR3/3暗褐色土
　土質はⅨ層に類似　砂・粘土等が混在しており　安定した堆積とは言えない
　やはり上方はマンガン粒が沈殿して黒くなっている

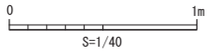
ⅩⅠ　10YR4/4～3/4褐色～暗褐色土
　下層であるⅩⅡ層の漸移層
　Ⅹ層とⅩⅡ層が入り混じる層で場所によって堆積状況が異なる

ⅩⅡ　10YR5/8黄褐色砂質土
　あまりしまりなし　あまり粘性ない　地山層　遺構検出面としている
　この層からその下の層(ⅩⅢ層？)に人頭大の礫(河原石のような円礫)が多く混じる
　砂が筋状に入ることもあるが洪水等によるものか

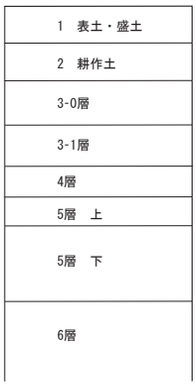
①　10YR3/4暗褐色土　しまり　粘性あり
②　10YR3/3暗褐色土　しまりあり　粘性やや強い
③　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土　しまり、粘性あまりなし
④　2.5Y3/2黒褐 土質③に類似



託麻弓削遺跡群１－２区北壁土層断面図1/40



第２図　基本土層及び１ー２区土層図(S=1/40)



2区基本土層(スケール任意)

1　表土・盛土

2　耕作土

3-0層　2.5Y4/1黄灰　極細砂質シルト
ごくわずかに細砂～極細砂まじる
全体的に粗く土壌化
厚みがあれば3-0層と3-1層の層界は明瞭

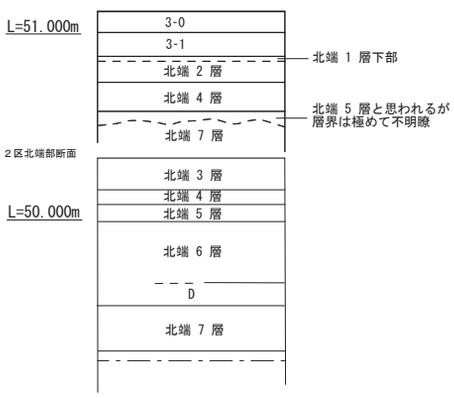
3-1層　2.5Y3/2黒褐～3/1　極細砂シルト
土壌化　細い粒々状のところ多い
3-0層に比べ暗色　細粒

4層　確認調査で褐色砂質土とされるもの

5層上　5Y4/1灰　シルトまじり極細砂
若干細砂まじる　シルト～細砂のブロック
5層下のほうがやや粗粒もほとんど同じ
杭2-5付近からシルト～極細砂になる

5層下　7.5Y4/1灰　シルトまじり極細砂
若干細砂まじる　やや粗いまじりのところ多い
6層との層界不明瞭なところあり
又しみのように暗くなっているように
みえるところもあり
5層上に比べ明るい

6層　5Y4/1灰～5/1　シルト～極細砂　シルトまじり極細砂
わずかに細砂まじる
標高50.7mくらいより上は酸化により
やや黄色　下はややオリーブになる
全体的に上方に細粒になる
東へ若干細粒になる
硬い部分　シルト～極細砂　横方向のラミナ顕著
流水による堆積構造を残す



杭2-3付近北端土層1/40

北端 1 層　5Y4/1灰～4/2 極細砂まじりシルト
下部は北端 1 層と北端 2 層がブロック状にまじる　（泥層）

北端 2 層　10YR3/1黒褐～4/1 極細砂まじりシルト
北端 1～7 層で最も暗く　3-1層と同じくらいの暗さ
細かいツブツブ状のところ多く土壌化

北端 3 層　5Y4/1灰～4/2 シルト
若干極細砂まじる　若干撹乱しているか　（砂泥層）

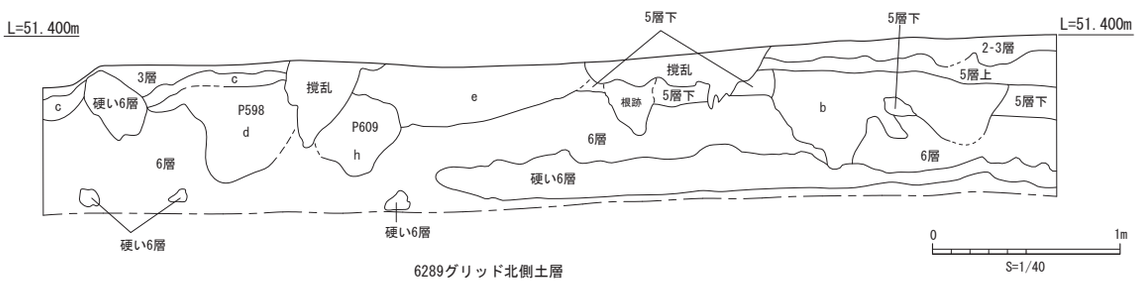
北端 4 層　10YR4/1褐灰～3/2 極細砂まじりシルト
土壌化と　以下記載なし

北端 5 層　北端 4 層下の土壌化ゆるい又はしみ込み　不明瞭
北端 4 層より明るく北端 6 層より暗い

北端 6 層　5Y4/1灰～5/2灰オリーブ 極細砂まじりシルト～極細砂質シルト　（砂泥層）

D　10YR4/1灰黄褐～5/1　5Y5/1灰
シルト～極細砂が粗いブロック状　φ5mmくらいのもの多い
撹乱を受けているものと思われる
鉄分の沈着あり

北端 7 層　10YR4/2灰黄褐～4/1　極細砂まじりシルト
ツブツブ状目立つところあり　低いところはゆるめの土壌化のところあり
高い部分は土壌化していると思われる



6289グリッド北側土層

2-3層　2.5Y3/2黒褐～4/2　極細砂質シルト
わずかに細砂まじる
よくまじるところ　ブロック状のところなどさまざま

3層　2.5Y3/2黒褐　極細砂まじりシルト
硬い6層ブロック多くまじる　わずかに細砂まじる
西への低まり(S101)につながる

b　5Y4/1灰　シルトまじり極細砂
5層上が明るくなった感じ
6層がまじる　平面ではいびつに広がり
根跡と思われる

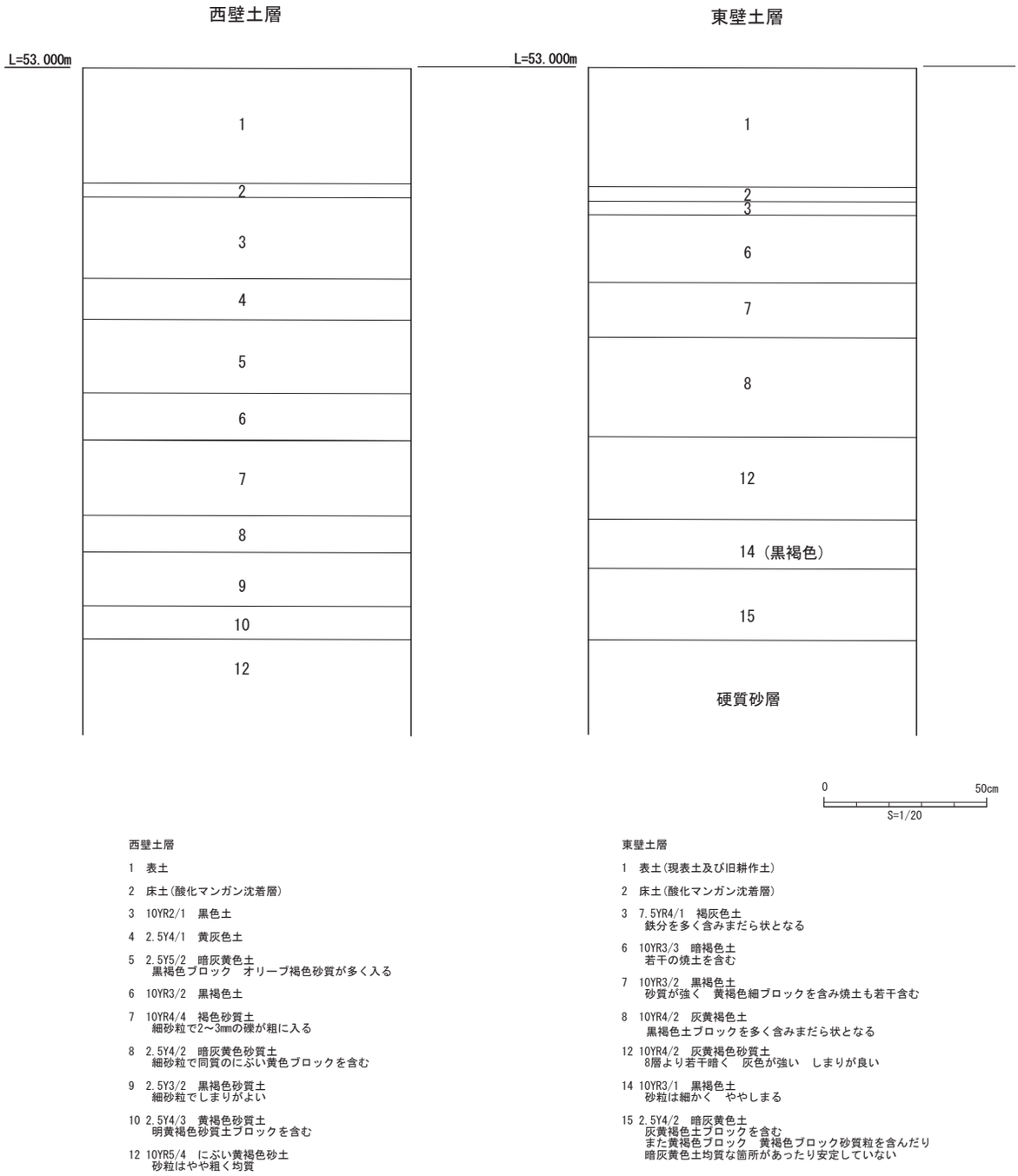
c　3層からのしみ込み　小さな根跡がまじる
やや暗い部分
硬い6層の下にもぐり込むように
入るところが多い

d　2.5Y4/1黄灰～5/1　シルトまじり極細砂
わずかに細砂まじる
ブロック状ははっきりしない
6389グリットの遺構埋土に似る

e　5Y5/1灰～4/1
6層のまじりが非常に多い
全体的に粗いブロック状
平面では非常にいびつに広がり
根跡と思われる
おそらく4層と思われる

h　断面ではdと変わらないが平面では明瞭に切合いが分かる

第３図　２区基本土層図(S=1/40)



第４図　３－１区西壁・東壁土層図(S=1/20)

４層　黒褐色土　場所により、暗褐色・茶褐色で表現される。砂質が弱い場所・強い場所がある。古代から弥生遺物包含層とされているが、出土量は少ない。

５層　暗褐色土　場所により砂質が弱い場所・強い場所がある。弥生遺物包含層である。

６層　黄褐色土　場所により褐色土、にぶい黄褐色、明褐色、灰褐色などと表現している場合がある。また砂質が弱い場所・強い場所がある。この層が地山となる場合もある。縄文後晩期遺物包含層と考えられている。遺構確認面としている層である。

７層　硬質砂質土　堆積の厚いところでは１ｍを超える箇所がある反面、10 cm 未満の薄い所もある。すべての地域で存在するわけではない。

８層　褐色砂質土　他に明黄褐色砂質土の表現がある。縄文遺構検出面だが、地山の場合もある。
９層　砂礫層　地山

１区基本土層（第２図）

第２図中段の土層図が、西壁の土層、下段の土層図は、託麻弓削遺跡群 1―２区の北壁の土層図である。１～ 12 層に分層されている。Ⅶ層までは、客土など現代の層で、Ⅻ層が遺構検出面であり、このⅻ層が基本土層の６層に該当するようである。

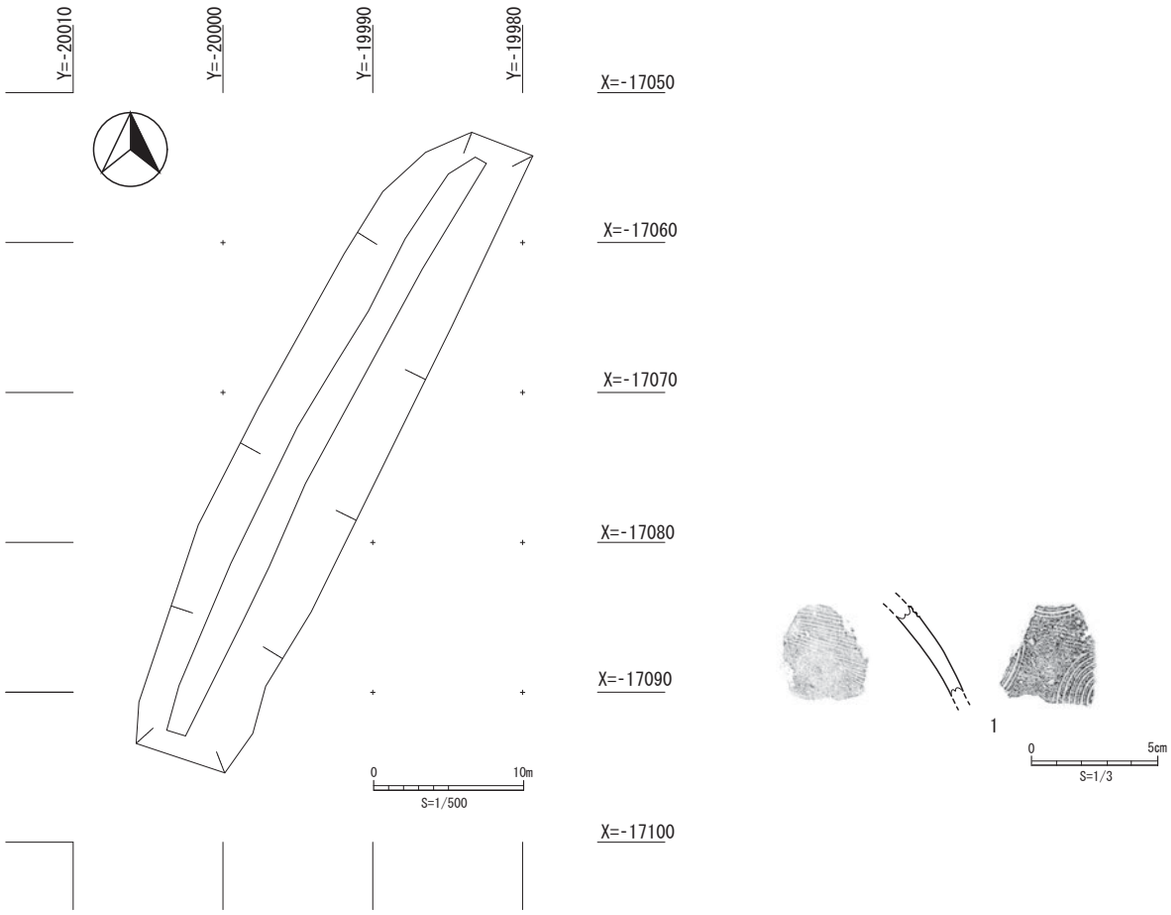
２区基本土層（第３図）

南北に長い調査区で、南側の土層については土色等の注記がなく参考にできなかったので、調査日誌に記載されている基本土層とそれを補う形で 6289 グリッドの北側の土層図を掲載している。そのため１層、２層、４層は土色が表示できていない。また北端側は土層の堆積状況がかなり異なり統一できなかったので、併せて掲載している。基本土層５層と２区の３―１層が対応し、基本土層６層と２区の４層が対応する。この調査区では、基本土層７層の硬質砂質土は存在せず、６層の中に部分的に硬い砂質土が存在する。掲載していないが、6389 グリッドでは６層の下に１つの層として硬い６層が図化されているなど一様ではない。

このような状況は確認調査時もみられた。明確な根拠はないが、基本土層では６層と８層の間に硬質砂層があるが、この硬質砂層が明確な層としては存在せずブロック状に存在し、６層と８層が分層できない状態が２区の 6289 グリッド北壁土層とは考えられないだろうか。基本土層の６層から８層は同じ土層で、何らかの作用で砂が固まり、７層として認識できる場合があるだけなのかも知れない。

３区基本土層（第４図）

この調査区の土層と基本土層の対比が難しく、２つの可能性が考えられる。一つは西壁、東壁８層と基本土層の６層が対応するものである。一方西壁８層と東壁 14 層の黒褐色土が、基本土層４層に対応し、その下の層である西壁 10 層及び 12 層と東壁 15 層が基本土層５層に対応する可能性である。東壁では、この 15 層の下に硬質砂層が存在することから、後者の可能性が高いと考えている。



第５図　１－１区遺構配置図(S=1/500)及び出土遺物実測図(S=1/3)

第３節　１区の調査成果

一番下流側の調査区である。従来は託麻弓削遺跡群の範囲外であった場所である。今回の試掘・確認調査で、遺構と遺物が確認され、遺跡地図を変更し、託麻弓削遺跡群に含まれるとした場所である。

１　１－１区の遺物（第５図）

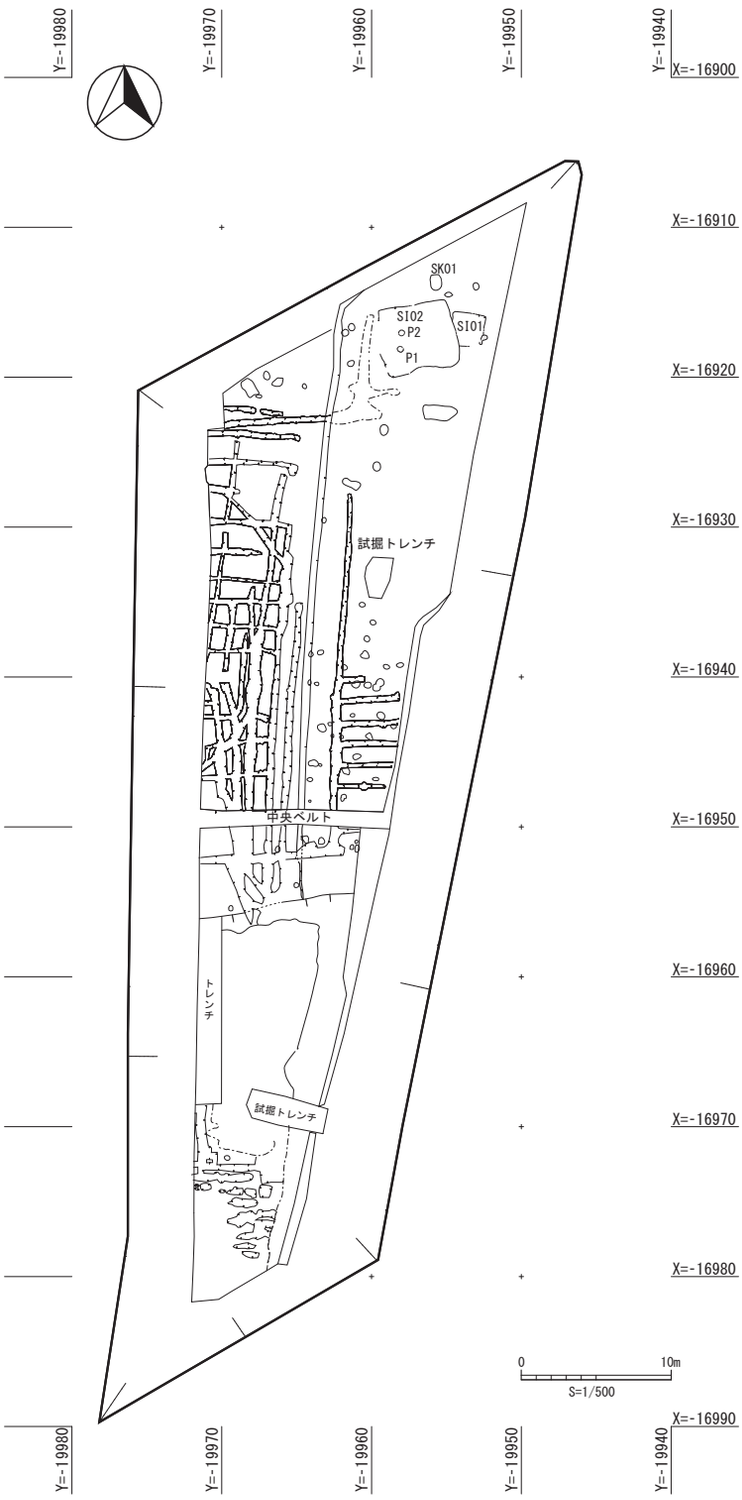
長さ約 43m、幅２ｍ前後の細長い調査区であり、その狭さと相まって明確な遺構は確認できていない。遺物も図化に耐えない小破片がほとんどで、その中で１点重弧文土器の壺の小片を図化、掲載した。

２　１－２区の遺構と遺物（第６図）

幅約 23 m､長さ約 70 mの調査区である。近現代の農地改良等による改変が激しい。西側は一段低くなっている。一段高い北東側には南北に走る暗渠と思われる溝及びそこから東に延びる数条の溝がある。この東に延びる溝は砂で埋もれていたようである。一方一段低くなる西北側には、田畑の畝を思わせる縦横及び弧を描いたような溝が走る。以上のようにかなり改変され、かろうじて北東端の 9195 グリッド内で２軒の竪穴建物、1 基の土坑などが確認できたにすぎない。しかし弥生時代後期の小形の甕のほか、墨書土器や布目瓦、陶磁器類など、８世紀後半遺構の遺物が一定量出土している。

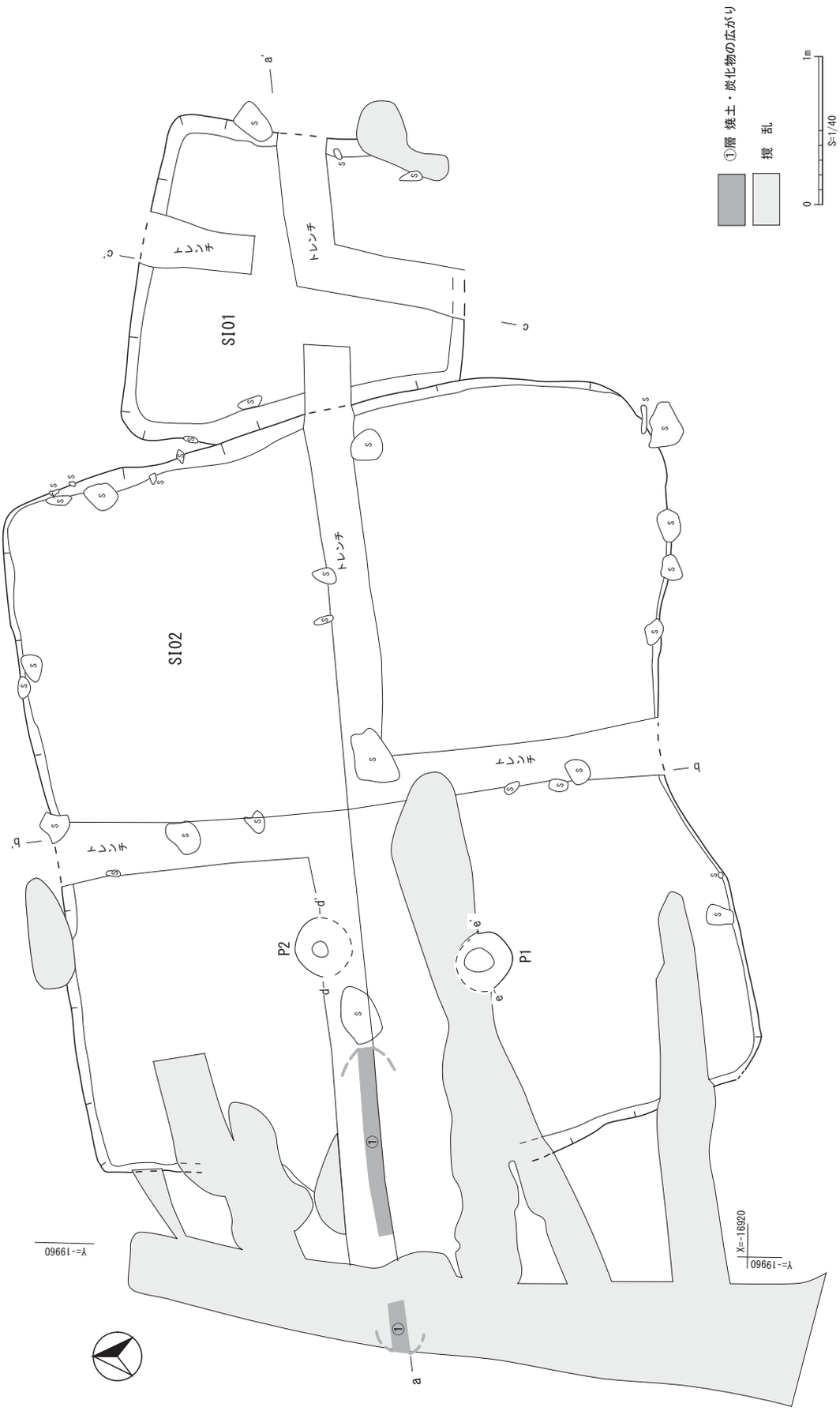
ＳＩ０１（第７・８図）

ＳＩ０２により、僅かに西側壁面が壊されている。また南東側の遺構の輪郭が不明である。１辺約２．２

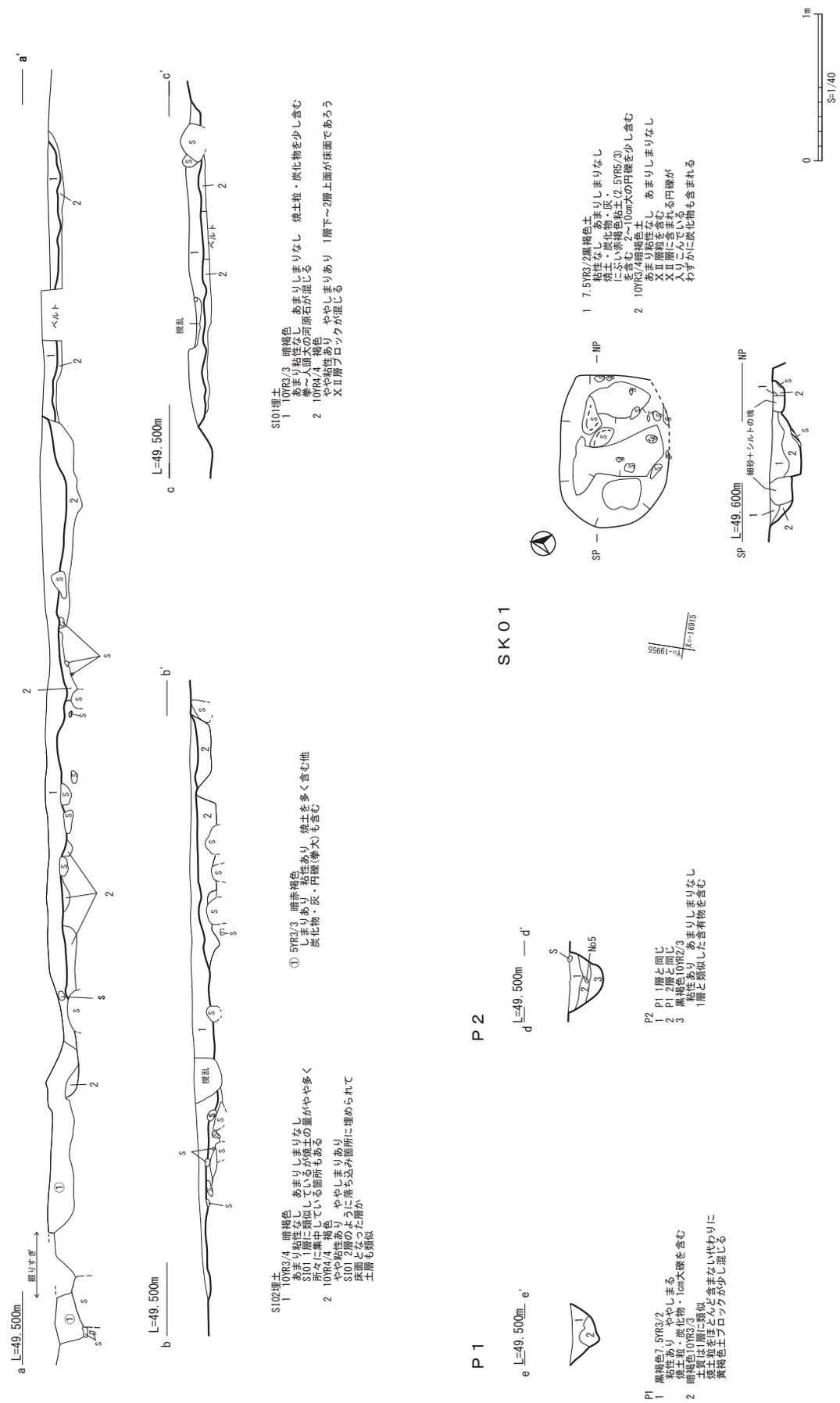


第６図　１－２区遺構配置図(S=1/500)

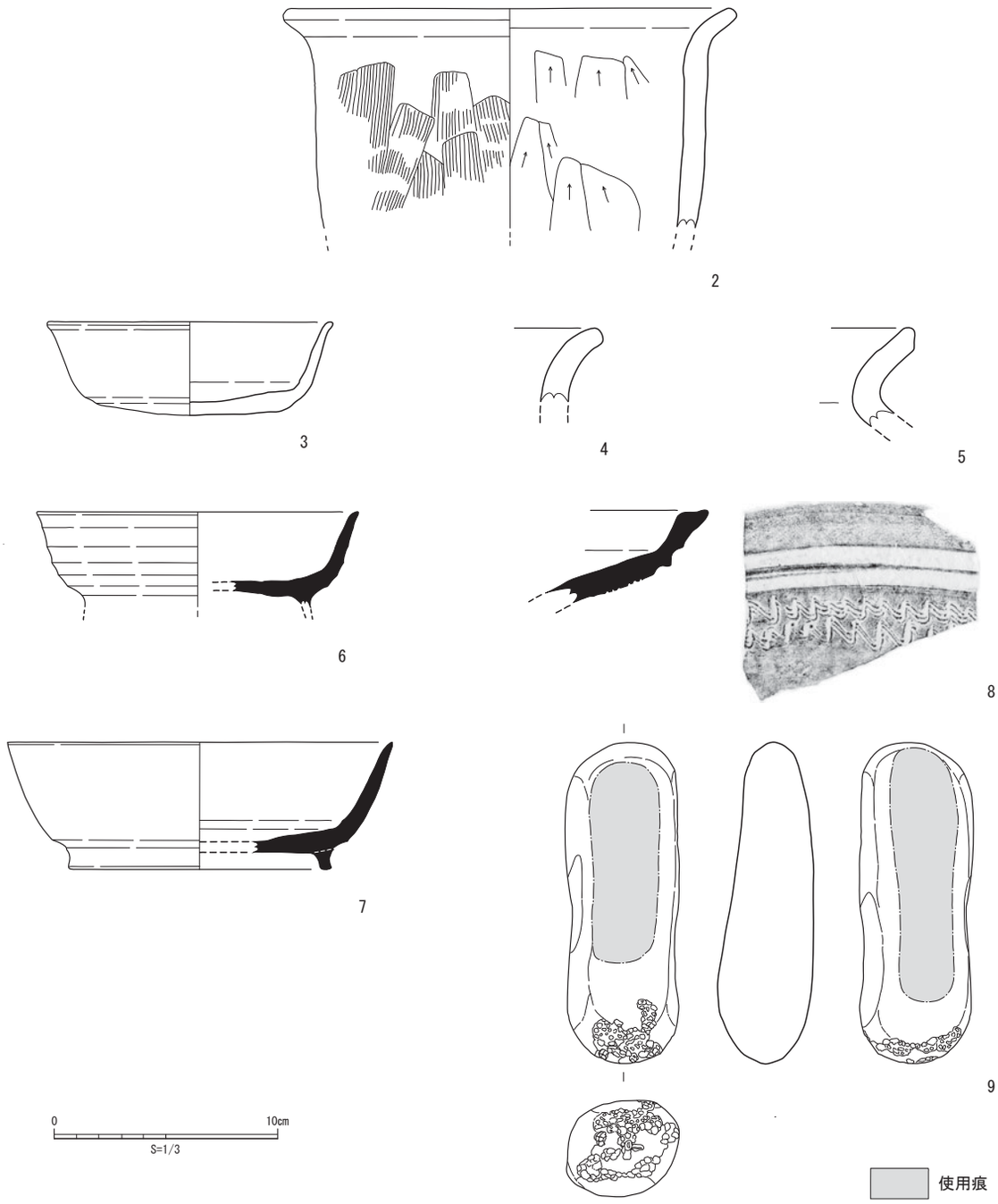
mの歪な方形を呈するものと思われる。深さは 10cm 程である。円礫が多い場所で､床面にも礫が見られる。そのためか２層を用い貼床状にしているようである。この遺構に伴う柱穴や炉は検出されておらず、竪穴建物とするには問題があるかも知れないが、遺構検出時には明確に平面形が確認できたことから、何らかの遺構であることは間違いなく、その形状から一番可能性の高い竪穴建物として取り扱った。



第７図　１―２区ＳＩ０１・ＳＩ０２平面図(S=1/40)



第８図　１－２区ＳＩ０１・ＳＩ０２・Ｐ１・Ｐ２断面図及びＳＫ０１実測図(S=1/40)



第９図　ＳＩ０１(2)、ＳＩ０２(3～9)出土遺物実測図(S=1/3)

出土遺物（第９図２）

２は土師器の甕で、口縁部が外反する。最大径は口縁部にあり、復元口径 19.8cm を測る。外面にはハケメが認められ、内面にはヘラケズリが認められる。

ＳＩ０２（第７・８図）

ＳＩ０１の西に隣接する。東西長は推定で約 5.6 m、南北長約 4.2 mの方形を呈す。深さは現状 10cm 前後である。西側は暗渠と思われる溝で破壊が著しく、西側の形状はやや不明確である。やはり円礫が多く存

在している場所で、床面にも円礫の露頭が見られる箇所がある。そのためＳＩ０１同様、やや粘性のある２層を用いくぼみを埋め、貼床状にしているようである。また東西土層断面（ａ－ａ’）の西端からａ地点より東へ 2.2 m程の間に焼土や炭化物を多く含む ①層が存在する。このことについては、所見では①層は後世のものと判断されているが、但し書きで「この遺構に伴うカマドで後世の撹乱により撹拌され周囲に拡散した可能性はある」と書かれている。一方で火床のような熱による硬化は確認できなかったとしている。この遺構に伴う確実なカマドや、炉及び柱穴はやはり確認されていないので、竪穴建物とは断定できないが、ＳＩ０１同様明確に平面形が確認されたことや、方形であることから一番可能性の高い竪穴建物として取り扱った。

出土遺物（第９図３～９）

出土遺物としては、土師器の甕の口縁部片や坏、須恵器の甕、椀がある。その他磨石もあるが流れ込みと思われる。

３は土師器坏で復元口径 12.8cm、器高 4.2cm で、比較的器高が高いものである。４・５は甕の口縁部片である。４は口縁部が外反する。５は頸部で一旦すぼまり、緩やかな「く」の字形を呈す。６・７は須恵器の椀である。６は復元口径 14.4cm、７は復元口径 17.2cm で、高台は断面形が四角形に近い形状となる。８は須恵器甕の口縁部片と思われる。赤褐色の色調で、口縁部に２条の凹線を巡らせ、その直下の頸部にも２条の波状文を描く。口縁部内外面に薄い自然釉がかかる。この色調から荒尾産須恵器の可能性が高い。９は磨石であるが、撹乱等流れ込みの可能性が高い。

Ｐ１・Ｐ２（第７・８図）

ＳＩ０２と重なって検出されたピットであるが、ＳＩ０２に伴うものではない。Ｐ１は径 40cm 前後で，深さは 20 cm 前後を測る。北側半分は完全に撹乱により壊されている。Ｐ２はトレンチにより南側が壊されている。長軸は約 42cm、短軸は推定で約 37cm で、深さは約 20cm である。

ＳＫ０１（第８図）

ＳＩ０１・０２の北側に位置する土坑である。長径 1.1m、短径 72cm、深さ 20cm 程である。遺物は出土していない。床面は凸凹があり、中央部がより深くなっている。あるいは複数の土坑の重なりあいだったのかもしれない。

３　包含層等出土の遺物

遺物の多くは暗渠や畝と思われる溝からの出土である。近現代の遺物も混じるが、多くは古代の土師器や須恵器、布目瓦である。出土量は東側の暗渠状の溝からが多く、9496・9596 グリッドからの出土が多い。特に暗渠状の溝では、排水を良くするために、溝の底に礫や土器・瓦を意識的に入れ込んだようである。

弥生時代の遺物（第１０図 10・11）

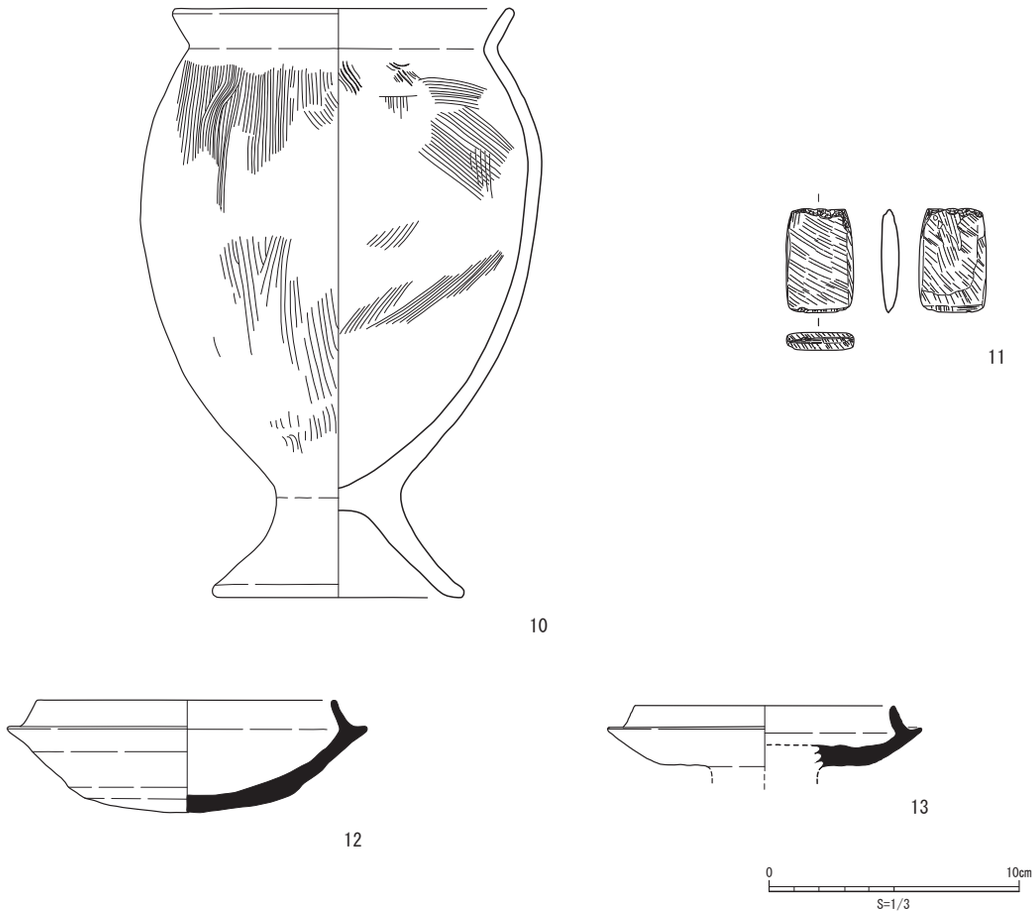
10 は 9295 グリッドからの出土の脚台付き小型甕で器高は 23.6cm 程である。「く」の字状の頸部に外反する口縁部が付く。最大径は体部上位にあり、復元口径 13.4cm である。体部に比してやや大きめの脚がつく。内外面共にハケメが残るが、下部は上部に比べやや粗いハケメである。11 は磨製石斧で、9295 グリッド内の暗渠状溝から出土している。

古墳時代の遺物（第１０図 12・13）

12 はほぼ完形の須恵器坏身で、立ち上がりは短く内傾する。体部に回転ヘラケズリ痕跡を残す。口径は受部で 14.4cm である。13 は有蓋高坏の坏身部分である。復元口径は 10.4cm 程である。

古代以降の遺物（第１１～１８図）

14 ～ 27 は土師器坏である。このうち 14 ～ 20 は底部に墨で文字が書かれているが、残念ながらいずれ



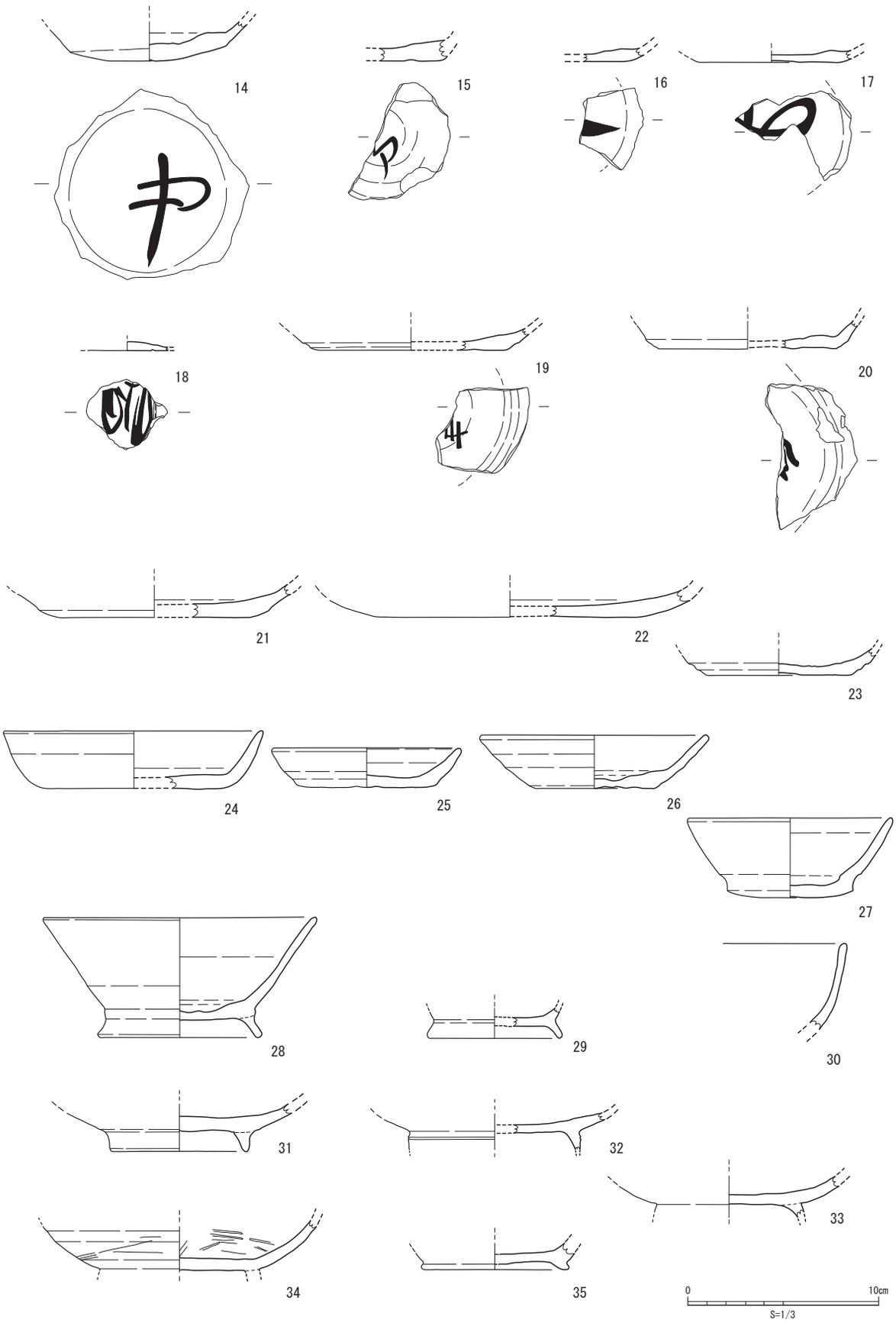
第１０図　１ー２区包含層等出土遺物実測図（１）(S=1/3)

も判読できない。14 だけが底部に丸みを残すが、それ以外は完全な平底である。いずれも回転ヘラ切り離し後、ナデ調整を行っている。21・22 は回転ヘラミガキ土師器である。21 は外器面に赤彩が、22 は内面に赤彩が認められる。23 は回転ヘラミガキ土師器を模倣したものと思われ、内外面に赤彩が認められる。24 は平坦な底部から丸みをもって立ち上がるもので、在地の土師器とされているものである。26 の底部は回転ヘラ切り離し後明確な調整は見られない。27 は平底ではあるが、突出気味の底部で、一旦内湾し立ち上がる。

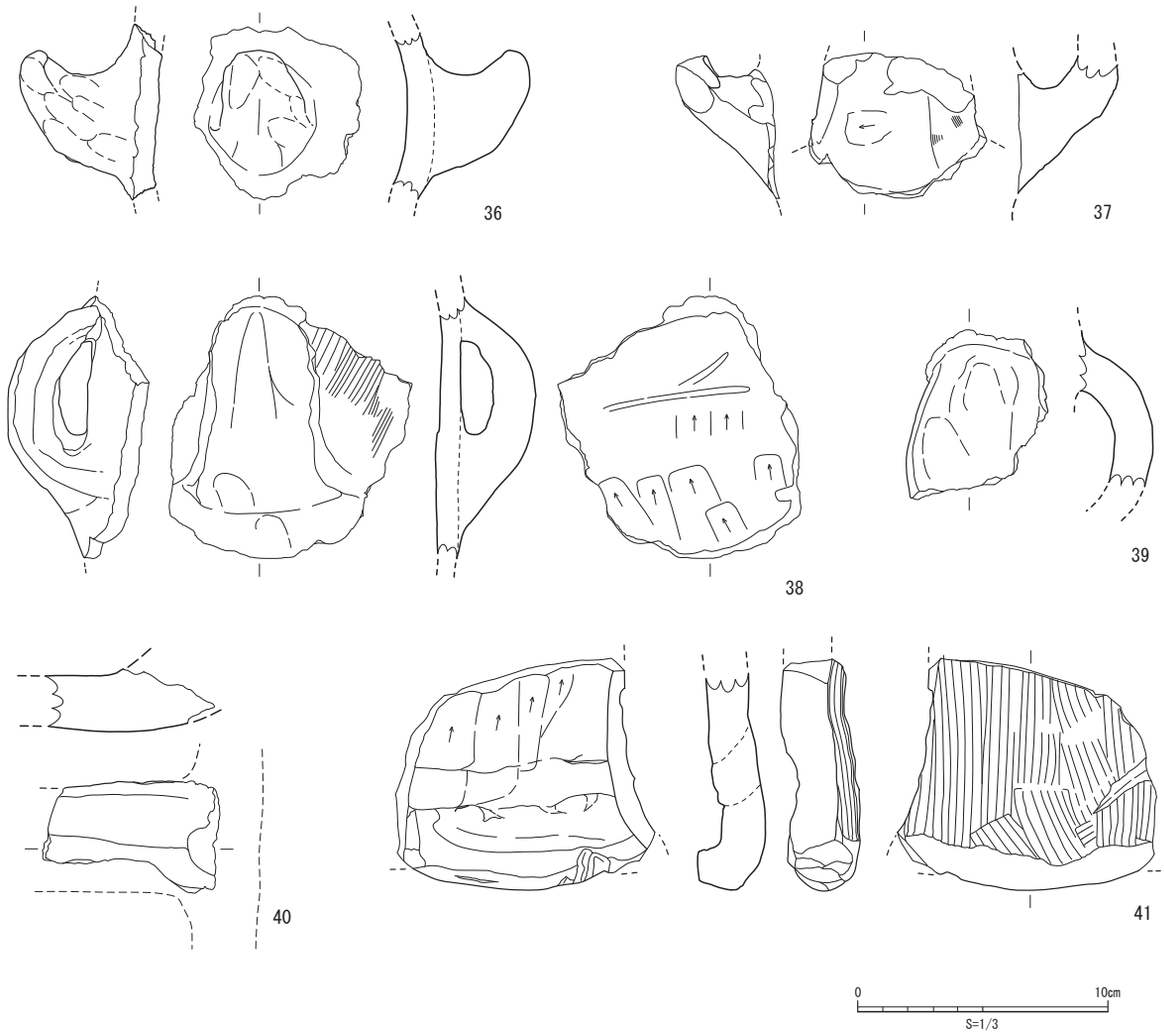
28 ～ 35 は土師器椀である。28 は器高が高く、高台は細長く外に開き、体部は直線的に外に開く。30 ～ 35 は黒色土器Ａ類で、31・32 は断面三角形の高台が付く。33 も同様の高台となると思われる。34 は高台が外れているが、その痕跡から細い高台が付くものと推察される。また 35 は丸みを帯びた短い高台となる。

36 ～ 40 は甑である。36 は甑の把手部分で、角状の形態である。37 も同様であるが、36 に比べ扁平である。38・39 は把手部分が、環状になる。40 は底部の桟部分として図化しているが、桟の周辺の部位の可能性もある（図版１９の上の 40）。41 は移動式カマドの底部で焚口部の切り込みが認められる。外面はハケ調整、内面はケズリが施される。

42 ～ 46 は須恵器の蓋である。44 のみが土師質の須恵器である。42 を除けば扁平な器形である。42・43・44 は中央に扁平なつまみが付くが、45・46 はつまみを持たない。また 46 の蓋の外面は静止ヘラケズリが施される。47 ～ 49 は須恵器の坏である。49 は底部端部が少し張り出す形状で、器高が高い。50 は鉢であるが、49 同様に底部端部が少し張り出す形状で、器高が高い。51 ～ 54 は須恵器椀である。51



第１１図　１－２区包含層等出土遺物実測図（２）(S=1/3)　30～35は黒色土器

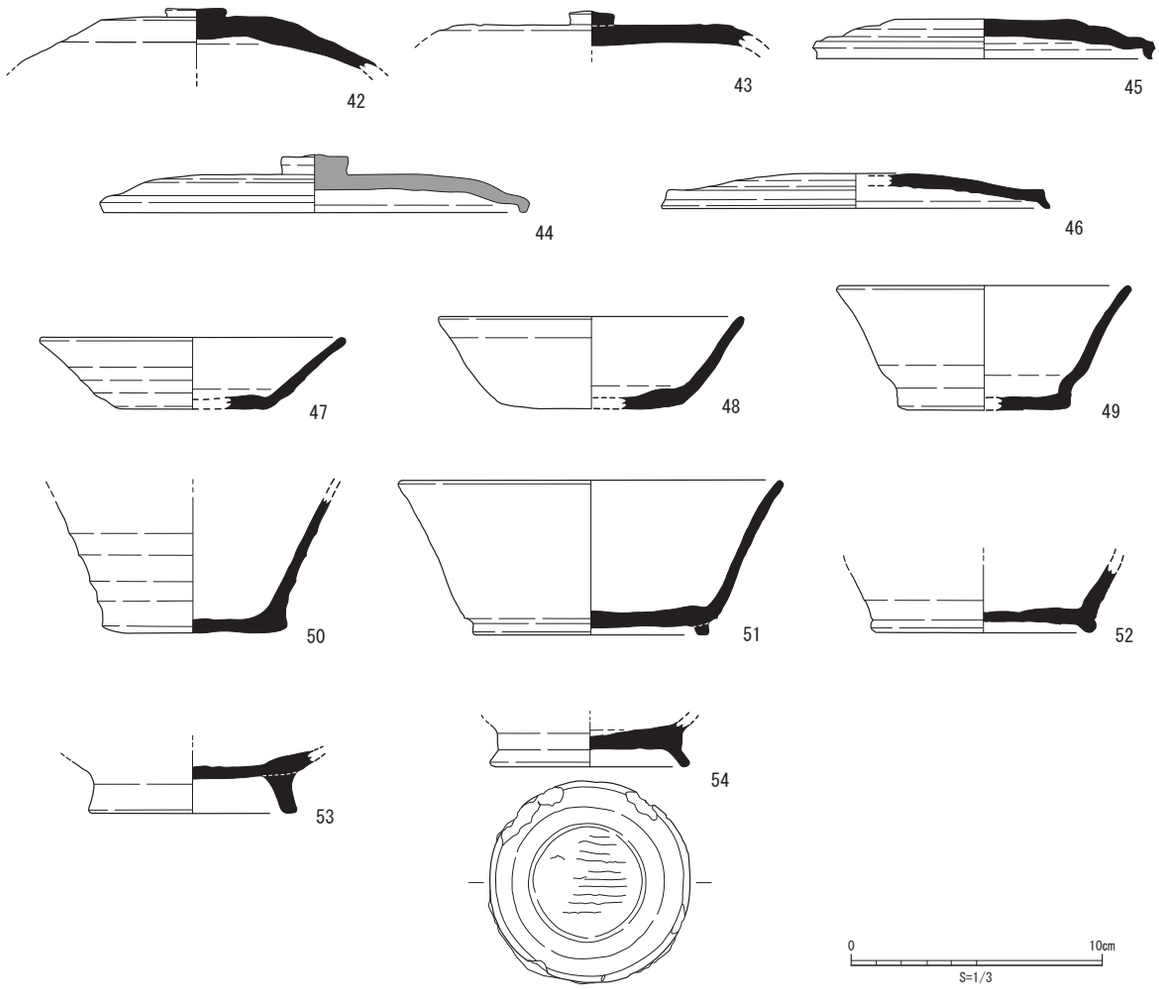


第１２図　１ー２区包含層等出土遺物実測図（３）(S=1/3)

は短めの高台が底部端より僅かに内側につく。比較的器高が高い。52 は短めの高台が底部端につく。また 53 はやや長めの高台が底部端につく。54 の底部は板状の痕跡が残り、細めの高台が底部端につく。

55 ～ 57 は須恵器の甕である。56 は赤褐色の色調で、口縁部に 2 条の凹線を巡らせ、その直下の頚部にも 2 条の波状文を描く。口縁部内面に薄い自然釉がかかる。57 も赤褐色の色調で、口縁部に一条の沈線を巡らせ、その直下に数条のカキメ状の沈線を施す。58 ～ 62 は須恵器の壺である。この内 58・59 は土師質である。58 は体部上位片と思われる。山形の耳がつく。外器面はタタキの痕跡をナデにより消されている。内面は黒色でヘラケズリが施される。59 は底部片で外面には煤が付着する。外面はタタキの痕跡をナデにより消している。58 と同一個体と思われる。60 も肩部に耳がつくもので、内面には同心円状の、外面には平行タタキが認められる。やはり赤褐色の色調である。61 も 60 同様の器形と思われるが、耳の部分が破損している。外面には黒味を帯びた釉がかかり、内面は灰黒色である。タタキの痕跡は認められない。62 は平底の壺の胴部である。外面には深緑色の自然釉が全面にかかるが、胴部中央に釉のかかっていない部分が楕円形に認められる。63 は円面硯で、十字形の透かしが付く。類例としては、荒尾市府本の洗出窯跡出土のものがあり、生産遺跡基本調査報告書Ⅱ（熊本県文化財調査報告第 48 集 P70）に掲載されている。

64 は瓦器である。体部はやや内湾気味に立ち上がる。高台は、短く断面三角形を呈する。外面はヘラケズリの後ミガキを施す。内面はナデを施す。内外面とも濃い灰色味をおびるが、部分的に灰白色の部分が認められる。65 は研磨土師器である。64 とほぼ同様の器形であるが、色調は内外面ともに灰白色で、内面は



第１３図　１－２区包含層等出土遺物実測図（４）(S=1/3)

不定方向のミガキが施される。

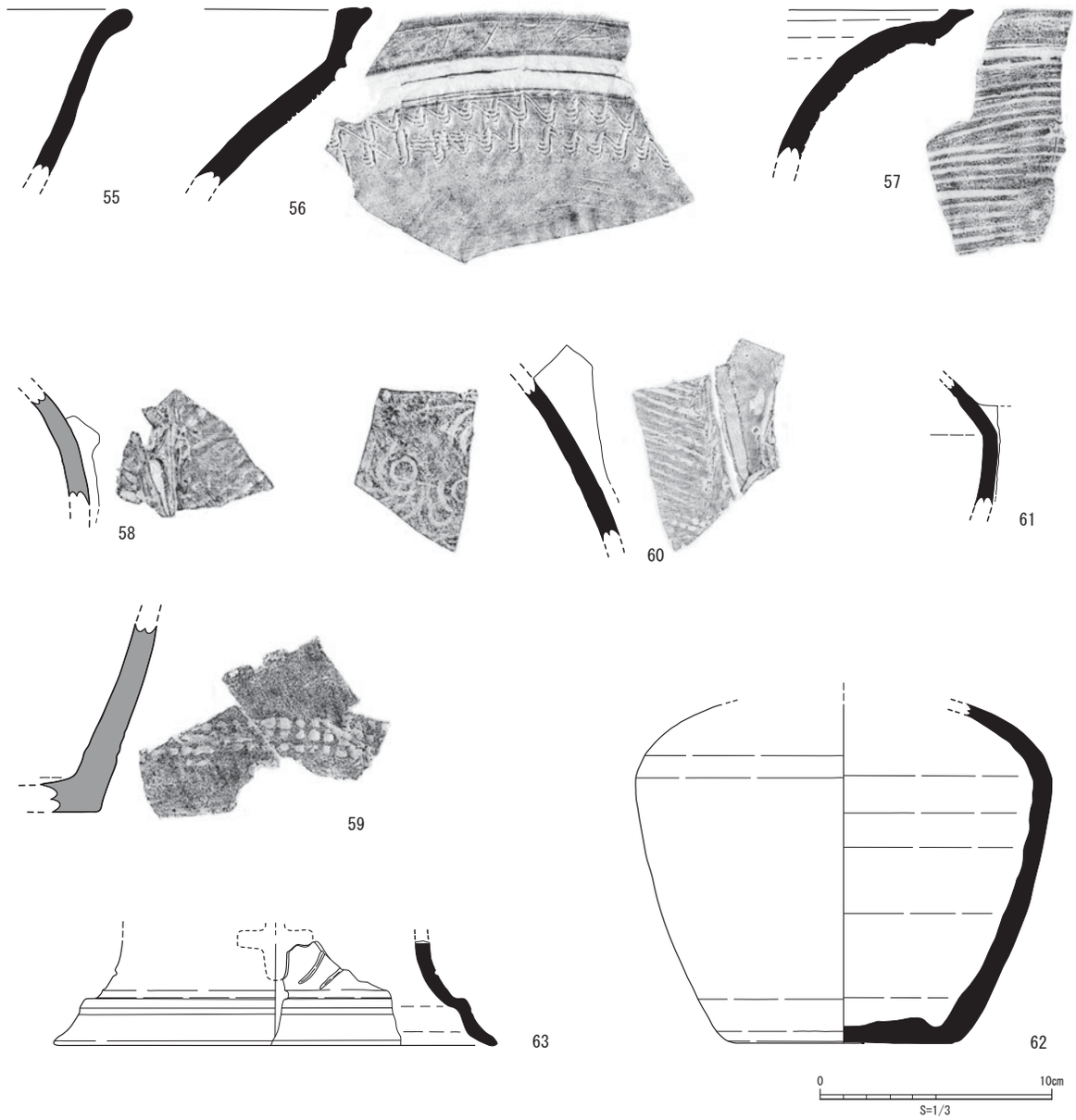
66 は長門産の緑釉陶器である。67 は越州窯系の青磁である。蛇ノ目高台で畳付部分に重ね焼きの目跡が残る。内外面に釉薬がかかる。68・69 及び図版２２の写１の遺物は、龍泉窯系青磁である。70 は同安窯系青磁である。内面見込みと体部との境が段をなす。外面には櫛目文が施される。

71 は近世の中国産の磁器、72 は伊万里焼である。

73 は滑石製石鍋の口縁部片で、直下に鍔が付く。口縁部内面には縦方向のノミケズリ痕が残る。74 は石製銙具の丸鞆である。黒色で表面は研磨され鏡面のように仕上げられているが、側面はそこまでの研磨はなく、裏面はより粗くなっている。一般的な丸鞆より側面が薄いようである。潜り孔が数か所に見られる。

75 は土錘である。長さ 3.25cm、厚さ 1.1cm で、重さは 3.1g を量る。

76 ～ 83 は丸瓦片である。凹面には布目痕が認められる。76・79・80・82・83 の凸面には縄目タタキが認められる。84 ～ 86 は平瓦片で、凹面には布目痕が、凸面には縄目タタキが認められる。比較的多量に出土しているが、破片で全形のわかるものはなかった。また、軒先瓦の瓦当に該当するものは残念ながら確認されていない。

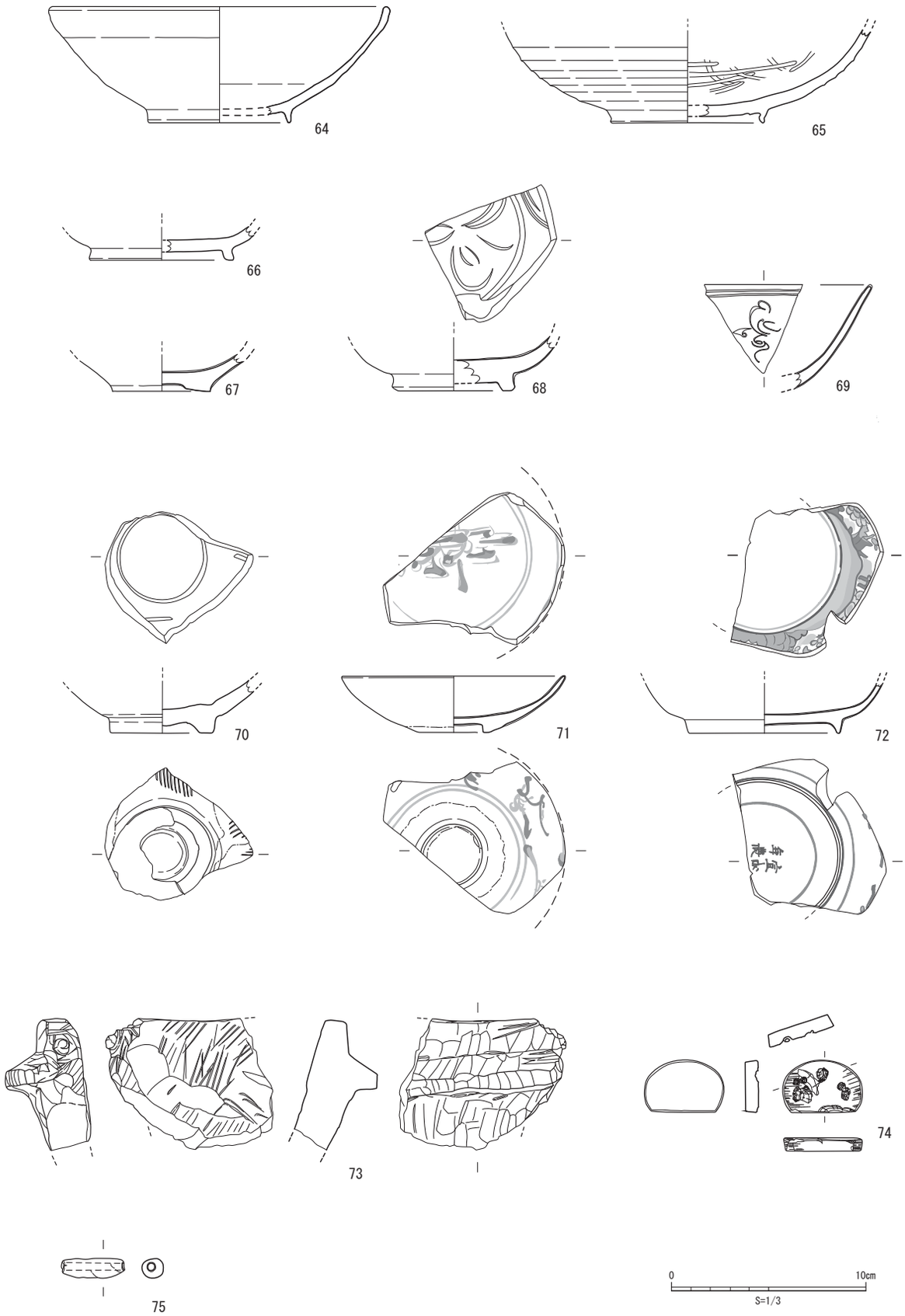


第１４図　１―２区包含層等出土遺物実測図（５）(S=1/3)

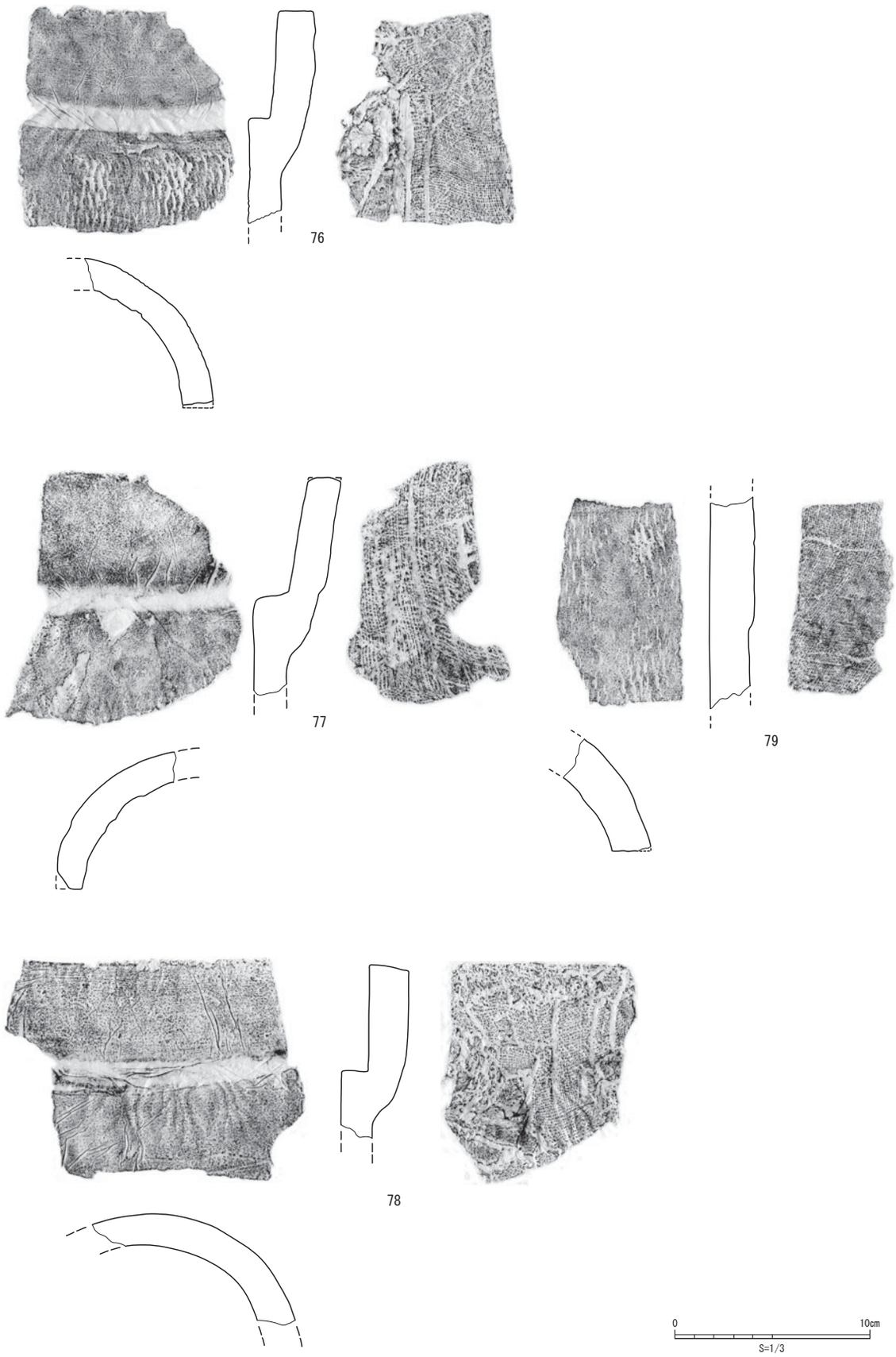
まとめ

調査区は土地改良事業により大きく改変をうけているため、検出された遺構は、竪穴建物２軒と土坑１基にすぎない。しかし遺物には布目瓦、墨書土器、陶磁器、石帯など注目される遺物が出土している。また須恵器も荒尾産須恵器の特徴である赤みを帯び、特徴的な把手を有する須恵器が出土している。出土遺物の年代は、土師器では、回転ヘラミガキ土器（21･22）、回転ヘラミガキ模倣土師器（23）、在地系土師器（23）が８世紀代、墨書土器（14）や金雲母を含む土器（28）などが９世紀代、黒色土器（31 ～ 35）が 10 世紀代と考えている。須恵器では、蓋・坏・円面硯（63）が８世紀代で、耳の付く瓶型が９世紀代か。また瓦や石帯（74）が８世紀後半から９世紀前半と思われる。陶磁器類では､緑釉陶器（66）や越州窯系（67）が９世紀代、龍泉窯系（68・69）、同安窯系（70）が 12 世紀代であろう。その他瓦器（64）・研磨土師器（65）・石鍋（73）が 12 世紀代である。11 世紀代の遺物を欠くが、８世紀後半～ 12 世紀にかけてほぼまんべんなく出土している。

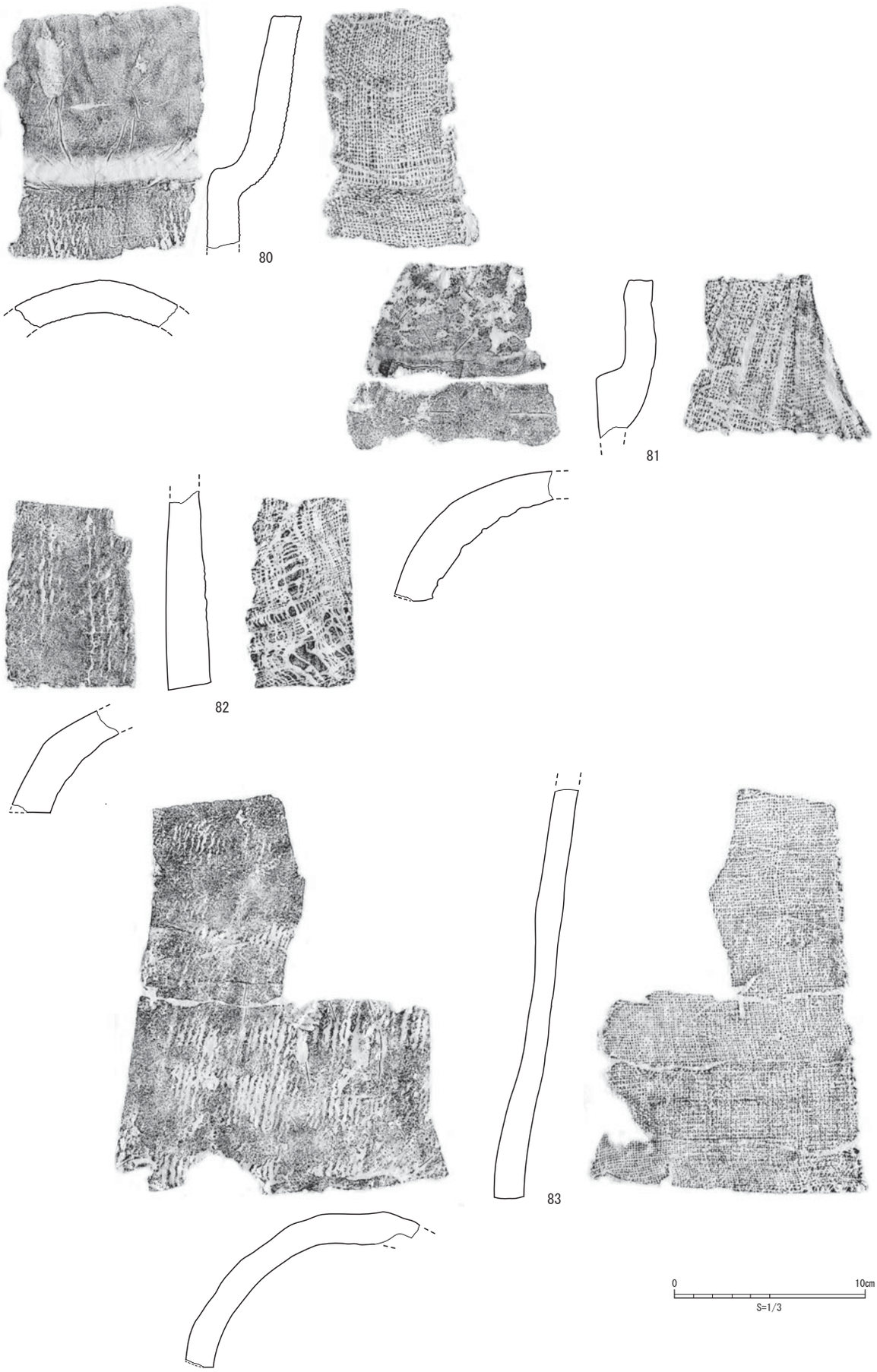
多くの遺物は畝状遺構等から出土したもので、原位置を保っていないが、出土した遺物からは、託麻郡における村落（郷）の一つで、付近にこの村の中心部があったことを想定させる。



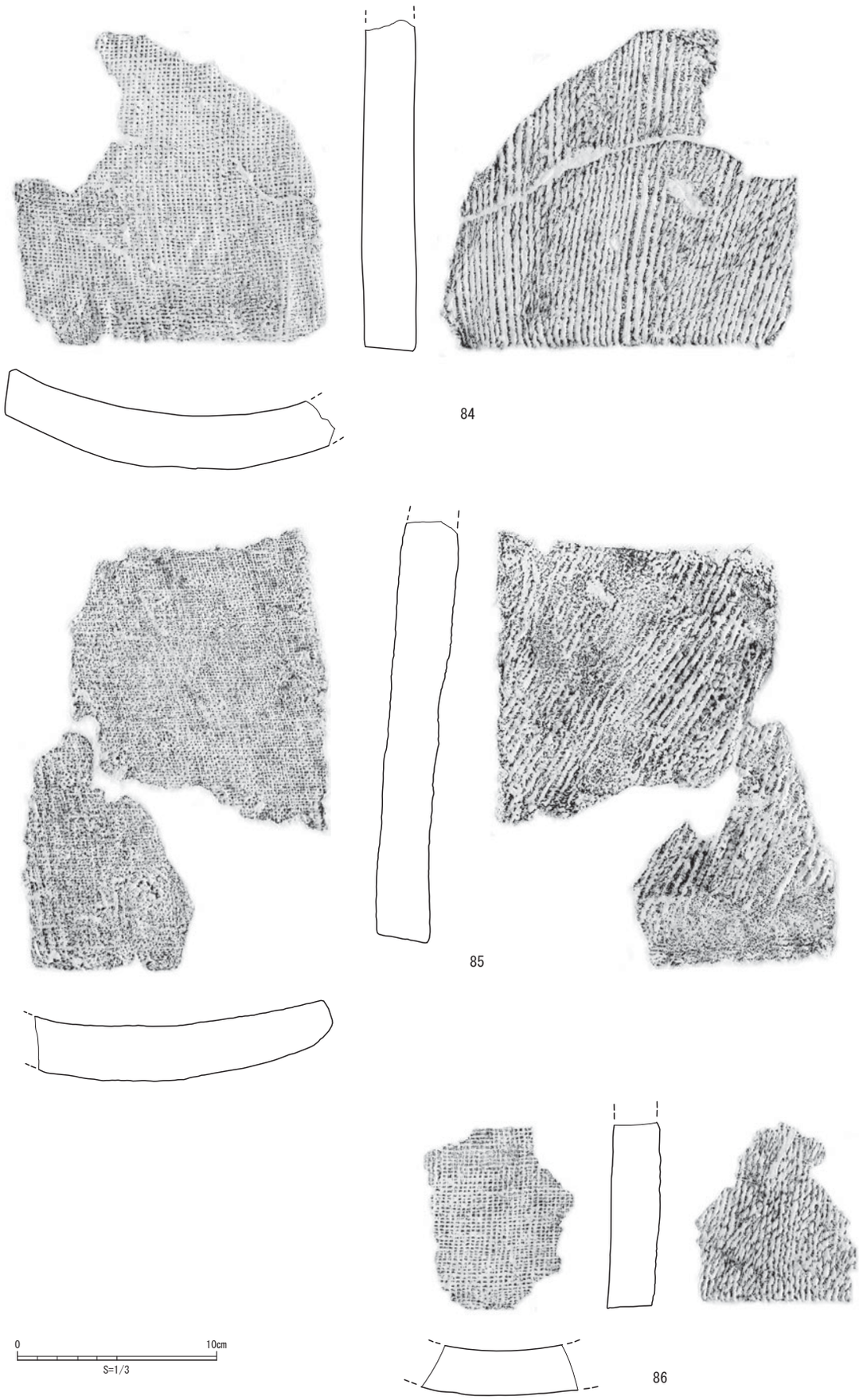
第１５図　１－２区包含層等出土遺物実測図（６）(S=1/3)　64は瓦器、65は研磨土師器



第１６図　１－２区包含層等出土遺物実測図（７）(S=1/3)



第１７図　１－２区包含層等出土遺物実測図（８）(S=1/3)



第１８図　１－２区包含層等出土遺物実測図（９）(S=1/3)

第４節　２区の調査成果

調査２区は、白川の流れが南西から、より南側に流れを変える箇所に位置する。他の１区と３区は調査区と河川の間に既存道路が走っているが、２区は完全に河川に隣接している。ただし安全面から河川から約５ｍの距離をおいて調査区を設定している。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴建物と古代の竪穴建物及び掘建柱建物である。出土遺物は 34 コンテナを数えるが、そのうち 32 コンテナが縄文時代の遺物で、土器が 26 コンテナ、残りの６コンテナは石器類であり、残りの２コンテナの多くは、古代の遺物である。主体は縄文時代である。河川に近い西側には遺構も少なく、遺物もほぼ東側からの出土が多い。

１　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺物の主体は後期・晩期の遺物である。検出した遺構は竪穴建物１軒のみであった。

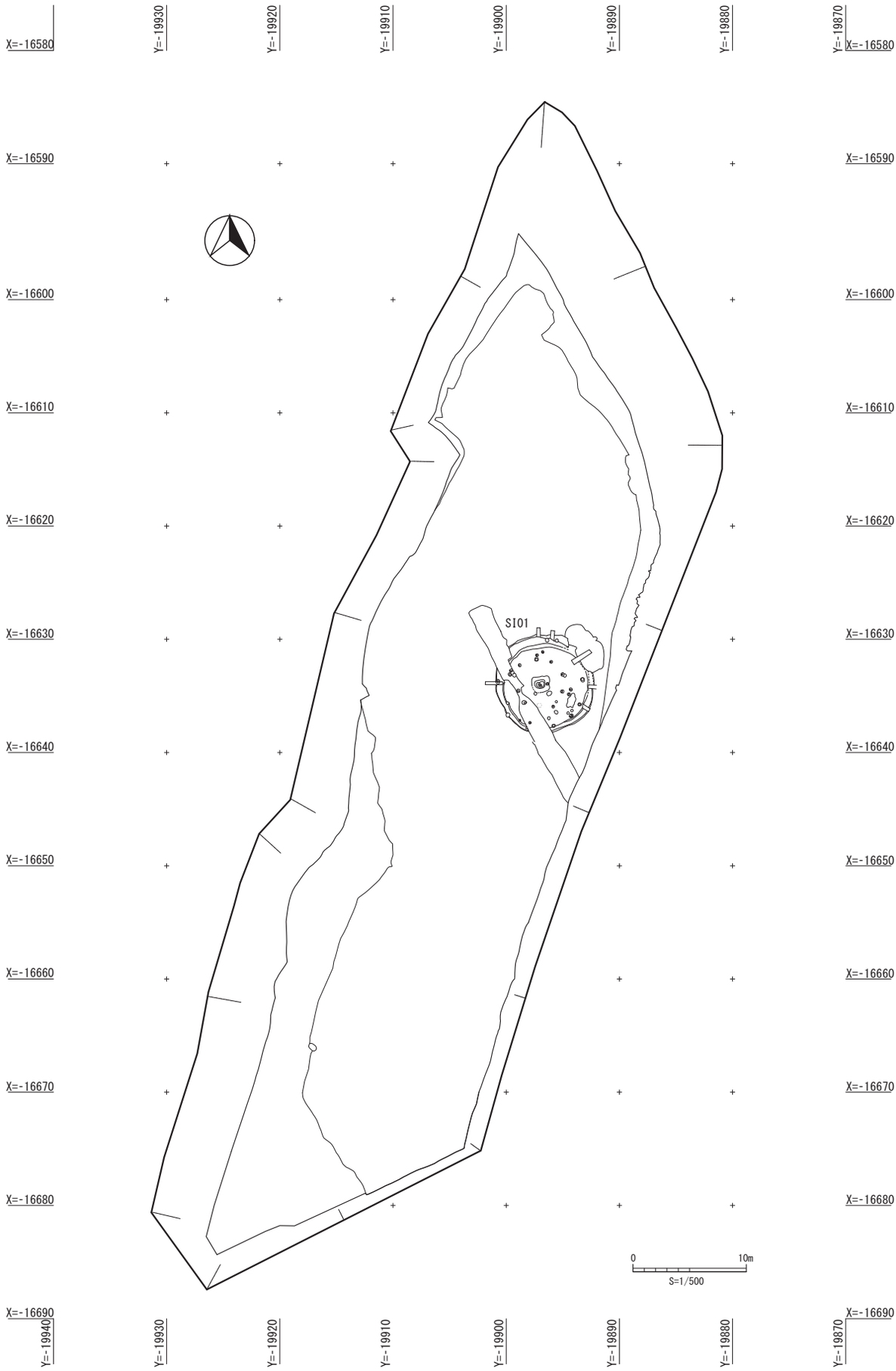
ＳＩ０１（旧 S014　第１９・２１・２２図）

Ｓ０１４としていた竪穴建物である。調査区のほぼ中央、わずかに北東よりの 6389 グリッドで検出された竪穴建物で、遺構の西端部が 6390 グリッドにかかる。この遺構の上層で、２軒の竪穴建物 （ＳＩ０３・ＳＩ０４）が検出され、その後更に掘り下げていく過程で検出されている。間層が厚かったためか、図面を見る限りＳＩ０１は上層の遺構の影響は受けてないようである。

北西から南東に延びる水路と思われる現代の溝で西側部分が破壊されている。遺構の形状は円形を呈し、東西径約 9.8 m、南北は推定 8.8 m程である。現状の深さは 35cm 前後である。中央部の床面レベルに比べると、壁際が一段高くなる。東壁際では 10cm 程高くなり、西壁際は 20cm 程、北壁際・南壁際は 15 cm 程高くなっている。複数の建物の重なりも考えられたが、土層の堆積状況からは、1 軒の建物と考えられる。また焼土・炭化物は床面が一段低くなった範囲のほぼ全域に広がっているが、まだら状であり、炭化物は東側のより外側に集中する。また焼土塊や炭化物の層を除去しても第 22 図のとおり、床面に焼土面が残る。床面は部分的に硬質砂層の面となる。その他この遺構の周囲にも硬質砂層が認められるので、硬質砂層を部分的に削って掘り込まれたものと思われる。柱穴のような痕跡は数か所で確認されており、調査担当者が遺構に伴う可能性が高いと判断したピットを図化している。しかし出土遺物の項目で後述するが、第２３図９の土器は、柱穴の炭化物を含む埋土から出土しているが、6389 グリッド上層から出土の土器片と接合する。比較的大きな破片であり、樹根等による流れ込みとは考えにくく、柱穴とされているが、建物廃棄後に掘りこまれたピットの可能性がある。明確に柱穴といえるピットがどれかは不明である。また中央のピットは７層とされた焼土や炭化物の混じる埋土が確認されている。前述の第２３図９が出土したピットと中央ピット以外のピットの埋土については、特に焼土や炭化物については記述されていないので、焼土や炭化物は含まれていなかった可能性が高い。

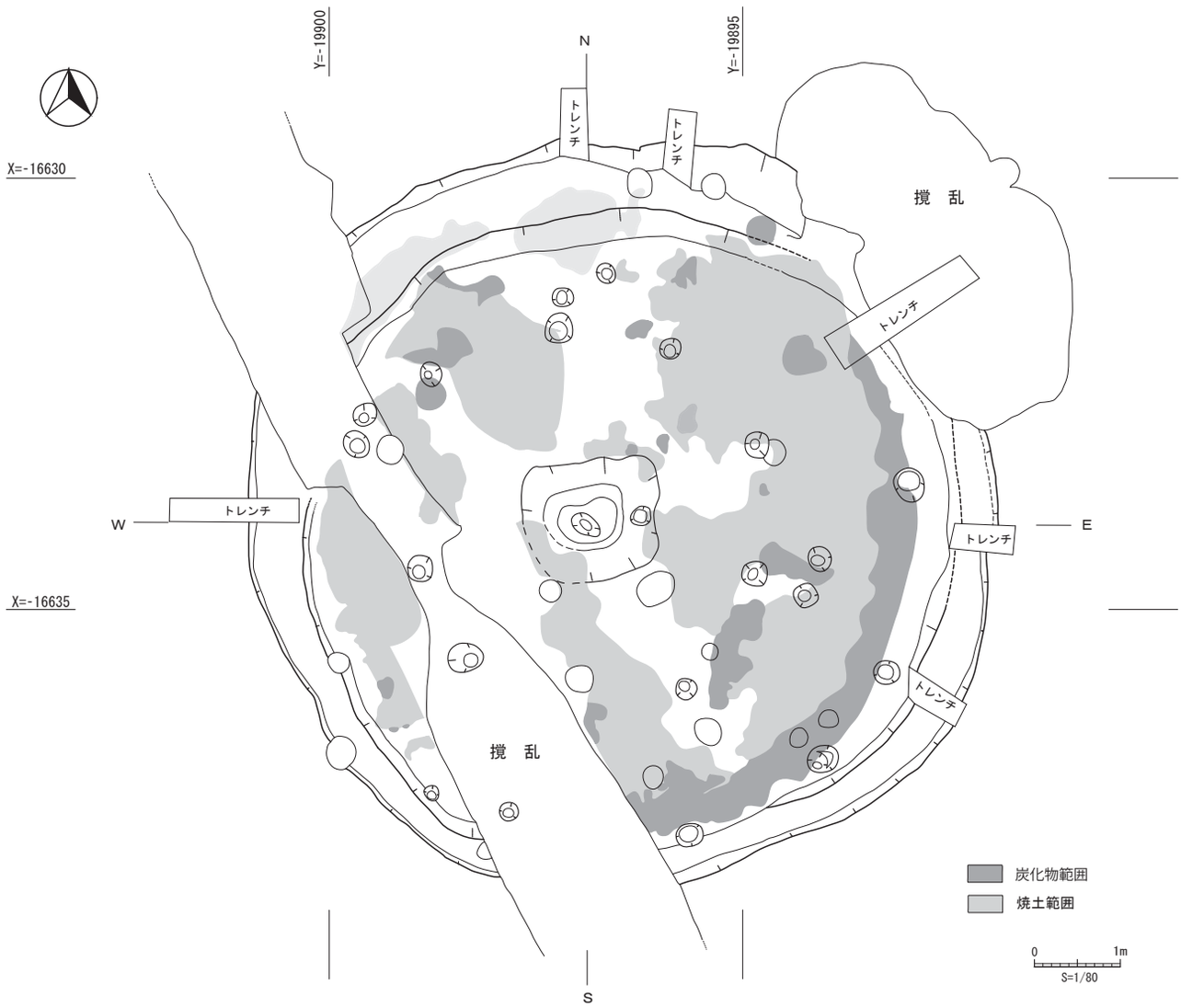
土層堆積を見ると、東西土層断面の東壁際及び南北土層断面の北壁際に焼土や炭化物を含まない 10 層や 20 層が見られる。所謂三角堆積土で、その後に焼土や炭化物を含む層が堆積している。確かに中央部分では床直上に焼土や炭化物を含む層があるが、南北土層の北側の 20 層から考えると、この建物が廃棄してから焼土や炭化物は堆積したものと考えられる。なお、東西土層の焼土範囲部分に上下二段の太線を表記しているが、上段を床面として判断し、床面の下が被熱により赤変してしまったと考えた。

また炭化材は認められないが､柱材が完全に燃焼した或いは既に抜かれていたなどの可能性が考えられる。以上から焼失建物と認定できると思うが、堆積状況からは不慮の失火ではないだろう。建物を放棄し、三角堆積土が形成される時間が経過した後に、焼却処分をした可能性が高いと考えている。



第１９図　２区縄文時代遺構配置図(S=1/500)

第２０図　２区遺構配置図（ＳＩ０１を除く）(S=1/500)



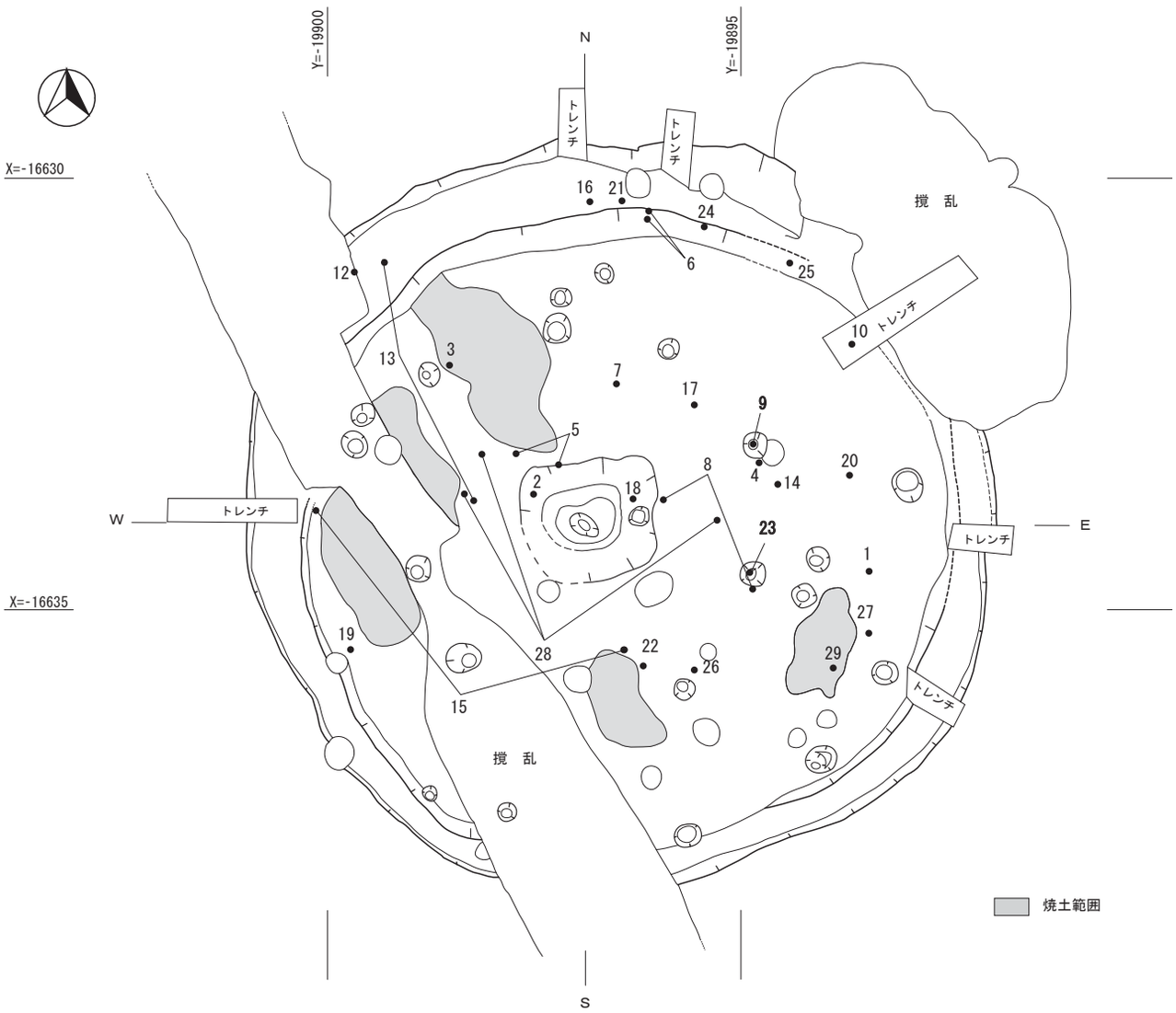
第２１図　２区ＳＩ０１焼土・炭化物範囲図（S=1/80）

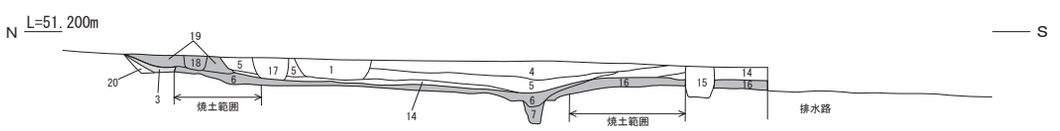
出土遺物（第２３～２７図）

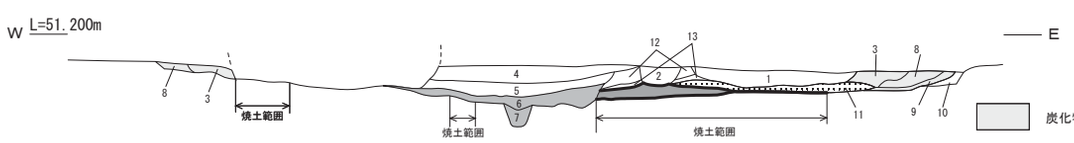
出土遺物は、縄文時代後晩期の土器と石器である。出土した土器の多くは、天城式、古閑式に該当するが、破片のみで、口縁部片でも口径の四分の一程度のものが最大であり、底部のみが完全な形で残存する程度であるので、厳密には時期を特定できないが、量的には天城式が僅かに多い。

出土遺物の位置と高さと土層断面図を照合しての判断なので確実性に欠ける点もあるが、床面直上の可能性の高い遺物は、6、14、16 の土器片位である。14 の小片を除けば一段高くなった壁際からの出土である。その他１や４の土器の小片が、焼土や炭化物を含む層の直上の可能性がある。しかしそれ以外の遺物は、焼土や炭化物を多量に含む層より上層の出土である。またＳＩ０１が確認される以前に 6389 グリッド出土として取り上げられた土器片とＳＩ０１埋土の土器片と接合するものが一定量存在する。或いは遺構としての検出が遅れたため、既にＳＩ０１の埋土中であったものをグリッドで取り上げてしまった可能性がある。

１～７は深鉢の口縁部片である。１はやや内向する口縁帯に４条の沈線を施す。２は無文の口縁帯で強く







炭化物多量に含む
焼土多量に含む
焼土と炭化物多量に含む
焼土
床の可能性

0　1m
S=1/80

1	7.5YR4/2灰褐	粘性弱	しまり弱	炭化物微量	焼土微量	石を含む(3～10cm大)
2	7.5YR3/3暗褐	粘性弱	しまり弱	炭化物微量	焼土なし	石(10cm以下)含む　硬質砂層ブロック少量含む
3	7.5YR3/1黒褐	粘性弱	しまり弱	炭化物多量	焼土なし	
4	7.5YR4/4褐	粘性弱	しまり弱	炭化物微量	焼土なし	
5	7.5YR4/3褐	粘性弱	しまり弱	炭化物少	焼土少	
6	7.5YR5/8明褐	粘性弱	しまり弱	炭化物多	焼土多	
7	7.5YR4/3褐	粘性弱	しまり弱	炭化物多	焼土多	
8	7.5YR4/4褐	粘性なし	しまりなし	炭化物多	焼土なし	
9	7.5YR3/1黒褐	粘性なし	しまりなし	炭化物多	焼土なし	地山ブロック含む
10	7.5YR3/1褐灰	粘性有	しまり有	炭化物少	焼土なし	地山ブロック含む
11	7.5YR5/6明褐	粘性なし	しまりなし	炭化物少	焼土多量	焼土ブロックを多量に含む　硬質砂層ブロックを含む
12	7.5YR4/2灰褐	粘性なし	しまりなし	炭化物少	焼土微量	砂層粒を少量含む
13	7.5YR3/2黒褐	粘性なし	しまりなし	炭化物少	焼土少	砂層粒を多く含む　焼土かたまりを多く含む
14	7.5YR3/1黒褐	粘性なし	しまり有	炭化物少	焼土少	
15	7.5YR3/3暗褐	粘性なし	しまりなし	炭化物少	焼土少	根跡
16	7.5YR2/2黒褐	粘性なし	しまりなし	炭化物多	焼土多	焼土かたまり有　砂層粒を多く含む
17	7.5YR4/6褐	粘性なし	しまりなし	炭化物微量	焼土なし	根跡
18	7.5YR4/4褐	粘性有	しまりなし	炭化微量	焼土少量	根跡
19	7.5YR4/4褐	粘性なし	しまりなし	炭化物多	焼土少	
20	7.5YR2/2黒褐	粘性なし	しまりなし	炭化物少	焼土なし	

第２２図　２区ＳＩ０１実測図及び遺物出土状況(S=1/80)

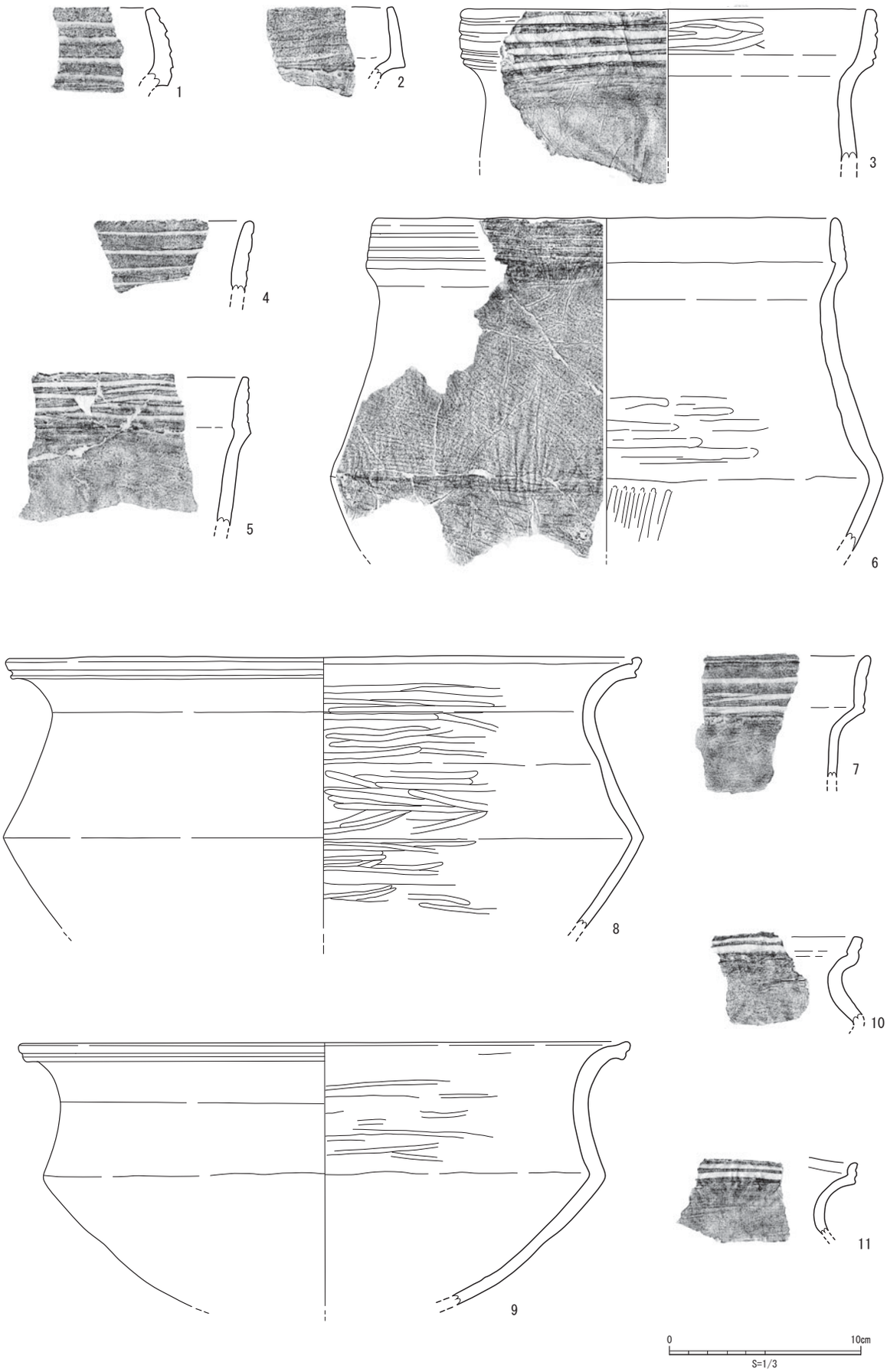
屈曲して頸部につながると思われる。３は頸部からの湾曲は弱く、真っ直ぐに口縁が伸びる。口縁帯には４条の沈線が施される。内外面ともにヘラによる研磨が施されるが雑である。４は口縁帯に４条の浅い沈線を施す。５は僅かに内湾する頸部からほぼ真っ直ぐに口縁部が立ち上がる。口縁帯には４条の沈線が施されるが、沈線の始点と終点が交差している。内外面ともヘラによる研磨と言うよりナデに近い調整が施される。６は口縁部から胴部にかけての破片で、胴部が張り、そこからゆるく内湾して頸部を形成し、わずかに内向する口縁部が付く。口縁帯には３条の浅い沈線が施されるがかなり粗雑である。ヘラによる研磨は認められるが雑である。７は湾曲した頸部から真っ直ぐに伸びる口縁部がつく。口縁帯に３条の浅い沈線が施されるが、始点と終点が繋がっていない。内外面ともヘラによる研磨は比較的丁寧である。

８～14は浅鉢である。８～10は鉢としたほうがいいのかも知れないが、破片で、器高比率も不明なので浅鉢として取り扱った。８は張り出した胴部から内湾して頸部を形成し、その上に短い口縁部が付く。口縁帯には１条の沈線が施される。内外面ともにヘラによる研磨が行われる。９も８とほぼ同じ器形だが、頸部は短く、また湾曲も弱い。最大径は口縁部にある。ヘラによる研磨が認められる。10は内湾する頸部に直向する口縁部が付く。口縁帯に２条の沈線を施す。内外面ともにヘラによる研磨が施される。11も湾曲する頸部のうえに短い口縁部が付く。やはり２条の沈線を施し、ヘラによる研磨が認められる。

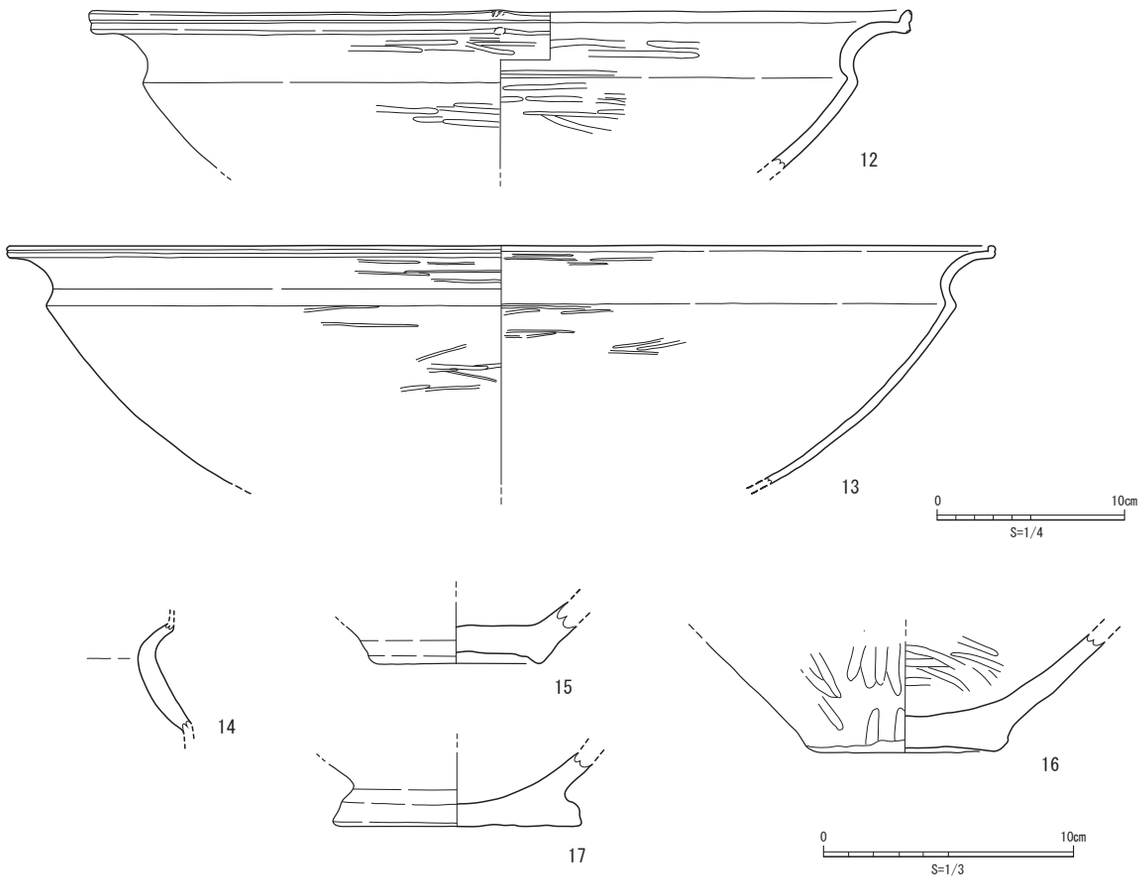
12・13も張り出した胴部のうえに強く内湾する頸部があり、その頸部から短い口縁部が屈折して立ち上がる。口縁帯には１条の沈線が施される。12には中心部には凹点が形骸化したようなものが認められる。14は内湾する頸部で、その上に口縁部が付くと思われる。内外面とも丁寧に研磨されている。15～17は底部片である。15は上げ底、16・17は平底である。

18は十字形石器で埋土５層からの出土である。石材は雲母で、明確な整形痕は不明であるが、抉られた根基部分を中心に磨痕が認められる。19は石鏃、20は砥石で石材は砂岩と思われる。両面とも２条の溝があり、1つは幅１ cm程度で深く刻まれ断面はU字形となる。片方は幅５mm以下で浅い痕跡のものである。21は勾玉で石材は蛇紋岩である。扁平で両面とも研磨痕跡が顕著である。22～26は磨石、27～29は石皿である。他に、石斧や磨石・石皿の可能性のあるものとして図版32の写２・写４を掲載している。石皿類として採集されたものだが、明確な使用痕はなく、周辺にある河原石と変わりなかったために図化していない。このように石皿のような大きさの石が多数埋土中に見られる。焼土層よりは上層であり、過去の洪水等により流れてきた川原石なのかもしれない。

以上が、ＳＩ０１出土の遺物である。出土状況も床面直上のものは、小片も含め３点にすぎないし、一段高くなった壁際のものである。出土している土器は、天城式土器や古閑式土器の特徴を持つ土器である。しかし縄文時代後期から晩期にかけての御領式土器から天城式土器・古閑式土器の変遷は、器面調整が雑になること。口縁帯にめぐる沈線の幅が狭く、粗雑になること。口縁帯そのものが消失すること。胴部では、境界部の沈線が消滅したりする。また底部は、上げ底気味の底部から平底、円盤貼付状の底部へと変化することなどが指摘されている。しかし完形品を観察すると、口縁帯の沈線は粗雑であるが、底部は上げ底気味であったりと、形式を特定するには全体形から個々の要素を検討し決定する必要があるように思われる。今回ＳＩ０１出土の土器は、前述したように、口縁部片も口径の四分の一程度のものが多く、全体形のわかるものはなく、時期は特定できない。しかしながら個別要素は、天城式に属する要素が多いようである。



第２３図　２区ＳＩ０１出土遺物実測図（１）(S=1/3)



第２４図　２区ＳＩ０１出土遺物実測図（２）(S=1/3, 13のみS=1/4)

包含層等出土の遺物（第２８～３３図）

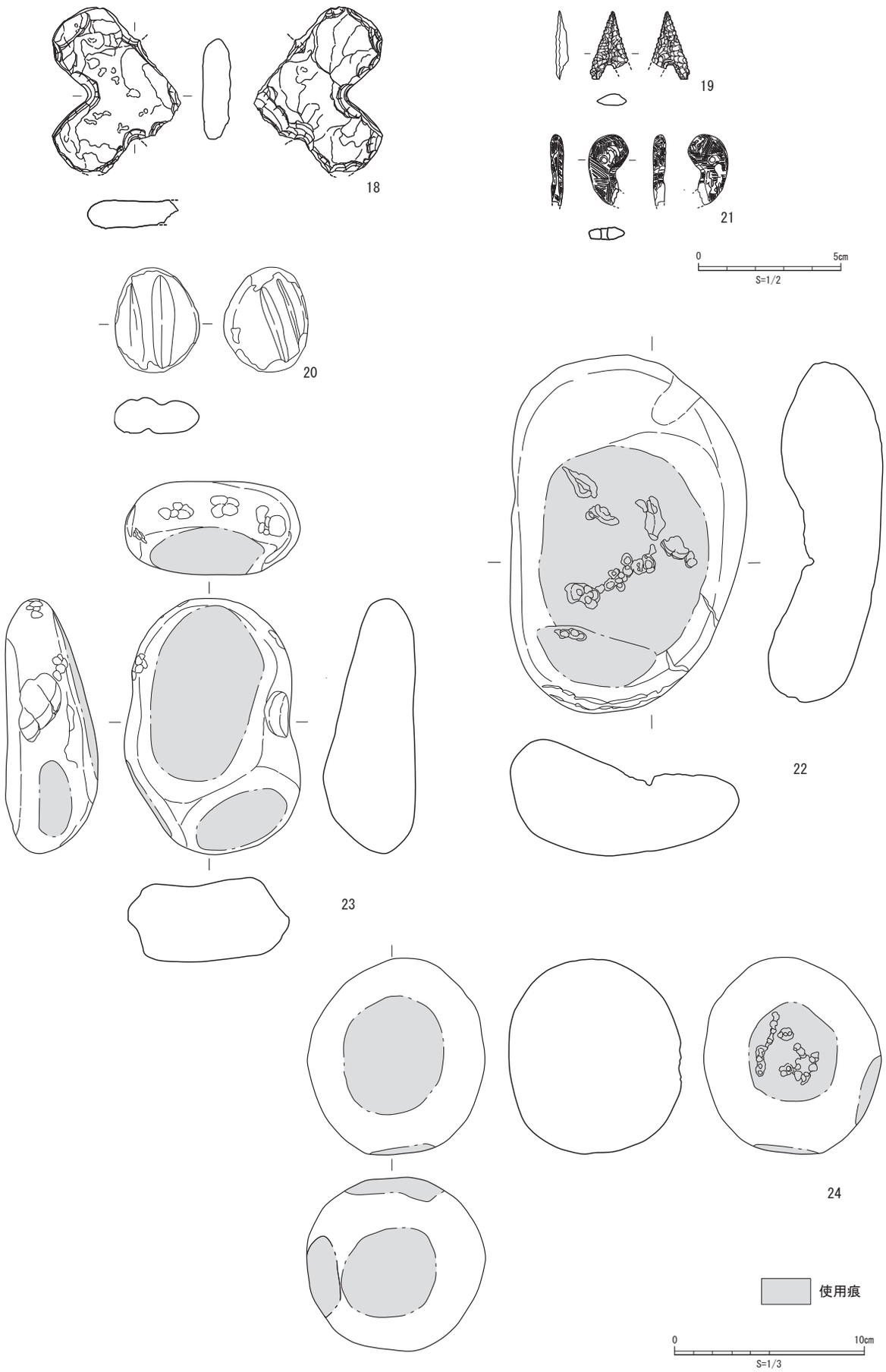
層位ごとに取り上げられているものは多いが、下層から新しい土器が出土するなど、時期差としては把握できない。また包含層出土とはしているが、撹乱層出土の遺物も掲載している。

30 は台付きの鉢か坏と思われる。脚部に方形の透かしが 2 か所入る。脚裾部は沈線で挟まれた箇所に磨消縄文が認められ、円形の押点が数箇所に施される。また裾部の内面にはヘラによる研磨が認められる。31 は鉢で、外向する体部から内側に屈折する口縁部が付く。口縁帯に 2 条の沈線が施され、上段の沈線の上部及び下段の沈線の下部に磨消縄文が認められる。30・31 とも中津式系統の土器であろう。32 ～ 34 は波状口縁の土器で、口縁頂部には押点を施し、そこを起点とし 2 本の沈線が巡る。32・33 には磨消縄文が認められる。35 は胴部片で、「X」字状の文様が認められる。

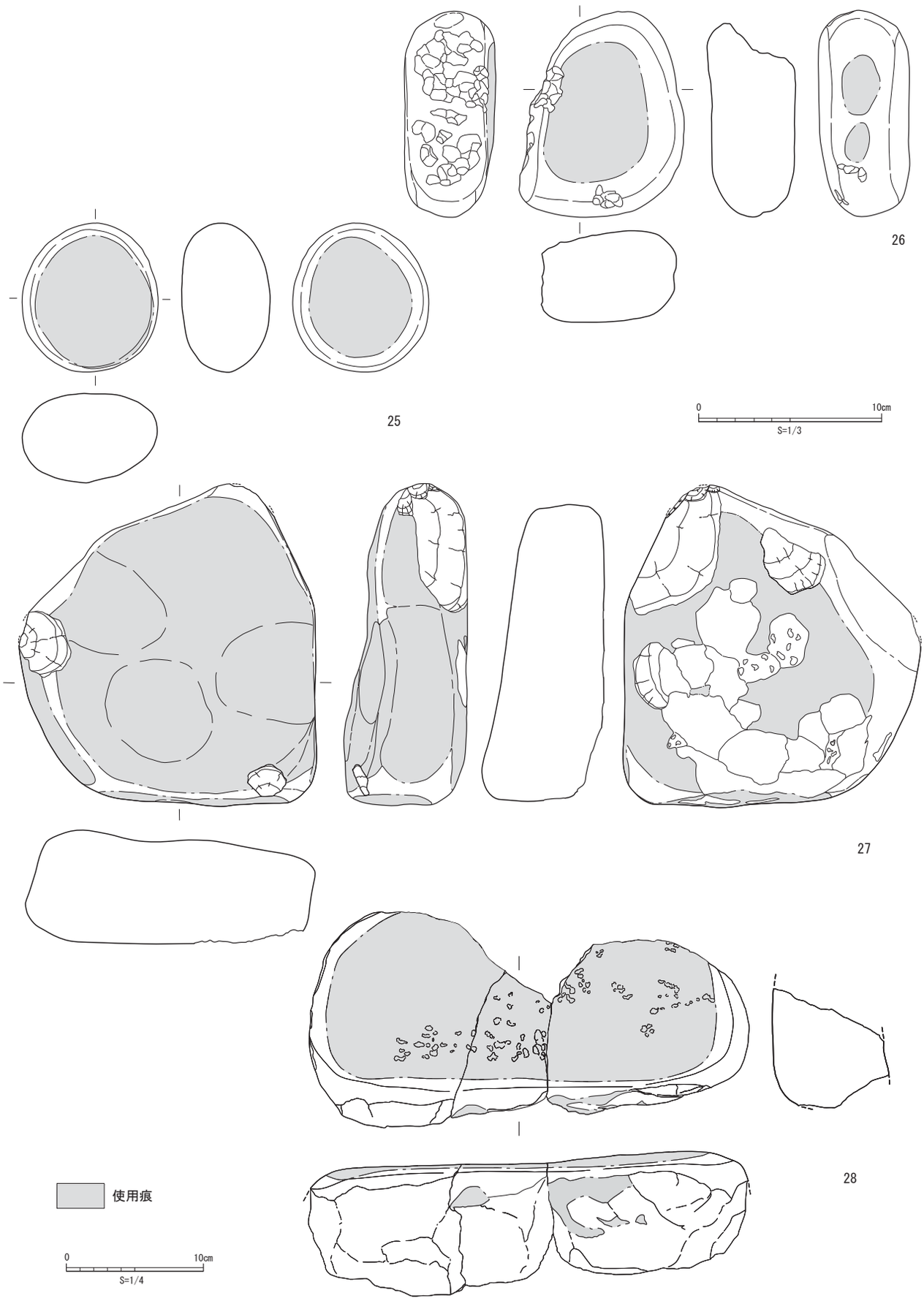
36 は深鉢の波状口縁部片で、口縁帯に 2 条の凹線を巡らせ、口縁帯下位に楕円形の押点を施す。37 は浅鉢の口縁帯に 2 条の凹線が巡る。38 ～ 40 は湾曲する頸部から口縁部が真っ直ぐに立ち上がる。いずれも波状口縁をもつ浅鉢である。口縁帯に 2 条の幅の広い沈線を施し、38・39 は口縁帯下位に、40 は波頂部に押点を施す。

41・42 は深鉢の口縁部片である。口縁帯に 2 条の沈線を巡らす。43・44 は浅鉢の口縁部片で、43 は波状口縁で 1 条の沈線を巡らす。44 は口縁帯の沈線がヘラ研磨により消されてしまったようで、明確でなくなっている。

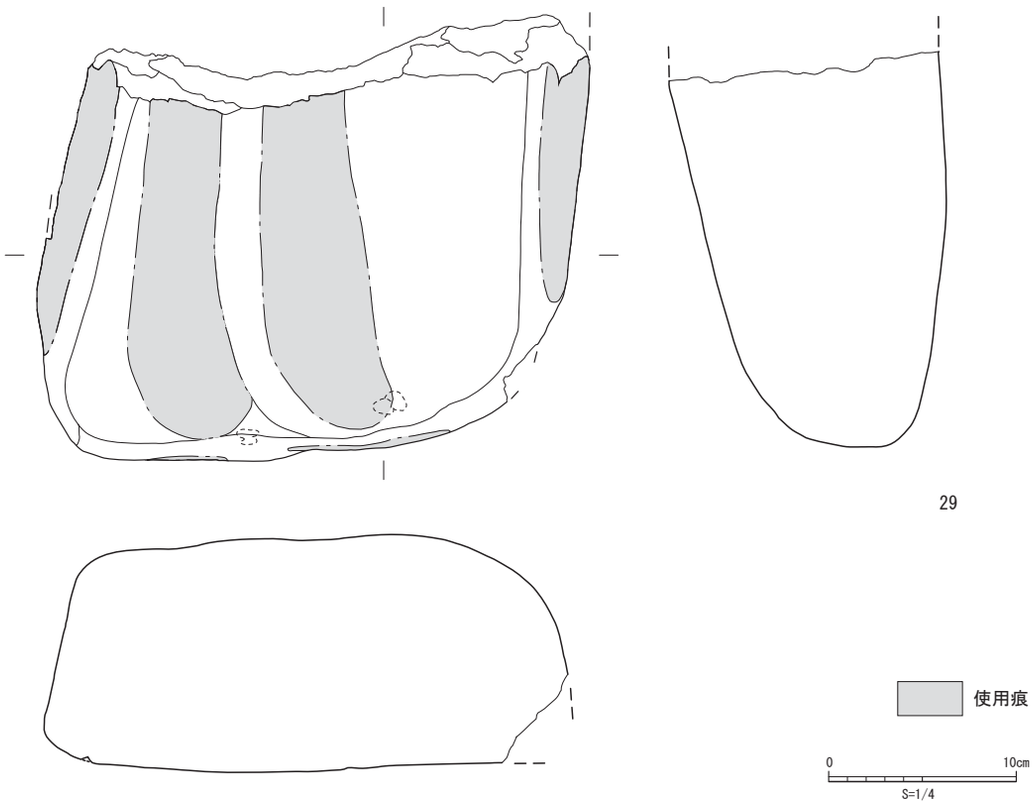
45 ～ 50 は深鉢の口縁部片である。45 は頸部が僅かに湾曲し真っ直ぐ伸びる口縁部が付く。口縁帯は無文で、内外面とも調整が雑で条痕が残ったままである。46 は口縁帯と言えるものが消失している。無文で、外器面にはヘラによる研磨が認められるが粗雑である。出土地点は造り付けカマドを持つＳＩ０３（旧



第２５図　２区ＳＩ０１出土遺物実測図（３）(19・21はS=1/2, 他はS=1/3)



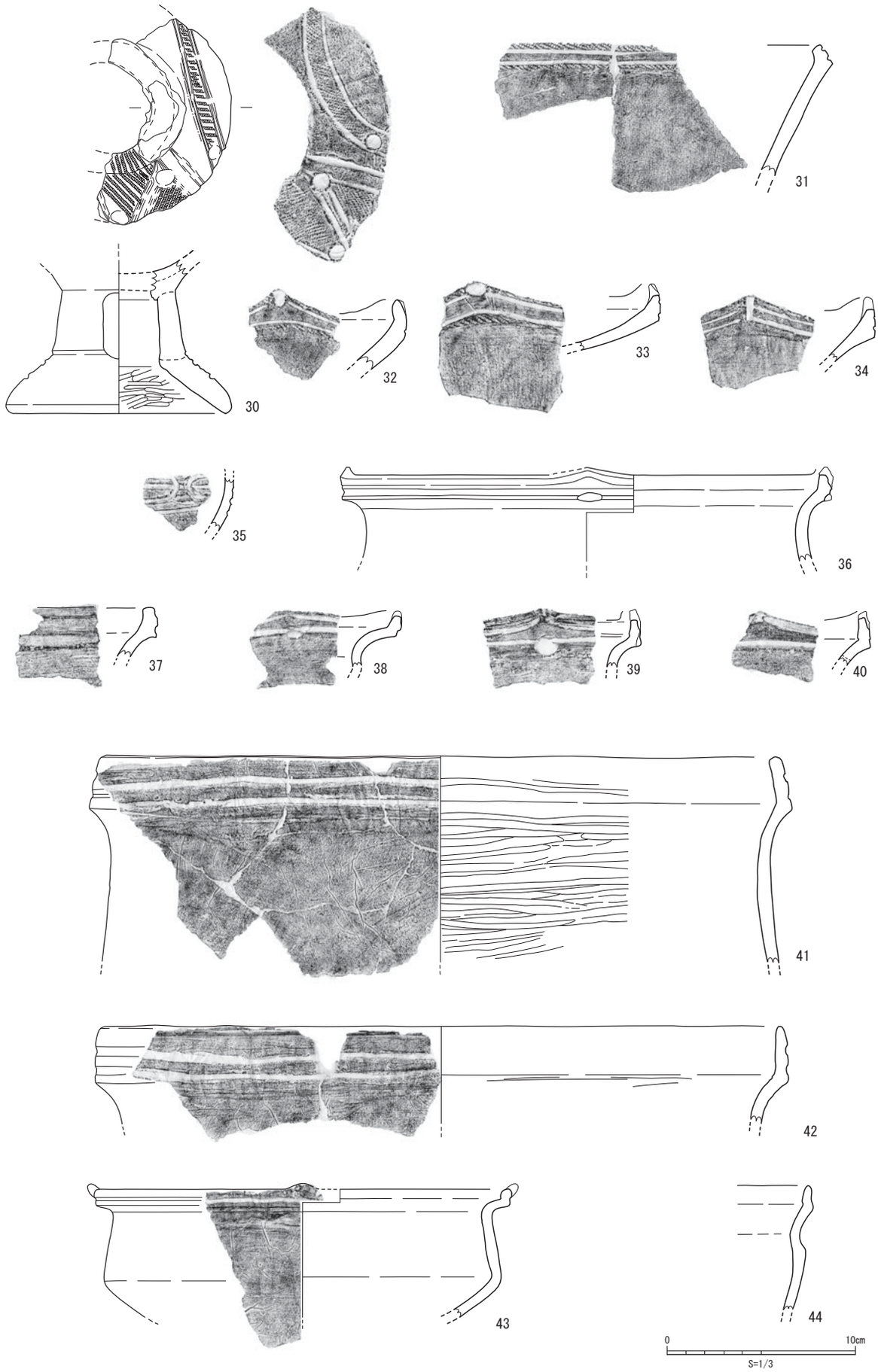
第２６図　２区ＳＩ０１出土遺物実測図（４）(25・26はS=1/3、27・28はS=1/4)



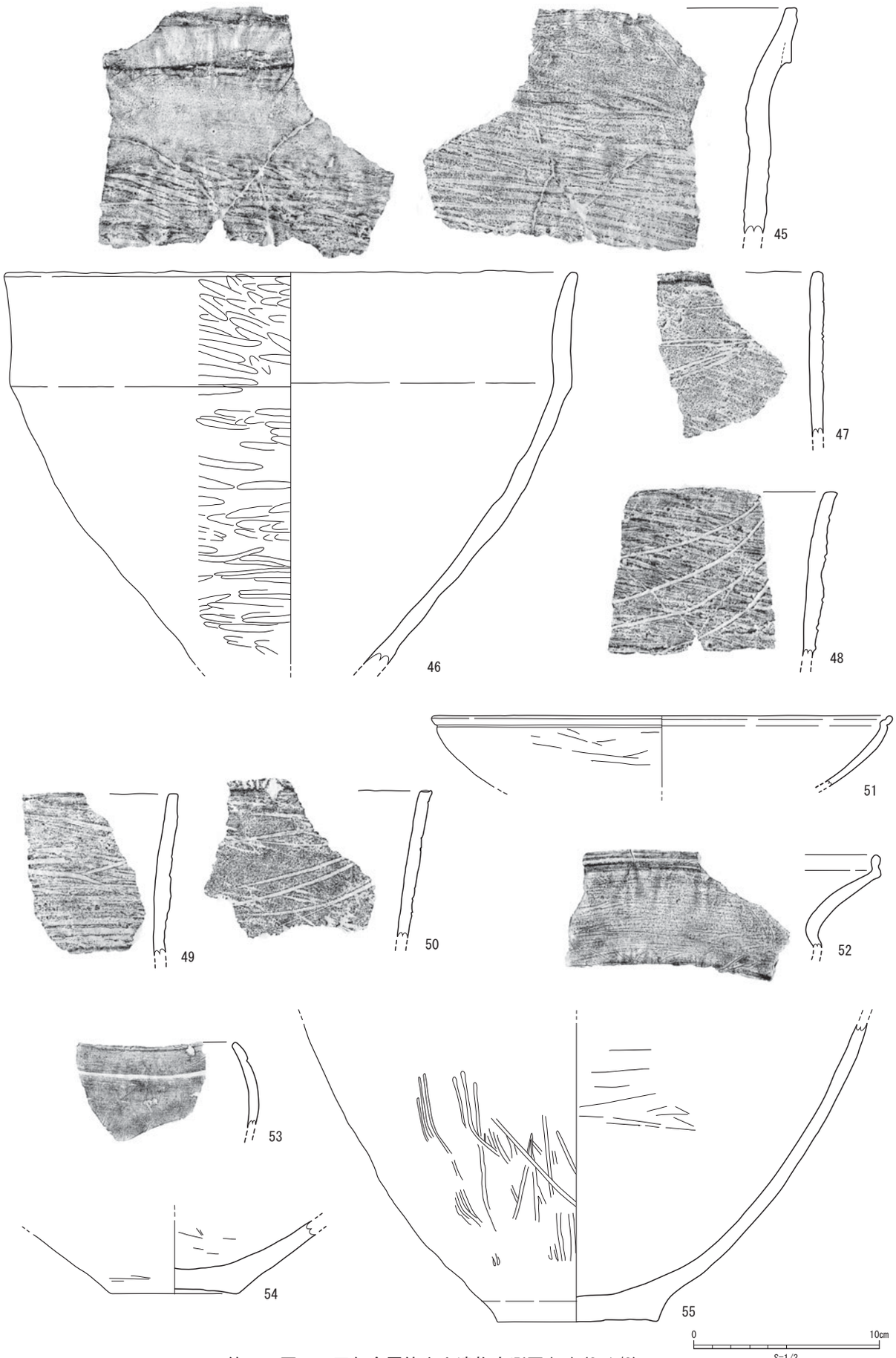
第２７図　２区ＳＩ０１出土遺物実測図（５）(S=1/4)

S105）及び 6389 グリッド 4 層となっている。この下層に前述の縄文時代の竪穴建物であるＳＩ０１が存在する。47 ～ 50 も明確な口縁帯はなく、条痕による器面調整の後、弧を描いたような細い沈線が施されている。51 ～ 53 は浅鉢の口縁部片である。51 は椀形の体部に短い口縁部がつく。52 は湾曲した頚部に短い口縁部が付く。口縁帯に 1 条の沈線を施す。53 は椀形で口縁部が内向する。口縁下に 1 条の沈線が巡る。54・55 は底部片で、54 は僅かに上げ底を呈する。

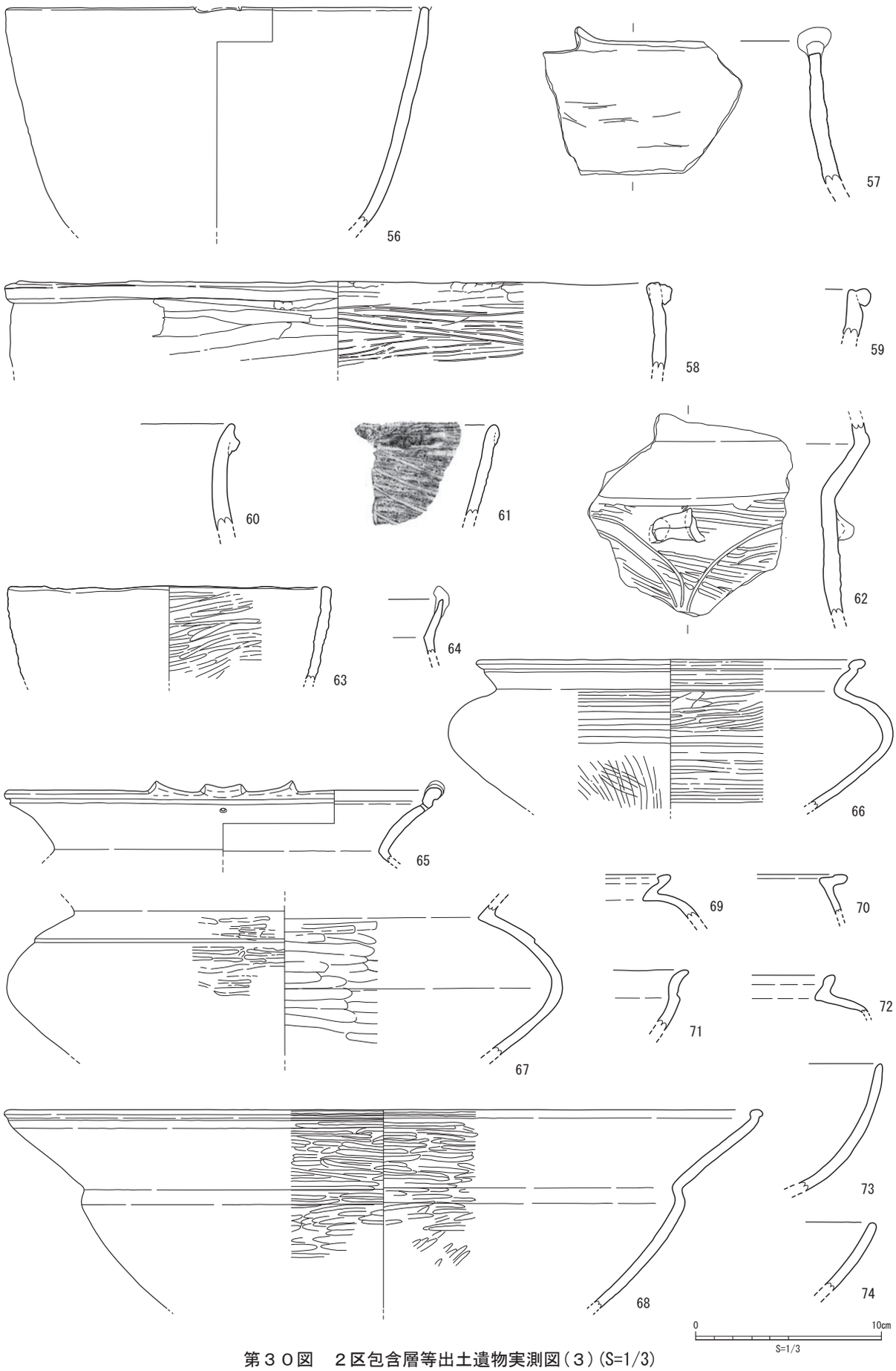
56・57 は鉢で、口縁部にリボン状突起を施す。58 ～ 60 は口縁部に突帯を施されるが、刻目は施されない。61 は口縁部に指でつまみだしたような肥厚した箇所が部分的に見られる程度で、明確な突帯ではなく、その直下に 4 条の斜め方向の浅い沈線が施される。62 は胴部から頚部にかけての破片で、胴部にリボン状の突起と弧線が施される。胴部外面には条痕が残る。63 も深鉢の口縁部片で、内面はヘラによる研磨が認められるが、外面には条痕が残る。64 は口縁部にリボン状の突起をもつ。器壁が薄く、頚部がくびれるので浅鉢と思われる。65 ～ 74 は浅鉢である。65 は口縁部にリボン状の突起をもち、その直下に 1 条の沈線を巡らせる。またリボン状突起の中央下に径 2 mm 程の穿孔がある。おそらく対になるものであろう。66 は丸く膨らんだ胴部に短い頚部が付き、口縁下に 1 条の沈線を巡らす。内外面とも丁寧に研磨され黒光りしている。67 は丸く膨らんだ胴部の上位で段が付き、それから強く屈折する頚部につづくものである。内外面とも研磨されている。68 は長い頚部をもつもので、口縁下に 1 条の沈線を巡らす。内外面とも研磨されている。69 は丸みのある胴部に、強く湾曲する短い頚部が付く。70 も短い頚部が付くものだが小片で詳細は不明である。或いはこの図よりまだ内側に傾くかも知れない。71 も短い頚部がつくものだが、他と比べ器高が深く椀形になるものかも知れない。72 は球形の体部に短い頚部が付くものと思われる。73・74 は椀のような器形で胴部・頚部といった境界はない。口縁が一部低くなる片口のような形状になるものかも



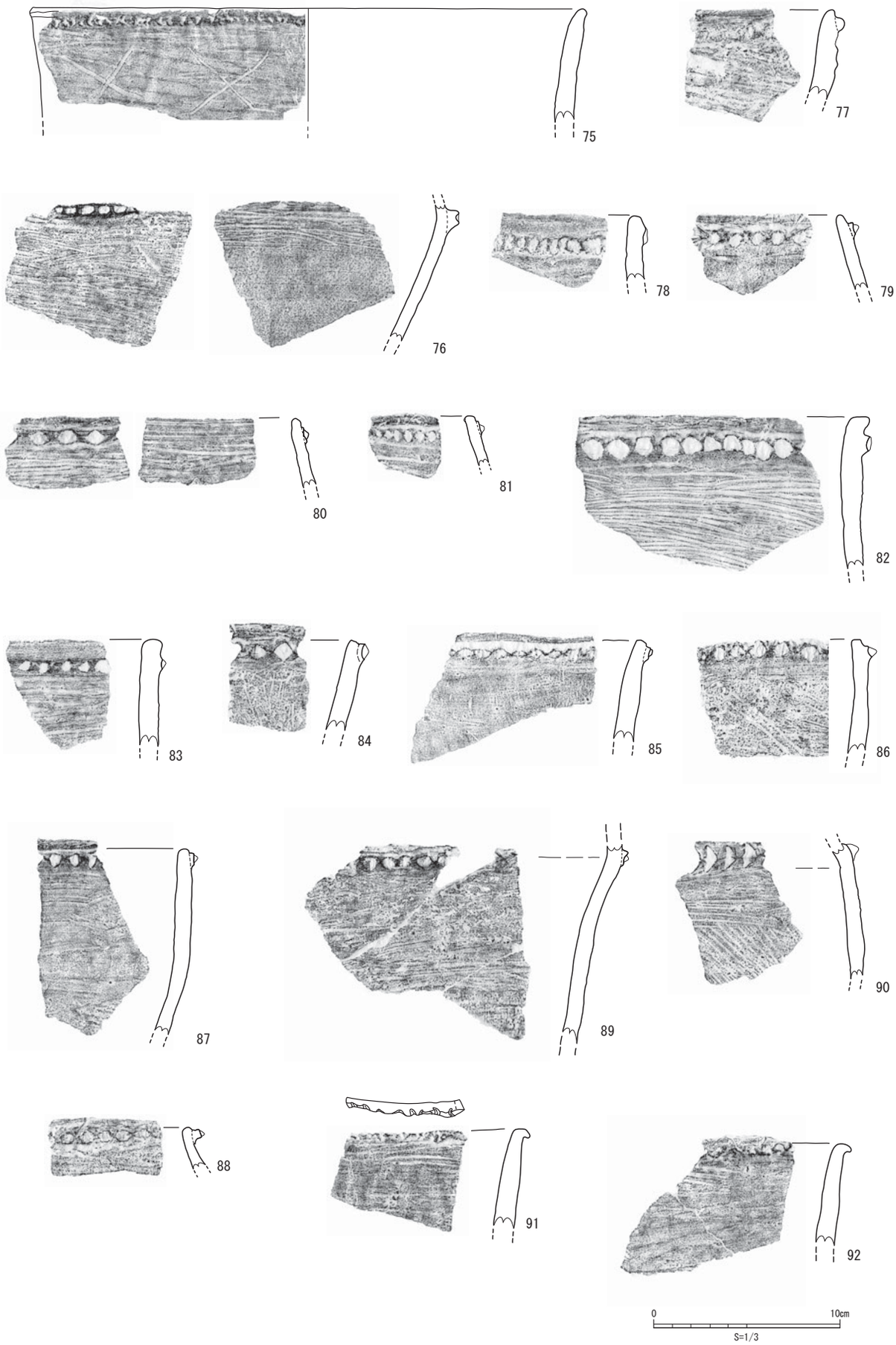
第２８図　２区包含層等出土遺物実測図（１）(S=1/3)



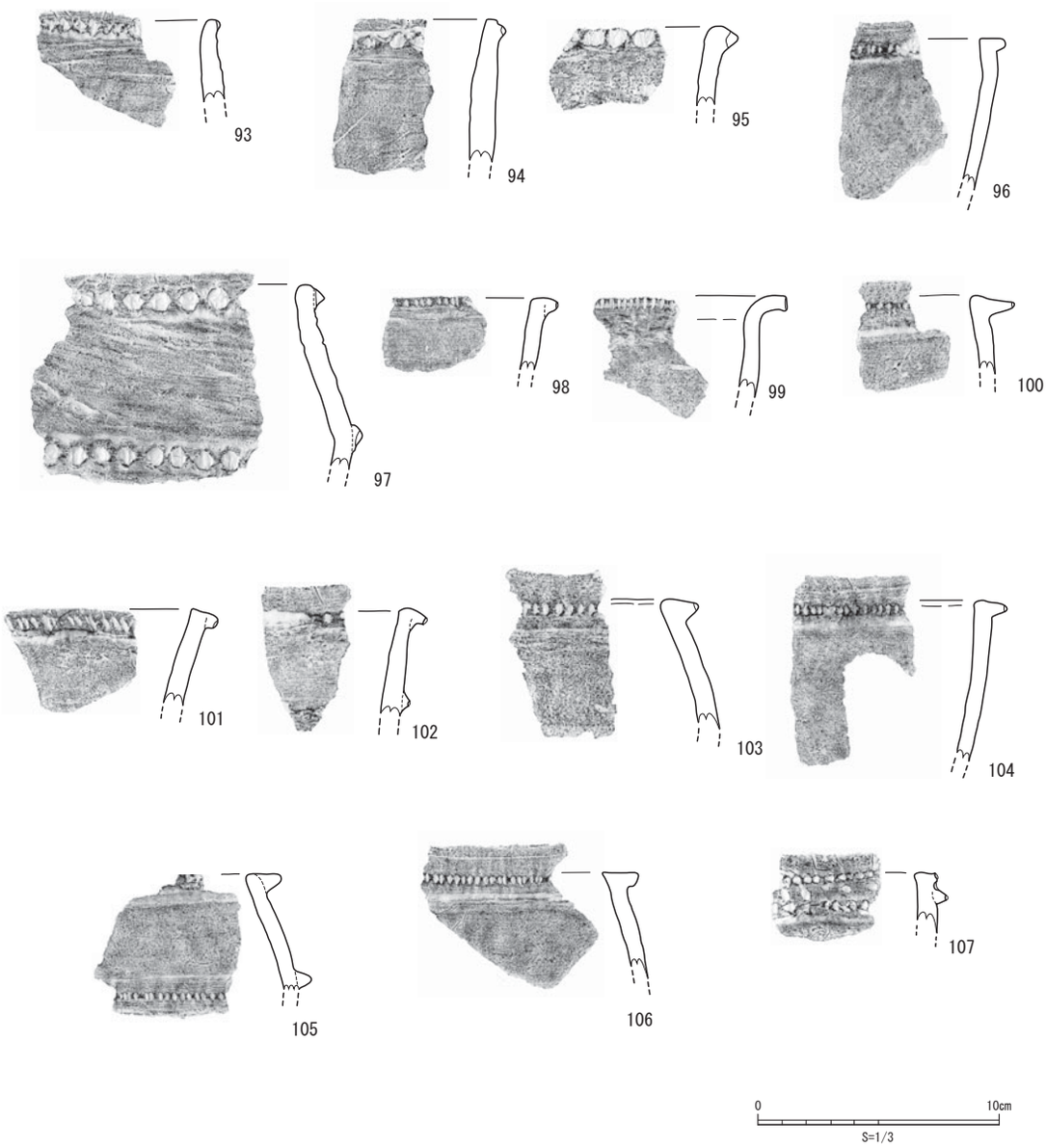
第２９図　２区包含層等出土遺物実測図（２）(S=1/3)



第３０図　２区包含層等出土遺物実測図（３）(S=1/3)



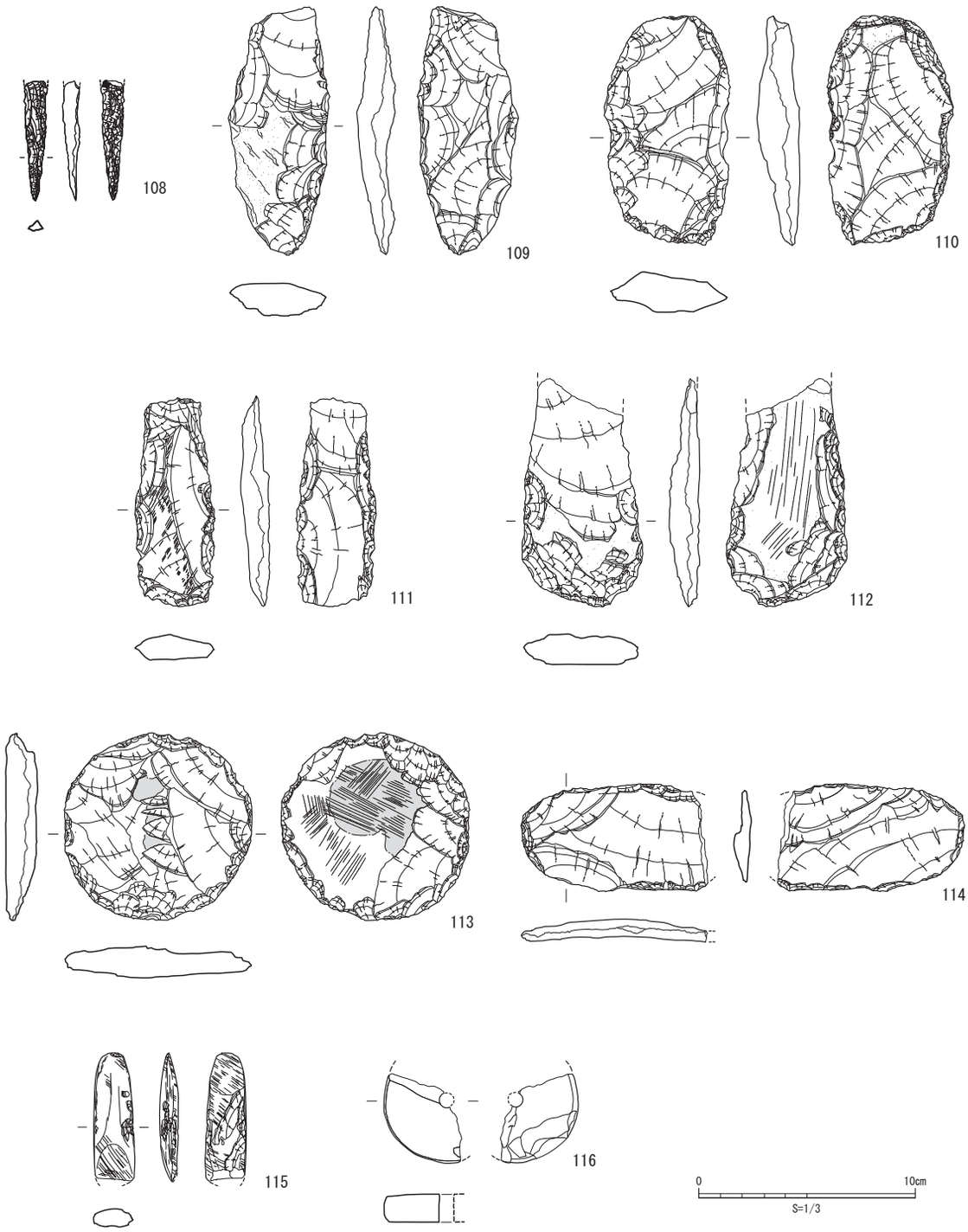
第３１図　２区包含層等出土遺物実測図（４）(S=1/3)



第３２図　２区包含層等出土遺物実測図（５）(S=1/3)

知れないが、類例を見つけることが出来ず、詳細は不明である。

75 ～ 107 は刻目を持つ深鉢である。75 は口縁端部を指でつまみ上げわずかに端部が肥厚した所も見られる。76 は胴部片で、屈折部に刻目突帯が付くが長さ 5 cm 程で全周しない。内外面ともに条痕が残る。77 は外面に一見模様と思えるような粗い条痕が残り、一部器壁が剥がれている。口縁上部よりわずかに下がった個所に突帯を巡らす。刻目が施されるが、雑で刻目の痕跡が明確でないところもある。78 ～ 88 も口縁上部よりわずかに下がった個所に刻目を施すものだが、88 では部分的には口縁直下に突帯がきている所がある。80・82・86 は外面に粗い条痕が残ったままである。89・90 は 2 条の刻目突帯の下段の突帯で、胴部の屈折する箇所に付く。外面には粗い条痕が残る。91 ～ 93 は口縁直下に刻目突帯を持つものだが、口縁端部を摘みあげ肥厚させたような突帯で、91・92 はほとんど肥厚していない箇所も見られる。94 ～ 106 は口縁直下に刻目突帯を持つもので、97・102 は 2 条の突帯をもつ。107 は口縁部直下に 2 条の刻目突帯が付き、上下の突帯の間にも刻目が施される。口縁部としたが、脚部の可能性もある。

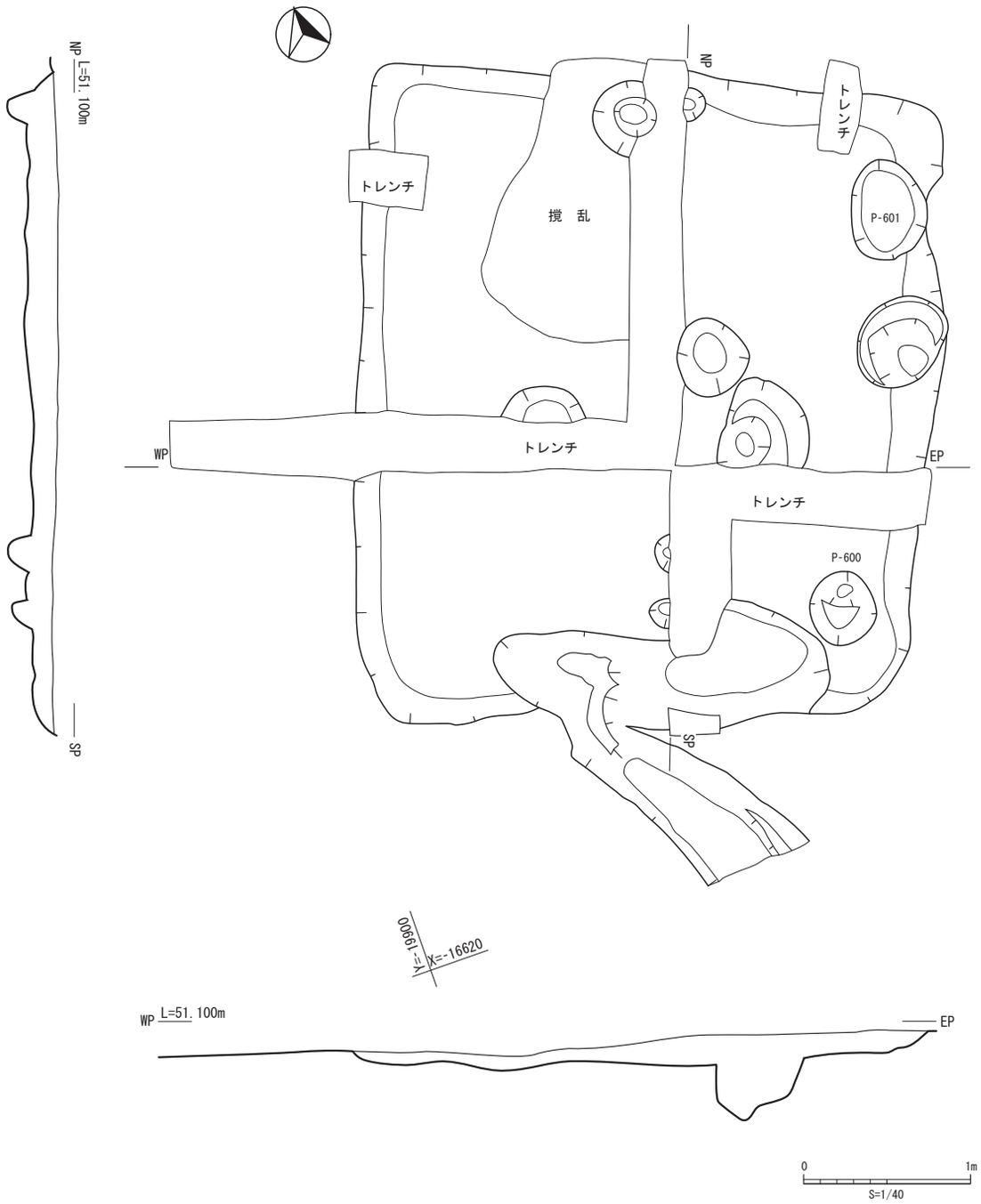


第３３図　２区包含層等出土遺物実測図（６）(S=1/3)

石製品（第３３図 108 ～ 116）

108 は角錐状の石錐である。109 ～ 112 は打製石斧で、111 までは従来から「短冊形」と呼ばれてきたもので、全体の形状は長方形に近く、最大幅がほぼ中位にくるものである。112 は最大幅が下位にくるもので、従来から「バチ形」と呼ばれてきたものである。113 は従来から「円盤状石器」と呼ばれてきたものである。114 は上部に抉りもなく不明だが打製石包丁かもしれない。115 は磨製の石ノミである。116 は紡錘車である。厳密には時代は不明であるが、便宜上縄文時代の遺物として取り上げた。

その他全体形がわからないので実測はしていないが、石ノミ１点と磨製石斧２点（図版 32 の写１）、打製石斧６点（図版 32 の写３）が出土している。 縄文時代後晩期の遺跡としては土器も多いという程では



第３４図　２区ＳＩ０２実測図(S=1/40)

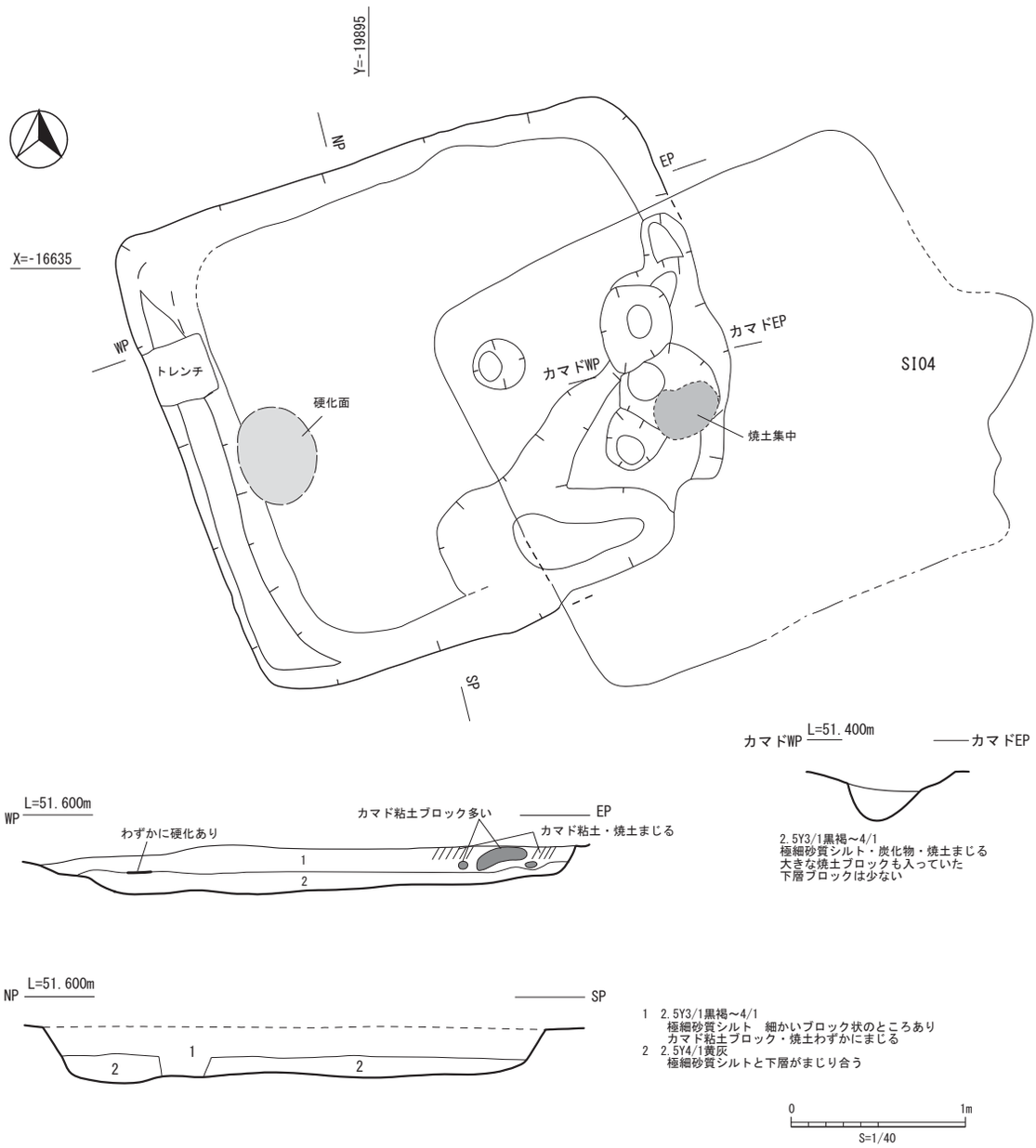
ないが、この時期にしては、石器の中でも特に打製石斧が少ないように思える。

２　古代以降の遺構と遺物

竪穴建物のほとんどが柱穴は確認されていない。中には炉やカマドも確認されていないものもあるので、ここで報告するすべてを竪穴建物と認定するには問題があるのかもしれないが、可能性のあるものを広く竪穴建物として掲載した。

ＳＩ０２（旧S117　第３４図）

6189 グリッドに位置する。南北長は推定で約４m、東西長は約 3.5 mの方形プランである。深さは最大で 20cm 程で、西側はより削平がひどい。また北側は攪乱により、南側も不明遺構により破壊されている。



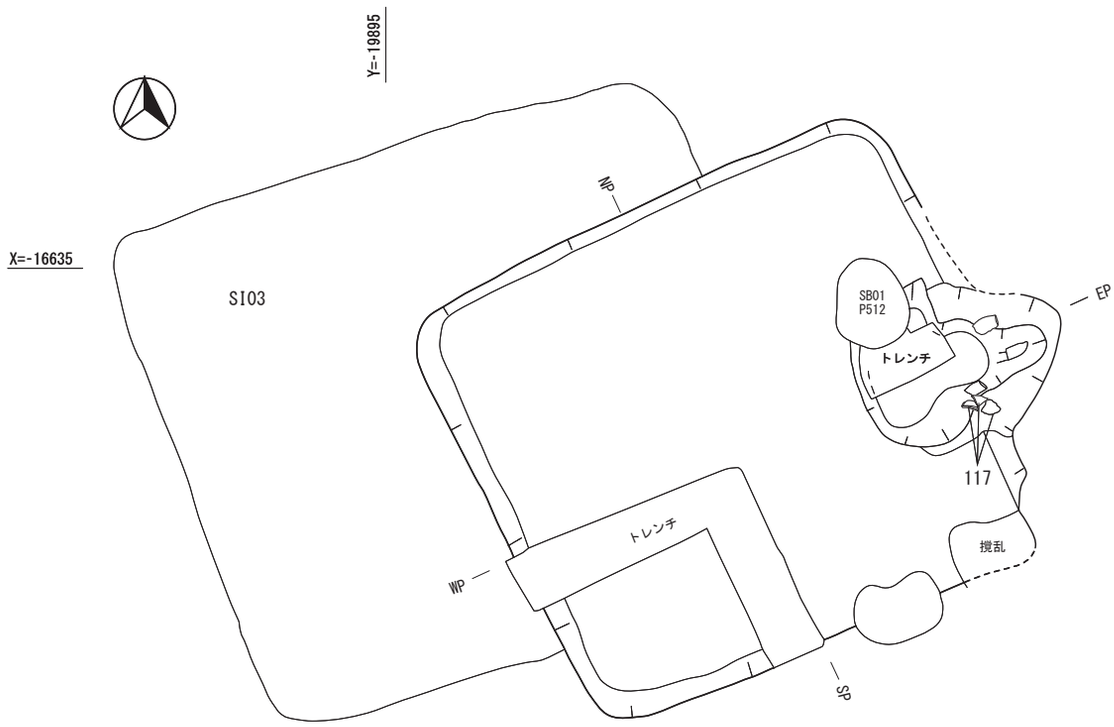
第３５図　２区ＳＩ０３実測図(S=1/40)

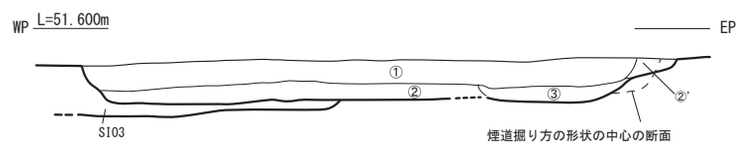
多くのピットがあるが、この建物に伴うものかは不明である。また遺物も出土していない。

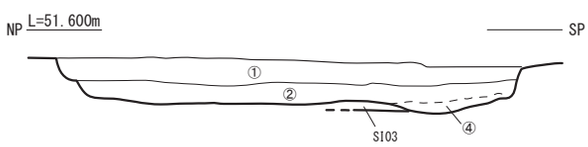
ＳＩ０３（旧S105　第３５図）

6389 グリッドに位置し、ＳＩ０４により南東部が破壊されている。またＳＩ０３・ＳＩ０４の下に前述した縄文時代のＳＩ０１がある。

南北 2.85 m、東西 3.2 m程の方形プランである。西側は２段掘のような断面形になり、西端中央床面に部分的に硬化面が認められる。東側は大部分がＳＩ０４により壊されているが、床面より掘り込まれた造り付けカマドの痕跡がかろうじて残っているようである。西壁側で認められる２段の掘り込みは２軒の建物の可能性もある。東西土層断面図をみると、１層が１段目の掘り込みに対応すること、１層にわずかに硬化ありの注記やカマド粘土・焼土が混じるとの注記があること、南北土層断面の１層にピット状の掘り込みがあることからの推察であるが、或いは２層は貼床であった可能性も考えられる。その他南東部の不定形の掘り込みについては、ＳＩ０３と重なり合っていない個所にも存在し何に起因するか不明である。東壁際のカマド周辺のピットはカマドを壊しているようなので、ＳＩ０４に伴うものの可能性もあるが、ＳＩ０４の平面

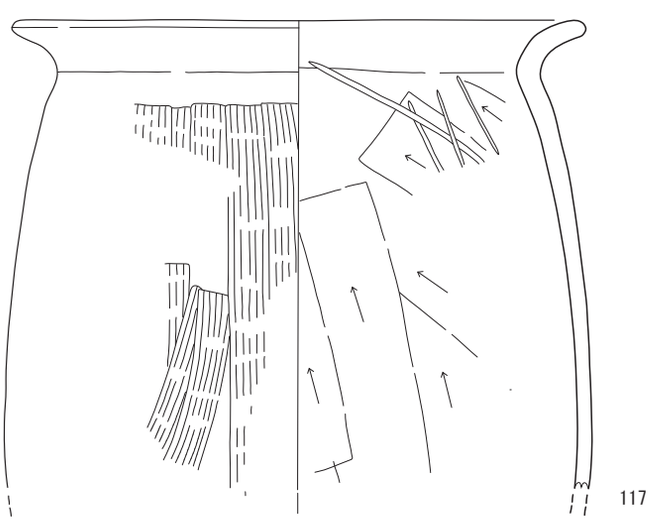


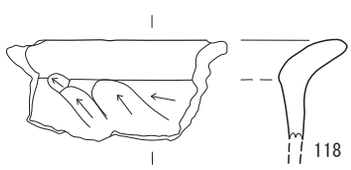




① 10YR3/1黒褐～4/1極細砂質シルト
細砂若干まじる　全体的に細かいブロック状
カマド上部は焼土、カマド粘土がまじるが多くはない
又カマドの南に炭化物が入るところがある
② 10YR3/1黒褐～4/1と10YR5/3黄褐～4/3
極細砂質シルト(4層)が粗くまじる
全体的に粗いブロック状
②' 煙道掘り方？焼土が少し混じる
③ 10YR4/1褐灰極細砂質シルト　カマド下部
焼土、カマド粘土、炭化物若干まじる(特に煙道付近)
④ 10YR3/1黒褐～4/1
極細砂質シルトと下層がまじり合う
②との層境は不明瞭

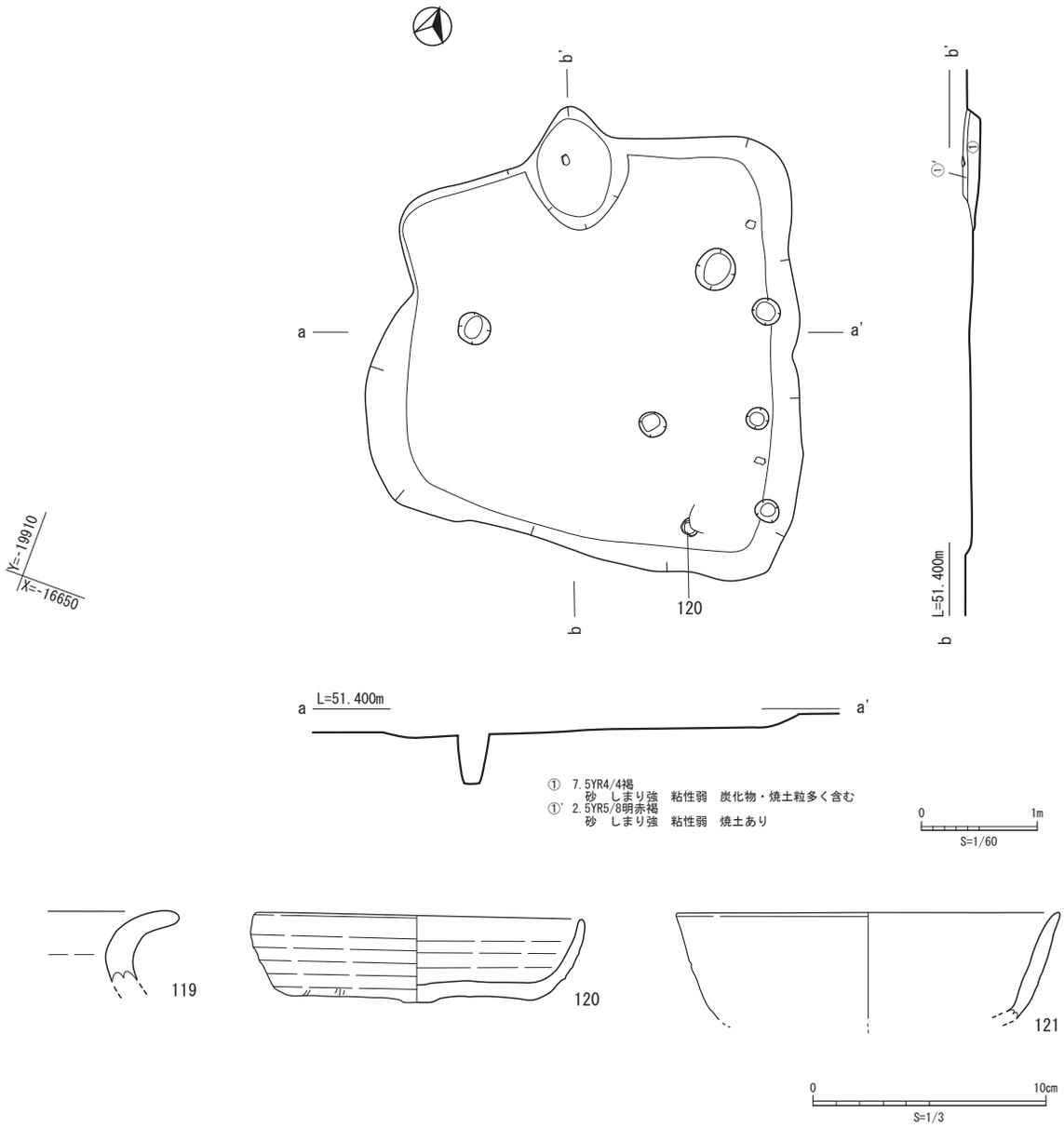
0　1m
S=1/40





0　10cm
S=1/3

第３６図　２区ＳＩ０４実測図(S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)



第３７図　２区ＳＩ０５実測図・遺物出土状況(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)

図には描かれていない。なお、遺物は出土していない。

ＳＩ０４（旧S104　第３６図）

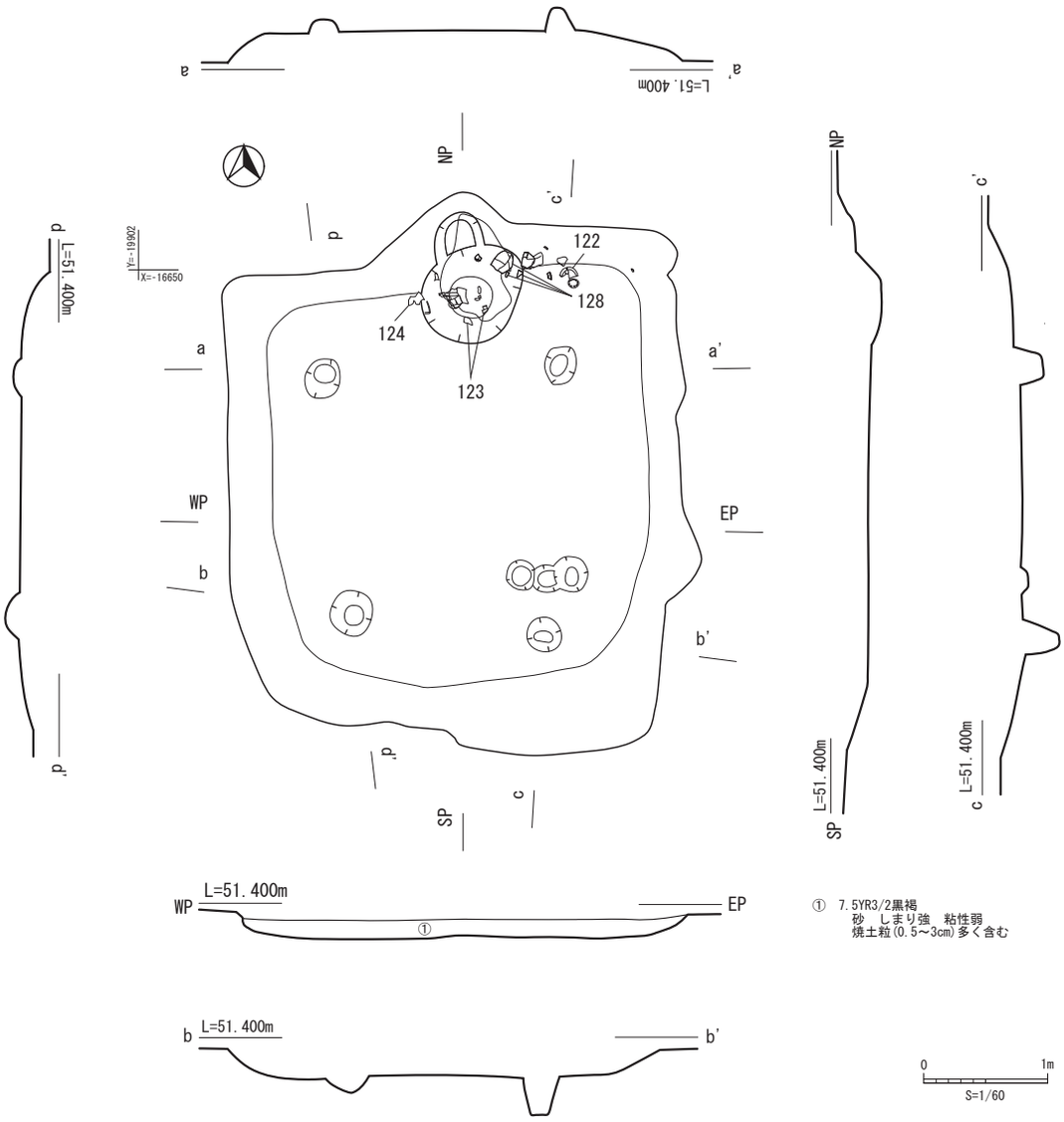
東側に造り付けカマドを有する竪穴建物である。南北 2.55 m、東西 2.8 m程の方形である。東西土層断面を見ると②層を掘り込んでカマドが造られていることから考えると①層と②層の境が床面と判断され、②層は貼床に該当する可能性が高い。これも西側壁や北壁断面は２段の掘り込みとなっており、その１段目と想定した床面が対応する。あるいは２軒が重なりあっているのかも知れない。①層までの深さ約 11cm ②層までの深さ約 21cm である。柱穴は検出されていない。

ＳＩ０４出土遺物（第３６図 117・118）

遺物はカマド周辺から出土している。117 は甕の口縁部から胴部にかけての破片で内面にはヘラケズリが施される。118 も甕の口縁部片でかなり熱を受けている。

ＳＩ０５（旧S008　第３７図）

6490 グリッド内に位置する。北側に造り付けカマドを有する竪穴建物である。方形プランであるが、東



第３８図　２区ＳＩ０６実測図及び遺物出土状況(S=1/60)

壁際の長さ約3.8 mに対して、西側壁際の長さは2.8 m程で、台形状を呈す歪な平面形である。東西長は3.55m程である。深さは最大でも10cmにも満たない。特に西側の削平が著しく、そのためか、西側ラインが不定形になっている可能性はある。ピットが複数検出されているが、建物に伴うものがあるのか不明である。

ＳＩ０５出土遺物（第３７図119～121）

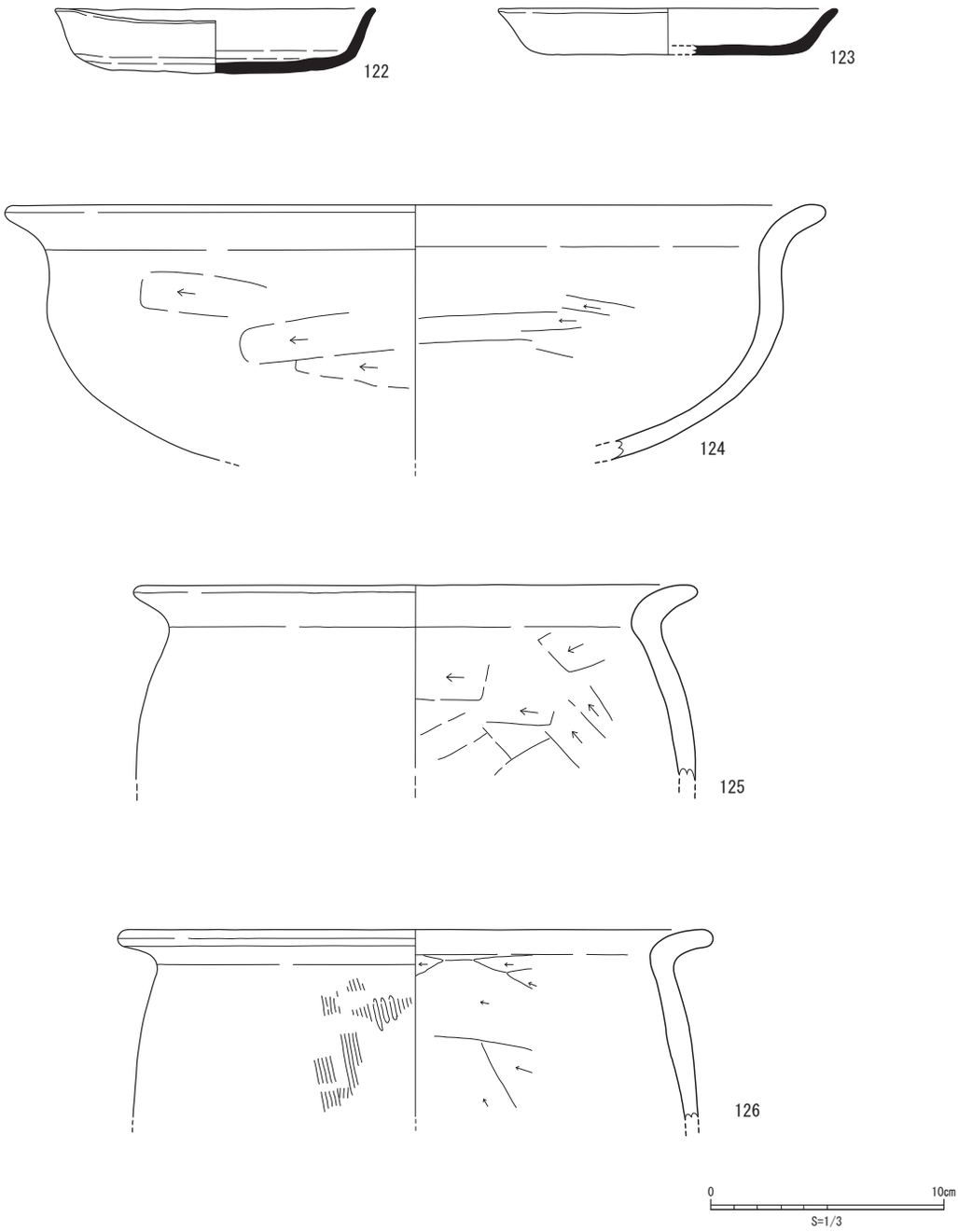
119は土師器甕の口縁部片。120・121は土師器の坏で、120の底部は回転ヘラ切離しの後、ナデ調整を施されるが雑である。

ＳＩ０６（旧S004　第３８図）

6490・6489・6589・6590グリッドにまたがる個所に位置する。北側に造り付けカマドをもつ。東西長約3.7 m、南北長3.65 mの方形を呈す。現状での深さは約15cmで、埋土は単層である。平面図でみると一見４本柱の建物のように見えるが、深さは様々で、西側の柱の深さは10cmにも満たず、柱穴と認定するのは躊躇される。

ＳＩ０６の出土遺物（第３９・４０図）

遺物はカマドを中心に比較的多く出土している。122・123は須恵器の坏である。両者とも底部は回転ヘ

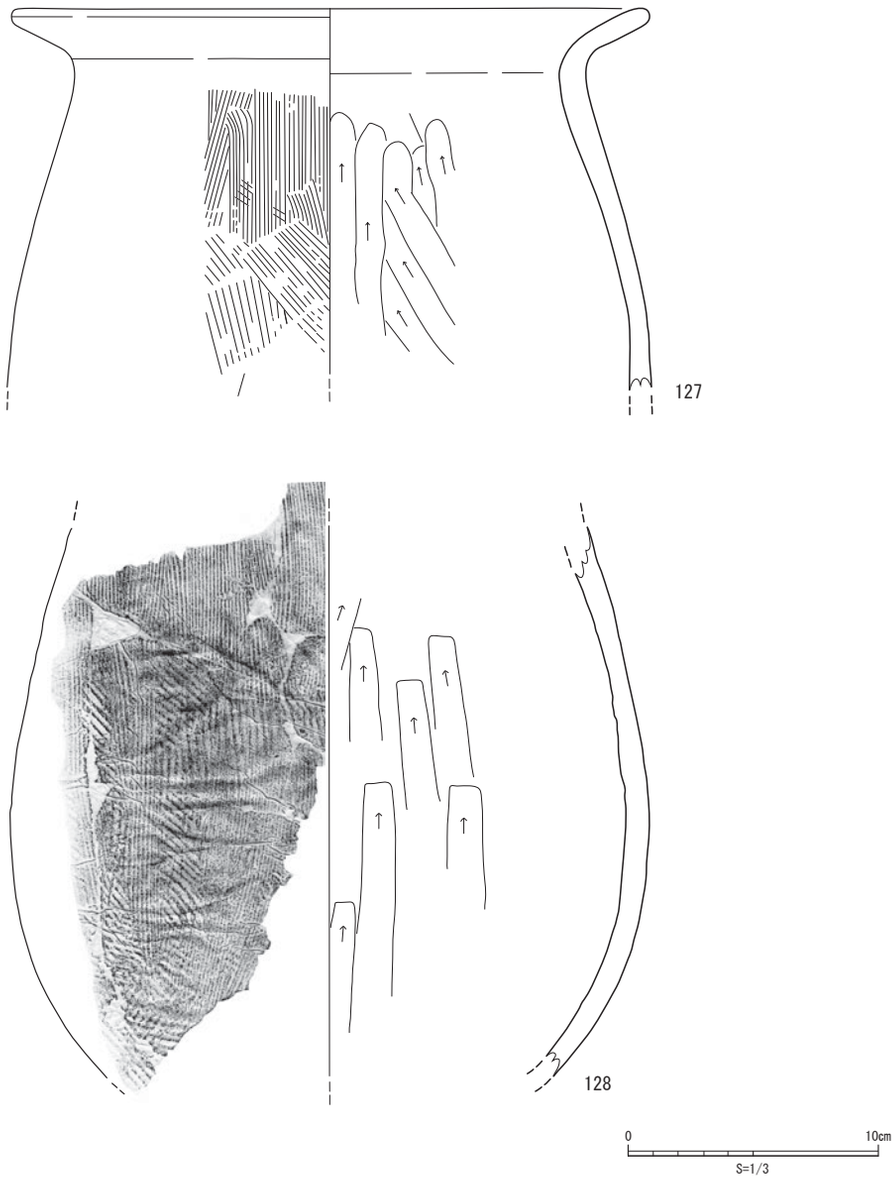


第３９図　２区ＳＩ０６出土遺物実測図（１）(S=1/3)

ラ切離しの後、比較的丁寧なナデが施される。124 は鉢で、体部外面は横方向のヘラケズリが施され、その後ナデ調整を施す。内面はヘラケズリのままである。125 ～ 128 は甕である。いずれも内面にはヘラケズリが施される。127 と 128 は同一個体と思われる。外面にはタタキの後ハケ調整が施されるが、部分的にタタキの痕跡が残る。

ＳＩ０７（旧 S006　第４１図）

6490 グリッドに位置する。最初に焼土が確認された箇所に十字にトレンチを入れ、土層断面図が作成されている。それが土層図３と５である。①層がその焼土に該当し、３の図で言えば NP から南へ 1.18 mの地点から 2.66 mまでの範囲、土層図５では、WP1 から東へ 2.25 mから 3.06 mまでの範囲が焼土となる。調査日誌では、この焼土の範囲は楕円形で示され、そこに竪穴建物の外形ラインが描かれ、２軒ないし３軒の竪穴建物の重なりが想定されていた。それが第 41 図の外側の外形ラインに該当する。ところが３日後の

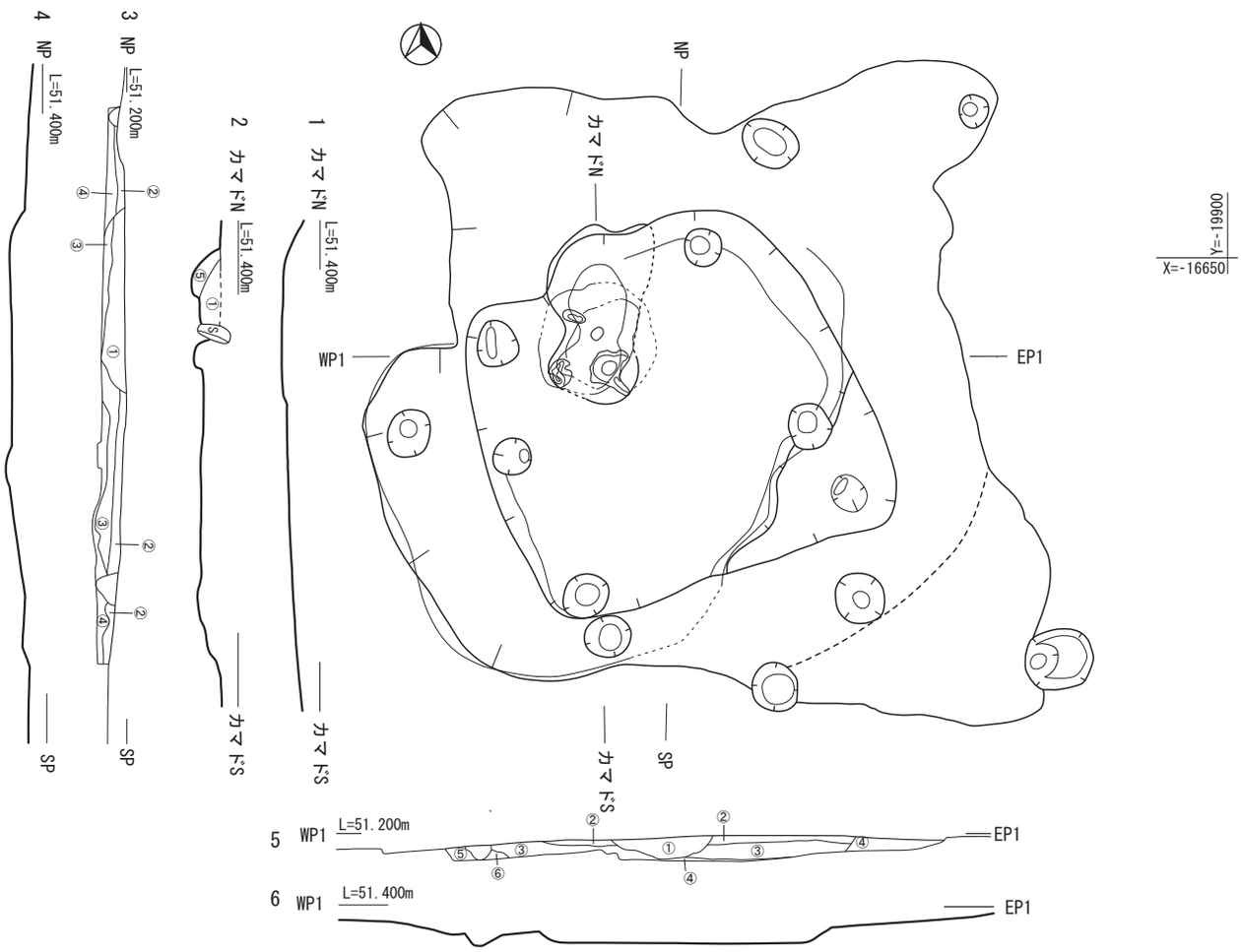


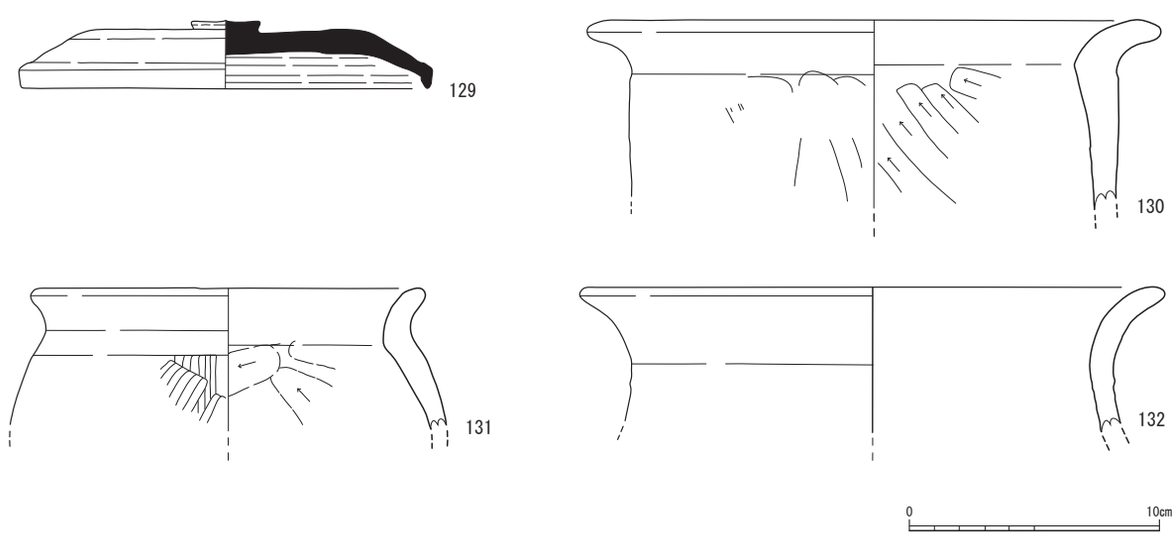
第４０図　２区ＳＩ０６出土遺物実測図（２）(S=1/3)

実測図には、別の位置にカマドの平面図が描かれている。NP － SP ラインにはカマドはなく、新たにカマド N －カマド S というセクションが設定されている。またカマドの位置は WP1 より東へ 1.6 mから 2.5m の地点となっているので明らかに最初の焼土とは違うものである。その図面に各ポイントの標高も書かれているが、前回の図面より 20 cm 高く標高 51.4m となっている。この間の経緯には全く触れられず、最終的には一番内側の方形プランを S006 とされている。南東側の下端のラインは歪であるし、カマドの東側の立ち上がりもないし、竪穴建物として取り扱うのは躊躇される。また断面図 4 と 6 は、平面図に落としてあるレベルより立ち上げて作成したものであるが、この図から判断すれば当初図面の各ポイントのレベルが間違っていて、土層図 3 と 5 の標高は 51.4 mの可能性が高い。すべての図面が意味不明である。しかし遺構写真に焼土が写っているので焼土があったことは間違いないので、遺構として掲載している。

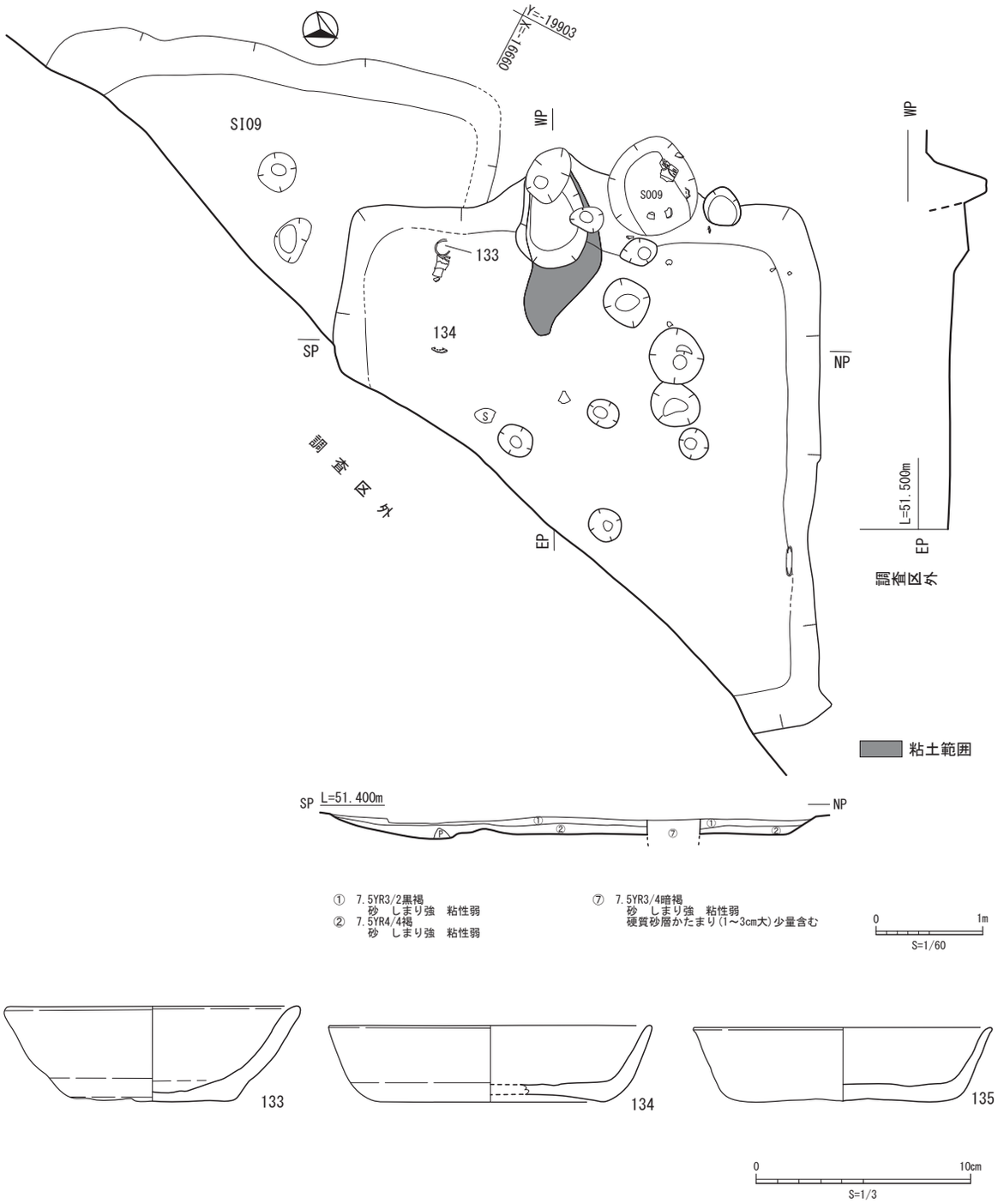
出土遺物（第４１図 129 ～ 132）

129 は須恵器の蓋で、扁平なツマミが付く。130 ～ 132 は甕の口縁部片である。内面にはヘラケズリの痕跡が見られる。132 は 130・131 と比べると口縁部がなだらかに外反する。





第４１図　２区ＳＩ０７実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)



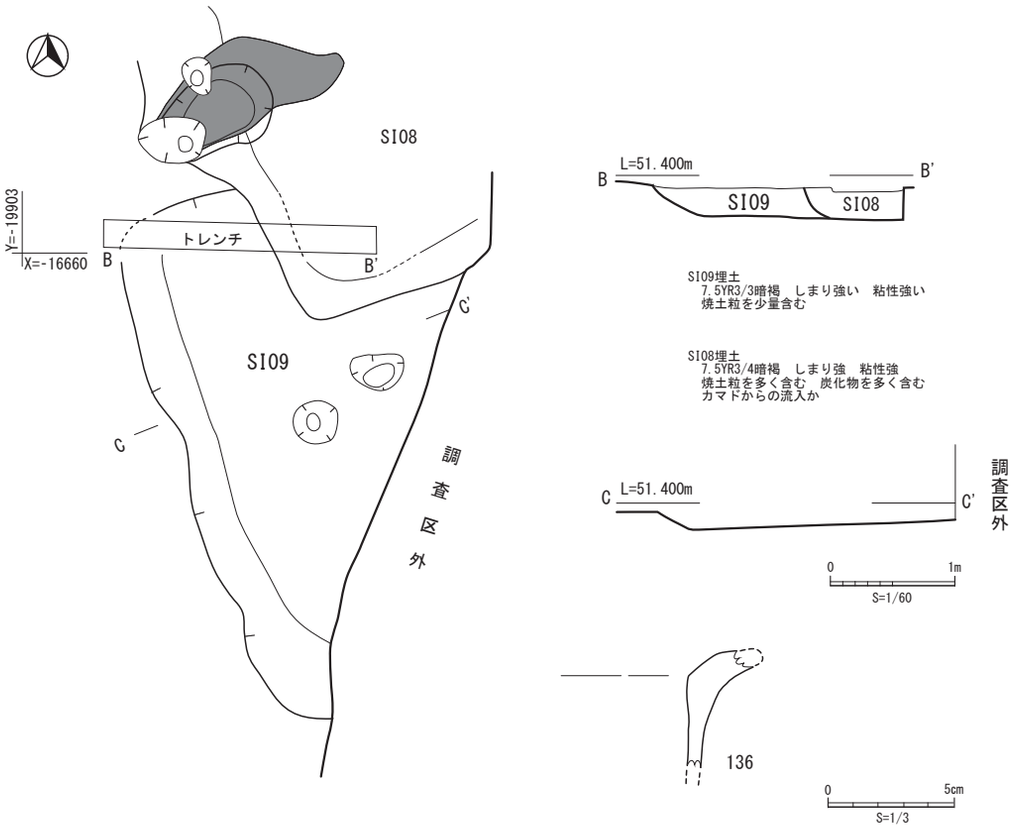
第４２図　２区ＳＩ０８実測図・遺物出土状況(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＩ０８（旧S003　第４２図）

6589グリッドに位置する。西に造り付けカマドを有し、南側の一部はＳＩ０９と重複する。南北長約4.6m、東西長約５mの方形を呈する。深さは現状で約15cmである。カマドは後世のピットにより煙道側を破壊されている。この建物に伴う柱穴は確認されていない。

ＳＩ０８の出土遺物（第４２図133～135）

いずれも土師器の坏である。133は平底の底部から外向する体部がつく。調整がわからないほど器壁が荒れている。134はわずかに上げ底の底部で、回転ヘラ切り離し後ナデ調整が施される。135も底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整が施される。



第４３図　２区ＳＩ０９実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＩ０９（旧S005　第４３図）

ＳＩ０８により北側が壊されている。また東側は調査区外となる。南北長は 4.3m 程と推定される。埋土は単層で、現状の深さは約 25cm である。この建物に伴う柱穴は確認されていない。

ＳＩ０９の出土遺物（第４３図 136）

甕の頸部片で、外面はハケメ、内面はかすかにヘラケズリの痕跡が認められる。

ＳＩ１０（旧S012　第４４図）

6690 グリッドに位置する。東側の大半は調査区外となってしまっている。隣接して焼土があるが、焼土にかかる土層図が作成されていないので、この建物に伴うものか不明である。

ＳＩ１０の出土遺物（第４４図 137・138）

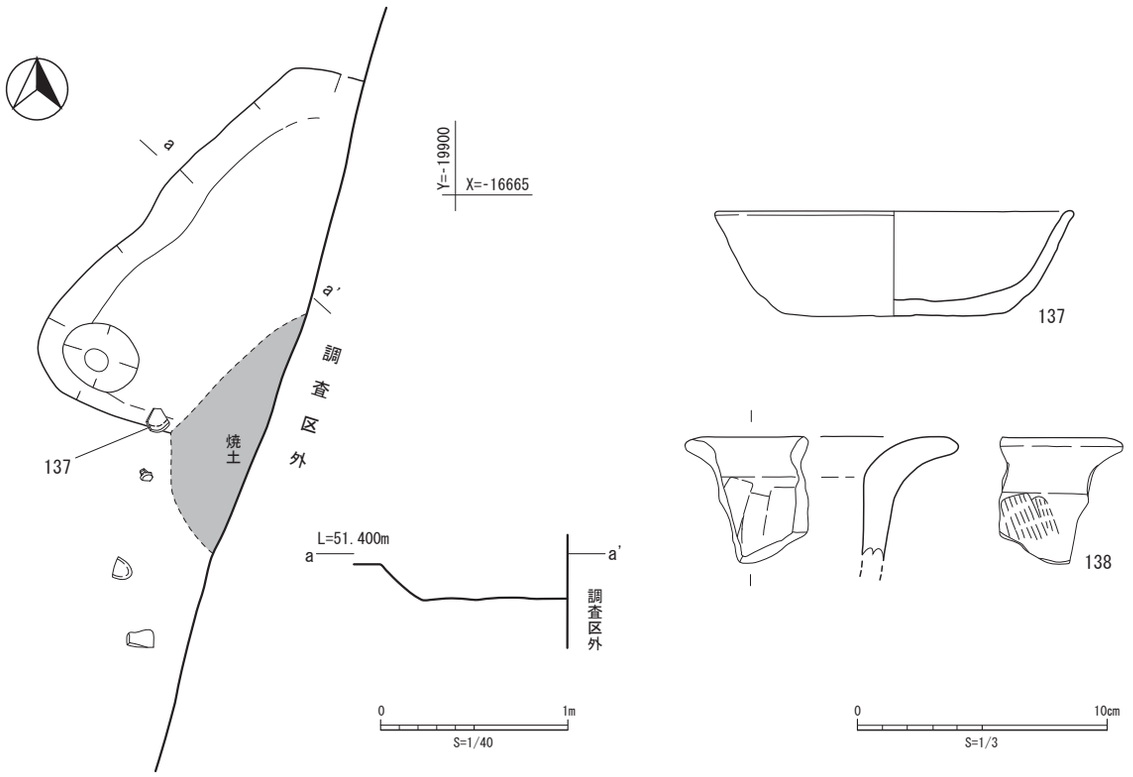
137 は土師器の坏で、回転ヘラ切離し後ナデ調整が施されている。138 は甕の口縁部で外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが認められる。

ＳＢ０１（旧S108　第４５図）

6389 グリッドに位置する。東側は調査区外となっているため全体形は不明である。現状で２×３間で、西側は全長約 5.2 mで、柱間の間隔は北より約 1.65 m・1.5 m・1.6 mである。北側は現状長約 5.15 mで、柱間隔は西より約 2.2 m・2.3 mである。また南側は 1 間のみだが柱間隔は約 1.9 mである。いづれも柱痕跡は確認されていない。

ＳＢ０１の出土遺物（第４５図 139）

P514 より土師器口縁部が出土している。細片で調整等も不明だが、薄手のもので坏か椀と思われる。



第４４図　２区ＳＩ１０実測図(S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＢ０２（旧S110　第４６図）

6390・6490 グリッドにまたがっている。南側はＳＢ０３と重なっている。桁行４間・梁行３間の柱配置をしている。北側桁行は全長約 7.6m で、柱間隔は東より約 1.7 m・1.9 m・1.65 m・1.8 m、南側桁行は全長約 7.2m で、柱間隔は東より約 1.6 m・1.8 m・1.75 m・1.5 mである。東側梁行は全長約 5.3 mで柱間隔は、北より約 1.5m・1.6 m・1.7 m、西側梁行は全長約 5.3 mで、柱間隔は北より約 1.75m・1.4 m・1.85 mである。柱痕跡はいずれも確認されていない。

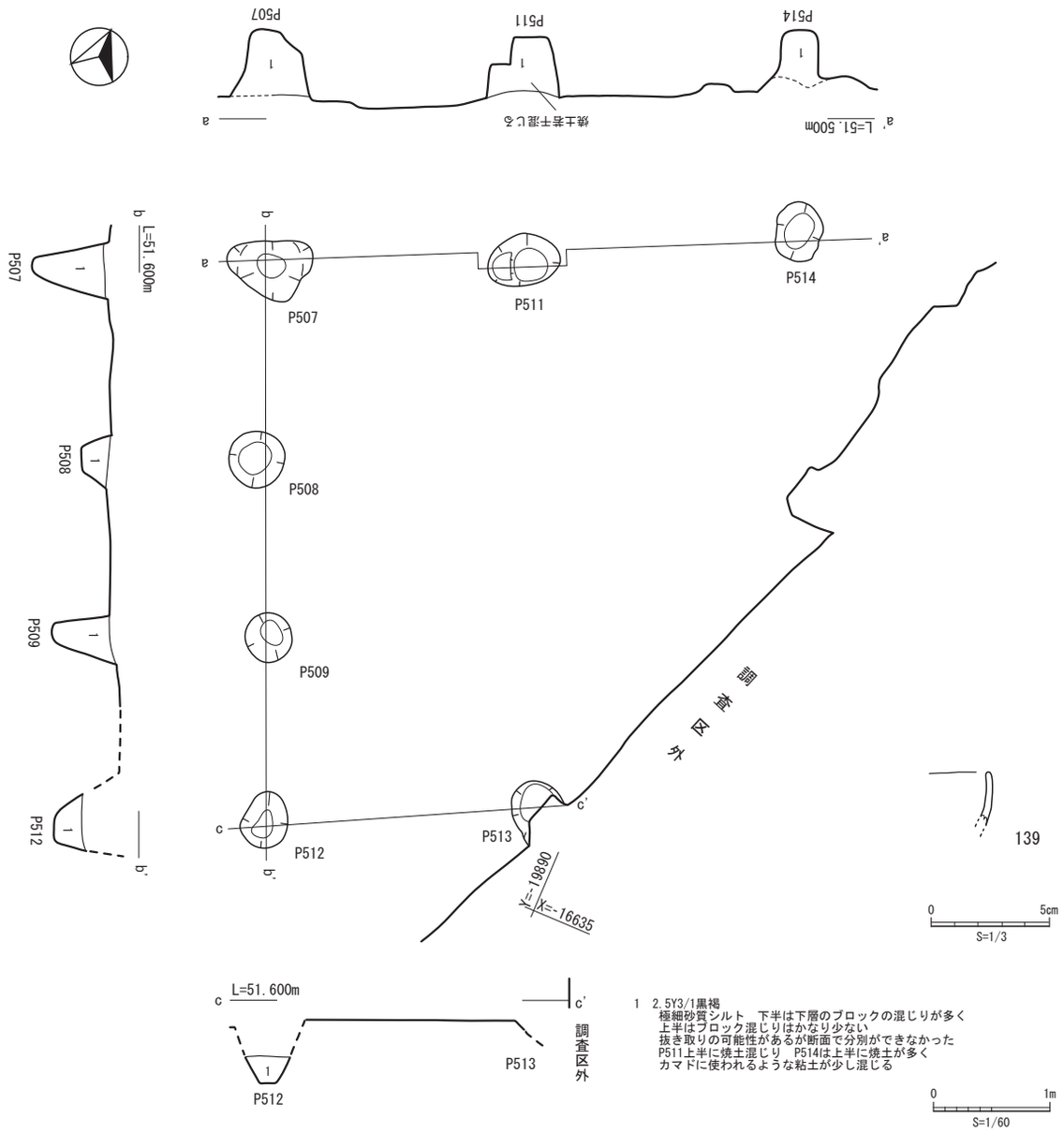
ＳＢ０２の出土遺物（第４６図 140）

P532 の埋土より土師器の口縁部片が出土している。細片で調整も不明だが、口縁部の形態より甕と思われる。

ＳＢ０３（旧S111　第４７図）

北側はＳＢ０２と、南側はＳＢ０４と重なりあっている。桁行方向は、ＳＢ０２とほぼ 90 度違っている。桁行４間･梁行３間の柱配置をしている。西側桁行は全長約 7.6m で､柱間隔は北より約 1.75 m･1.8 m･1.85 m・1.65 m、東側桁行は全長約 7.6m で、柱間隔は北より約 1.85 m・2 m・1.6 m・1.85 mである。北側梁行は全長約 5.4 mで、柱間隔は西より約 1.6m・1.65m・1.6 m、南側梁行は全長約 5.2 mで、柱間隔は西より約 1.65m・1.65m・1.55 mである。柱痕跡はいずれも確認されていないが、P536・P535 で 30cm 程の大きさの石が検出されている。

出土遺物としては、P541 の埋土より弥生土器の口縁部片が出土しているが、この掘立柱建物と直接関係するものではないと判断したので掲載していない。



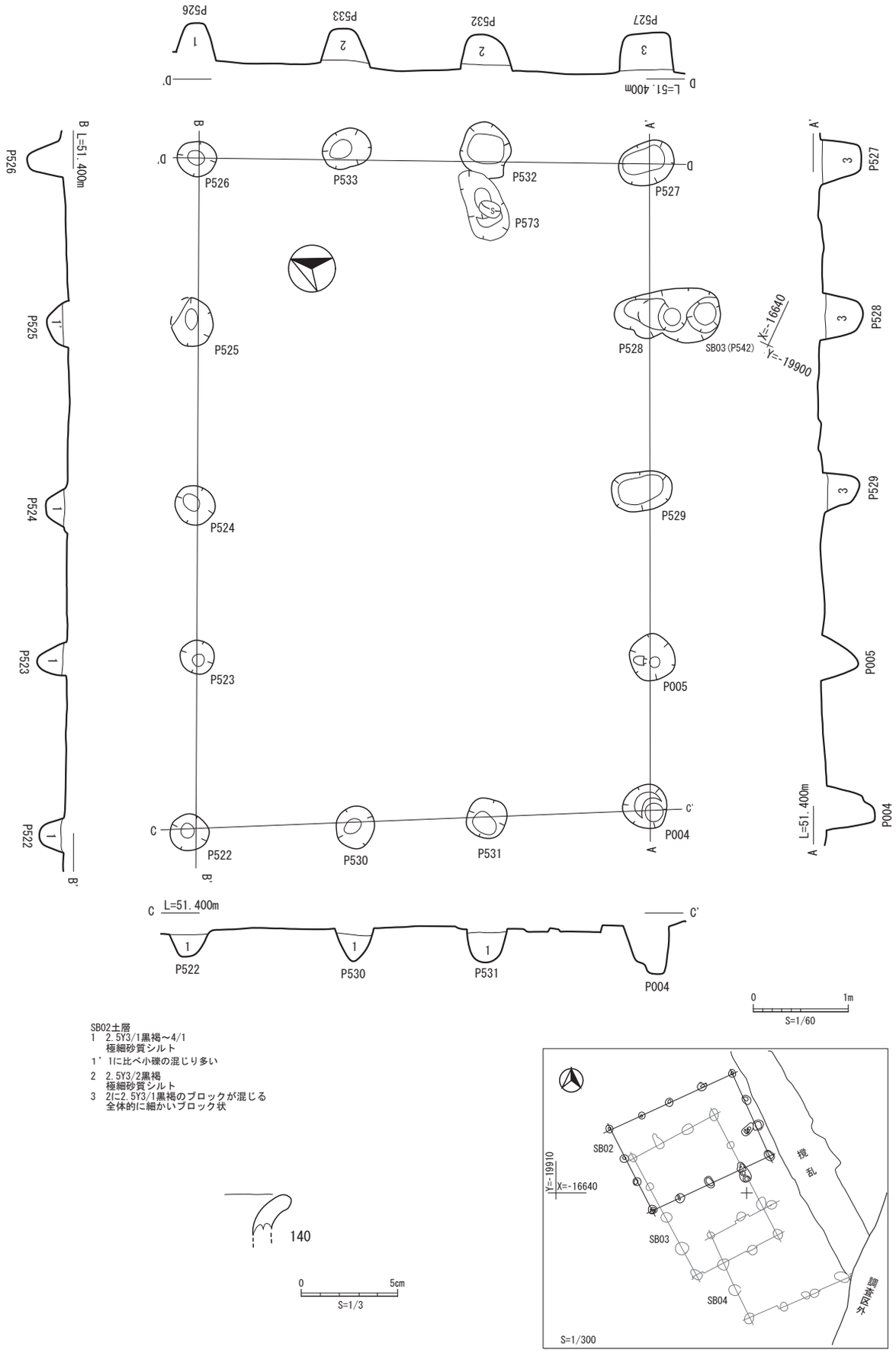
第４５図　２区ＳＢ０１実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＢ０４（旧S122　第４８図）

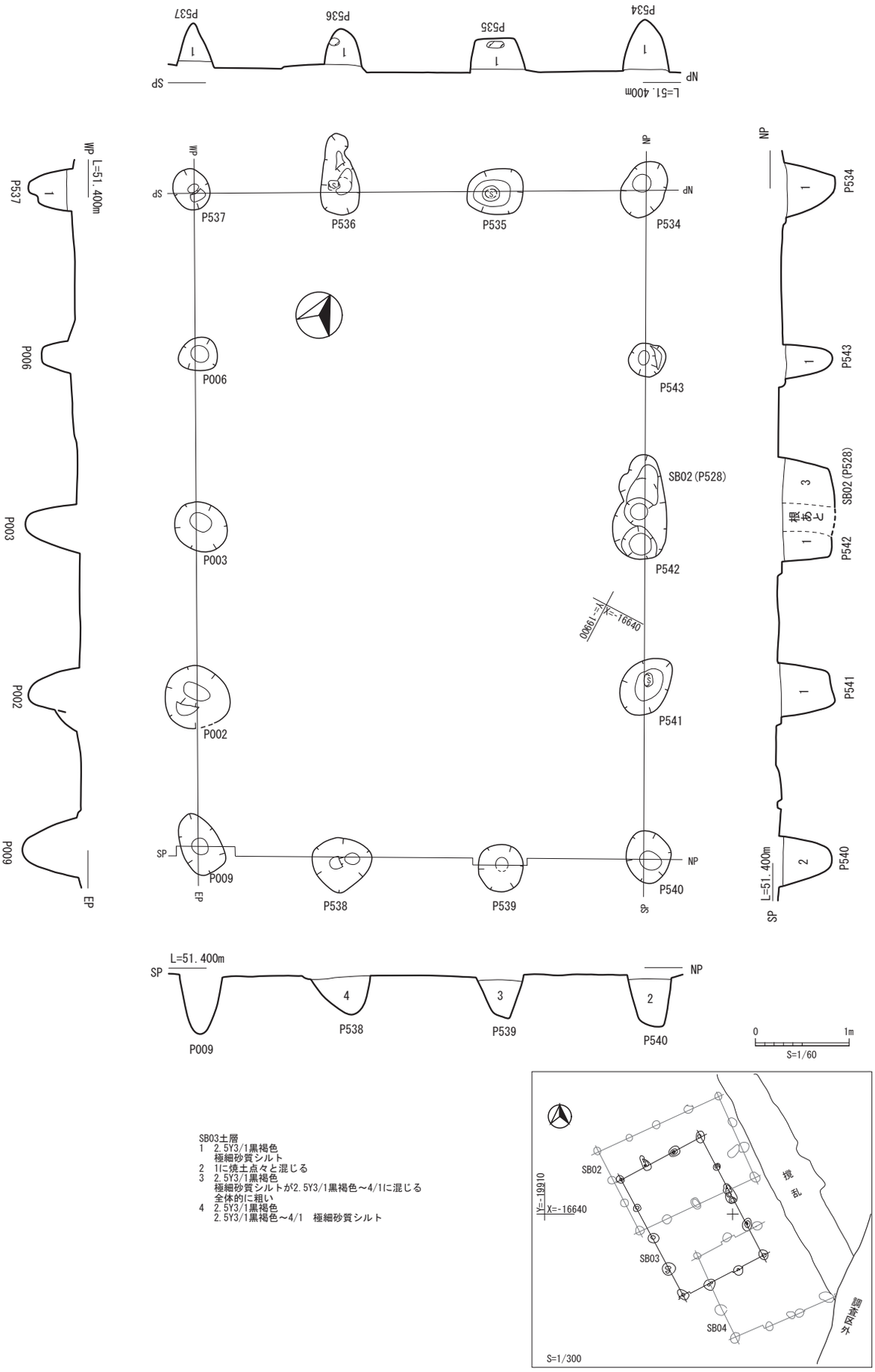
北側はＳＢ０３と重なりあう。また東側はカクランを受けているため全体形は不明である。現状で３×３間で、西側は全長約 5.35 mで、柱間の間隔は北より約 1.5 m・1.55 m・1.6 mである。南側は現状長約６mで、柱間隔は西より約 1.9m・1.8 m・1.75 mである。また北側は２間のみだが、柱間隔は西より約 1.85 m・1.8 mである。柱痕跡は確認されていない。また遺物も出土していない。

柱列（旧S109　第４９図）

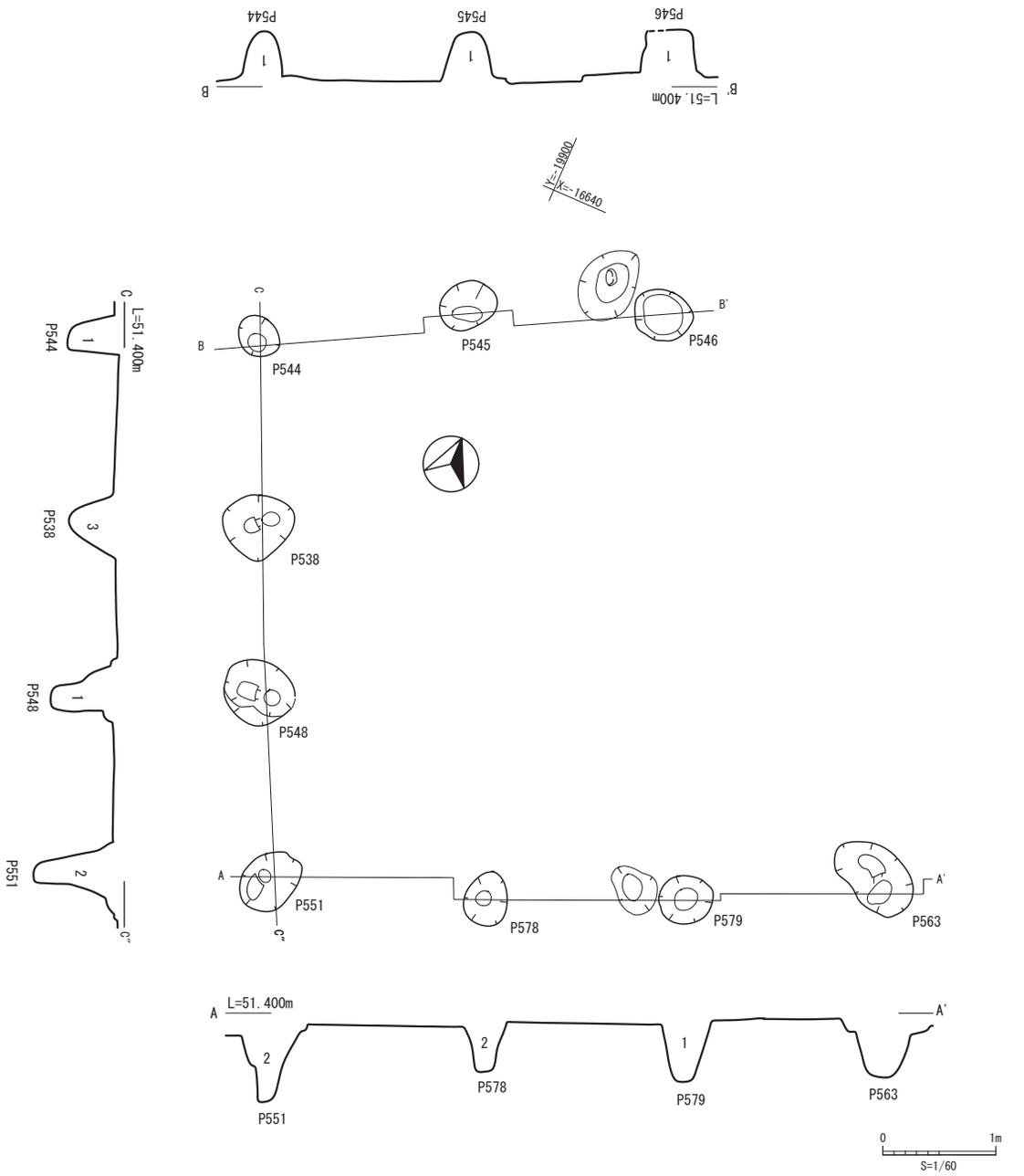
ＳＢ０２の北30cm程のところに、ＳＢ０２の桁行、ＳＢ０３の梁行方向とほぼ平行に位置する。現長約6.5 mで、柱間隔は西より約２m・1.85m である。２間だけで、また柱の深さが他の掘立柱建物と比べ浅いので柱列とするのは問題があるかもしれないが、軸方向がＳＢ０２・ＳＢ０３と同一なので柱列として取り扱った。遺物は検出されていない。



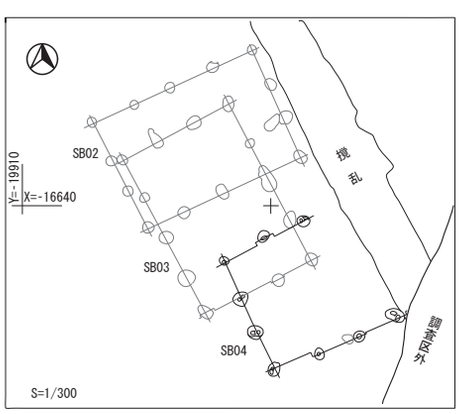
第４６図　２区ＳＢ０２実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(S=1/3)



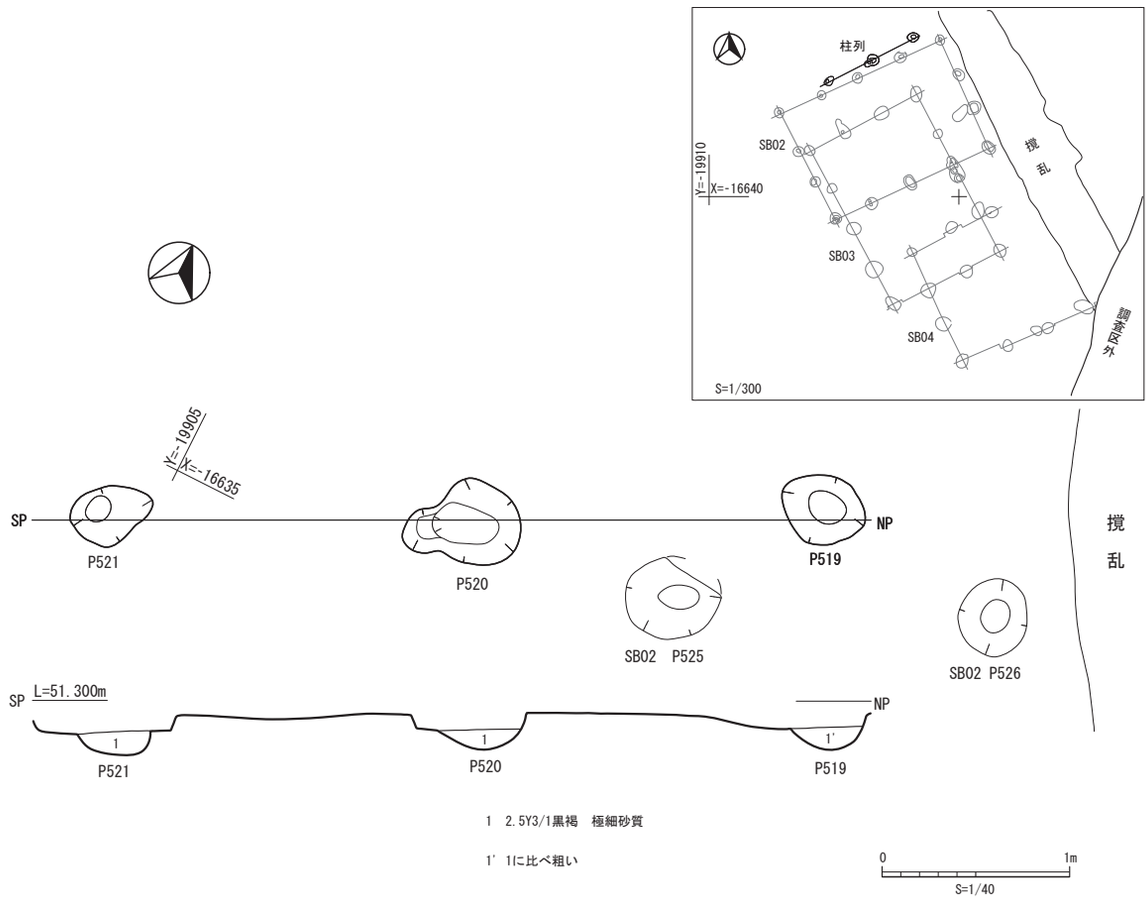
第４７図　２区ＳＢ０３実測図(S=1/60)



S122土層
1　2.5YR3/1黒褐色
　極細砂質シルト　若干下層ブロックが入る
2　2.5YR3/1黒褐色～4/1
　極細砂質シルト　下層のまじりが多い
　P548わずかに炭化物入る
3　1.2. 下層との細いブロック状



第４８図　２区ＳＢ０４実測図(S=1/60)



第４９図　２区柱列実測図(S=1/40)

ＳＫ０１（旧S120　第５０図）

6289 グリッドに位置する。径約 2.5m の隅丸方形の土坑である。深さは 10 ～ 15cm で床面は平坦ではない。遺物は出土していない。

ＳＫ０２（旧S121　第５０図）

同じく 6289 グリッド内でＳＫ０１の東約 2.5 mに位置する。東側は調査区外となっているが、南北長 1.9 m程で、楕円形のプランとなると思われる。深さは現状で 60cm 程である。遺物は出土していない。

ＳＫ０３（旧S114　第５０図）

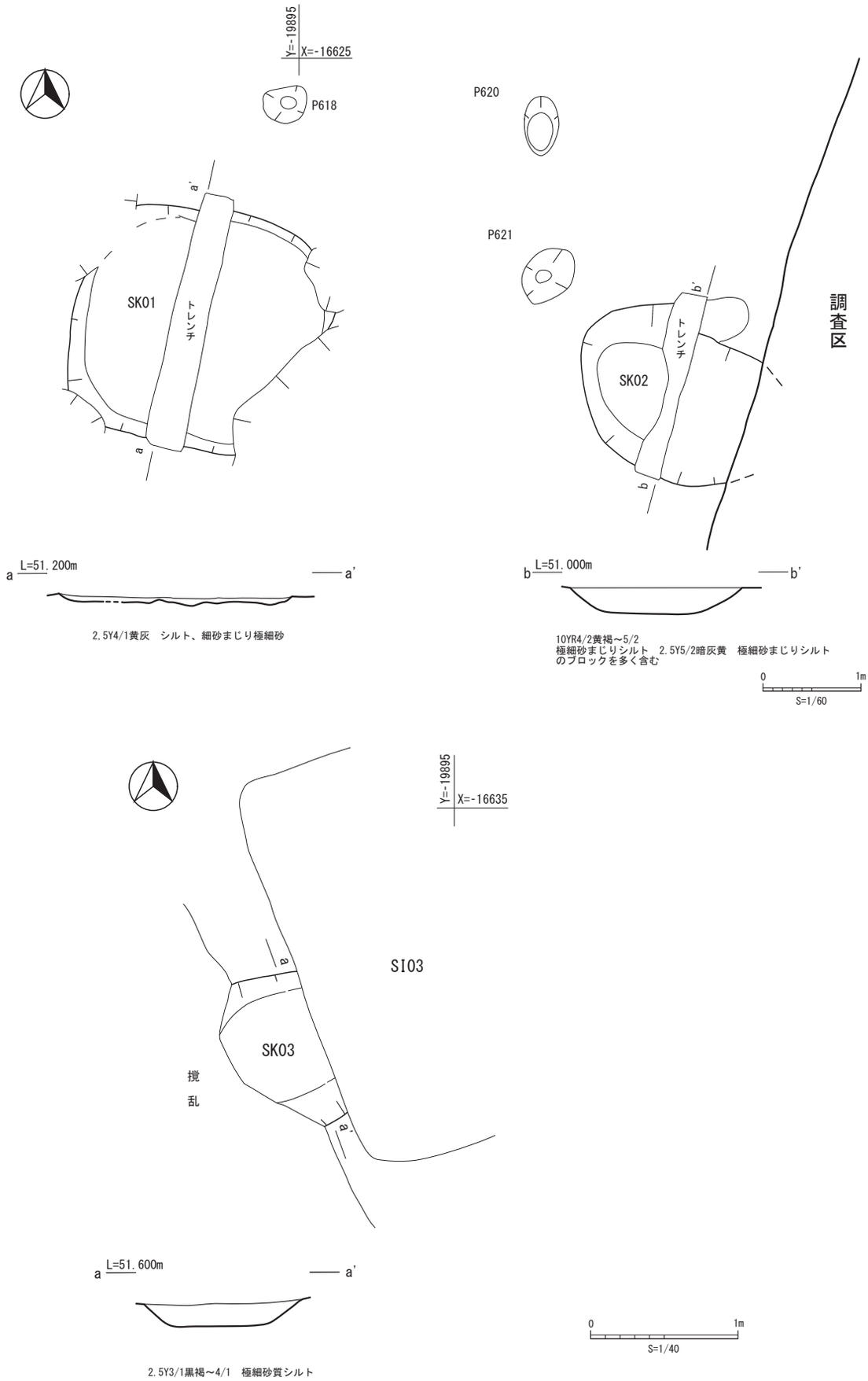
6390 グリッド内に位置する。西側が撹乱で破壊されており、全体の形状は不明である。a － a' 間で約 1.1m で深さは 16cm 程である。遺物は出土していない。

ＳＤ０１（旧S115　第５１図）

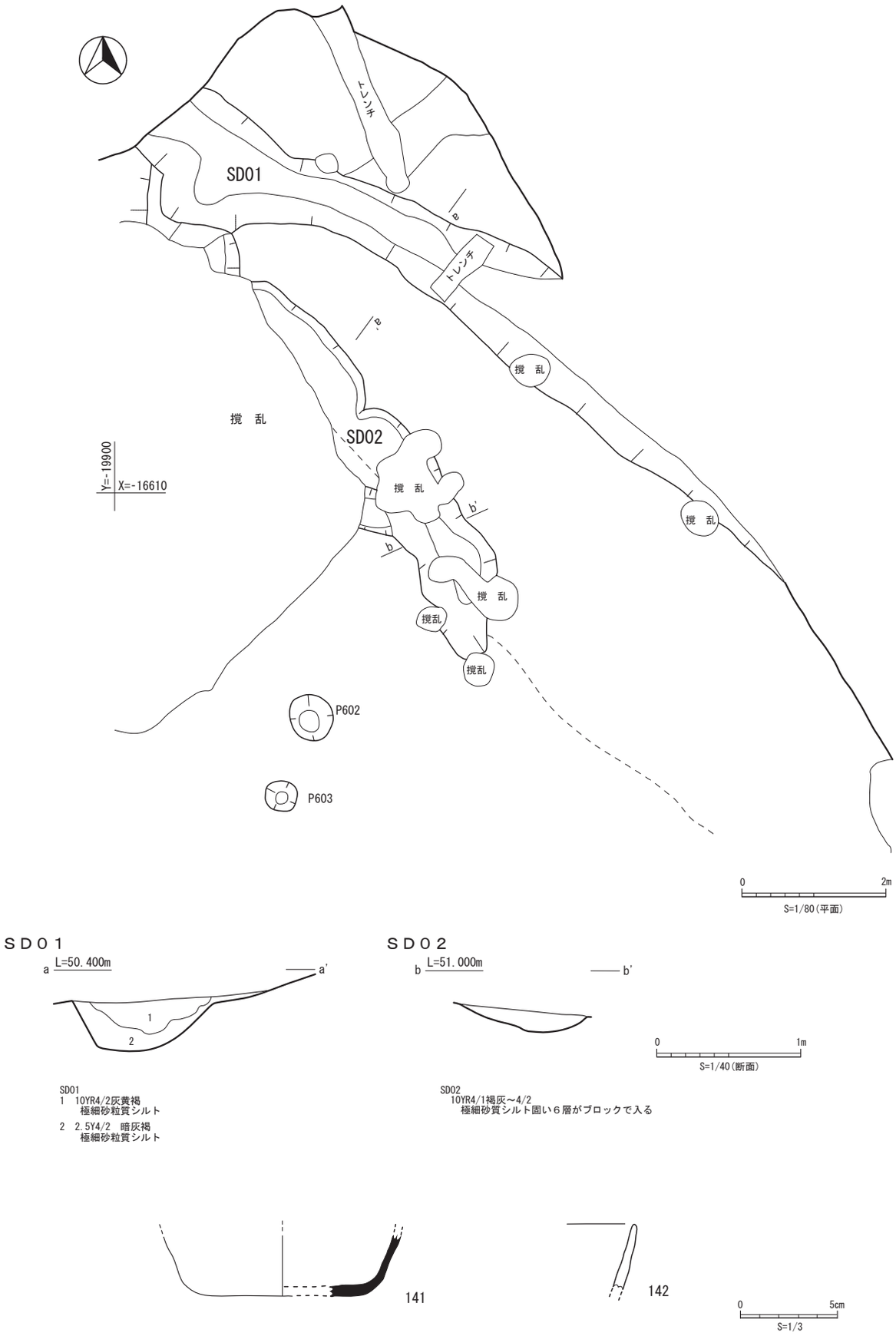
6089・6189 グリッド内に位置する。撹乱がひどく形状は不明だが、北西方向から南東方向に向けての溝状遺構と思われる。a － a' 地点で幅約 80cm、深さ約 34cm である。

ＳＤ０１の出土遺物（第５１図 141)

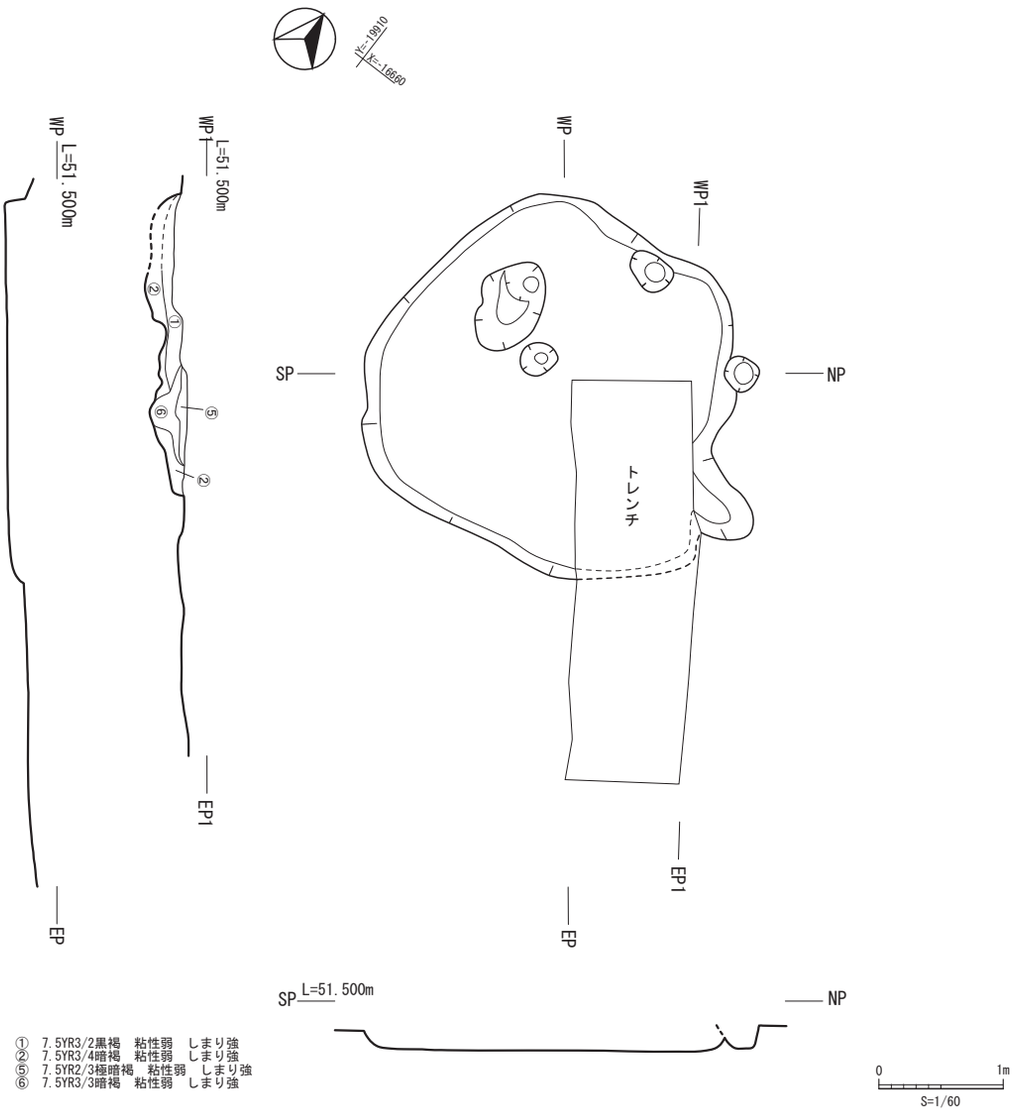
須恵器の坏が出土している。平底の底部で回転ヘラ切離し後ナデが施されている。



第５０図　２区ＳＫ０１・０２（S=1/60）・０３実測図(S=1/40)



第５１図　２区ＳＤ０１・０２実測図(平面S=1/80, 断面1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)



第５２図　２区ＳＸ０１実測図(S=1/60)

ＳＤ０２（旧S116　第５１図）

やはり北西方向から南東方向に向けての溝状遺構と思われる。b－b'地点で幅１m、深さ15cm前後である。

ＳＤ０２の出土遺物（第５１図142）

土師器の口縁部片が出土している。細片で詳細は不明だが、坏または椀の口縁部片と思われる。

ＳＸ０１（旧S002　第５２図）

6690グリッド内に位置する。SP－NP間約2.9 m、WP－EP間約3.1 mのやや不整だが隅丸方形のプランで、深さは10cm程である。土坑とすべきか迷ったが、東側にカマド状に突出する不定形の平面形であることから、不明遺構とした。

WP1－EP1で土層をとったのは、カマドを想定していたのかも知れないが、土層には焼土・炭化物は全く含んでいない。或いは⑤層⑥層の埋土を有する別な遺構の重なりを確認しようとしたのかも知れない。この土層図では南東側の床面は高くなっているが、WP－EP、SP－NPの図で見ると平坦であり、トレンチを入れた部分だけが高くなっていると考えるしかない。分層が間違っており、複数の遺構の切り合いの可能性が高い。遺物は出土していない。

まとめ

２区では、縄文時代後・晩期の遺構と遺物及び古代の遺構の２時期が調査の中心となる。調査地は河川に隣接した部分で、ここに見られる遺構と遺物の状況は、その中の断片的なものである。

縄文時代後・晩期の竪穴建物については、焼失建物であるか否かとこの建物の性格が問題となる。来跡者からは多くの意見をいただいた。それを集約すると、まず焼失建物か否かであるが、炭化材がないことから焼失住居ではないとして、河岸に一軒のみあることから特殊な建物で、火は祭祀等の可能性を考慮すべきという意見である。一方柱材は完全燃焼すれば炭化材は残らない。あるいは既に抜き取られた可能性もあるとし、焼失建物とする意見である。前述したように土層図が正しいとするならば、焼土・炭化物の形成は建物廃棄後と考えられ、建物の処分のために燃やされた可能性が高いと判断した。

また河岸に一軒のみ存在することについては、本来の竪穴建物検出面はもう少し上層で、実際には周辺にも同時期の建物があったが、削平されてしまい、この建物だけは巨大で他の建物より深く掘り込まれていたから残ったと考えることは出来ないだろうか。ＳＩ０１出土土器とこの遺構を検出する前の上層の遺物が比較的接合するのは、本来の遺構検出面はもう少し上層だった可能性があることや、更に上層にはＳＩ０３・０４の遺構があったにも関わらず残っていることくらいが根拠なので、確定的なことは言えない。あるいは調査区外である南東側には多くの竪穴建物が存在して、この建物がたまたま北端にあっただけなのかも知れない。

前述したように、遺物の大半は縄文時代後期・晩期の土器である。しかし破片ばかりで、完形品はない。また石器は、写真掲載のものでほぼすべてであり、この時期にしては打製石斧なども少量であることは留意される。

古代の遺構として、竪穴建物として９軒、掘立柱建物４軒を報告した。竪穴建物については、柱穴が並ぶものはなく、四本柱が想定されるＳＩ０６にしても、柱の深さは一様でなく、深さ 10cm に満たない柱穴もあるなど柱穴と認定するのは躊躇される。また平面形が歪なものもある。結局竪穴建物と判断する拠り所は、造り付けカマドの有無しかない状況である。その判断基準では、ＳＩ０３、０４、０５、０６、０７、０８の６軒である。しかしカマドの向きは、竪穴建物の北側につくもの（ＳＩ０５・０６・０７）、東側につくもの（ＳＩ０３・０４）、西側につくもの（ＳＩ０８）など様々である。検出軒数が少ないので、偶然の可能性もあるが、建物自体が重なりあったり、隣接した竪穴建物が同じカマドの向きであるようである。

一方掘立柱建物については、主軸方向が規則的であることや、一定地域に集中して重なりあって存在することから、残念ながら時期を特定できないが、最大でも３軒程の建物が同時に存在していたことが考えられる。

出土遺物は少量で、ほとんどは土師器の甕、鉢、坏である。１区で出土したような布目瓦・陶磁器などは見られず、日常容器ばかりである。

第５節　３区の調査成果

民間調査組織に委託した調査区であり、道路を挟んで西側下流側を３－１区、東側の上流側を３－２区としている。

１　３－１区の遺構と遺物

縄文時代の遺物（第５４図）

縄文時代の遺構は検出されていない。遺物も後期・晩期の土器が少量出土しているにすぎない。１は胴部が「く」の字状に屈曲する。屈折部と胴部上位に磨消縄文が施される。胴部上位の磨消縄文の下部には波状の沈線がめぐる。内外面ともにヘラによる研磨が施される。２は鉢の口縁部片で、内外面とも縦方向の条痕が認められる。３は組織痕文土器で、土器の上下や傾きは不明であるが図のように便宜的に配置した。外面に網目押型文が認められる。４は口縁部にリボン状突起を有する。口縁直下と頸部に沈線が巡る。浅鉢としたほうがいいのかも知れないが、鉢として取り扱っている。内外面とも、ヘラによる研磨が施されている。５は浅鉢の口縁部片である。口唇部に刻目が施される。外面は条痕が残り、内面にはヘラによる研磨が施される。

弥生時代の遺構と遺物

ＳＩ０１（旧S633　第５５図）

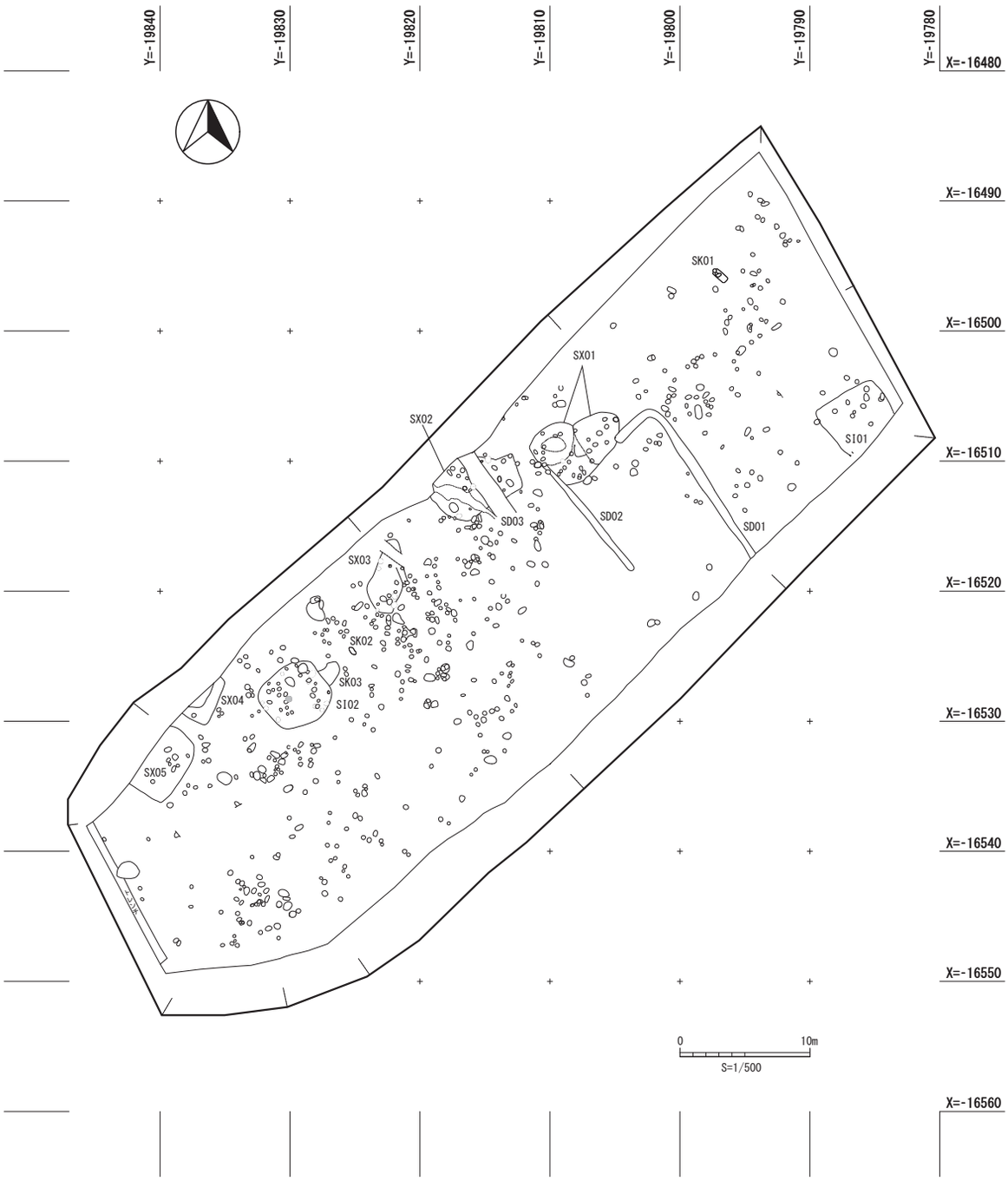
5078グリッド内に位置する。南側は調査区外になるため全体形は不明であるが、方形プランで、ａ－ａ'で約5.25ｍを測る。深さは現状で60cm程である。断面土層図をみると、南側に硬化面が広がっているようである。この建物に伴う柱穴は北よりに１個検出されているだけである。しかしａ－ａ'土層図でａ'側の壁よりａ側へ約１ｍ行った所に４層の硬化面が途切れている個所があるのは、ここに柱穴があったとは考えられないだろうか。なお、炉跡は確認されていない。

ＳＩ０１の出土遺物（第５６図）

甕、壺、鉢、鉄鏃が出土している。６は壺でほぼ完形である。形態的には甕との区分が難しいが、煮沸の痕跡が認められないことや、平底になることから壺とした。頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は直線的に外に向かう。最大径は胴部中位にあり、21.4cmを測る。底部は丸みを帯びた平底になる。体部の形状は胴が張り、ひし形を思わせる球形である。また胴部中位に径２cm程の穿孔されたような穴がある（図版33の6）。ただし孔の半分程は、偶然に割れたところと重なっているので、確実ではない。内外面ともにハケ調整される。７もほぼ完形の壺である。頸部から外に向かって外反する口縁部がつく。最大径は胴部中位にあり、26cmを測るが、胴部の張は弱い。底部は丸みを帯びた平底である。内外面ともにハケメが認められる。８は甕で、底部を欠損する。頸部は「く」の字形で、口縁部は直線的に外に向かう。最大径は胴部中位にあり25.5cmを測る。胴部の張は弱い。内外面ともにハケメが認められる。外面には広範囲に黒斑が認められる。内面はそれほど明確ではないが、外面の黒斑と内面の焦げ痕跡がほぼ対応する。９は鉢形土器の完形品である。椀形で内外面ともにハケ調整で、外面はその後ナデが施される。内外面とも黒色処理を施したのではと思わせるように大部分が黒色で、部分的に褐色の面が認められる。10は有茎の柳葉形式の鉄鏃である。埋土２層からの出土である。

ＳＩ０２（旧S361　第５７図）

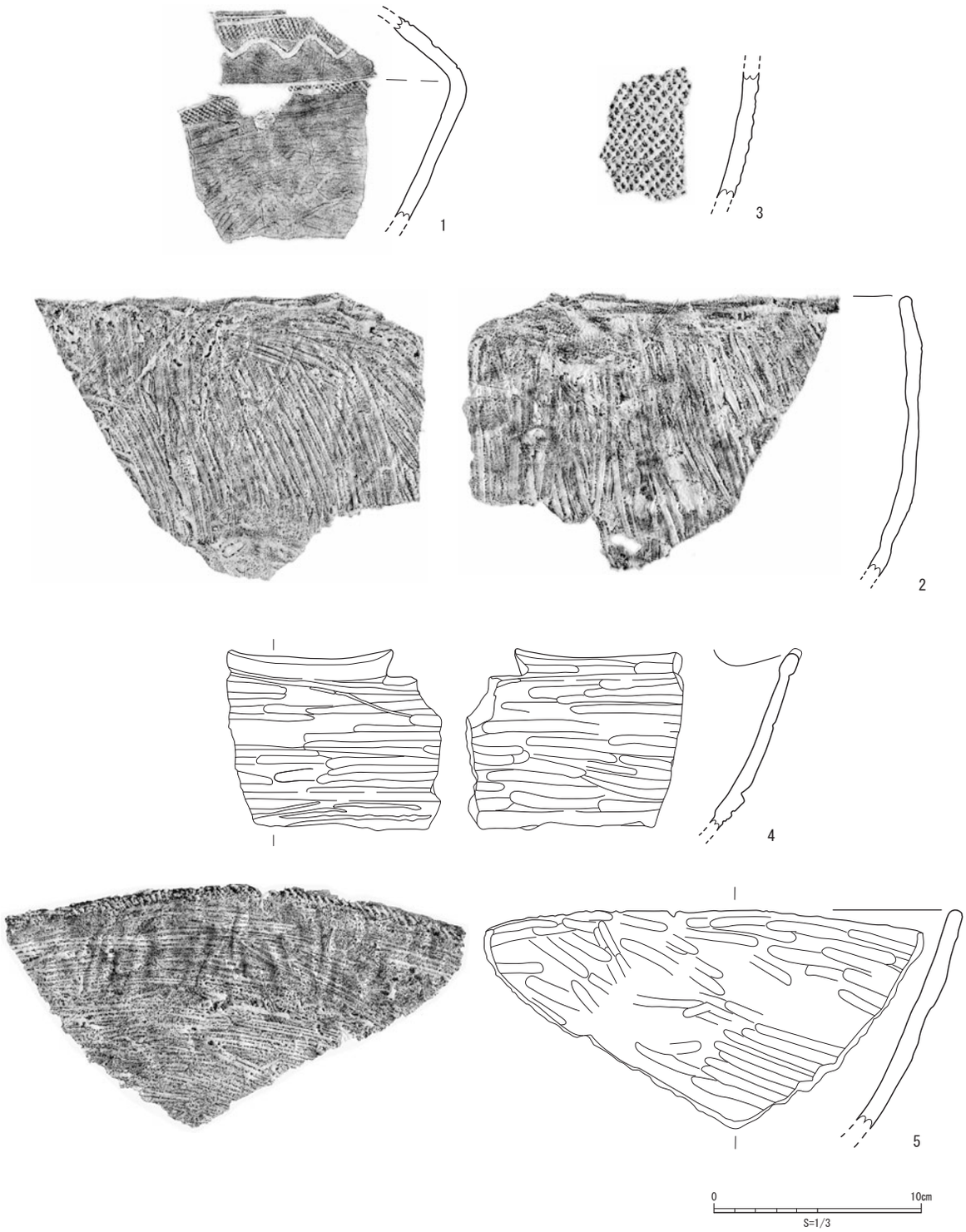
5282・5382・5283・5383グリッドにまたがって位置する。東側はＳＫ０３と重なっている。ａ－ａ'間の長さ約6.6ｍ、ｂ－ｂ'間の長さ約4.8ｍで、平面プランは、不整形ながらもほぼ方形である。深さは30cmから40cm程である。柱穴も不明で、竪穴建物とするには問題はあるが床面は部分的に硬化していることや焼土の痕跡があることから竪穴建物として取り扱った。



第５３図　３－１区遺構配置図(S=1/500)

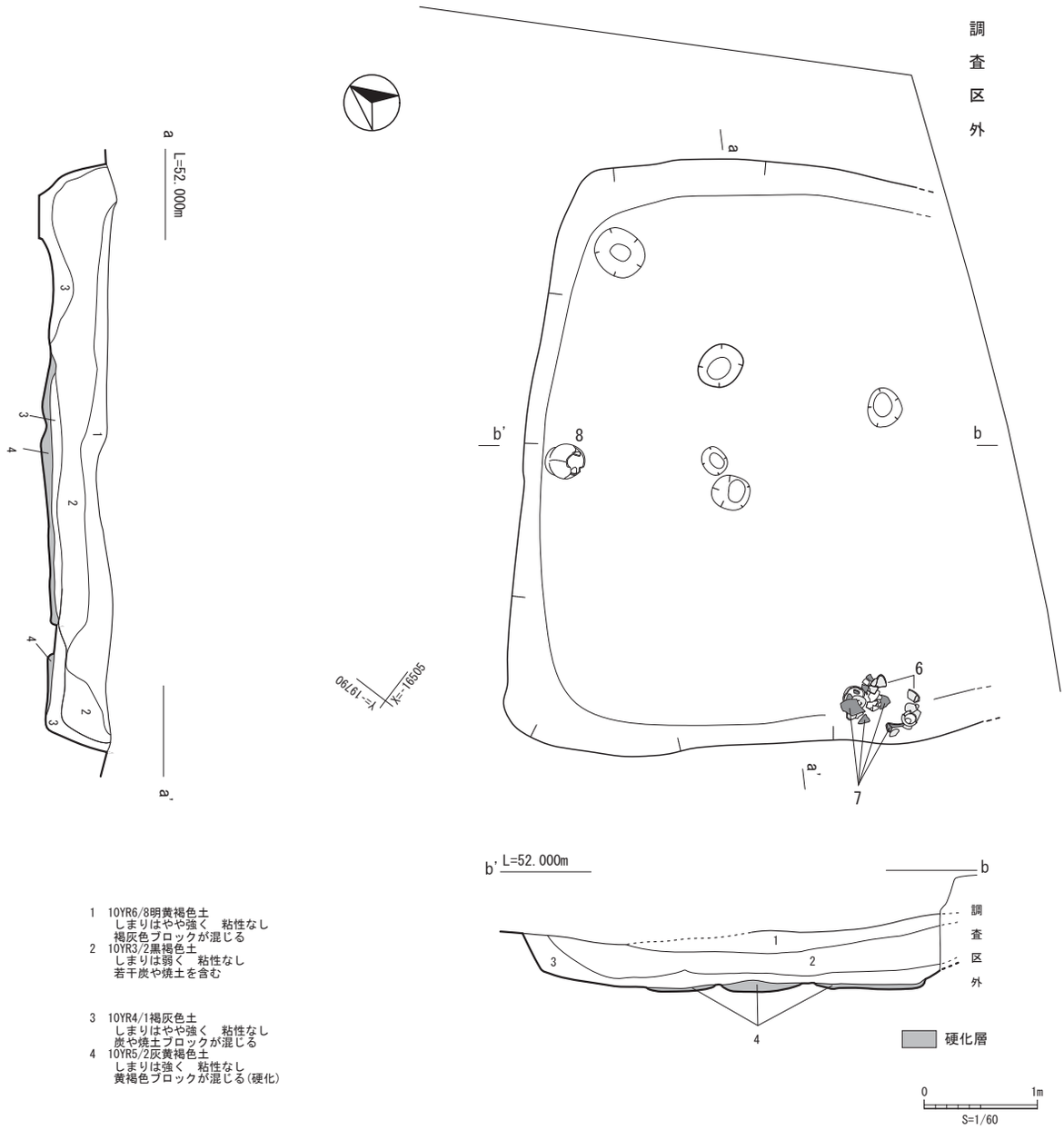
ＳＩ０２の出土遺物（第５８・５９図）

11 ～ 15 は甕である。11 は一部欠損する箇所はあるがほぼ完形である。「く」の字状に屈曲する頸部に直線的に外に向かう口縁部が付く。胴部最大径は胴部上位にあり、短い脚部が付く。内外面ともにハケメが認められる。外面の広い部分に黒斑が認められる。12 は口縁部から胴部にかけての破片である。「く」の字状に屈曲する頸部に外反する口縁部が付く。胴部最大径は、体部上位にある。外面にはタタキの後ハケ調整を施されるが、体部上位にはタタキの痕跡が残る。内面はハケ調整が施される。また外面の口縁部付近には筋状に吹きこぼれの痕跡が残る。13 も口縁部から胴部にかけての破片である。「く」の字状に屈曲する頸部に外反する口縁部が付く。12 に比べると口縁端部は丸みがある。胴部最大径は、体部中位にくる。内外



第５４図　３－１区包含層等出土遺物実測図（１）(S=1/3)

面ともにハケメが認められる。14 は胴部の大半を欠損するが、形態・調整方法はほぼ 13 と同様である。15 は甕の口縁部片と思われる。形態的には 11 ～ 14 と同様であるが、頸部の屈曲がより強く、内側に口縁部がわずかに張り出すような形状となる。16 は壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部に２条の突帯、その下にも１条の突帯を巡らす。11・13・14 の破片の一部はＳＸ０３（S367）出土のものと接合する。また、S361（現ＳＩ０２) 直上の注記があるが、これはＳＩ０２の埋土１層の直上である。



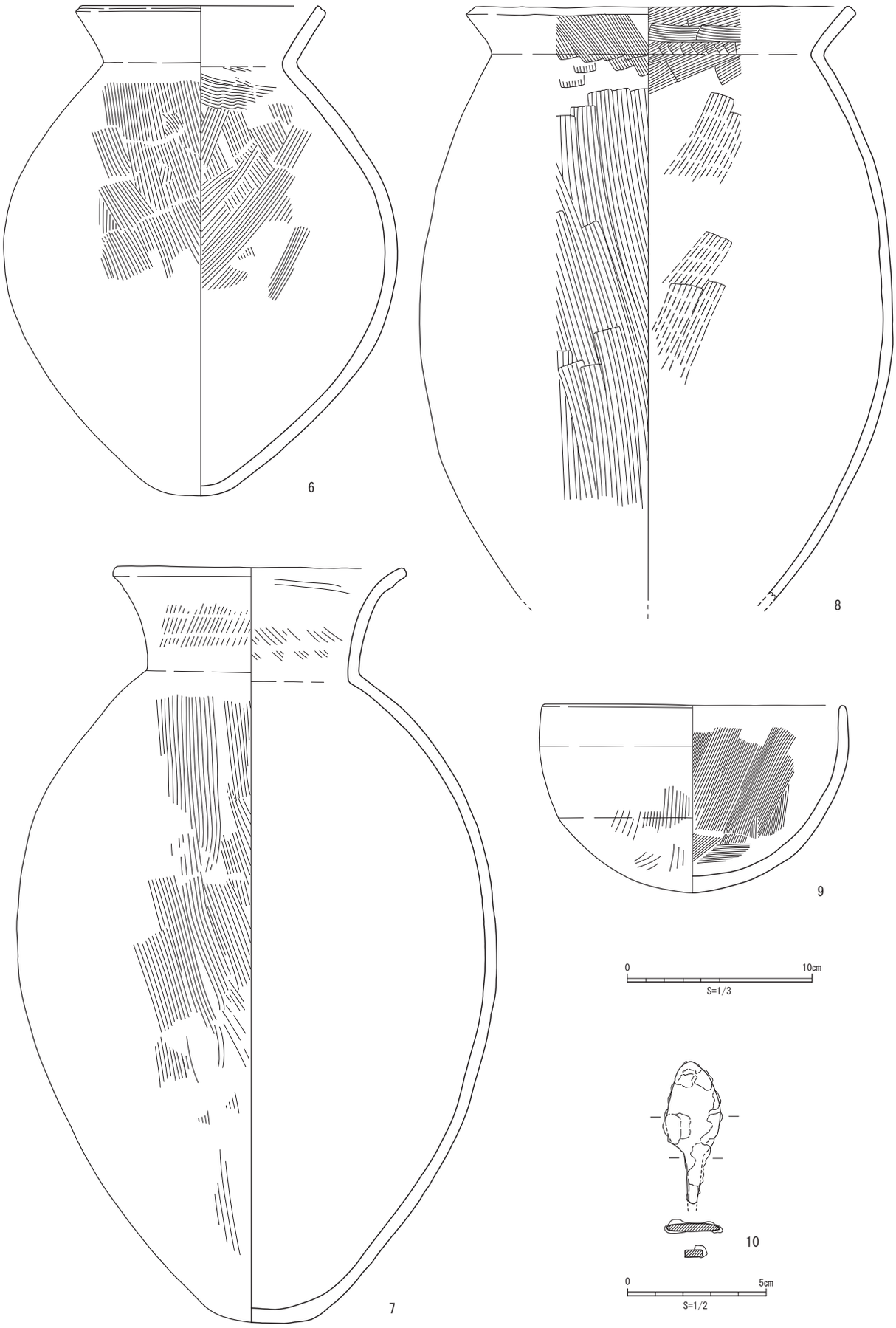
第５５図　３－１区ＳＩ０１実測図及び遺物出土状況(S=1/60)

ＳＫ０１（旧S288　第60図）

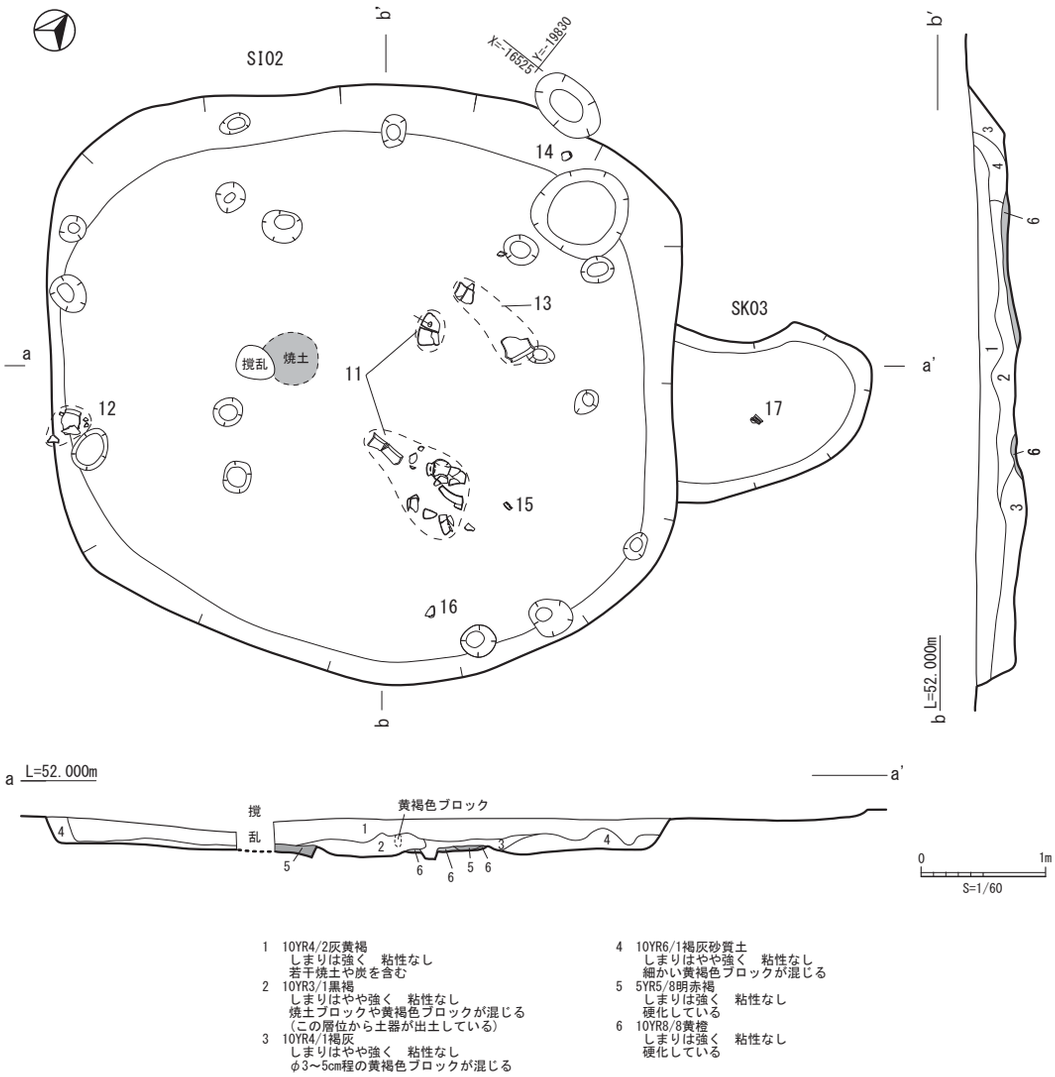
4980グリッド内に位置する。長さ1.3 m、幅50cm程の長方形の土坑（S288）をＳＫ０１とした。この土坑はS289としたピット及び隣接したピットにより壊されている。またＳＫ０１（S288）土坑の北西端にピット状の遺構（S351）が描かれている。深さはＳＫ０１と同じレベルであることから、S351とＳＫ０１は一連の遺構かもしれない。土層図は作成されておらず、埋土の色も不明である。

ＳＫ０１の出土遺物（第６０図18・19）

ＳＫ０１（旧S288) 出土の遺物は細片で図化に絶えない。ここに掲載した遺物は厳密にはＳＫ０１からの出土ではなくS351ピットからの出土である。壺の胴部と底部が出土している。18は壺の胴部片で、球形の胴部に２条の刻目突帯を巡らす。外面にはハケメが認められる。19は平底の底部片で、器壁はかなり荒れているが、内外面ともに縦方向のハケメが認められる。18と同一個体の可能性が高い。



第５６図　３－１区ＳＩ０１出土遺物実測図(10はS=1/2、他はS=1/3)



第５７図　３－１区ＳＩ０２・ＳＫ０３実測図及び遺物出土状況(S=1/60)

ＳＫ０２（旧S297　第６１図）

5282グリッド内に位置する。個別に実測図は作成されておらず、遺構配置図に描かれているだけである。幸いそこにレベルが示されていたのでそれより断面図をおこしている。長軸72cm、短軸35cmの不整な楕円形で、深さは65cm程である。出土遺物は、甕棺の蓋の可能性があり、この掘り込みは甕棺墓の土壙の掘方かもしれない。しかし周辺よりこれ以上の甕棺片は出土していない。

ＳＫ０２の出土遺物（第６１図20）

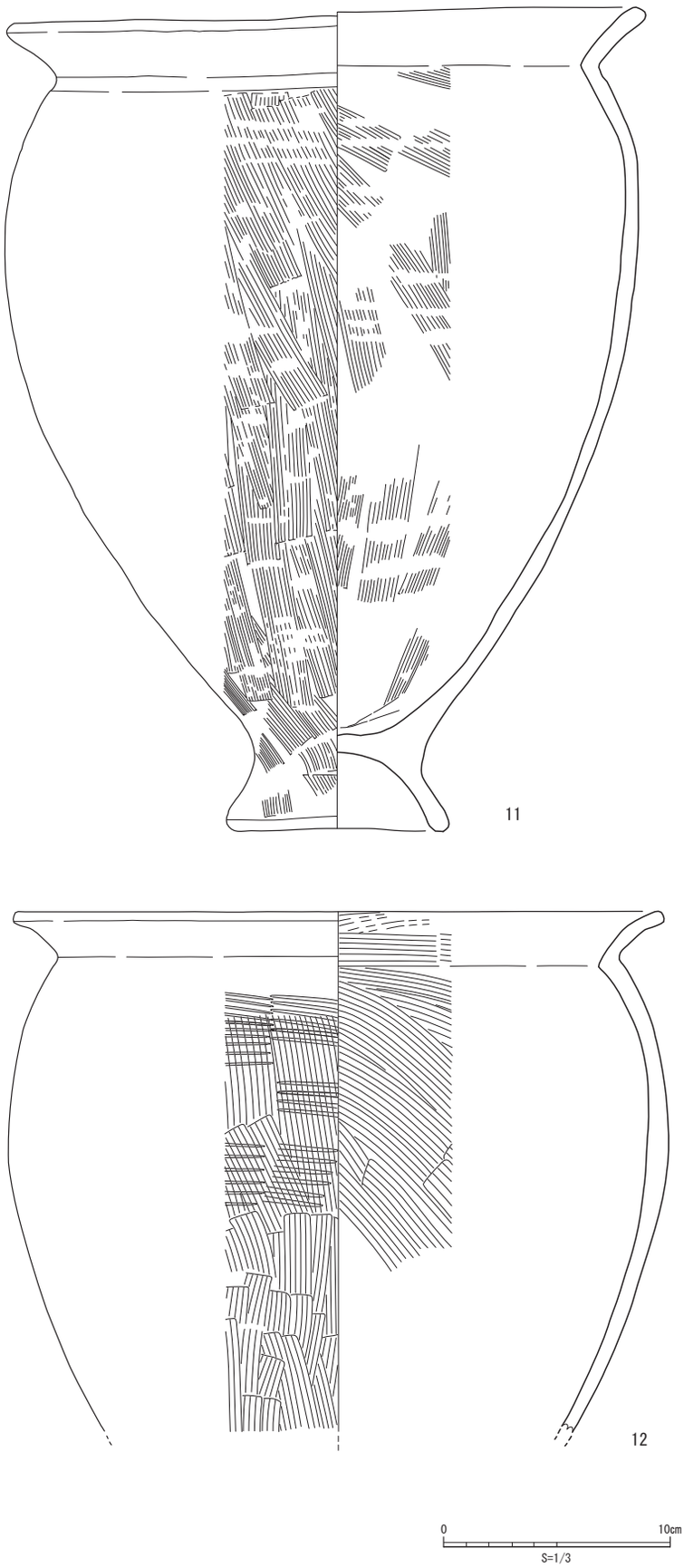
甕棺の蓋として掲載した底部片である。底部は突出しわずかに上げ底となる。体部はかなりひらくようで、いわゆる「陣笠」状になるようである。

ＳＫ０３（旧S363　第５７図）

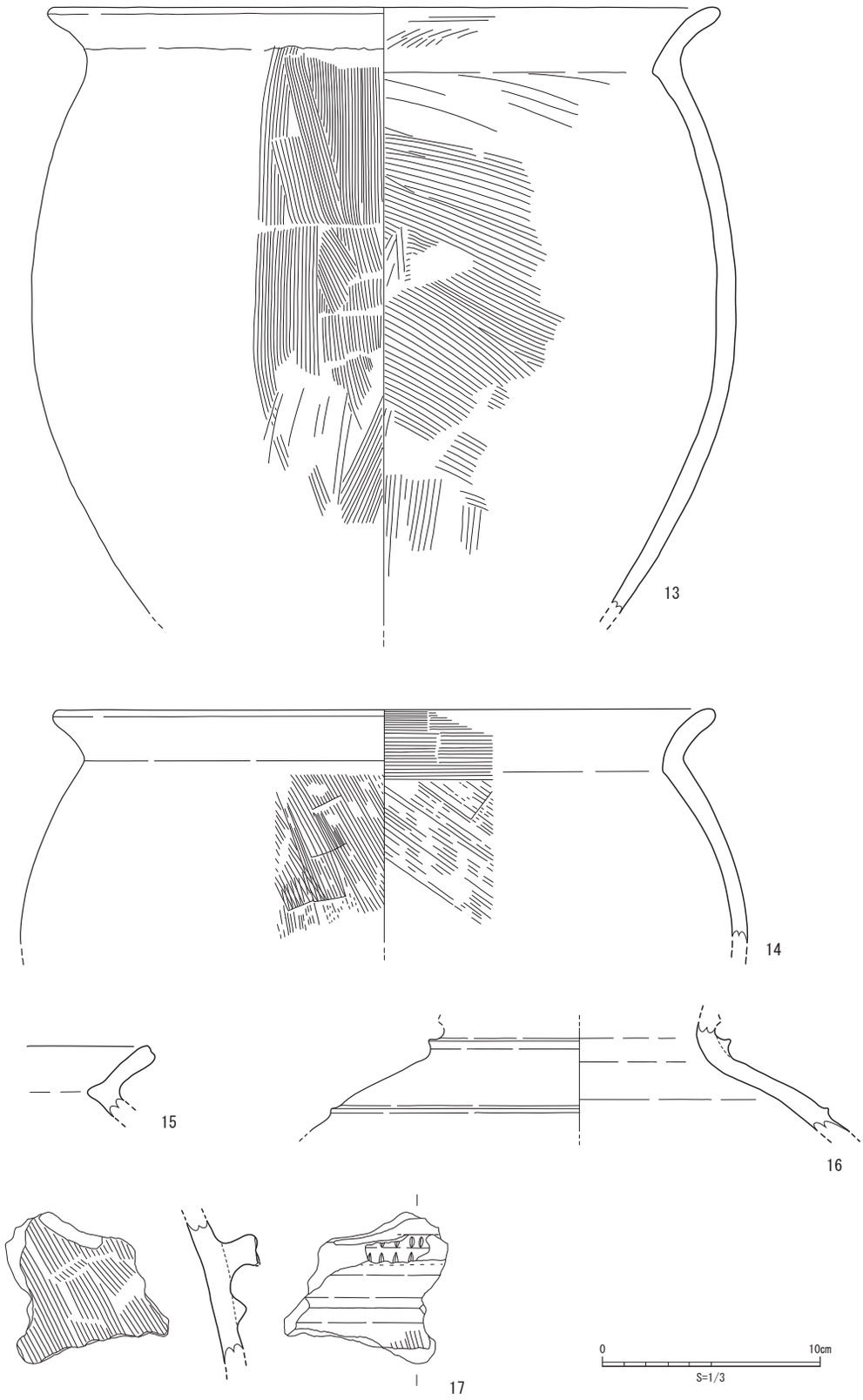
ＳＩ０２に隣接する土坑で、ＳＩ０２により大半が破壊されている。幅約1.4 m、長さは現況で1.65 mを測る。深さは約30㎝である。

ＳＫ０３の出土遺物（第５９図17）

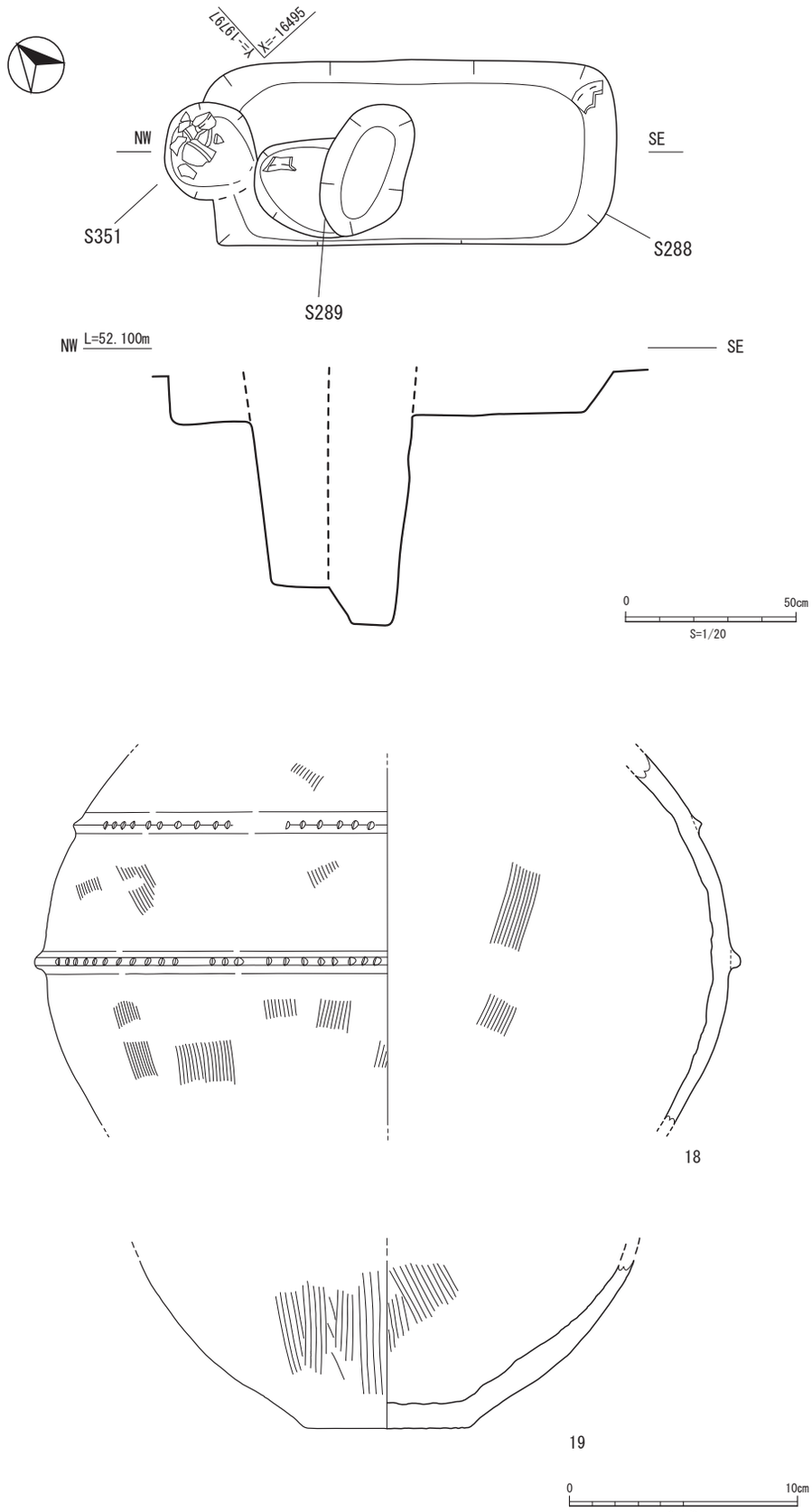
S363直上との注記があるので、この遺構検出面からの出土としたが、ＳＩ０２に伴うものかもしれない。



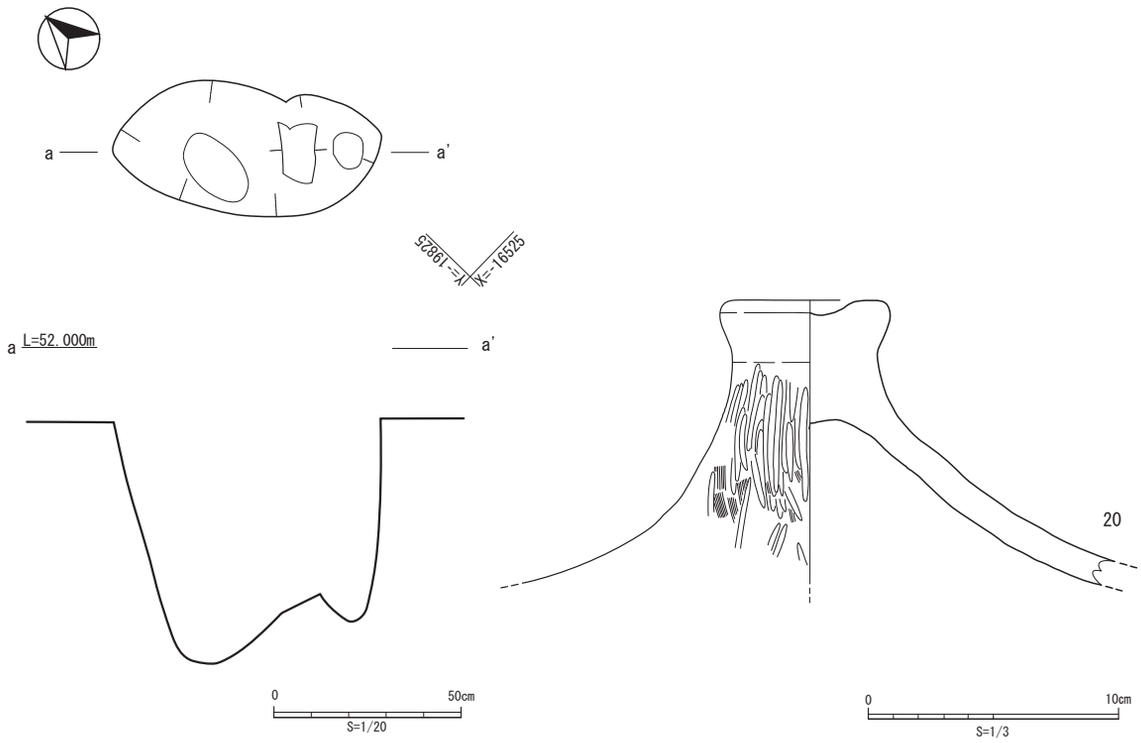
第５８図　３－１区ＳＩ０２出土遺物実測図(S=1/3)



第５９図　３－１区ＳＩ０２（１３～１６）及びＳＫ０３（１７）出土遺物実測図(S=1/3)



第６０図　３－１区ＳＫ０１実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/3)



第６１図　３－１区ＳＫ０２実測図(S=1/20)及び出土遺物実測図(S=1/3)

体部に２条の突帯が巡る。上段の突帯は断面四角形で両端に刻目を施す。下段の突帯は断面三角形である。突帯には赤彩が認められる。またその他の部分は黒色であるが、意識的に塗布されているのか不明である。

ＳＤ０１（旧S365　第６２図）

5180・5279 グリッドにまたがる。幅 50 ～ 85cm 程でＬ字形を呈する。深さは南東側に向かって深くなっていく。北西側の浅いところでは 10cm にも満たないが、南東側では 80cm 程になる。北西端ではＳＸ０１の一部を壊している。

ＳＤ０１の出土遺物（第６２図 21）

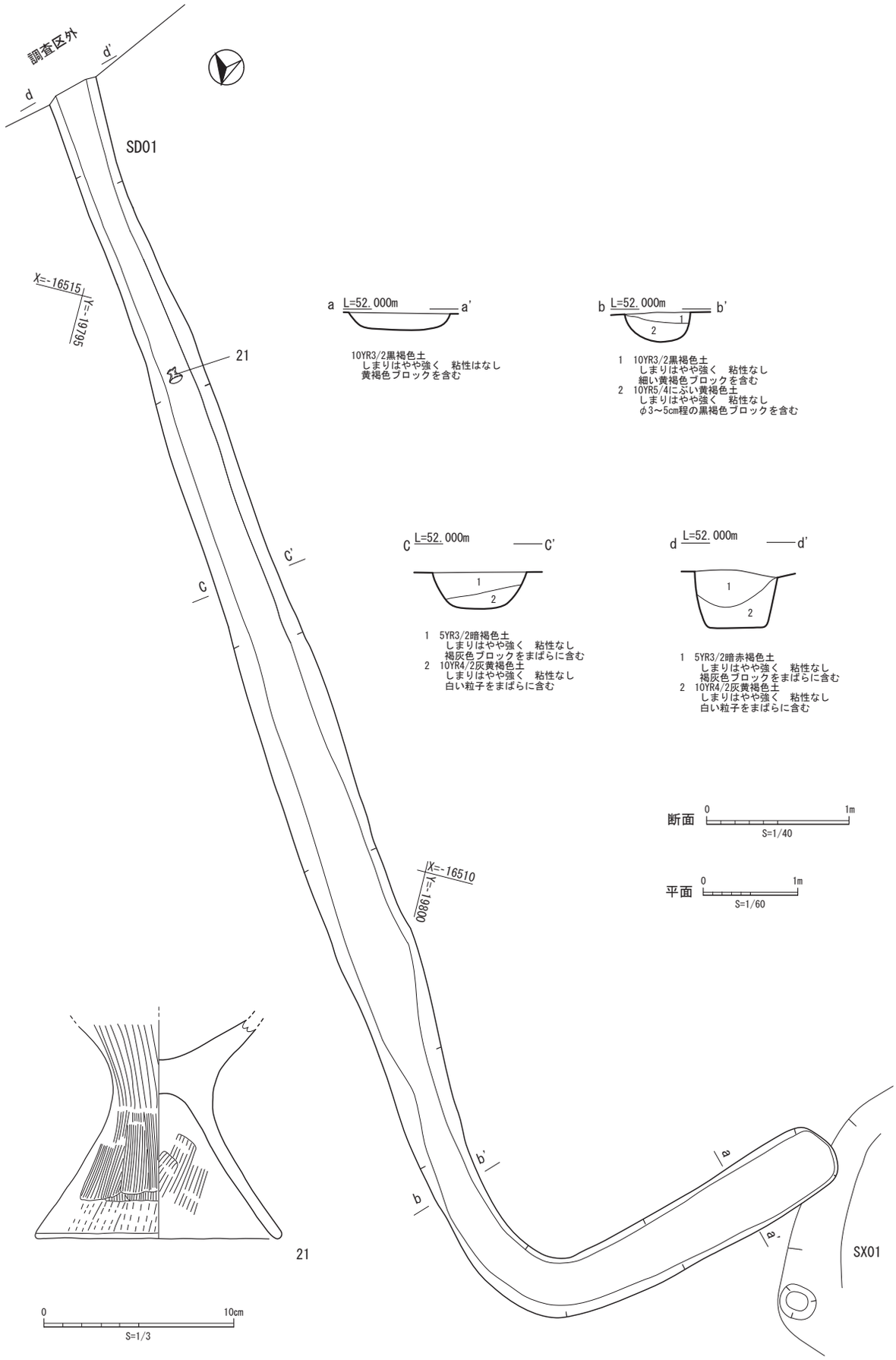
甕の脚部片である。他の出土遺物と比べると脚が長い。内外面ともにハケメが認められる。

ＳＤ０２（旧S364　第６４図）

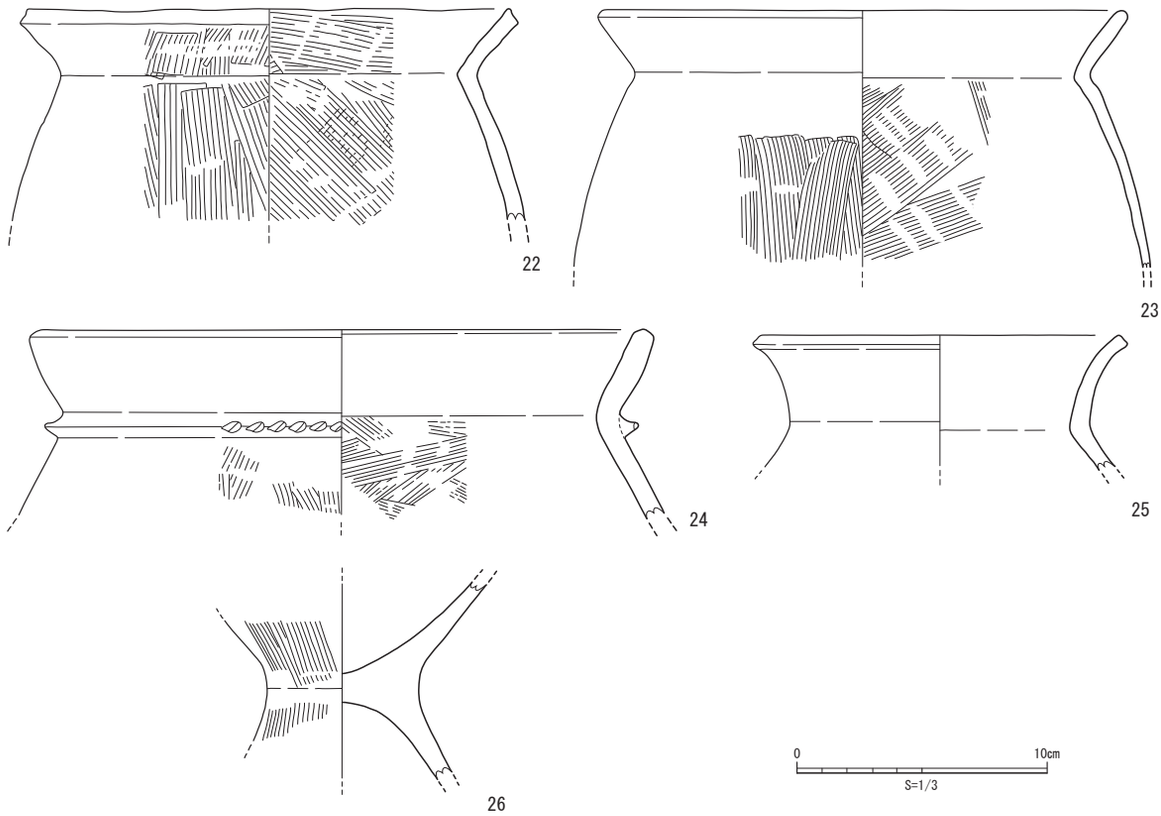
ＳＸ０１の南西に隣接する溝で南東方向に伸びる。現況長約 10.9 mで幅 30cm、深さ 40cm 程を測る。

ＳＤ０２の出土遺物（第６３図）

いずれも溝埋土 (2) 層からの出土である。22 ～ 24 は甕で、口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも頸部が「く」の字形に屈曲する。22・23 は口縁部が直線的に外に向かう。24 は頸部に刻目突帯を有し、口縁部は僅かに膨らんで外に向かう。いずれも内外面ともにハケメが認められる。25 は壺で口縁部から頸部にかけての破片である。前述の甕に比べると頸部の屈曲は弱く、口縁部が外反する。26 は甕の脚部片である。外面にはハケメが認められる。



第６２図　３－１区ＳＤ０１実測図（平面S=1/60、断面S=1/40）及び出土遺物実測図（S=1/3）



第６３図　３－１区ＳＤ０２出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＤ０３（旧S100　第６８図）

ＳＸ０２の中央を破壊する溝である。長さは６m程で南東に向かうにつれ不鮮明となる。上端幅約 1.5 m、下端幅 70cm 前後で断面形は逆台形を呈する。深さは現状で約 40cm である。遺物は出土していない。

ＳＸ０１（旧S387・S366　第６４図）

5080・5081・5180 グリッドにまたがって位置する。全体形はハート形を呈する。北東側をＳＤ０１、南西側をＳＤ０２により破壊されている。当初一つの遺構としてベルトを残し掘削し、土層図を作成する際に複数の遺構があることに気が付いたようである。埋土１層２層は、この遺構に伴わない可能性が高く、それを除去することなく掘り始めたせいかも知れない。そのため平面図には土層断面図から、ａ－ａ’、ｂ－ｂ’上に個々の遺構と思われる点を落とし、破線で結んだ。最低でも３つから４つの遺構があるようだ。便宜的に第 64 図のようにＳＸ０１を４つに分け、ＳＸ０１－１・ＳＸ０１－２・ＳＸ０１－３・ＳＸ０１－４とした。

ＳＸ０１－１（旧S387・S382）

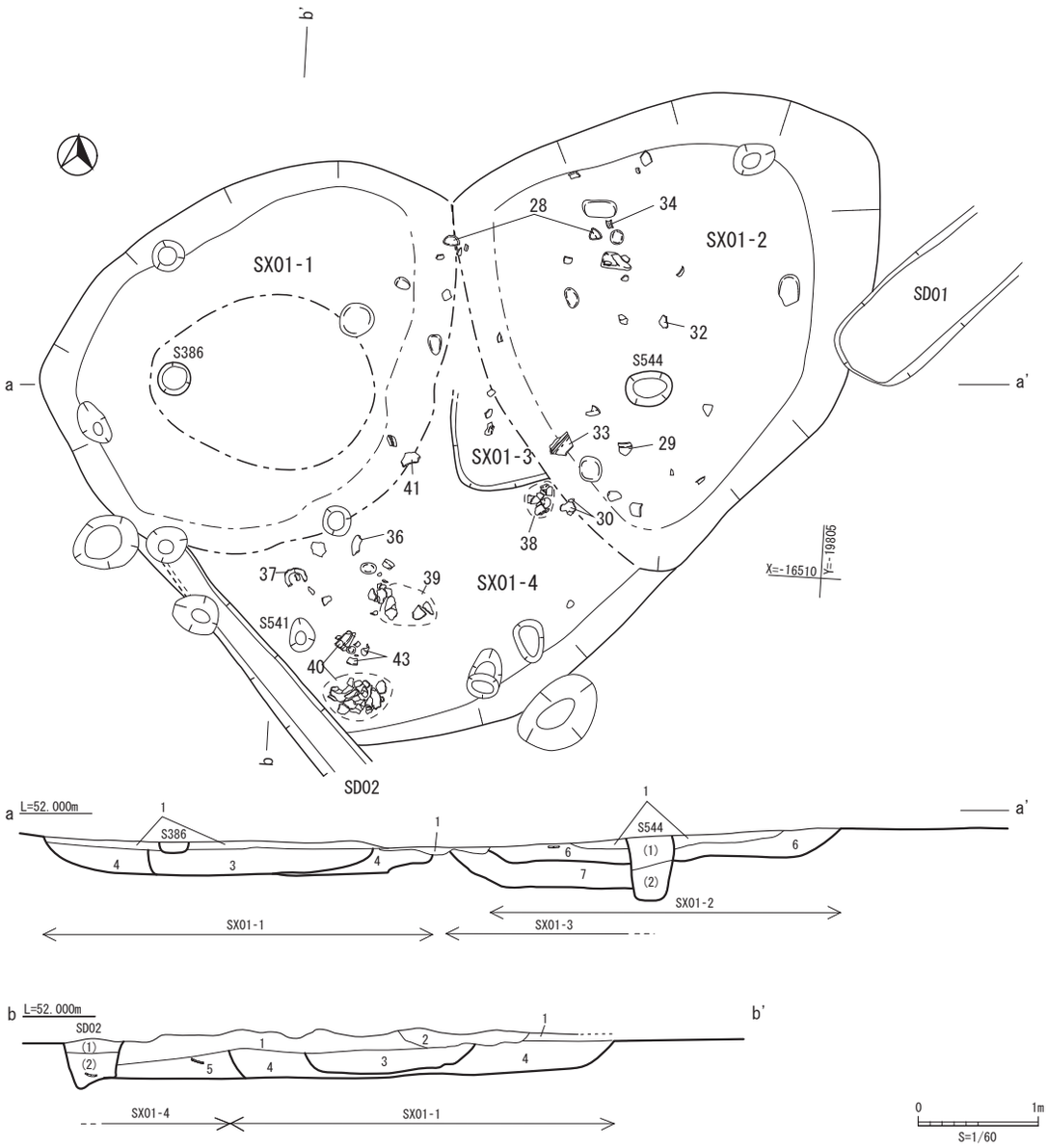
北西に位置する遺構である。破線は全くの推定であるので形状は不明である。図上では、長軸約 3.8 m、短軸は推定で約 2.9 mである。この遺構の内側に３層を埋土とする別の遺構（S382）があったのかも知れないが、３層をＳＸ１－１とした遺構が埋没する過程の堆積として取り扱った。遺物は出土していない。

ＳＸ０１－２（旧S366）

北東に位置する。西側は全くの推定だが、それを差し引いてもかなり歪な形状である。図上では、長軸は推定で約 3.85 m、短軸で約 3.4 mである。６層がこの遺構の埋土となる。

ＳＸ０１－３（旧S384）

大半をＳＸ０１－２により破壊されている。またＳＸ０１－４との関係は不明である。７層がこの遺構の埋土である。



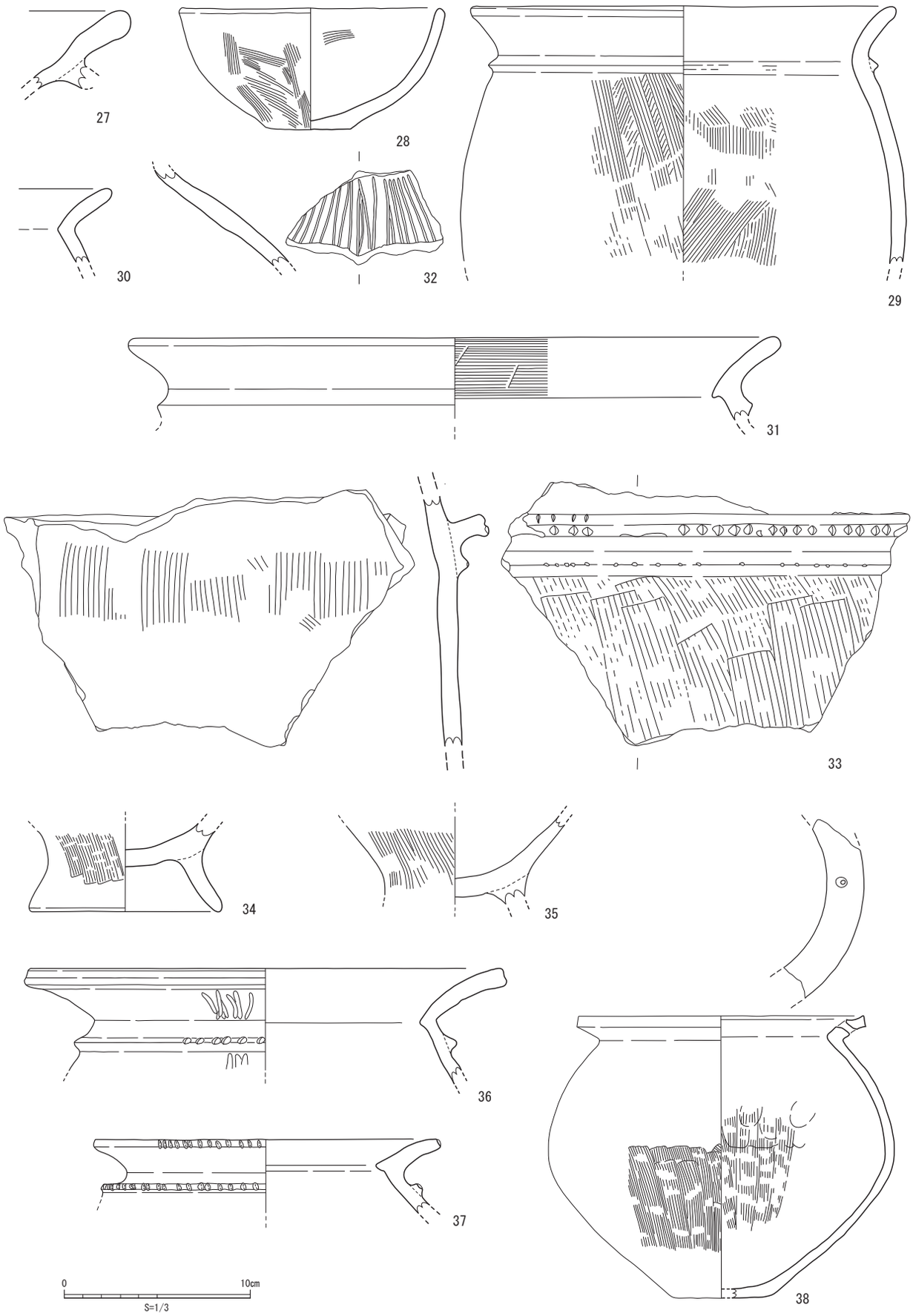
1　10YR4/4褐色砂質土
　若干の焼土や黒褐色ブロックを含む
2　10YR3/4暗褐色土
　しまりは弱く　粘性なし
　細かい黄褐色ブロックが混じる
3　10YR4/3にぶい黄褐色土砂質土
　しまりは弱く　粘性なし
　黄褐色ブロックが混じる(S382埋土)
4　10YR4/4褐色 砂質土
　しまりはやや強く　粘性なし
　黄褐色ブロックが混じる(S387埋土)
5　10YR4/6褐色砂質土
　しまりは強く　粘性なし　微量の焼土を含み
　細かい黒褐色ブロックが混じる(S383埋土)
6　10YR5/2にぶい黄褐色土
　しまりはやや強く　粘性なし
　細かい黄褐色ブロックが混じる(S366埋土)
7　10YR2/2黒褐色土
　しまりは弱く粘性なし
　黄褐色ブロックが混じり
　若干焼土も含む　多量に炭を含む(S384埋土)

S386
　10YR3/3暗褐色土
　しまりはやや強く　粘性なし
　細かい黄褐色ブロックを含む

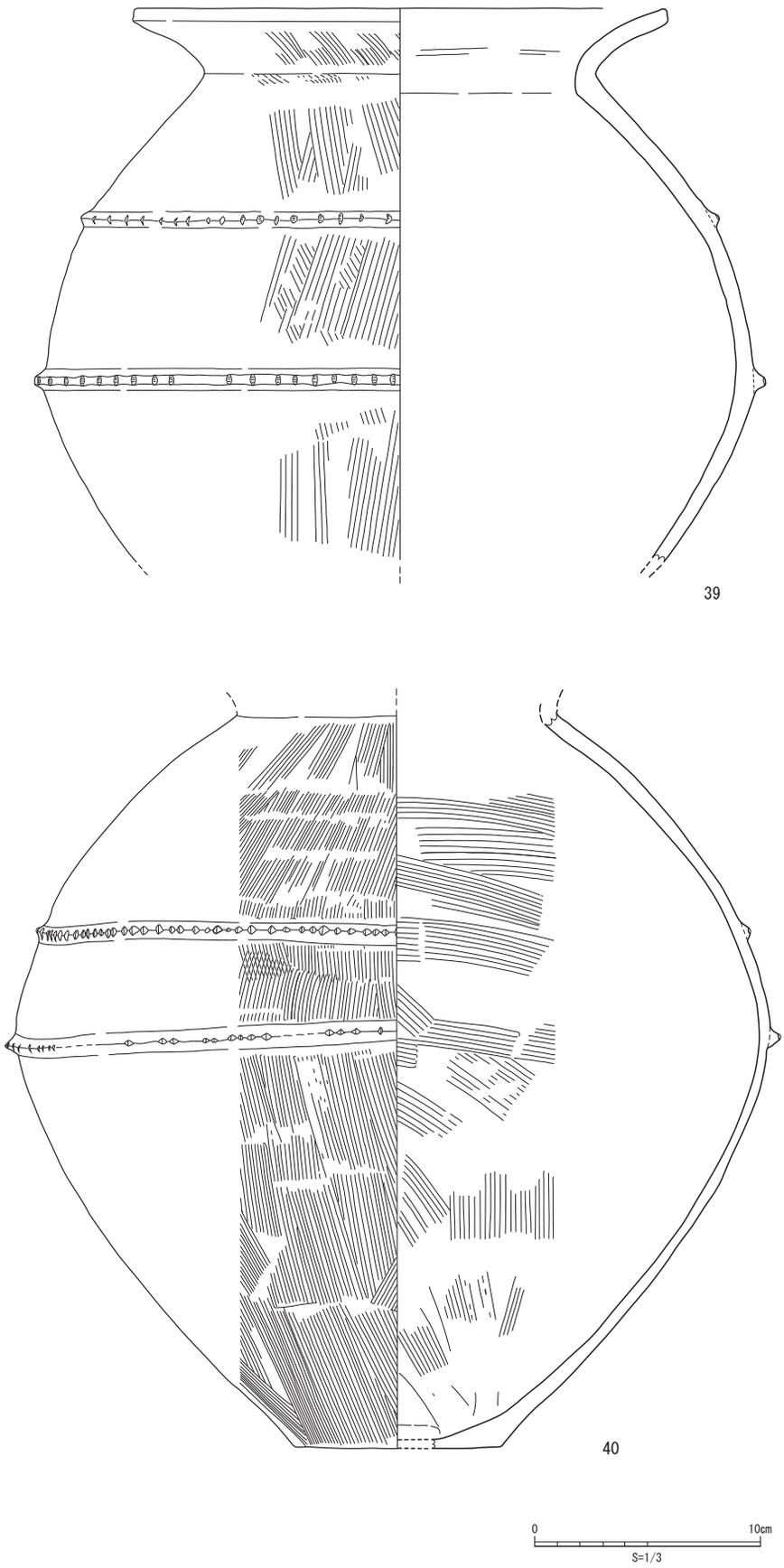
S544
(1)　10YR4/4褐色土
　しまりはやや強く　粘性なし
　φ1mm程度の焼土を微量に含む
(2)　10YR4/1褐灰色土
　しまりは強く　粘性なし
　黄褐色ブロックと黒褐色ブロックが混じる

SD02
(1)　10YR5/6黄褐色土(砂質)
　しまりは弱く　粘性なし
　細かい褐灰色ブロックが混じる
(2)　10YR4/3にぶい黄褐色土
　しまりはやや強く　粘性はなし
　(1)の埋土が混じる

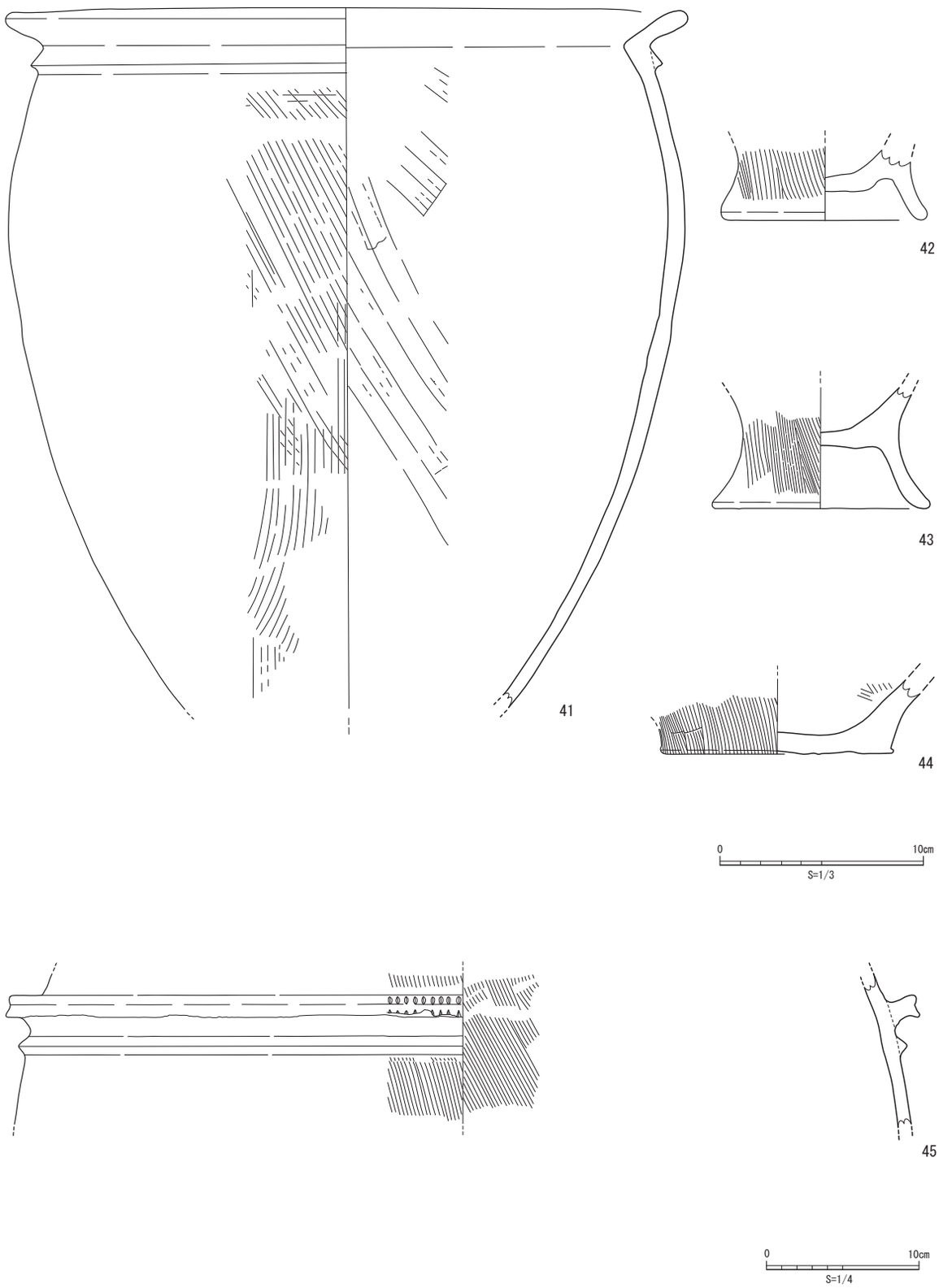
第６４図　３－１区ＳＸ０１実測図及び遺物出土状況(S=1/60)



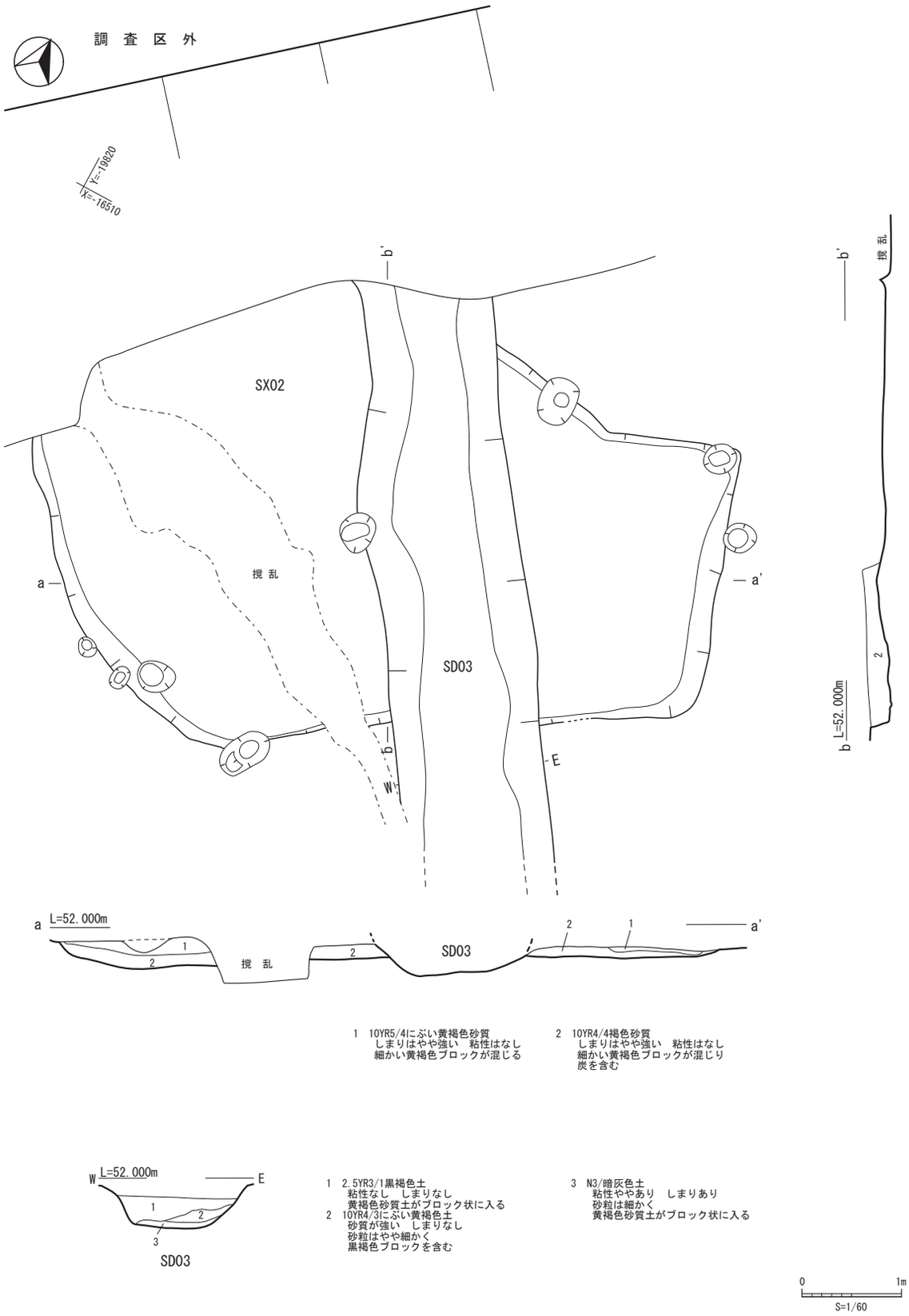
第６５図　３－１区ＳＸ０１出土遺物実測図（１）(S=1/3)



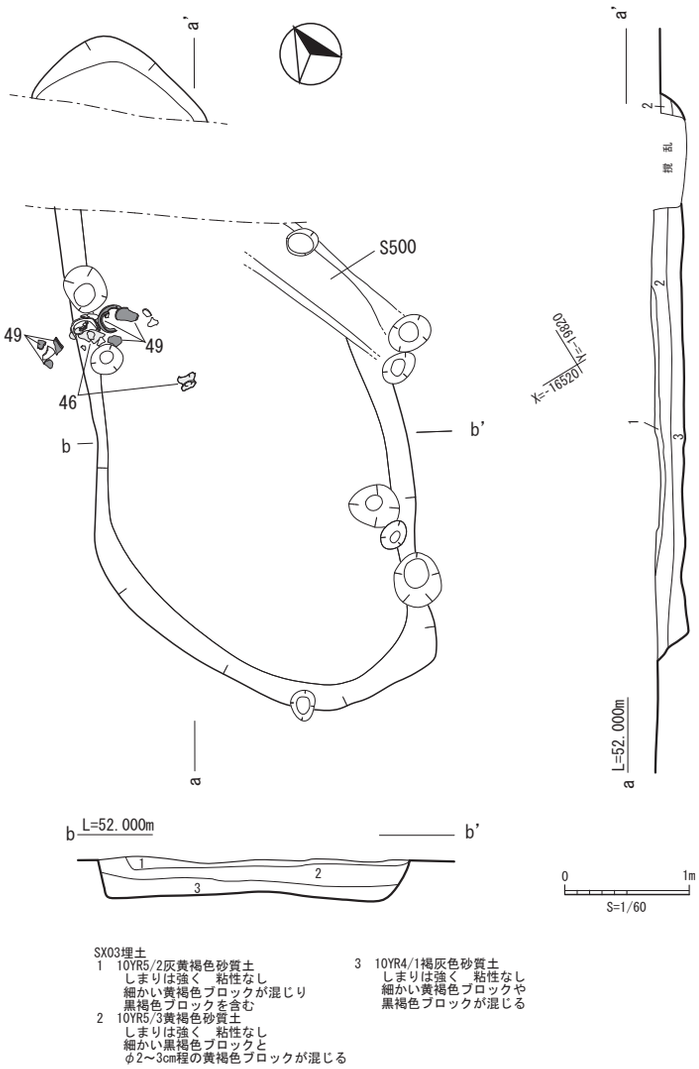
第６６図　３－１区ＳＸ０１出土遺物実測図（２）(S=1/3)



第６７図　３－１区ＳＸ０１出土遺物実測図（３）(S=1/3、45はS=1/4)



第６８図　３－１区ＳＸ０２・ＳＤ０３実測図(S=1/60)



第６９図　３－１区ＳＸ０３実測図及び遺物出土状況(S=1/60)

ＳＸ０１－４（旧S501）

南側に位置する。ＳＸ０１－１により北側を破壊されている。他のＳＸ０１－２、ＳＸ０１－３との関係は不明である。5層がこの遺構の埋土となる。

ＳＸ０１の出土遺物（第６５～６７図）

すべてＳＸ０１として取り上げられているが、出土状況図やピット番号が書かれているので出土位置が特定できるものは多い。しかし平面図の破線部分は推定であるので、どの遺構から出土したかはあくまでも目安にすぎない。その中で、ＳＸ０１－１内から確実に出土したと断定できるものはない。

27は壺か甕の口縁部片で口縁下に突帯が巡る。上層出土と書かれているので、この遺構そのものに伴うものではないものかも知れない。28～34はＳＸ０１－２から出土した可能性が高いものである。28は鉢である。平底で底部がわずかに突出する。29は甕の口縁部から胴部の破片で、頸部に突帯を有す。緩やかに屈曲する頸部に外反する口縁部がつく。30も甕の口縁部片である。出土位置はＳＸ０１－２と４の境界付近であるのでＳＸ０１－４出土の可能性もある。31は甕または壺の口縁部片で、頸部の下に突帯が巡る。頸部から外反する口縁部が付くが、口縁端部は内側にわずかに張り出す。32は壺の肩部である。暗文が施され赤く塗られている。その他、小片で図化してはいないが同様に赤く彩色された土器がＳＸ０１内から他に２点出土している。33は２条の突帯を巡らす。上段は断面四角形の突帯で、その中央に太い沈線を施し

区画する。本来は突帯の下側にのみ刻目を施すものが、部分的に上段にも刻目が入ってしまったように見える。下段の突帯は断面三角形で、浅い刻目を施すが非常に雑である。34 は脚付の底部片で、底径に比べ脚は短い。

35 は、脚付の底部片である。埋土７層からの出土であることからＳＸ０１－３からの出土とした。

36 ～ 43 はＳＸ０１－４出土の可能性のある遺物である。36・37 は壺の口縁部片で肩部に刻目突帯を巡らす。36 は口縁部と突帯下に暗文を施す。37 も肩部に刻目突帯を巡らせる。口唇部にも刻目を施し、口縁端部は僅かに内側に突出する。38 は鉢としたほうがいいのかもしれないが、壺とした。底部は平底で、胴部最大径は中位にあり、ひし形のような球形となる。「く」の字形に屈折する頸部に二段階に屈折する口縁部が付く。口縁部には穿孔が見られる。39･40 も壺で､胴部に２条の刻目突帯を巡らす。大きさは異なるが、両者とも同じ器形と思われる。平底の底部に球形の体部が付く。「く」の字形に屈曲する頸部に外反する口縁部が付く。内外面ともにハケメが認められる。41 は甕で頸部下に断面三角形の突帯が巡る。胴部最大径は上位にくる。42・43 は脚付の底部で、比較的脚は短い。

44・45 はＳＸ０１内出土であるが場所を特定できないものである。44 は壺の底部で完全な平底である。45 は壺の体部である。33 と同じ形態であるが、上段の突帯は上下ともに刻目がしっかり施され、下段の突帯には刻目は施されない。

ＳＸ０２（旧 S362　第６８図）

5181 グリッド内に位置する。北西側は調査区外になる。中央にＳＤ０３とした溝が通る。不整形で遺物は図化に耐えない小片の土器等が数点出土しているのみである。

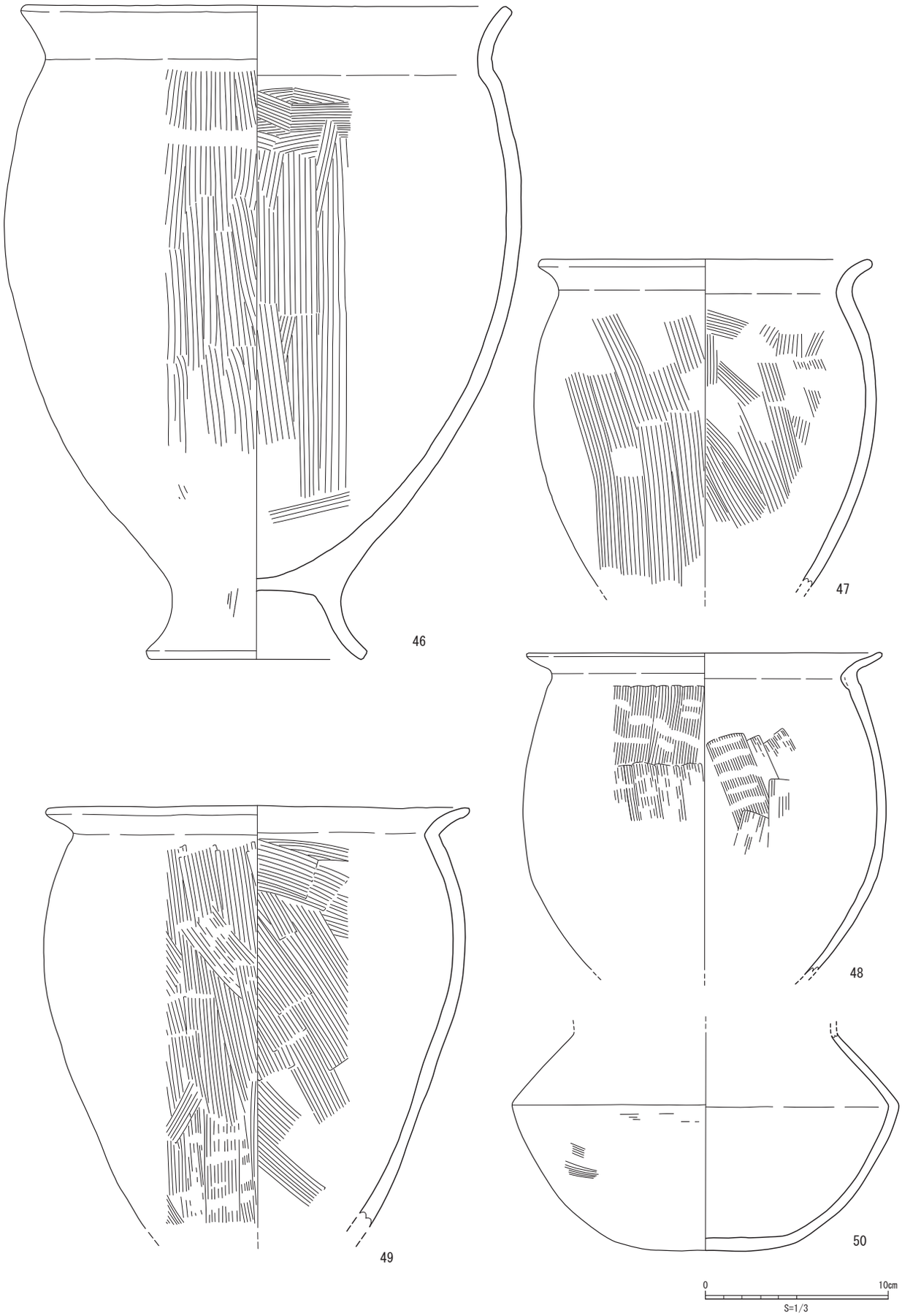
ＳＸ０３（旧 S367　第６９図）

5182・5282 グリッドにまたがって位置する。北側を攪乱により破壊されている。また S500 とされる溝に壊されているが、それ以上平面図が書かれておらず詳細は不明である。不整形な楕円形で長軸約 5.8 m、短軸約 2.5 mである。深さは 25cm 程で底は平坦である。46・49 の遺物は、平面図にあるように遺構外の遺物と接合する。壁が部分的に崩落した際に遺物が落ち込んだ可能性もある。若干場所を異にするがｂ－ｂ' の断面を見るとｂ' 側の壁は丸みをもち立ち上がるのに比べ、ｂ側は直線的に立ち上がっており、あるいはもう少しｂ側に広がっていた可能性もある。その他、ＳＩ０２の出土遺物として掲載したものの中に、破片の一部がＳＸ０３出土のものと接合するものがある。土器に焼成破裂痕が多く認められるので土器焼成に関連する遺構ではないかとも考えたが焼土等の痕跡は認められない。

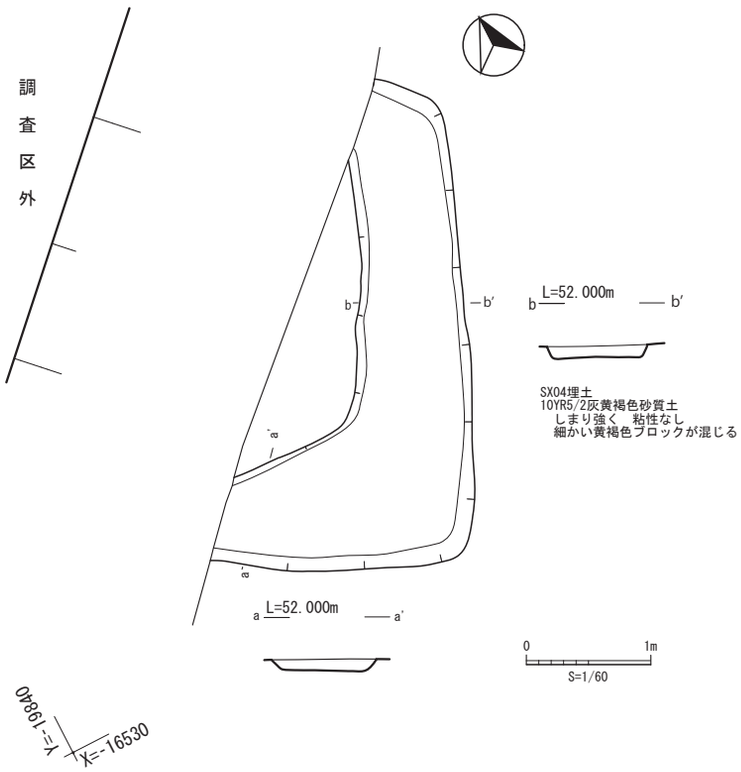
ＳＸ０３の出土遺物（第７０図）

出土した５点の土器すべてに焼成破裂痕が認められる。46 ～ 49 は甕で、46 と 49 は前述したとおり遺構外のものとも接合する。46 は胴部最大径はやや上位にあり、頸部の屈曲は弱い。短い脚がつく。内外面

写真１　第 70 図 46 の土器：焼成破裂痕土器（左）　右写真は、剥がれた薄片（焼成破裂土器片）が接合した状態



第７０図　３－１区ＳＸ０３出土遺物実測図(S=1/3)



第７１図　３－１区ＳＸ０４実測図(S=1/60)

ともにハケメが認められる。焼成破裂痕が数か所に認められ、そこに接合する破片（焼成破裂土器片）もある（80 頁　写真１）。47 も 46 と同様な形態であるが、口縁部はより外反する。48 も同様であるが、頸部のくびれが強くなり口縁部は直線的に外に向かう。また口縁部が内面にわずかに突出する。この土器も焼成破裂痕に破片が接合する。49 も同様な形態であるが、頸部のくびれは強い。50 は壺の胴部片で、胴部が張りだし、所謂そろばん玉の形状に近くなってきている。底部は図ではうまく表現しにくいが接地面はそれほど広くない。

ＳＸ０４（旧 S501　第７１図）

5283 グリッドに位置する。北西側は調査区外となる。方形の溝のような形状であるが、幅は 90cm 程で深さは 10cm 程で浅い。遺物は図化に耐えない小片が数点出土している。

ＳＸ０５（旧 S360　第７２図）

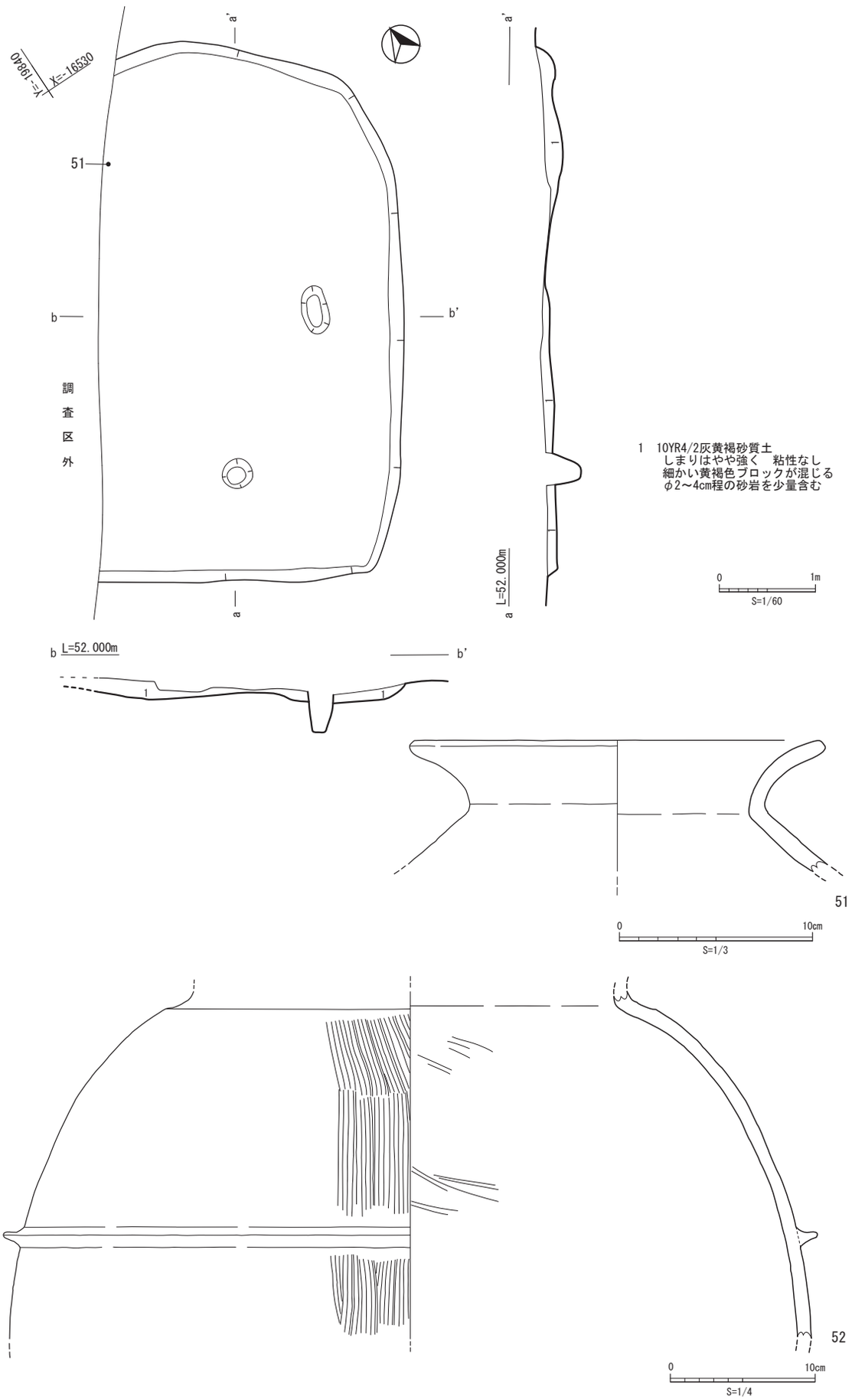
5283 グリッド内に位置する。北西側は調査区外となる。ａ－ａ’で約 5.7 m、幅は現状で約 3.2 mで深さは 15cm にも満たない。

ＳＸ０５の出土遺物（第７２図 51・52）

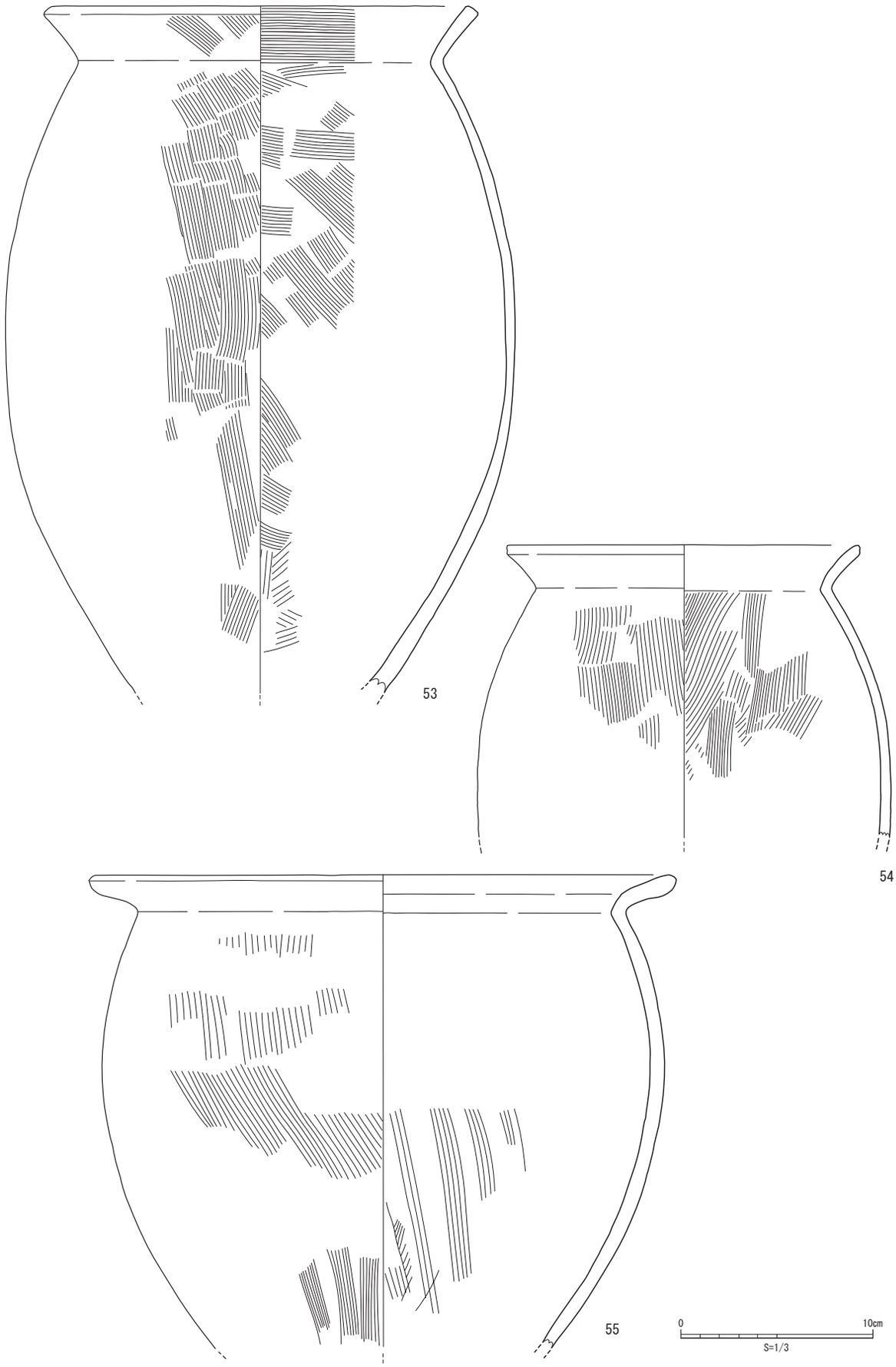
51 は壺の口縁部で、頸部で強く屈曲して口縁部が外反する。52 も壺の頸部から胴部にかけての破片で胴部に突帯を巡らす。

包含層出土の遺物（第７３・７４図）

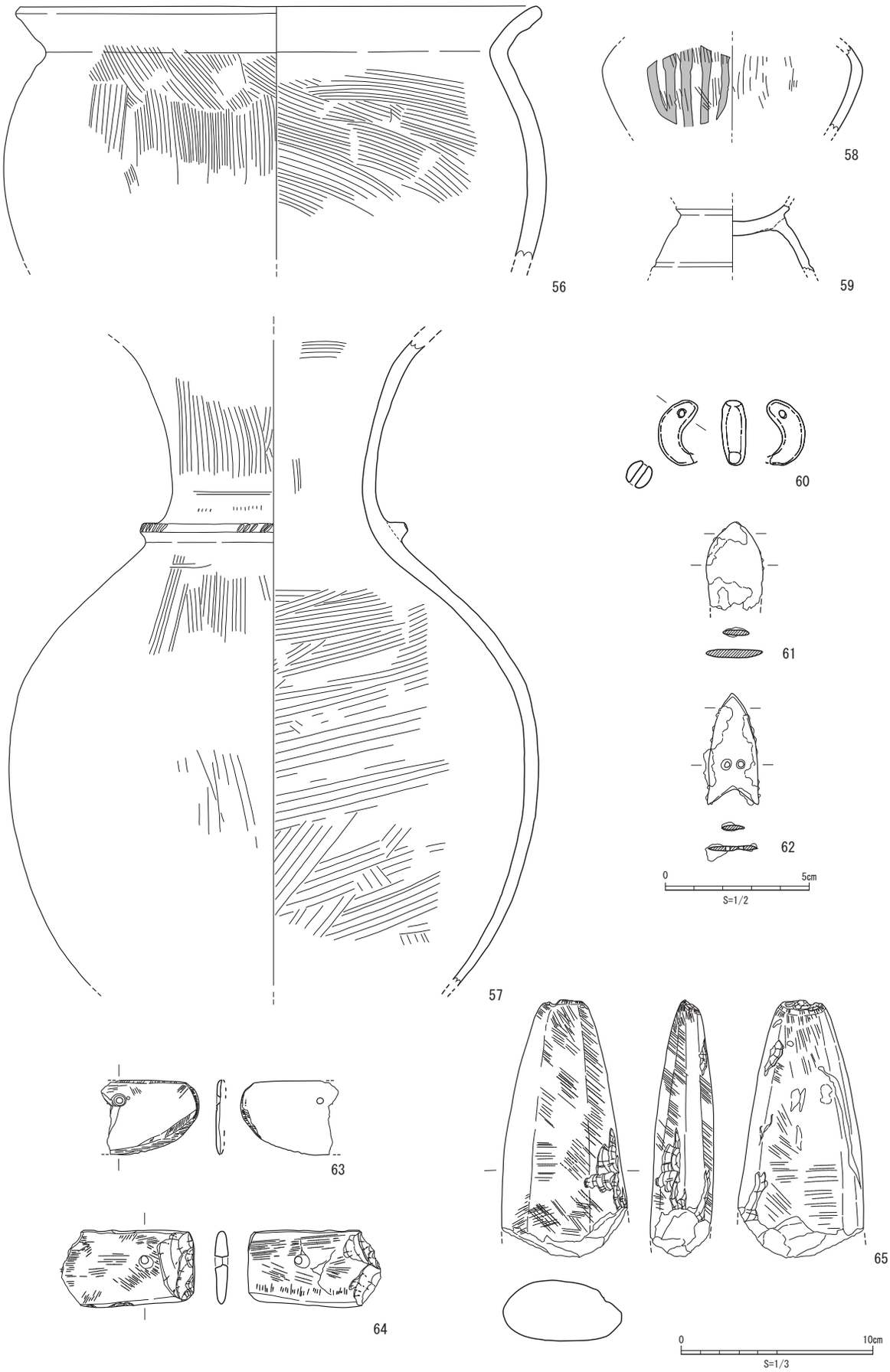
53 ～ 56 は甕である。いずれも脚部を欠損する。「く」の字形に屈曲する頸部から外に向かう口縁部がつく。53・54 は胴部最大径が中位付近にある。55・56 は胴部最大径は、やや上位にくる。いずれも内外面



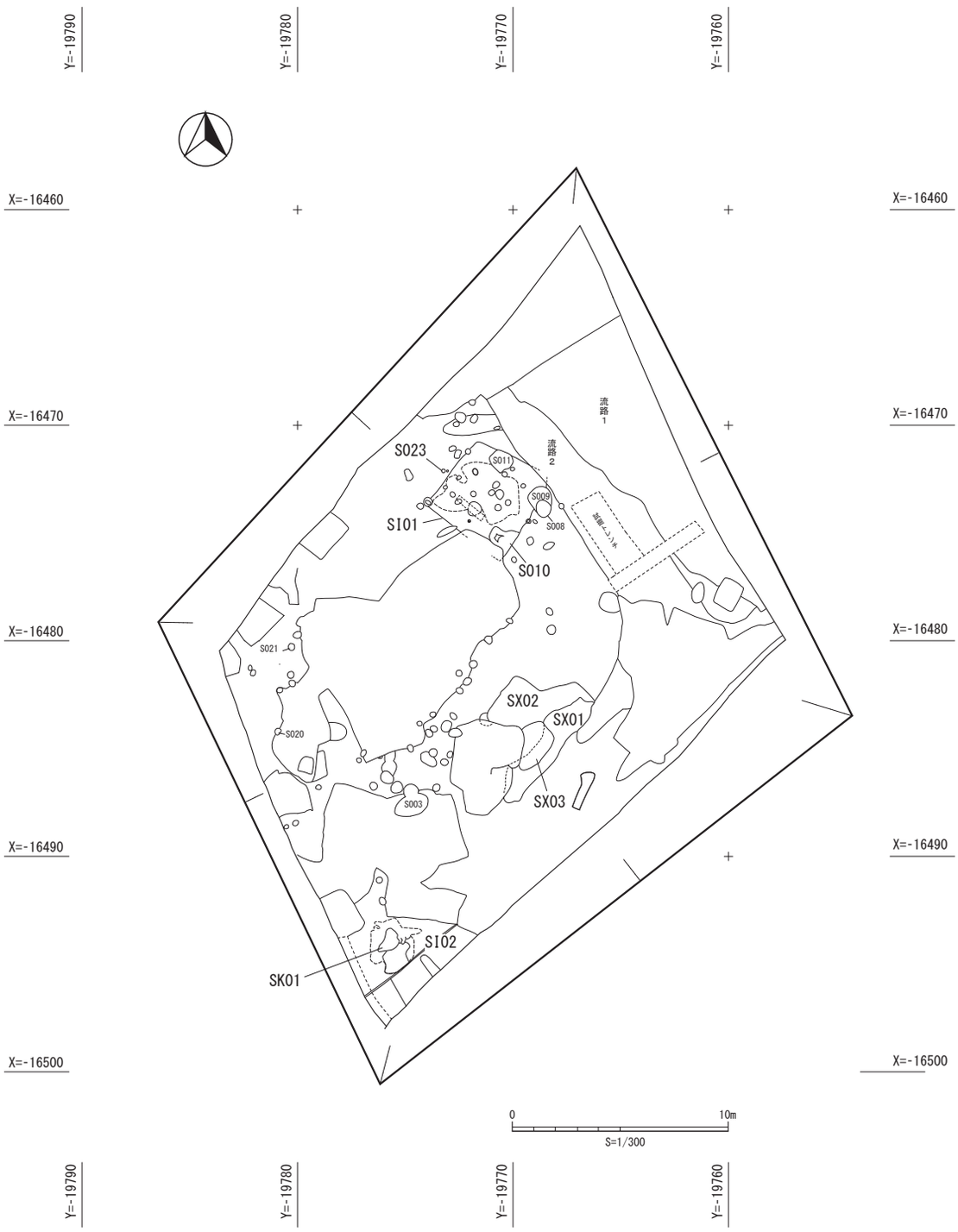
第７２図　３－１区ＳＸ０５実測図(S=1/60)及び出土遺物実測図(51はS=1/3、52はS=1/4)



第７３図　３－１区包含層等出土遺物実測図（２）(S=1/3)



第７４図　３－１区包含層等出土遺物実測図（３）(60･61･62はS=1/2、他はS=1/3)



第７５図　３－２区遺構配置図(S=1/300)

ともにハケメが認められる。57 は壺で口縁部を欠損する。頸部が長く、口縁部は外反すると思われる。肩部に突帯を巡らす。突帯には刻目を施すが、連続するものでなく、一定の間隔で施してある。残存状態が悪く、規則性があるかは不明である。胴部最大径は上位にある。58 は壺の胴部片で、赤彩文が施される。小片で天地もはっきりしない。その他図化はしていないが、図版 37 の写 1 にも赤彩が見られる。5178、5179、5180 グリッドからの出土である。 59 は脚台部分であるが器形は不明である。甕の脚とするには小さく器壁も薄い。高坏とするには脚が太い。60 は土製勾玉である。61 は鉄鏃で基部を欠損しており、全体の形状は不明である。62 も鉄鏃で無茎の三角形鏃で、凹基の抉入部は三角形状である。また中軸を挟んで 2 か所に穿孔が施される。63・64 は石包丁である。63 は背部は直線的で、刃部は湾曲するものである。64 は再利用した可能性がある。65 は磨製石斧で刃部を欠損している。

２　３－２区の調査の成果

ＳＩ０１（旧 S001　第７６図）

4776・4777 グリッドにまたがって位置する。 a － a' 間で約 6.45 m、 b － b' 間で約 6.6 mを測る。深さは現状で 10cm 程である。四隅を土坑やピットで壊されている。建物の中央から北西側に硬化面が広がる。やや太い線で示したピットがこの建物に伴うものであるが、明確に柱穴と言えるかは不明である。

ＳＩ０１の出土遺物（第７６図 66 ～ 69）

66 は壺の口縁部から胴部にかけての破片である。「く」の字状に屈曲する頸部に外反する口縁部が付く。また頸部には突帯を巡らす。67 は平底で、壺の底部と思われる。66 と同一個体の可能性が高い。68 は石包丁で、背は直線的で、刃部が湾曲し、半月形になるものである。ただしこの石包丁は南東の土坑からの出土である。69 は磨製石鏃で平面形が三角形を呈する平基無頸鏃である。

ＳＩ０２（旧 S006　第７７図）

調査区南端に位置する。削平され床の硬化面のみが残存し、硬化部分の一部をＳＫ０１で破壊されている。厳密には竪穴建物と言えないが、硬化面の存在や遺物が出土していることから竪穴建物として取り扱った。

ＳＩ０２の出土遺物（第７７図 70 ～ 75）

70 は甕の口縁部片である。ゆるやかに屈曲する頸部に短い口縁部が付く。小型で復元口径は 17 cm 程で、鉢としたほうがいいのかも知れない。71・72 は甕の口縁部片で、やはり頸部が「く」の字形に屈曲する。73 は甕の脚部で、内外面ともにハケメが認められる。74 は底部片である。平底で底部端が出っ張る。体部に穿孔が見られる。ヘラ状工具で強く撫でられ内面はケズリのようにも見える。このような形態の弥生時代の土器があるのか不明で、弥生時代の土器とするのは躊躇される。75 は壺の底部である。

ＳＸ０１・ＳＸ０２・ＳＸ０３（旧 S004・012・013　第７８図）

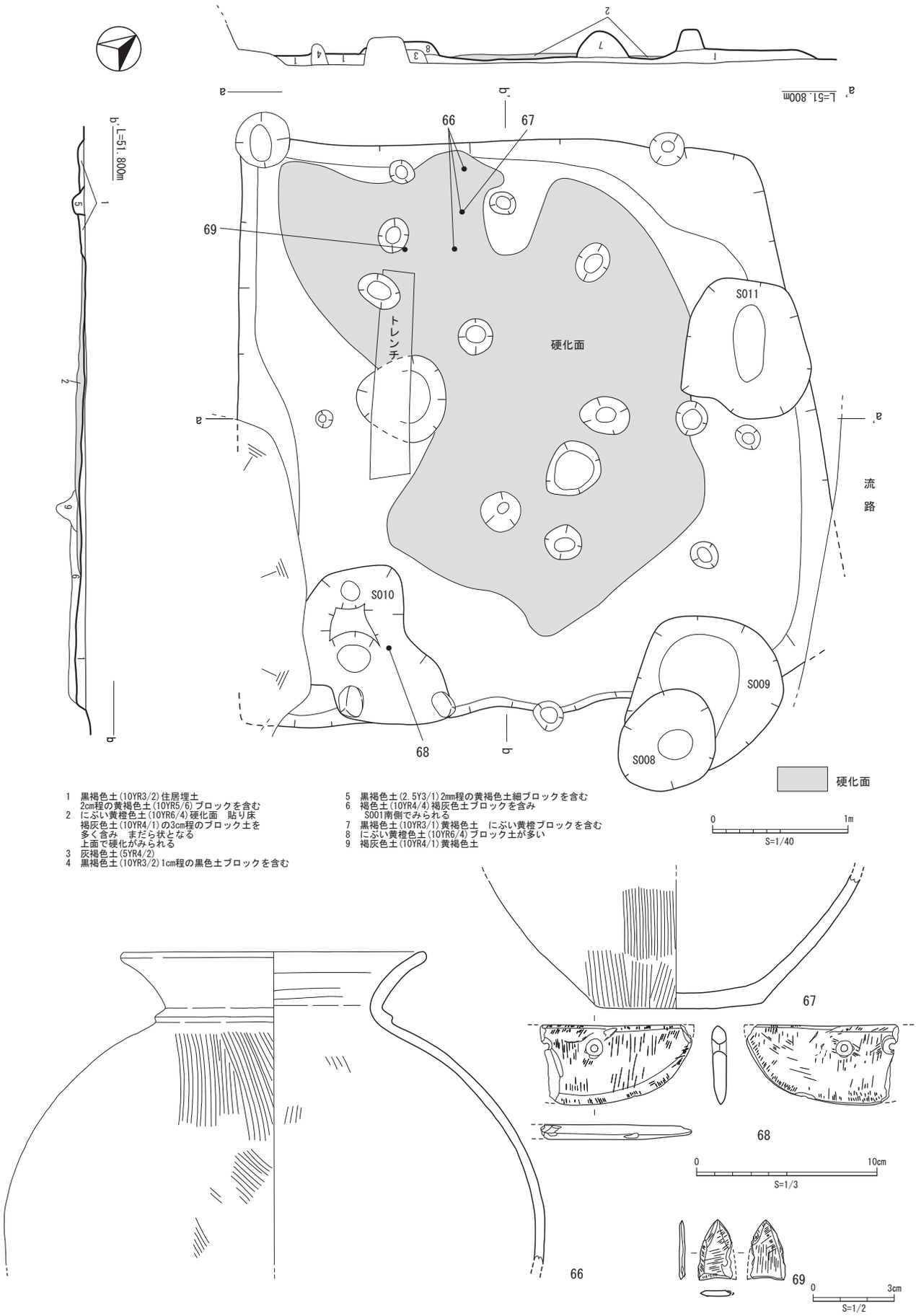
4876・4877 グリッドにまたがり位置する。当初ＳＸ０３ともう一つの遺構（S005）との認識であったようだが、 a —a' 土層を作成する際にさらに別の遺構の存在が判明したようで、最終的に３つの遺構となっている。いずれも不整形である。

ＳＸ０１は長さ約 6.2 mで幅は 1.2 m前後である。深さは現状で 60cm 程である。ＳＸ０２はさらに不整形で、西に攪乱があることもあり、どのような平面形になるのか想像できない。あるいはさらに遺構の重なりがあったのかも知れない。ＳＸ０３は長軸約 2.1 m、短軸約 1.1 mの隅丸方形を呈す。深さは 20cm 程である。

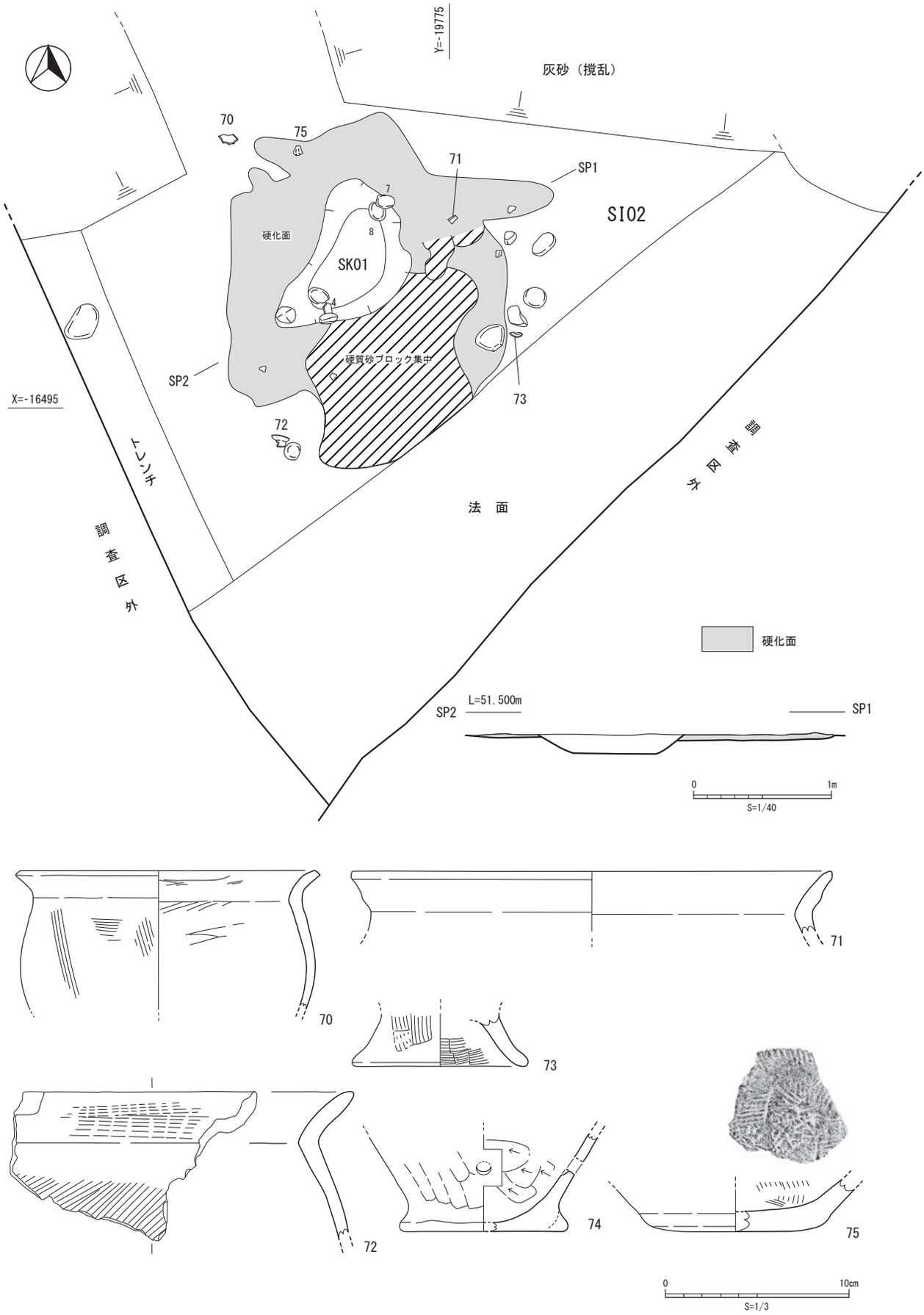
ＳＸ０１・ＳＸ０２・ＳＸ０３出土遺物（第７９・８０図）

ＳＸ０１出土の遺物（第７９図 76 ～ 79）

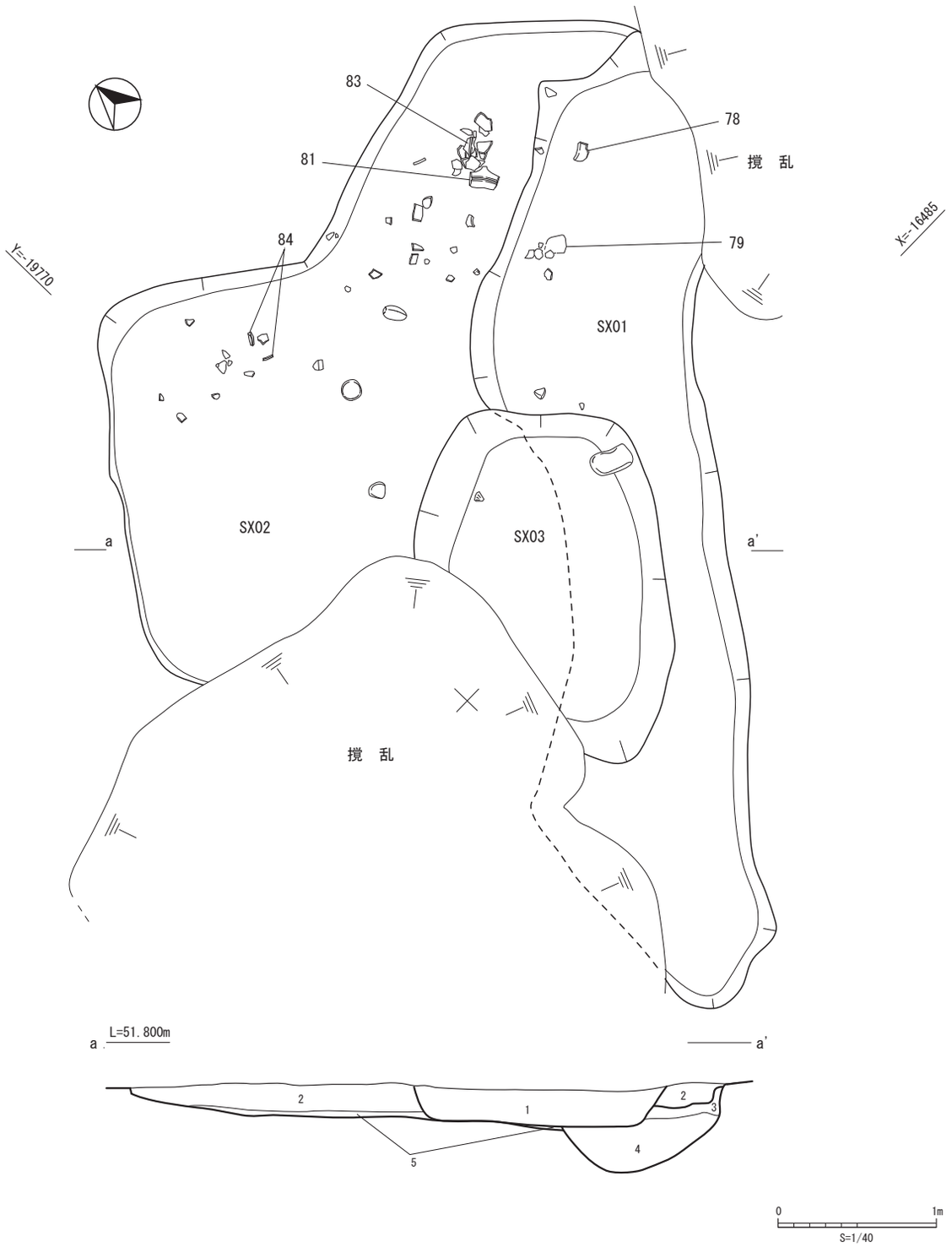
76 は甕の口縁部片で、強く「く」の字形に屈折する。77 は壺の口縁部片と思われる。口縁端部が内面に



第７６図　３－２区ＳＩ０１実測図・遺物出土状況(S=1/40)及び出土遺物実測図(69はS=1/2、他は1/3)

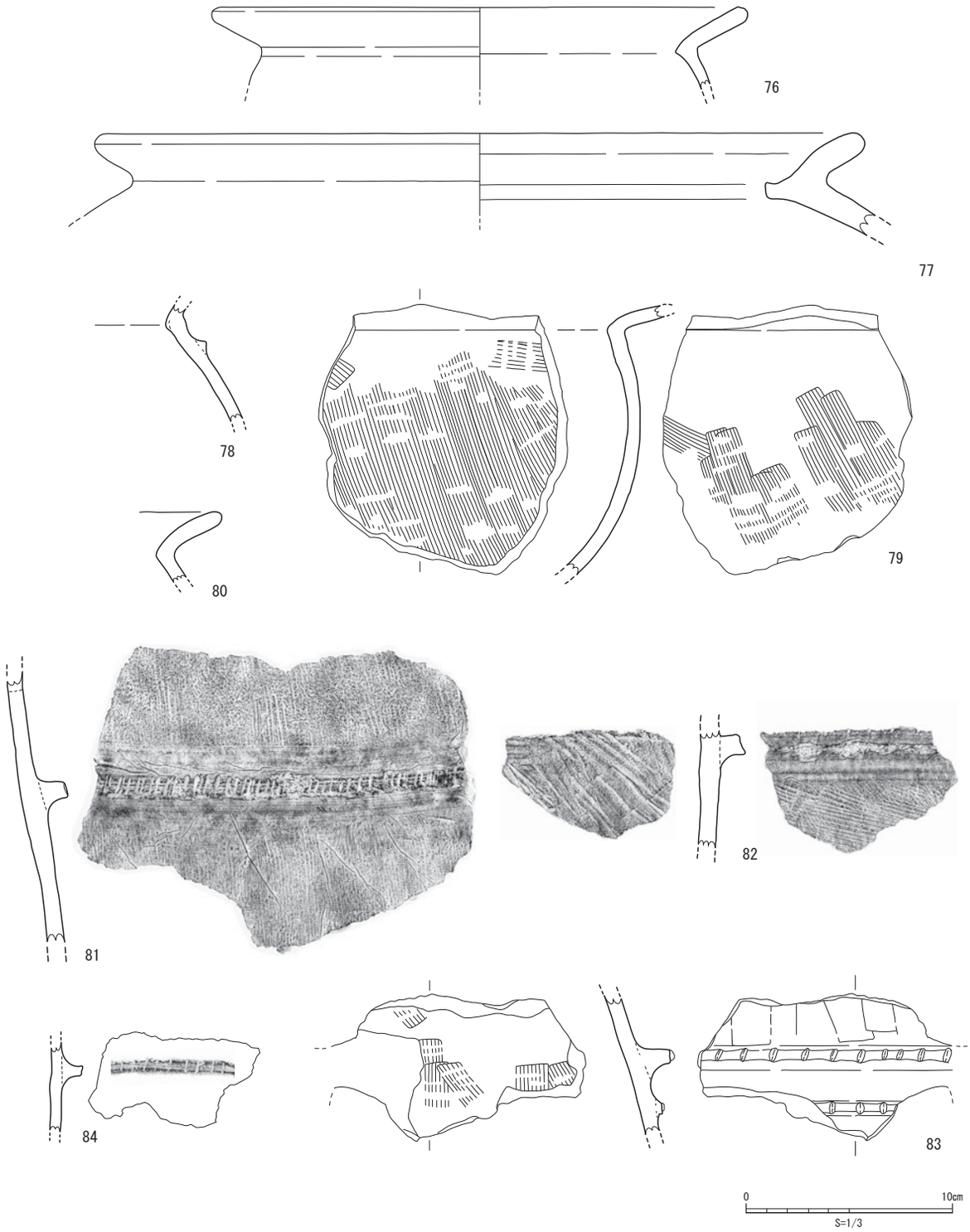


第７７図　３－２区ＳＩ０２・ＳＫ０１実測図・遺物出土状況(S=1/40)及び出土遺物実測図(S=1/3)



1　10YR3/1黒褐色土　SX03埋土褐色ブロック土、炭化物が入る
2　10YR3/2黒褐色土　しまりは強く、粘性なし
　細かい黄褐色ブロックが混じり、微量に焼土を含む
3　10YR4/2灰黄褐色土　しまり強く、粘性なし
　1～2cm程の黄褐色ブロックを少量含む
4　10YR4/1褐灰色土　しまりはやや強く粘性なし
　黄褐ブロックが混じる
5　10YR7/6明黄褐色土　しまりは強く粘性なし
　黒褐色ブロックが混じり硬化している

第７８図　３－２区ＳＸ０１・０２・０３実測図及び遺物出土状況(S=1/40)

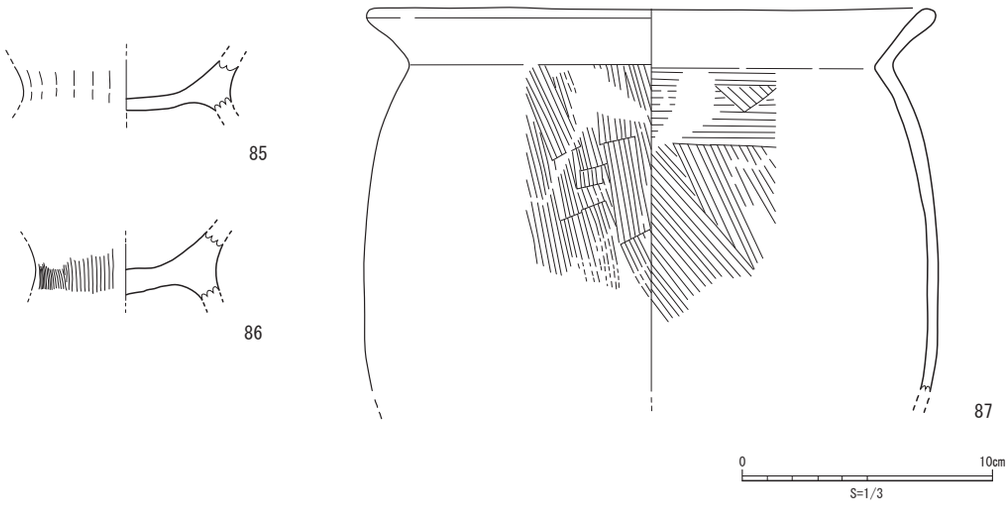


第７９図　３－２区ＳＸ０１(76～79)・０２(80～84)出土遺物実測図(S=1/3)

突出する。78 は壺の肩部である。突帯を巡らす。79 は壺か甕の頸部から胴部にかけての破片である。頸部が強く屈曲する。

ＳＸ０２の出土遺物（第７９図 80 ～ 84）

80 は甕の口縁部片で「く」の字形を呈する。81 ～ 84 は胴部片で、刻目突帯を巡らす。82 は刻目の間隔が粗である。



第８０図　３－２区ＳＸ０３出土遺物実測図(S=1/3)

ＳＸ０３及びその他の出土遺物（第８０図）

85・86 はＳＸ０３出土で甕の脚部である。87 は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、ＳＸ０１、０２、０３から出土したものが接合するので、どの遺構出土か特定できない。

まとめ

３区の調査では、縄文時代晩期の遺物も僅かには出土しているが、ほとんどは弥生時代後期の遺物であり、古代の遺物も出土していない。隣接箇所で熊本市も調査をおこなっているが、そこでは弥生時代中期の竪穴建物が検出されており、後期の遺物は少数であるようだ。

３－１区で竪穴建物とした遺構は２軒で、その他は遺構の性格が不明なものが多い。ＳＸとしたものは、いくつかの遺構が重なってしまったために不定形になった可能性が高い。ＳＸ０１は１つの遺構として掘削されたため、個々の遺構の形状が不明である。遺物は比較的多く出土しているので、何らかの遺構であることは間違いないと思われるが、その性格は全く不明である。

その中で特に気になった遺構はＳＸ０３である。掲載したすべての土器に焼成破裂痕が認められる。しかしＳＸ０３の遺構そのものには焼土や被熱の痕跡は認められない。46・47 の土器片の接合地点をみると、遺構内のものと周辺包含層出土のものが接合する。大半が遺構内であるものを遺構出土としているが、壁の一部が崩落した際に包含層の遺物が落ち込んだ可能性もあるので、その帰属には慎重にならざるを得ない。また破片の一部はＳＩ０２出土の土器と接合する。すべてに焼成破裂痕があることや剥離した面にも煤等の痕跡がないことから、焼成時に穴があいてしまって使用されずに、破棄されたものだろう。その土器捨て場の可能性も考えたが、土器捨て場と言える程の出土量もなく、最終的には不明遺構とせざるを得なかった。

出土遺物では、弥生後期でも前半の遺物が多い。出土遺物の中で、特徴的なこととして、高坏が見られないことがある。ただし託麻弓削遺跡群全体からみると、遺跡の縁辺部を調査したのみであり、今後の調査の進展により、遺跡の性格は大きく変わってくるものと思われる。

第４章　総括

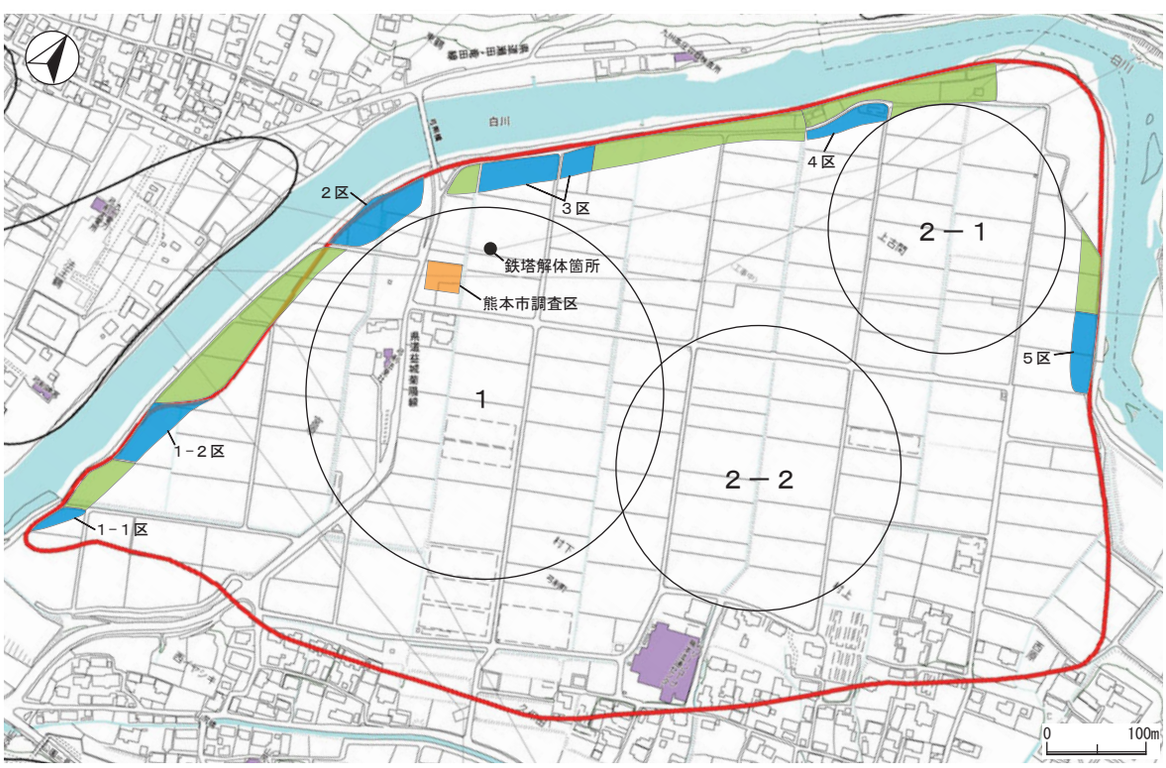
第１節　託麻弓削遺跡群の性格

今回調査した１区は古代の遺物が、２区は縄文時代後・晩期の遺物が中心である。３区では弥生時代後期が中心で、３地区それぞれ主体となる時代が異なっている。調査区は第 81 図のとおり、河川に隣接した地域のみであり、後背地にそれぞれの時期の中心となる箇所があるはずであり、今回の様相はあくまでも断片にすぎない。これまで正式な発掘調査はおこなわれておらず、昭和 49 年 11 月から 12 月にかけて、農業基盤整備事業に先立ち全域で予備調査が行われているのみである。しかしこの予備調査の内容については公表されておらず不明である。このような状況では、託麻弓削遺跡群の遺構の広がりやその性格を論じるのは難しいが、平成 26 年度に県で調査した３地区（１区～３区）以外に熊本市も調査（託麻弓削遺跡群第１次調査）を行っている。また平成 27 年度も４区・５区の２箇所で調査を行っているので、適宜参考にしながら、遺跡の性格やその広がりについて可能な限り考察してみたい。

なお託麻弓削遺跡群は、第２章でも述べたとおり、昭和 56 年に弓削宮原遺跡と弓削上古閑遺跡（トンノマエ地点（天神林）とイデミゾ地点からなる）を併せて託麻弓削遺跡群とされている。

１　縄文時代の託麻弓削遺跡群

熊本市教育委員会発行の昭和 46 年度熊本市東部地区文化財調査報告書には、託麻弓削遺跡群の表面採集資料が掲載されている。それによれば、弓削上古閑遺跡のトンノマエ地区の河川に近い地点で西平式土器や打製・磨製石斧や石鏃が表面採集され、イデミゾ地区では、水田用水路から曽畑式土器などが表面採集されている。その他周辺の畑からは後・晩期の土器が表面採集されている。一方弓削宮原遺跡では、弓削神



遺構・遺物が確認されなかった地区

※○は旧遺跡概略場所　１：弓削宮原遺跡　２：弓削上古閑遺跡（２－１トンノマエ（天神林）、２－２イデミゾ））

第８１図　託麻弓削遺跡群調査区配置図

Copyright：熊本県・市町村電子自治体共同運営協議会

社周辺で御領式土器や石器類が確認されている（上野 1973）。それとは別に吉原遺跡発掘調査報告書の付論として弓削宮原遺跡の表面採集遺物が紹介されている。多くは、縄文時代後期・晩期の遺物である。黒色磨研土器、刻目突帯文土器のほか土偶や人物が描かれている土器など特殊遺物も紹介されている（富田 1983b）。

今回の調査では２区で縄文時代後・晩期の遺物が出土している。天城式土器や古閑式土器の時期が中心だが、刻目突帯文土器も一定量出土している。また３区でも少量ではあるが黒色磨研土器が出土している。今回の２区・３区の内容だけをみると、打製石斧等の石器類の出土が少ないことは特色としてあげることができるが、他の地点では打製石斧など石器類も表面採集されているので、たまたまこの地域で出土をみなかっただけなのかも知れない。また２区で建物廃棄後に焼失したと考えた竪穴建物も１軒のみで、当地は集落の北西端にあり、集落は調査区外の南東に広がっている可能性がある。その他現在調査中の５区では、後・晩期の土器のほか、阿高系土器も出土している。現在調査中の４区や熊本市の調査でも少量は出土しているが、1 区だけは全く縄文時代の遺物は見られない。1 区を除き、縄文時代の遺物はほぼ遺跡の全域に広がっており、その中心は後期から晩期にかけての時期と考えられる。

２　弥生時代の託麻弓削遺跡群

弓削宮原遺跡の表面採集遺物には、弥生時代の遺物の記載も比較的多くみられる。地点は不明だが中期の甕棺が出土したことが記載されている（富田 1983b）。

その他弓削上古閑遺跡のトンノマエ地点では、昭和 38 年ゴボウ収穫の折、弥生時代城の越式の甕数個と黒髪式の土器片が出土していることが記述されている。検出状況は明らかでないが、完全な形で埋まっていたらしい。「その折、人頭大の倍位ある河原石が多数出土していたが土器や遺構に関係あるものと思われる」との記述がある（上野 1973）。この上古閑遺跡は、現在の託麻弓削遺跡群の中の東側部分であり、トンノマエ地点は、より北東側にあたる。これは新南部遺跡群 11 次調査で見られたような標石のある甕棺の存在を予想させる。また九州電力の鉄塔解体に際しての熊本市の工事立会でも、鉄塔の南東側の脚部で中期の甕棺墓が確認され、南西側の脚部では木棺墓の痕跡が確認されている。また３区で甕棺の可能性があるとしたＳＫ０２の蓋も中期頃である。一方で熊本市の託麻弓削遺跡群第１次調査では、169㎡程の調査区で弥生時代中期の竪穴建物 12 軒が重複して検出されている。このことからは、中期の集落の河川側に同時期の墓域が広がっていたことが想定される。

今回の調査で弥生時代の遺構と遺物が確認されているのは３区だけで、１区や２区では遺物が少量出土している程度である。その３区も竪穴建物４軒と不明遺構が７基検出されているにすぎないが、ほとんどは後期の遺物で、中期の遺物はごくわずかである。３－１区では河川側に不明遺構が集中する。この遺構の性格は、文字通り不明であるが、より河川側に存在することや、焼成破裂痕土器がまとまって出土することから工房など居住域・墓域以外の空間利用を考えたほうがいいのかもしれない。

３　古代の託麻弓削遺跡群

弓削宮原遺跡の表面採集遺物には、古代の遺物は見られない。弓削神社から道越しの東の畑から土師器類があったことが記述されているくらいである（上野 1973）。また３区の調査や熊本市の調査区でも、古代の遺物はほとんどみられない。２区では、竪穴建物や掘立柱建物が検出されているが、遺物量は少ない。一定量が検出されているのは、1 区だけであるが、遺構に伴うものではない。従来は遺跡の範囲外で今回の試掘調査で追加した地点である。その他現在調査中の５区で造り付カマドをもつ竪穴建物が数軒検出されている。以上のように、断片的でこの託麻弓削遺跡群の範囲の中に古代の遺構がどのように広がっているのか

想定できない。しかし、１区の布目瓦、石帯、墨書土器、陶磁器などの出土遺物からは、この付近に村落の中心があったことが想定される。しかし、村落がどのように広がっていたかは不明で、今後の調査の進展をまちたい。

以上述べたように託麻弓削遺跡群は、縄文時代後・晩期が中心で、全域に広がっている。次の弥生時代には、中期の集落や墓域が形成され、後期にも規模は不明ながら継続する。次の古墳時代の遺構は確認されておらず、遺物も極僅かである。その後、８世紀後半以降に村落が形成されるようであるが、その実態は不明である。１区から多くの遺物が出土していることから、託麻弓削遺跡群の中でも西側に村落の中心があった可能性がある。

第２節　竪穴建物について

今回検出された竪穴建物は、１区で古代に属すると思われるもの２軒、２区では、縄文時代の竪穴建物１軒、古代に属すると思われる竪穴建物９軒、３区では弥生時代の竪穴建物４軒が検出されている。

縄文時代の竪穴建物は、径 8.7 m程の円形を呈する。壁際の幅 40 ～ 60cm 程が一段高くなっている。周壁が一段高くなる竪穴建物は、やや時期が古くなるが、豊前市の挟間宮ノ下遺跡に類例をみることができる。

弥生時代以降の建物は、各時期で微妙にその特徴は異なるが、以下の２点で共通点が見られる。

１　壁の立ち上がりが緩やかであること。一般的な竪穴建物は床面から壁がほぼ直角に立ち上がるのに対して、傾斜角度がゆるく、２区のＳＩ０２・０６など、おおげさに表現すれば弧を描くような立ち上がりを示すものもある。

２　柱穴が明確に並ぶものはない。

その他、弥生時代の竪穴建物については、炉跡が確認されていない。また古代と思われる竪穴建物は、床面の硬化が認められないという特徴も指摘できる。

この特徴は、遺構が掘り込まれた土の性質によるものではないか。つまり竪穴建物を造るために、まず地面を掘り下げるが、今回の調査区の土は砂質土で、雨や乾燥によってすぐ崩れてしまう。そこで壁面が崩れるのを防ぐため、垂直に掘らず、傾斜をつけて掘り込んだのではないかと言う仮説である。その他砂質土は、焼土が形成しにくい、踏み固めても硬化しにくいと言う性質もあると思われる。また埋土も砂質であった場合、柱穴等の確認もしづらいと考える。

この仮説に基づき、河川に隣接し、土質が類似している遺跡として、対岸の梅ノ木遺跡や法王鶴遺跡及び熊本市の託麻弓削遺跡群第１次調査を選び対比を試みた（第１・81 図）。しかしこの３遺跡の竪穴建物は弥生時代のもので、今回検出された竪穴建物で弥生時代のものは４軒にすぎず、11 軒は古代である。その点では、単純に比較検討するのは問題があるかもしれないが、火床を除けば、壁の立ち上がりや柱穴、床の硬化には大きな変化はないと考えている。

まず熊本市の託麻弓削遺跡群第１次調査では、県調査３区の南西約 70 mに位置する。土層は、３区の土層とそれほど変わりはないようである。弥生時代中期の竪穴建物が 12 軒検出されている。壁の立ち上がりはほぼ直角に立ち上がっているが、ごく一部に緩やかに立ち上がるものがある（ただし建物の切りあいが激しく、四方の壁全ての立ち上がりが緩やかだったのかは不明）。主柱穴は明確でないものが多い。炉は確認できていない。床面の硬化は明確なものが多い。以上を調査担当者の後藤愛弓氏よりご教示頂いた。３区の弥生時代の竪穴建物と対比すると、柱穴や炉が確認しづらいことや、硬化面が明確なことは共通するが、壁の立ち上がり形状が大きく異なる。

次に、託麻弓削遺跡群の対岸、西側に位置する法王鶴遺跡は、九州電力弓削変電所の変電設備建設に伴い熊本市により調査が実施されている。弥生時代後期の竪穴建物 18 軒が検出されている。遺構検出面は、4

層（黒褐色～暗褐色、しまりあり、粘性なし）と５a 層（暗褐色土　しまりやや悪い、粘性なし）で、遺構の壁を形成している層は５b 層（暗褐色砂質土）と考えられる。竪穴建物 18 軒のうち、壁の立ち上がりがわかるものは 12 軒で、そのうち９軒は緩やかに立ち上がる。一方で柱穴が確認できたものは約 22％、炉が検出できたものは約 39％である。中には炉をもたないものもあるようである。床の硬化面は、明確なものが 66％で、硬化面が確認できないものは１軒にすぎない。

最後の梅ノ木遺跡は、対岸の北東部に位置する。県道益城菊陽線道路改良工事に伴い県が調査を実施している。主体となる時期は弥生時代中期から後期前半である。３層（明褐色シルト）が遺構検出面で、竪穴建物の壁を構成する土層は４層（暗褐色シルト）や５層（黄褐色シルト）であるようだ。171 軒の竪穴建物が検出されている。切りあいが激しく、四方の壁面がわかるものはない。また断面セクションの位置で、一つの竪穴建物の壁が緩やかに立ち上がる形状になったり、比較的直角に近く立ち上がる形状になったりしているので、壁の立ち上がりが緩やかかどうかの判断が難しく、比率を提示するのを断念した。しかし調査当時に現地を訪れた際、壁の立ち上がりが緩やかだったことに驚いたことは今でも覚えている。柱穴は切りあいのせいで、並ぶかどうかは不明だが、遺構に伴うものと認定されたものは多く、約 90％になる。一方で床の硬化面の確認できたものは 28％、炉跡が確認できたものは 22％程度である。この数字は切りあいが多く、１つの建物の床面積が小さいものが多いため実態をあらわしていない可能性がある。

以上からは、炉が検出できた例は少ない。また柱穴についても主柱穴が２本柱、４本柱と確認できるものも少ない傾向は共通する。一方で硬化面の形成は、３区や熊本市の託麻弓削遺跡群第１次調査、法王鶴遺跡では比較的高い割合で確認できるのに対し、梅ノ木遺跡では約 28％と低い。また壁の立ち上がりについては、熊本市の託麻弓削遺跡群第１次調査では、ほぼ真っ直ぐに立ち上がるのに対して、他は緩やかな立ち上がり方をするものが多い。熊本市の第１次調査と３区は 70 m程しか離れておらず、そこに土質の大きな違いがあったことは考えにくい。熊本市１次調査の主体は弥生時代中期で、３区は後期であるので、時期差かとも考えたが、梅ノ木遺跡では、中期の竪穴建物でも緩やかに立ち上がっており、時期差でもないようだ。あるいは梅ノ木遺跡の竪穴建物の掘方は、壁を垂直に掘り下げており、築造中に壁が崩れ落ちていった箇所があったのではないか。このことが、断面セクションの場所の違いで壁の立ち上がり形態が違ってくるのかもしれない。硬化面の形成は、梅ノ木遺跡は切りあいが激しいこと、使用期間が短かったことなどを原因としてあげることが出来る。その他、今回の調査区の基本土層で７層とした硬質砂層の存在の有無も関係するだろう。つまり硬質砂層面が床面になった場合は明確な硬化面となる。しかし壁の立ち上がり方については、その原因が見いだせない。

結論からいえば、前述の仮説は十分に検証できなかった。しかし、壁の立ち上がりが緩やかな竪穴建物が存在することは確かである。託麻弓削遺跡群を含め白川流域の調査は今後も数年続くので、壁の立ち上がり方の違いは、何に起因するのか、例えば竪穴建物でも用途が違うのか等問題意識をもって今後の調査に取り組んでいく必要がある。

謝辞

縄文時代の土器については、熊本市塚原歴史民俗資料館の清田純一氏、熊本城調査研究センターの金田一精氏にご教示頂いた。古代の遺物については、熊本市文化振興課の網田龍生氏、林田和人氏からご教示を得た。また熊本市の託麻弓削遺跡群１次調査の内容及び鉄塔撤去時の工事立会の内容については、調査担当者である後藤愛弓氏から情報を提供していただいた。記して感謝申し上げる。

（土器類）

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	1-1 区	0699G 西壁サブトレ	弥生式土器	壺	-	-	3.7+	ナデ、ハケメ	ハケメ、重弧文	黒褐 (2.5Y3/1)	黒褐 (2.5Y3/1)	石英、黒色粒を含む。	良好	免田式土器。
2	1-2 区	S001 Ⅰ層	土師器	甕	(19.8)	-	9.8+	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハケメ	褐 (10YR4/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	白色粒、赤褐色粒を少量含む。	良好	内面にスス付着。
3	1-2 区	S002 Ⅰ層、S001 埋土	土師器	坏	(12.8)	8.8	4.2	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	長石、石英、角閃石、赤褐色粒を含む。	良	底部に歪みあり。
4	1-2 区	S002 床面	土師器	甕	-	-	3.3+	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、石英、赤褐色粒を含む。	良好	
5	1-2 区	S002 Ⅲ層	土師器	甕	-	-	4.4+	ハケメ後ナデ	ヨコナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	長石、石英、角閃石を含む。	良好	
6	1-2 区	S002 Ⅰ層、S002 トレンチ	須恵器	椀	(14.4)	-	4.3+	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ、底部：削り出し高台	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	石英、黒色粒を含む。	良	
7	1-2 区	S002 トレンチ、9195G Ⅵ層	須恵器	椀	(17.2)	(11.6)	5.7	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ、底部：貼付高台、ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	黄灰 (2.5Y5/1)	長石、石英、角閃石、黒色粒を含む。	良	高台の貼付がやや雑である。高台接合部分から胴部外面の一部に自然釉付着。
8	1-2 区	S002 Ⅰ層	須恵器	甕	-	-	4.1+	回転ナデ	回転ナデ、凹線２条、波状文２条	褐灰 (5YR4/1)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	長石、石英を含む。	良	口縁に自然釉付着。
10	1-2 区	9295G P1 Ⅲ層 Ⅻ層	弥生式土器	甕	(13.4)	(9.8)	23.6	ハケメ（ナナメ）	ハケメ（タテ）、脚部：ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/4) 黒 (2.5Y2/1) 明褐 (7.5YR5/8)	角閃石、輝石、黒色粒を含む。	良	外面にスス付着。赤茶色の部分が内面のごく一部と外面に見られるが、彩色なのか、二次的に焼かれたものか、長年埋もれていて変色したのか不明。
12	1-2 区	9395G P2	須恵器	坏	12.0	8.4	4.5	回転ナデ、ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、底部：ヘラ切り後ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3) 灰黄 (2.5Y7/2)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	全体的に歪みあり。一見鉄分付着のように見える茶色い土が器底に付着している。
13	1-2 区	9296G Ⅲ層	須恵器	高坏	(10.4)	-	2.6+	回転ナデ	回転ナデ	灰 (7.5Y4/1)	灰 (5Y4/1)	1mm 以下の白色粒を含む。	良好	口縁部に歪みあり。坏部下部に釉付着。
14	1-2 区	9596G Ⅻ層	土師器	坏	-	8.2	2.1+	ナデ	ヘラケズリ後ナデ、底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	1 ～ 5mm の砂粒を含む。長石、石英、角閃石等。	良好	底部に墨書あり。底部のケズリが粗く、いびつである。
15	1-2 区	9295G Ⅲ層	土師器	坏	-	-	1.1+	ケズリ後ナデ	ヘラケズリ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	長石、石英、褐色粒を含む。	良	底部に墨書あり。
16	1-2 区	9496G 撹乱	土師器	坏	-	-	0.7+	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石を含む。	良	底部に墨書あり。
17	1-2 区	9496G 撹乱、9596G Ⅻ層	土師器	坏	-	(7.6)	1.0+	ナデ	ヘラ切り離し後ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい橙 (5YR6/4)	長石、石英、赤褐色粒、黒色粒を含む。	良好	底部に墨書、板目痕あり。
18	1-2 区	9496G 撹乱	土師器	坏	-	-	0.5+	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	長石、角閃石、石英を含む。	良好	底部に墨書あり。内外面に赤色顔料あり。

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
19	1-2 区	9496G 撹乱	土師器	坏	-	(9.8)	1.2+	ナデ	ヘラケズリ後ナデ、底部：ヘラ切り後ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	底部に墨書あり。
20	1-2 区	9496G 撹乱	土師器	坏	-	(9.4)	1.4+	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	白色粒、黒色粒を含む。	良好	底部に墨書あり。
21	1-2 区	9496G XI層	土師器	坏	-	(10.2)	1.7+	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	にぶい橙 (5YR6/4)	明赤褐 (5YR5/8)	白色粒を含む。	良好	外面に赤色顔料付着。
22	1-2 区	9497G 撹乱	土師器	坏	-	(13.8)	1.4+	ヘラミガキ	回転ヘラ切り後ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	黒色粒、白色粒を含む。	良好	内面に赤色顔料付着。
23	1-2 区	9496G 撹乱溝	土師器	坏	-	(7.6)	1.4+	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	白色粒、赤褐色粒を含む。	良好	全面に赤彩が施されているが、剥がれあり。
24	1-2 区	9495G VI層	土師器	坏	(13.6)	(9.6)	3.0	ナデ	ナデ、底部：ヘラ切り後ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	長石、石英、角閃石、雲母、褐色粒を含む。	良	口縁から胴部の一部にスス付着。
25	1-2 区	9195G VI層	土師器	坏	(9.8)	7.2	2.1	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	角閃石を含む。	良	
26	1-2 区	9496G 撹乱	土師器	坏	(11.8)	6.2	2.8	回転ナデ	ヘラケズリ後回転ナデ、底部：回転ヘラ切り離し	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	1 ～ 2㎜の砂粒を含む。長石、石英、角閃石、赤褐色粒等。	良好	内外面に赤色顔料（橙 2.5YR6/6）が残存。口縁～底部にかけて一部黒斑あり。底部付近に粘土痕あり。
27	1-2 区	9496G 東XI層	土師器	坏	(10.7)	(6.6)	4.2	ヘラケズリ後ヨコナデ	ヘラケズリ後ヨコナデ、底部：ヘラ切り後ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	長石、石英、雲母、角閃石、褐色粒を含む。	良	底部が丸みをおびており、ややいびつである。
28	1-2 区	9496G XI層	土師器	椀	14.2	(8.4)	6.3	回転ナデ	ヘラケズリ後回転ナデ、底部：ヘラ切り離し、貼付高台	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	1 ～ 3㎜の砂粒を含む。長石、角閃石、金雲母、赤褐色粒、黒色粒等。	良好	全体的にやや楕円である。
29	1-2 区	9396G III層～IV層	土師器	椀	-	(6.8)	1.7+	不明	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	砂粒を含む。	良好	内面に土器片と土付着。外面に土付着。
30	1-2 区	9596G XII層溝	黒色土器 A	椀	-	-	4.5+	ナデ、ミガキ	ヘラケズリ、ナデ	黒 (5Y2/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4) 黒 10YR(1.7/1)	赤褐色粒を含む。	良好	
31	1-2 区	9495G 撹乱	黒色土器 A	椀	-	(7.2)	2.5+	ミガキ	ヘラケズリ後ナデ、底部：ヘラ切り離し、貼付高台	黒 (7.5Y2/1)	明黄褐 (2.5Y6/6)	石英、長石、角閃石を含む。	良	底部外面の一部に黒斑あり。
32	1-2 区	9596G 南段下 X層	黒色土器 A	椀	-	-	1.9+	ナデ、ミガキ	ナデ、底部：貼付高台	暗灰 (N3/)	にぶい橙 (5YR6/4) にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色粒を含む。	良好	外面は赤色顔料付着。
33	1-2 区	9496G 撹乱	黒色土器 A	椀	-	-	2.3+	ミガキ	ナデ、底部：貼付高台	黒 (10YR2/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色粒、黒色粒を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
34	1-2 区	9495G Ⅶ層	黒色土器 A	椀	-	-	2.6+	ミガキ	ナデ、ミガキ、底部：回転ヘラ切り後ナデ、ミガキ	黒 (7.5YR1.7/1)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	角閃石を含む。	良	高台が剥がれた痕あり。
35	1-2 区	9195G Ⅵ層、Ⅻ層上清掃	黒色土器 A	椀	-	7.6	1.4+	ミガキ	ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	橙 (7.5YR7/6)	赤褐色粒を含む。	良好	
36	1-2 区	9596G Ⅹ層	土師器	甑	-	-	7.6+	ケズリ	ナデ、指頭圧痕	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、石英、雲母、白色粒を含む。	良好	把手部分。
37	1-2 区	9496G Ⅷ層	土師器	甑	-	-	5.3+	ナデ	ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色粒、小石を含む。	良	把手部分。摩滅がひどい。
38	1-2 区	9696G Ⅹ層	土師器	甑	-	-	10.5+	ケズリ、ナデ	ハケメ、ナデ、指頭圧痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、白色粒を含む。	良好	把手部分。
39	1-2 区	9596G Ⅹ層	土師器	甑	-	-	6.3+	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	石英、白色粒を含む。	良好	把手部分。
40	1-2 区	9596G Ⅻ層溝	土師器	甑	-	-	2.5+	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3) 黒 (10YR2/1)	白色粒、赤褐色粒、角閃石を含む。	良	外面にスス付着。
41	1-2 区	9496G 攪乱	土師器	移動式竈	-	-	9.3+	ケズリ後ナデ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	長石、石英、角閃石を含む。	良	内面に粘土接合痕が見られる。底部の作りがいびつで雑である。
42	1-2 区	表土ハギ	須恵器	蓋	-	-	2.4+	ナデ	回転ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	長石、輝石、石英、白色粒を含む。	良好	
43	1-2 区	9395G Ⅳ層	須恵器	蓋	-	-	1.3+	回転ナデ	回転ナデ、ツマミ貼付	灰黄 (2.5Y6/2)	灰 (5Y6/1)	長石、輝石、白色粒を含む。	良	
44	1-2 区	9497G 攪乱	須恵器	蓋	(16.8)	-	2.3	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、ツマミ貼付	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	1 ～ 2㎜の砂粒を含む。長石、石英、黒色粒等。	良好	土師質。
45	1-2 区	9496G 攪乱	須恵器	蓋	(13.6)	-	1.6	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、天井部：回転ヘラ切り後ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	長石、褐色粒、白色粒を含む。	良	天井部にやや歪みあり。
46	1-2 区	9195G Ⅵ層、Ⅻ層	須恵器	蓋	15.5	-	1.4	回転ナデ	ヘラケズリ後ナデ、回転ナデ	灰オリーブ (5Y4/2)	灰 (5Y4/1)	長石、黒色粒を含む。粒子が細かい。	良好	天井部はへこみが見られる。
47	1-2 区	9496G 攪乱溝	須恵器	坏	(12.0)	(5.8)	2.9	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	長石、石英、雲母、黒色粒を含む。	良	
48	1-2 区	9296G Ⅻ層清掃	須恵器	坏	(12.0)	(7.4)	3.7	回転ナデ	回転ナデ、底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	長石、白色粒を含む。	良好	
49	1-2 区	9496G Ⅺ層	須恵器	坏	(11.6)	(6.8)	5.0	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ（雑）	灰白 (5Y7/1)	灰 (5Y5/1)	角閃石、輝石を含む。	やや不良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
50	1-2 区	9495G XI層	須恵器	鉢	-	7.3	5.3+	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ	灰白 (5Y7/2) にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰白 (5Y7/2)	長石、石英を含む。	良	底部にやや歪みあり。
51	1-2 区	9596G 撹乱	須恵器	椀	(15.2)	(9.4)	6.2	回転ナデ、ヨコナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、底部：回転ヘラ切り、貼付高台	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	長石、輝石、角閃石、白色粒を含む。	良好	高台部分がいびつ。
52	1-2 区	9496G 東撹乱溝	須恵器	椀	-	8.4	2.7+	回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、底部：回転ヘラ切り、貼付高台	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	長石、白色粒を含む。	良	
53	1-2 区	9596G 南段下 X層	須恵器	椀	-	(8.2)	2.5+	回転ナデ、ヨコナデ	回転ナデ、底部：回転ヘラ切り、貼付高台	にぶい黄 (2.5Y6/4)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	石英、白色粒を含む。	良	
54	1-2 区	9496G 撹乱	須恵器	椀	-	7.6	1.9+	回転ナデ	回転ヘラ切り後ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	長石、白色粒を含む。	良好	
55	1-2 区	9495G 撹乱	須恵器	甕	-	-	7.2+	回転ナデ、ケズリ後ナデ	回転ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	長石、石英、白色粒を含む。粒子がやや粗い。	良	
56	1-2 区	9496G VI層	須恵器	甕	-	-	7.7+	回転ナデ	ヨコナデ、凹線２条、波状文	灰褐 (5YR4/2)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	長石、石英を含む。	良	口唇部に自然釉付着。
57	1-2 区	9596G 南段下 X層	須恵器	甕	-	-	6.5+	回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ、沈線１条、カキメ状の沈線	褐灰 (7.5YR4/1)	褐灰 (5YR4/1)	長石、石英を含む。	良	
58	1-2 区	9496G XI層	須恵器	壺	-	-	4.9+	ケズリ後ナデ	タタキ後ナデ	黒 (7.5YR2/1)	橙 (7.5YR6/6)	赤褐色粒を含む。	良好	肩部にツマミ状突起を有する。土師質。
59	1-2 区	9496G VI層	須恵器	壺	-	-	8.2+	ナデ	タタキ後ナデ	黒 (7.5YR2/1)	橙 (7.5YR6/6) 黒 (7.5YR2/1)	輝石、長石、白色粒、赤褐色粒を含む。	良好	底部にスス付着。土師質。
60	1-2 区	9496G 東XI層	須恵器	壺	-	-	8.5+	同心円状当具痕	平行タタキ、ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	黒色粒、白色粒を含む。	良好	肩部にツマミ状突起を有する。
61	1-2 区	9297G VI層	須恵器	壺	-	-	5.4+	ナデ	ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	黒 (7.5Y2/1)	黒色粒、白色粒を含む。密である。	良好	外面に自然釉付着。把手かツマミが欠損した痕あり。
62	1-2 区	9496G X層、9596G XII層溝	須恵器	壺	-	(10.0)	14.7+	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ、底部：ヘラ切り後ナデ	灰 (N6/)	灰 (7.5Y4/1)	粒子が細かい。長石、黒色粒、白色粒を含む。	良好	胴部外面及び底部外面に自然釉付着。
63	1-2 区	9596G X層	須恵器	円面硯	-	(19.2)	5.3+	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ、ヘラ描き文	橙 (5YR7/6)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	長石、白色粒、黒色粒を含む。	良好	透かしはヘラによる刳り抜きである。十字形の透かしがあると思われる。
64	1-2 区	9596G XII層東西溝、表土ハギ	瓦器	椀	(17.2)	(7.2)	6.0	ナデ	ヘラケズリ後ミガキ	黄灰 (2.5Y4/1) 灰黄 (2.5Y7/2)	灰 (N4/) 灰白 (5Y8/1) 灰 (5Y5/1)	白色粒を含む。	良	口縁部に黒帯状の文様？あり。底部は丸底で、器壁が薄い。
65	1-2 区	表土ハギ	研磨土師器	椀	-	(7.8)	4.8+	ナデ後ヘラミガキ	回転ヘラケズリ、底部：削り出し高台	灰黄 (2.5Y7/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	長石、角閃石、褐色粒を含む。	やや不良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
66	1-2 区	9596G Ⅹ層	緑釉陶器（長門）	皿	-	（6.4）	1.7+	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、底部：削り出し高台、施釉	淡黄 (2.5Y8/3)	灰白 (7.5Y8/2)	白色粒、黒色粒を含む。	良	全体に緑がかった釉が施されている。
67	1-2 区	9596G 撹乱	青磁（越州窯系）	椀	-	5.0	1.9+	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉、底部：削り出し高台、施釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ (7.5Y6/2)	灰ｵﾘｰﾌﾞ (7.5Y6/2) 胎土：灰黄 (2.5Y7/2)	密である。	良	全体に釉が施され、貫乳が見られる。高台の底面に重ね焼き痕あり。
68	1-2 区	表土ハギ	青磁（龍泉窯系）	椀	-	（6.3）	2.8+	回転ナデ後ヘラ描き文後施釉	回転ナデ後施釉、底部：削り出し高台、施釉	灰ｵﾘｰﾌﾞ (7.5Y6/2)	灰ｵﾘｰﾌﾞ (7.5Y5/2) 胎土：灰黄 (2.5Y7/2)	密である。	良	全体に釉が施され、見込部分には花弁のようなヘラ描き文様あり。
69	1-2 区	9496G 撹乱	青磁（龍泉窯系）	椀	-	-	5.4+	施釉（抹茶色）	施釉（抹茶色）	灰ｵﾘｰﾌﾞ (7.5Y5/2)	灰ｵﾘｰﾌﾞ (7.5Y5/2)	きめ細かい。	良好	内面に文様あり。
70	1-2 区	調査区一括	青磁（同安窯系）	皿	-	（5.2）	2.7+	ヘラ描き文、施釉	櫛描き文、施釉	淡黄 (5Y7/3)	淡黄 (5Y7/3) 淡黄 (2.5Y7/3)	きめ細かい。	良好	
71	1-2 区	9296G Ⅷ層	染付	皿	（11.5）	3.6	2.9	染付後施釉	染付後施釉、底部：釉ケズリ	白 (9/)、染付 (藍色)	白 (9/)、染付 (藍色)	密である。	良好	
72	1-2 区	9796G Ⅹ層	染付	皿	-	（7.8）	2.6+	回転ナデ、透明釉	回転ナデ、透明釉、底部：削り出し高台、透明釉	白 (9/)、染付 (藍色)	白 (9/)、染付 (藍色)	密である。	良好	内外面に染付の文様が施され、底部外面に「宣成年農」の文字あり。伊万里焼。

（瓦）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	法量 (cm・g) ※（　）は現存値			調整		色調		胎土	焼成	備考
				長さ	幅	厚さ	凹面	凸面	凹面	凸面			
76	1-2 区	9496G 撹乱	丸瓦	(10.8)	(8.6)	1.6	布目痕	縄目タタキ	橙 (5YR6/6) 褐灰 (5YR4/1)	灰黄 (2.5Y7/2) 橙 (5YR6/6)	角閃石、砂粒を含む。	良	赤色顔料塗布。
77	1-2 区	9596G 撹乱	丸瓦	(12.4)	(8.8)	1.7	布目痕	ヨコナデ	灰 (N6/)	灰 (N6/)	1 ～ 5㎜の砂粒を含む。長石角閃石、黒色粒等。	良	
78	1-2 区	9396G Ⅳ層	丸瓦	(11.2)	(10.4)	1.6	ヘラケズリ、布目痕	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰 (N4/)	長石、角閃石を含む。	良	
79	1-2 区	9496G 撹乱	丸瓦	(11.3)	(6.4)	2.2	布目痕	タタキ後ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	長石、石英、角閃石を含む。	良	
80	1-2 区	9296G Ⅷ層	丸瓦	(12.1)	(8.5)	1.8	布目痕	タタキ後ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	1㎜以下の白色粒、砂粒を含む。	良好	
81	1-2 区	9496G 撹乱	丸瓦	(8.4)	(8.3)	2.0	布目痕	ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (7.5Y6/1)	粒子が粗い。長石､黒色粒等。	やや不良	
82	1-2 区	9596G 撹乱	丸瓦	(10.7)	(5.6)	2.2	布目痕	タタキ後ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい赤褐 (5YR5/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	やや不良	
83	1-2 区	9596G Ⅻ層溝	丸瓦	(21.6)	(13.2)	1.5	布目痕	縄目タタキ後ナデ	灰 (N5/)	灰 (N4/)	1 ～ 6㎜の礫、長石を含む。	良好	凹面に粘土のつなぎ目が顕著に残る。歪みが激しい。
84	1-2 区	9596G Ⅻ層東西溝	平瓦	(16.3)	(16.4)	2.8	布目痕	縄目タタキ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	長石、石英、褐色粒を含む。	やや不良	
85	1-2 区	9596G Ⅷ層	平瓦	(23.2)	(16.8)	2.8	布目痕	縄目タタキ	黄灰 (2.5Y5/1)	にぶい黄 (2.5Y6/3) ～黄灰 (2.5Y4/1)	白色粒、砂粒を含む。	良	
86	1-2 区	調査区一括	平瓦	(9.4)	(8.1)	2.5	布目痕	縄目タタキ	にぶい黄褐 (10YR5/3) ～褐灰 (10YR4/1)	灰 (5Y4/1)	長石、白色粒を含む。	良	

（土製品）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	色調	胎土	焼成	法量 (cm・g) ※（　）は現存値				備考
							長さ	幅	厚さ	重さ	
75	1-2 区	9496G 撹乱	土錘	黒 (10YR1.7/1)	長石、石英を含む。	良	3.25	1.0	1.1	3.1	右側から左側に紐を通している。穿孔 3.5 ～ 4㎜。

（石製品）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	法量 (cm・g) ※（　）は現存値				石材・石質	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
9	1-2 区	S002	磨石	14.5	5.1	4.3	480.4	砂岩	表、裏、両側面に磨痕（使用痕）あり。縁辺に敲打痕あり。
11	1-2 区	9295G 撹乱一括	磨製石斧	4.2	2.7	0.7	16.4	蛇紋岩	表、裏、側面の全面に顕著な擦痕が残存する。
73	1-2 区	9295G 撹乱一括	石鍋	(6.8)	(8.6)	4.3	263.9	滑石	
74	1-2 区	9495G Ⅵ層	石製銙具（丸鞆）	2.7	4.1	0.7	15.5	流紋岩	裏面に潜り孔と呼ばれる２孔１対の穴が４ヶ所穿たれているが、２ヶ所は欠損している。表面は顕著に磨いてある

（土器類）

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	2区	S014 下層 №183	縄文式土器	深鉢	-	-	4.1+	ヨコナデ	ナデ、沈線4条	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、黒色粒を含む。	良	
2	2区	S014 下層 №186	縄文式土器	深鉢	-	-	3.8+	ナデ	ナデ後ミガキ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	白色粒を含む。	良好	ナデ後の処理があまく稜がいびつ。
3	2区	S014 上層 №79、6389G 4 層下	縄文式土器	深鉢	(21.4)	-	7.8+	ミガキ、ナデ	ミガキ、口縁部：沈線4条	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	石英、角閃石を含む。	良	オレンジ色の色調だが火色と思われる。
4	2区	S014 下層 №215	縄文式土器	深鉢	-	-	3.8+	ナデ	沈線4条	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)	雲母、黒色粒を含む。	良	
5	2区	S014 下層 №112 №114	縄文式土器	深鉢	-	-	7.8+	ミガキ	ミガキ 口縁部：沈線4条	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	角閃石を含む。	良好	
6	2区	S014 下層 №257 №259	縄文式土器	深鉢	(24.0)	-	17.4+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：浅い沈線3条	にぶい黄橙(10YR6/4)～黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4) ～黒褐 (10YR3/1)	長石、角閃石、砂粒を含む。	良好	口縁がいびつで波状のように見える。一部スス付着。
7	2区	S014 下層 №305	縄文式土器	深鉢	-	-	6.4+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線3条	黒 (5Y2/1)	褐灰 (10YR4/1)	長石、石英、雲母を含む。	良	
8	2区	S014 下層 №312、S014 №145	縄文式土器	浅鉢	(33.4)	-	14.1+	ミガキ後ナデ	ミガキ、口縁部：ヨコナデ、沈線1条	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、雲母、黒色粒を含む。	良	内面頸部から胴部にかけて輪積痕あり。
9	2区	S014 Pit2 下層、6389G 4 層下	縄文式土器	浅鉢	(31.7)	-	13.8+	ナデ、ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条	ｵﾘｰﾌﾞ褐 (2.5Y4/4)～黒 (2.5Y2/1)	褐 (10YR4/4) ～黒褐 (10YR3/1) にぶい黄橙 (10YR6/4)	角閃石、砂粒を含む。	良	
10	2区	S014 下層 №270	縄文式土器	浅鉢	-	-	4.4+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線2条	黒褐 (2.5Y3/1)	黒褐 (2.5Y3/1)	長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	
11	2区	S014 ベルト	縄文式土器	浅鉢	-	-	4.0+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：沈線2条	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、石英、角閃石を含む。	良	
12	2区	S014 下層 №124、6289G 3 層上	縄文式土器	浅鉢	(32.8)	-	6.4+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条、押点文	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	角閃石、長石を含む。	良好	口縁部はわずかな山形突起、押点2個を有す。
13	2区	S014 下層 №124 №346、6389G 6 層	縄文式土器	浅鉢	(52.8)	-	12.7+	ヨコ、斜め方向のミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条	にぶい黄橙(10YR7/4) 灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4) 灰黄褐 (10YR6/2)	長石、角閃石を含む。	良好	内外面に黒斑あり。
14	2区	S014 下層 №341	縄文式土器	浅鉢	-	-	4.1+	ミガキ	ミガキ	黒褐 (2.5Y3/1)	黒褐 (2.5Y3/1)	長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	類例がなく形状不明。
15	2区	S014 上層 №88 №103	縄文式土器	深鉢	-	6.8	1.4+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色粒、黒色粒を含む。	良	底部にやや歪みあり。
16	2区	S014 下層、C 下層 №317	縄文式土器	深鉢	-	8.2	4.8+	ミガキ	ミガキ、底部：ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	長石、石英、角閃石、黒色粒を含む。	良好	
17	2区	S014 上層 №224	縄文式土器	深鉢	-	10.0	3.0+	ナデ	ナデ、指オサエ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石を含む。	良	底部はややいびつである。底部外面にスス付着。
30	2区	6691G 撹乱	縄文式土器	台付き鉢か坏	-	(12.0)	8.2+	ナデ、ミガキ	ナデ、沈線文、磨消縄文、押点文	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	長石、白色粒を含む。	良	脚部に透かし2孔を有する。

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
31	2区	6489G、6589G 4層	縄文式土器	鉢	-	-	7.0+	ミガキ	ミガキ、口縁部:磨消縄文、沈線2条	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒 (10YR2/1)	長石、角閃石を含む。	良	
32	2区	6389G 5層下	縄文式土器	浅鉢	-	-	4.1+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：磨消縄文、沈線2条	褐灰 (10YR4/1)	褐灰 (10YR4/1)	角閃石、雲母を含む。	良好	波状口縁の頭頂部に押点1個あり。
33	2区	6690G 4層	縄文式土器	浅鉢？高坏型土器	-	-	3.5+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：磨消縄文、沈線2条	橙 (7.5YR6/6) 黒褐 (7.5YR3/1)	橙 (7.5YR6/6) 褐 (7.5YR4/3)	角閃石、長石を含む。	良好	波状口縁の頭頂部に押点1個あり。
34	2区	6489G 4層下	縄文式土器	浅鉢	-	-	3.7+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：沈線2条	にぶい黄橙 (10YR6/4)	明黄褐 (10YR6/6)	角閃石を含む。	良好	波状口縁の頭頂部に長方形の押点1個あり。
35	2区	用水トレンチ、撹乱	縄文式土器	深鉢	-	-	2.8+	ナデ	ナデ、沈線文	にぶい黄橙 (10YR6/4)	黒褐 (2.5Y3/1)	長石、石英、角閃石を含む。	良	「x」字状文様。
36	2区	6792G 3層下	縄文式土器	深鉢	(25.4)	-	5.0+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：凹線2条、押点	暗灰黄 (2.5Y4/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	長石、石英、角閃石を含む。	良	
37	2区	6289G 5層下	縄文式土器	浅鉢	-	-	2.6+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：凹線2条	黄灰 (2.5Y4/1)	黒褐 (10YR3/1)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	
38	2区	6389G 4層上	縄文式土器	浅鉢	-	-	2.9+	ミガキ	ミガキ、口縁部:沈線2条、押点	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (10YR3/1)	長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	
39	2区	6389G 5層下	縄文式土器	浅鉢	-	-	3.1+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：浅い沈線2条、押点	黒 (10YR2/1)	黒褐 (10YR3/2) ～黒 (10YR2/1)	白色粒、赤褐色粒を含む。	良好	
40	2区	S011	縄文式土器	浅鉢	-	-	3.1+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ、口縁部：沈線2条、押点	暗灰黄 (2.5Y5/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、角閃石を含む。	良好	
41	2区	S010、S010埋下層、6590G 3層下	縄文式土器	深鉢	(35.8)	-	11.0+	ミガキ	不定方向のミガキ、口縁部：ミガキ、沈線2条	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、石英、角閃石、輝石を含む。	良好	外面のミガキ調整は摩滅気味。
42	2区	S010、S010埋下層	縄文式土器	深鉢	(36.0)	-	5.2+	ナデ	ナデ後ミガキ、口縁部：ミガキ、沈線2条	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	長石、角閃石を含む。	良好	
43	2区	6489G 5層上	縄文式土器	浅鉢	(22.5)	-	7.1+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	長石、0.5㎜の砂粒を含む。	良好	
44	2区	6389G ～ 6390G 4層下	縄文式土器	浅鉢	-	-	6.6+	ミガキ	ミガキ、口縁部：浅い沈線1条	ｵﾘｰﾌﾞ黒 (5Y3/1)	黄灰 (2.5Y4/1)	長石、石英、角閃石を含む。	良	
45	2区	S009 №4	縄文式土器	深鉢	-	-	12.2+	ナデ、条痕	ナデ、条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	胴部内外面ともに条痕がはっきり残っている。口縁部内外上面にスス付着。
46	2区	S105埋1層、6389G 4層、6389G	縄文式土器	深鉢	(30.3)	-	21.3+	ナデ	ミガキ	暗灰黄 (2.5Y4/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3) 黒褐 (2.5Y3/1)	長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	口唇部はかなり凸凹している。口縁部外面に黒斑、胴部外面にスス付着。
47	2区	6691G 4層トレンチ	縄文式土器	深鉢	-	-	9.0+	条痕	条痕、沈線文	黄褐 (2.5Y5/3)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	角閃石、輝石、白色粒を含む。	良好	
48	2区	6390G、6691G 4層、6691G 3層下 7層	縄文式土器	深鉢	-	-	9.0+	ナデ	条痕、沈線文	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	
49	2区	6691G 7層	縄文式土器	深鉢	-	-	8.8+	条痕後ナデ	ナデ、条痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	角閃石、雲母を含む。	良好	外面にスス付着。

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量(cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
50	2区	6690G、6590G	縄文式土器	深鉢	-	-	8.0+	ナデ	条痕、沈線文	にぶい黄褐(10YR5/3)	暗灰黄(2.5Y4/2)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口唇部に刻目文が施され、口唇の一部にV字形の圧痕あり。
51	2区	6189G北端4層	縄文式土器	浅鉢	(24.6)	-	3.8+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条	黒(10YR2/1)	黒(10YR2/1)	角閃石、長石、白色粒を含む。	良好	
52	2区	6389G4層下	縄文式土器	深鉢	-	-	5.0+	ミガキ	ミガキ、口縁部：ヨコナデ、沈線1条	黒褐(2.5Y3/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	長石、石英、褐色粒を含む。	良	
53	2区	6791G5層	縄文式土器	浅鉢	-	-	5.5+	ミガキ	ミガキ	黒褐(10YR2/2)	黒褐(10YR3/1)	長石、白色粒を含む。	良	
54	2区	S010	縄文式土器	深鉢	-	6.8	3.9+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)～褐灰(10YR5/1)	にぶい黄橙(10YR6/4)	長石、角閃石、砂粒を含む。	良	内面にスス付着。
55	2区	S009№2、S013埋上層 埋1層下、6590G、6589G5層	縄文式土器	深鉢	-	8.6	16.1+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)～黒褐(10YR3/1)	橙(7.5YR6/6)～浅黄(2.5Y7/4)	長石、角閃石、黒褐色粒を含む。	良好	内面に黒斑あり。
56	2区	6691G3層下	縄文式土器	鉢	(22.2)	-	12.6+	ナデ	条痕	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい褐(7.5YR6/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	内外面の一部にスス付着。口縁部にリボン状突起を有するが、個数は不明。
57	2区	6089G北6層	縄文式土器	鉢	-	-	8.4+	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	黒(10YR2/1)	灰黄褐(10YR4/2)	白色粒を含む。	良好	内面は黒色磨研。口唇部に突起あり。
58	2区	S014下層、6389G4層下5層下	縄文式土器	深鉢	(36.0)	-	4.2+	条痕	ヨコナデ、貼付突帯	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい橙(5YR6/4)	長石、石英、輝石を含む。	良	口唇部分に沈線1条あり。全体に作りが粗雑。
59	2区	6387G	縄文式土器	深鉢	-	-	3.0+	条痕	ナデ、貼付突帯	黒褐(2.5Y3/2)	黒褐(2.5Y3/1)	長石、角閃石、雲母を含む。	良	
60	2区	6489G5層上	縄文式土器	深鉢	-	-	5.8+	ナデ	ナデ、貼付突帯に凹線1条	にぶい黄(2.5Y6/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	石英、角閃石を含む。	良	胴部外面にスス付着。
61	2区	6691G3層下	縄文式土器	深鉢	-	-	4.8+	ナデ	条痕後沈線	にぶい黄橙(10YR6/3)	褐灰(10YR4/1)	雲母、長石、1㎜の砂粒を含む。	良	口唇部の一部に押点あり。
62	2区	6691G3層下	縄文式土器	深鉢	-	-	11.0+	横方向の粗いナデ	条痕後円弧状沈線	にぶい黄橙(10YR6/4)～褐灰(10YR5/1)	明黄褐(10YR6/6)	角閃石、長石を含む。	良	内面に焼成時付着物痕あり。外面にリボン状突起を有する。
63	2区	6489G4層	縄文式土器	深鉢	(17.1)	-	5.1+	ミガキ	ミガキ	ｵﾘｰﾌﾞ黒(7.5Y3/1)	暗灰黄(2.5Y4/2)	長石、石英、角閃石を含む。	良	口唇部は多少歪みあり。
64	2区	6691G3層下	縄文式土器	浅鉢	-	-	3.6+	ミガキ	ミガキ	明黄褐(2.5Y6/6)	明黄褐(2.5Y6/6)	長石、石英を含む。	良	口縁部にリボン状突起。スス付着あり。
65	2区	6489G5層上、6389G5層下	縄文式土器	浅鉢	23.2	-	4.1+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条	黄灰(2.5Y4/1)	黄灰(2.5Y4/1)	長石、石英、雲母を含む。	良	口縁部にリボン状突起が施され、その下部に外から内方向に直径2㎜弱の穿孔あり。
66	2区	6487G3層、6489G3層4層上4層下	縄文式土器	浅鉢	(20.6)	-	8.1+	ミガキ	ミガキ	ｵﾘｰﾌﾞ黒(5Y3/1)	黒(5Y2/1)	長石、石英、角閃石、輝石を含む。	良	内外面ともに黒色に研磨されている。
67	2区	P050№1	縄文式土器	浅鉢	-	-	8.1+	ミガキ	ミガキ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい赤褐(5YR5/3)	石英、雲母、白色粒を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
68	2区	S101 埋2層、6289G 3層下	縄文式土器	浅鉢	(42.0)	-	10.7+	ミガキ	ミガキ、口縁部：沈線1条	黄灰 (2.5Y4/1)	黄灰 (2.5Y4/1)	雲母、1㎜の砂粒を含む。	良好	外面下部に黒斑あり。
69	2区	P070	縄文式土器	浅鉢	-	-	2.5+	ナデ	ミガキ	褐灰 (10YR4/1)	黒褐 (10YR3/1)	雲母、長石を含む。	良	
70	2区	6691G 撹乱	縄文式土器	浅鉢	-	-	2.1+	ミガキ	ミガキ	黒 (10YR2/1)	黒 (10YR2/1)	白色粒を含む。	良好	黒色磨研土器。
71	2区	6389G 5層上	縄文式土器	深鉢	-	-	3.2+	ミガキ	ミガキ、頸部に沈線1条	黒褐 (5YR2/1)	黒褐 (5YR3/1)	長石、石英を含む。	良	小型の鉢と思われる。
72	2区	6691G 4層トレンチ	縄文式土器	浅鉢	-	-	2.0+	ナデ	ナデ、ミガキ	ｵﾘｰﾌﾞ黒 (7.5Y3/1)	ｵﾘｰﾌﾞ黒 (7.5Y3/1)	長石、0.5㎜の砂粒を含む。	良好	
73	2区	6489G 5層上	縄文式土器	浅鉢	-	-	6.9+	ミガキ	ミガキ	暗褐 (10YR3/3)	黒褐 (10YR3/2)	石英、長石を含む。	良	胴部に歪みあり。74と同一個体
74	2区	6389G 5層上 4層上	縄文式土器	浅鉢	-	-	3.7+	ミガキ	ミガキ	黒褐 (10YR3/2)	暗褐 (10YR3/3)	石英、長石を含む。	良	口縁が波形になっている（片口？）。73と同一個体。
75	2区	S101 埋2層	縄文式土器	深鉢	(29.6)	-	6.1+	ミガキ	ミガキ、沈線文（×状）、口縁部：刻目文	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6) 黒 (10YR2/1)	角閃石、輝石、雲母を含む。	良好	内面に黒斑あり。口縁部の刻目文は摩滅気味。
76	2区	6490G 5層	縄文式土器	深鉢	-	-	7.4+	条痕、ナデ	条痕、刻目突帯	暗灰黄 (2.5Y4/2)	黄灰 (2.5Y4/1)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	肩の屈折部分に押点6個を施された突起を有する。
77	2区	6389G 客土下	縄文式土器	深鉢	-	-	4.7+	ナデ	条痕、口縁部：刻目突帯	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、3㎜の砂粒を含む。	良好	
78	2区	6287G 2-3層	縄文式土器	深鉢	-	-	3.5+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	黄灰 (2.5Y5/1)	浅黄 (2.5Y7/3)	角閃石、石英を含む。	良好	
79	2区	6189G 北端4層	縄文式土器	深鉢	-	-	4.0+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	浅黄 (2.5Y7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	角閃石、長石、1.5㎜の砂粒を含む。	良好	
80	2区	6290G 3層下	縄文式土器	深鉢	-	-	3.7+	条痕	条痕、口縁部：刻目突帯	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母、長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	
81	2区	6189G 北端2層	縄文式土器	深鉢	-	-	3.1+	ナデ	条痕、口縁部：刻目突帯	黄褐 (2.5Y5/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	長石、石英、輝石、角閃石を含む。	良好	
82	2区	6289G 2-3G	縄文式土器	深鉢	-	-	8.2+	ナデ	条痕、口縁部：刻目突帯	暗灰黄 (2.5Y5/2)	浅黄 (2.5Y7/4)	長石、砂粒を含む。	良好	外面スス付着。
83	2区	6691G 3層下	縄文式土器	深鉢	-	-	5.8+	ナデ	条痕、口縁部：刻目突帯	黒褐 (2.5Y3/1)	浅黄 (2.5Y7/4)	角閃石、石英、白色粒を含む。	良好	
84	2区	6289G 2-3層	縄文式土器	深鉢	-	-	4.8+	条痕	ナデ、口縁部：刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR6/3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口縁部に突帯を貼付けた後押点文を施す。
85	2区	P514	縄文式土器	深鉢	-	-	5.5+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英、雲母、黒色粒を含む。	良	
86	2区	6289G 2-3層	縄文式土器	深鉢	-	-	6.2+	条痕	条痕、口縁部：刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	角閃石、輝石、長石を含む。	良好	
87	2区	6692G 7層	縄文式土器	深鉢	-	-	10.0+	条痕	条痕、口縁部：刻目突帯	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	雲母、長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	
88	2区	S119	縄文式土器	深鉢	-	-	2.3+	条痕	条痕、口縁部：刻目突帯	にぶい黄 (2.5Y6/3)	明黄褐 (10YR7/6)	長石、1㎜の砂粒を含む。	良好	
89	2区	6289G 2-3層5層下	縄文式土器	深鉢	-	-	10.7+	条痕	条痕、口縁部：刻目突帯	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1～5㎜の砂粒を含む。長石、石英、角閃石等。	良好	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
90	2区	S011	縄文式土器	深鉢	-	-	7.3+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	灰黄褐 (10YR4/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	白色粒を含む。	良好	
91	2区	S101 埋2層	縄文式土器	深鉢	-	-	5.4+	ナデ	条痕後ナデ、口唇部：刻目突帯	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口唇部に粘土を貼付けた後、刻目文を施すがやや摩滅している。口縁は緩やかな山形を呈し、口唇部の一部に押点を施したと思われる。
92	2区	S101 埋2層　3層　4層	縄文式土器	深鉢	-	-	5.5+	ナデ	条痕、口縁部：刻目突帯	黒褐 (10YR3/1)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、白色粒を含む。	良	口縁部分に破損あり。突帯文土器。
93	2区	6389G 3層下	縄文式土器	深鉢	-	-	3.2+	ナデ	条痕、口縁部：刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、雲母、白色粒、黒色粒を含む。	良	内外面にスス付着。
94	2区	6289G 4層	縄文式土器	深鉢	-	-	6.0+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、白色粒を含む。	良好	外面にヘラ状工具による斜め方向の線あり。
95	2区	6289G 5層上	縄文式土器	深鉢	-	-	3.4+	条痕	条痕、口縁部：刻目突帯	明黄褐 (10YR6/6) ～黒 (10YR2/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	長石、角閃石を含む。	良好	
96	2区	6289G 4層	縄文式土器	深鉢	-	-	7.8+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、雲母、白色粒を含む。	良	外面にスス付着。
97	2区	S101 埋3層ベルト	縄文式土器	深鉢	-	-	7.7+	貝殻条痕	ナデ、条痕、口縁部：刻目突帯2条	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	白色粒、黒色粒を含む。	良	
98	2区	6189G 北端	縄文式土器	深鉢	-	-	3.1+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	暗灰黄 (2.5Y4/2)	黒褐 (2.5Y3/2)	長石、石英、雲母、褐色粒を含む。	良	口縁に突帯を貼り付けた後に刻目文を施す。
99	2区	6188G ～ 6189G 3-1層	縄文式土器	深鉢	-	-	4.3+	ヨコナデ	ナデ、口縁部：刻目	にぶい黄橙 (10YR6/4)	黒 (2.5Y2/1)	長石、石英、角閃石を含む。	良	外面全体にスス付着。
100	2区	6190G 3層	縄文式土器	深鉢	-	-	3.3+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	長石、雲母を含む。	良好	
101	2区	6290G 3層下	縄文式土器	深鉢	-	-	4.0+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	長石、石英、黒色粒を含む。	良	口縁に突帯を貼り付けた後に刻目文を施す。
102	2区	6188G ～ 6189G 2-3層	縄文式土器	深鉢	-	-	4.5+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯2条	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口縁部及び口縁付近胴部に突帯を貼付けた後刻目文を施す。
103	2区	6189G 3層	縄文式土器	深鉢	-	-	5.4+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	長石、角閃石を含む。	良好	口縁部にスス付着。
104	2区	6289G 3層	縄文式土器	深鉢	-	-	6.7+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	長石、角閃石、輝石を含む。	良好	口縁に突帯を貼付けた後に刻目文を施す。
105	2区	6289G、6290G 3層	縄文式土器	深鉢	-	-	4.8+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)	雲母、長石、1.5㎜の砂粒を含む。	良好	口縁部及び口縁付近胴部に突帯を貼付けた後刻目文を施す。
106	2区	S102 埋1層	縄文式土器	深鉢	-	-	4.4+	指頭圧痕	ナデ、口縁部：刻目突帯	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	雲母、黒色粒、4㎜の砂粒を含む。	良	
107	2区	6289G 2-3層	縄文式土器	深鉢	-	-	2.5+	ナデ	ナデ、口縁部：刻目突帯2条、刻目	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英、角閃石を含む。	良	
117	2区	S104 №2 №3 №4	土師器	甕	(22.4)	-	18.8+	ヘラケズリ	ナデ、ハケメ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英、角閃石を含む。	良	
118	2区	S014 埋1層カマド周辺	土師器	甕	-	-	4.0+	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	石英、雲母、3～4㎜の砂粒を含む。	良	全体に摩耗している。

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
119	2区	S008 埋下層	土師器	甕	-	-	3.1+	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	角閃石、長石を含む。	良好	
120	2区	S008 埋下層 №3	土師器	坏	13.9	10.5	3.9	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	長石、石英を含む。	良好	全体的にいびつである。
121	2区	S008 埋下層	土師器	坏	(16.4)	-	4.6+	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	長石、角閃石、赤褐色粒を含む。	良好	
122	2区	S004 №9、S004 カマド	須恵器	坏	(13.6)	11.2	2.1 ～ 2.8	ナデ	底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	長石、石英、角閃石を含む。	良	底部に歪みあり。内外面に火襷が見られる。
123	2区	S004 №10、S004 カマド２下層、カマド３層№２	須恵器	坏	(14.6)	(10.0)	2.0	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	長石、輝石、角閃石を含む。	良好	
124	2区	S004 カマド埋１層 №1	土師器	鉢	(24.4)	-	11.0+	ナデ、ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	長石、角閃石、雲母、白色粒を含む。	良好	
125	2区	S004 埋下層	土師器	甕	(23.4)	-	8.4+	ヘラケズリ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口縁部外面の一部、胴部内面の一部にスス付着。
126	2区	S004	土師器	甕	(24.9)	-	8.1+	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、タタキ後ハケメ後ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	長石、角閃石、1㎜の砂粒を含む。	良好	
127	2区	S004 カマド埋１層 №1	土師器	甕	(25.6)	-	15.2+	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、タタキ、ハケメ	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (5YR7/4)	白色粒、黒色粒を含む。	良	128 と同一個体か。
128	2区	S004 カマド埋３層 №3	土師器	甕	-	-	22.0+	ヘラケズリ	タタキ、ハケメ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	長石、赤褐色粒を含む。	良好	127 と同一個体か。胴部下部にスス付着。
129	2区	S006 埋下層	須恵器	蓋	(16.4)	-	2.7	ヨコナデ	ヘラ切り離し後ナデ	淡黄 (2.5Y8/3)	灰白 (2.5Y8/1)	2 ～ 3㎜の砂粒を含む。	良	
130	2区	S006 埋下層	土師器	甕	(10.5)	-	7.6+	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	橙 (7.5YR7/6) 褐灰 (7.5YR4/1)	橙 (7.5YR7/6)	長石、角閃石、砂粒を含む。	良好	内面にスス付着。
131	2区	S006	土師器	甕	(15.4)	-	5.6+	ヨコナデ、ハケメ後ナデ、ケズリ	ヨコナデ、粗いハケメ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR4/2)	長石、石英、雲母を含む。	良	口縁端部にスス付着。
132	2区	S006 カマド№5	土師器	甕	(22.8)	-	5.9+	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	灰黄褐 (10YR5/2)	石英、赤褐色粒、白色粒を含む。	良好	
133	2区	S003 P №11	土師器	坏	13.6	7.4	4.5	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	石英、角閃石、長石、1 ～ 5㎜の砂粒を含む。	良	外面は摩耗している。
134	2区	S003 P №9、S003 5 層	土師器	坏	(14.9)	(10.6)	3.6	ナデ	底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	長石、赤褐色粒を含む。	良好	
135	2区	S003 埋１層	土師器	坏	(13.8)	(10.6)	3.5	ナデ	底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4) ～浅黄 (2.5Y7/4)	橙 (7.5YR7/6) ～浅黄 (2.5Y7/4)	長石、白色粒、赤褐色粒を含む。	良好	口縁部内面にスス付着。
136	2区	S005 埋下層	土師器	甕	-	-	4.7+	ナデ、ケズリ	ハケメ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	長石、角閃石を含む。	良好	口縁部スス付着。赤色顔料？
137	2区	S012 埋上層 №1	土師器	坏	(14.2)	9.0	4.2	ナデ	底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	長石、黒色粒を含む。	良	
138	2区	S012	土師器	甕	-	-	5.1+	ナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハケメ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、角閃石を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
139	2区	S108 P514	土師器	坏？	-	-	2.3+	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	角閃石を含む。微細粒。	良	
140	2区	S110 P532	土師器	甕	-	-	2.1+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英を含む。	良好	
141	2区	S115 埋1層、6089G 北2層 北4層6層	須恵器	坏	-	8.0	3.2+	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	長石、白色粒を含む。	良好	外面にスス付着。
142	2区	S116 トレンチ	土師器	坏？	-	-	3.5+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4) にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、石英、輝石、角閃石を含む。	やや不良	器面は摩滅気味。内器面に赤色顔料残存か？

（石製品）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	法量 (cm・g) ※（　）は現存値				石材・石質	備　考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
18	2区	S014 埋土5層 №283	十字形石器	8.7+	6.7+	1.5	100.3	雲母	残存 1/2 以上。
19	2区	S014 埋下層	打製石鏃	2.4	1.3+	0.4	0.6	チャート	全体に細かい剥離調整。抉部は深く 5㎜。基部の片方は欠損。
20	2区	S014 下層 №192	砥石	5.6	4.45	1.9	57.8	砂岩	表裏両面に磨痕あり。
21	2区	S014 北側床面直上 №355	勾玉	2.5+	1.4+	0.4	2.0	蛇紋岩	頭部に両面から穿孔された1孔を有する。扁平形状で下部は欠損。全体に顕著な擦痕調整残存。
22	2区	S014 埋上層 №130	磨石	19.0	12.5	6.1	1940.0	安山岩	表面は中心部に向かって窪み、磨った痕跡が見られる。数ヶ所敲打痕あり。
23	2区	S014 埋上層 №319	磨石	13.4	9.35	4.9	870.0	安山岩	表面、側面3ヶ所に磨痕あり。両側面に使いやすいように凹みがあり、側面に打痕が見られる。
24	2区	S014 埋下層 №254	磨石	10.4	9.4	9.2	1080.8	安山岩	球形をしており、表面の一部にスス付着。裏面中心部は敲打痕か？表・裏・側面に磨ったと思われる痕跡あり。
25	2区	S014 埋下層 №268	磨石	8.2	7.4	4.8	450.0	安山岩	表裏両面に磨痕あり。表面にほぼ円形にススが付着しており、燻った灰の上に置かれていたのでは？
26	2区	S014 埋下層	磨石	11.3	9.0	5.0	800.0	安山岩	表面と側面に磨痕、打痕あり。磨痕はツルツルして、左の中央部に凹みあり。
27	2区	S014 埋下層 №168	石皿	23.5	21.7	9.0	6500.0	安山岩	表・裏・側面全体に磨痕。特に側面は顕著。表・裏面に被熱痕が広範囲に残存。裏面は剥離痕あり。
28	2区	S014 埋下層 №233 №231 №311	石皿	32.0+	15.7+	9.5+	5700.0	安山岩	3個で1個体。縁辺部欠損。表面は敲打痕と、広範囲に磨痕あり。側面と裏面は僅かに残存する部分に顕著な磨痕あり。
29	2区	S014 埋下層 №163	石皿	23.8	29.5	14.8	1480.0	安山岩	表・裏面は全面使用している。側面は3面とも顕著な磨痕が残り、凹みも見られる。表面の溝に磨製石斧を砥いだ痕跡あり。
108	2区	6289G 2-3層	石錐	5.6+	1.1+	0.7+	3.8	頁岩	上端のツマミ部は欠損したと思われる。先端は尖って錐部を形成する。
109	2区	6489G 4層上部	打製石斧	11.5	4.7	1.8	79.2	安山岩	ほぼ完形。表面は自然面を一部利用して形成。全体を敲打による剥離調整。基部は抉り調整。
110	2区	6290G 3層	打製石斧	10.7	5.8	2.0	118.3	安山岩	ほぼ完形。刃部に敲打による細かい剥離調整痕あり。
111	2区	6389G 4層下部	打製石斧	9.2	3.7	1.3	50.8	安山岩	完形。表面の一部は研磨して調整。裏面上部両端に柄着の為の剥離調整痕あり。
112	2区	6291G S101 根跡	打製石斧	10.6+	5.5	14	85.9	安山岩	表面の基部から 2/3 は剥離欠損か。裏面の中心部は磨研調整。
113	2区	6892G S011 石垣前	円盤状石器	8.7	8.6	1.5	137.3	安山岩	ほぼ円形。縁辺を敲打により形成。表面中心部は磨痕と擦痕あり。裏面は敲打により形成しているが、中心の一部に磨痕部が残存。
114	2区	6791G	打製石包丁？	5.0	8.5+	0.8	55.8	粘板岩	全体が扁平形成で、石包丁か石鎌かはっきりしない。
115	2区	6489G 4層上部	石鑿	5.9+	1.9	0.9	16.4	蛇紋岩	刃部は一部欠損。打痕もあるが全体を磨って形成。断面はやや扁平で、上下の両端に片刃か？
116	2区	6590G 3層下部	紡錘車	4.1+	3.6+	1.3	20.4	泥岩	1/3 残存。

（土器類）

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	3-1 区	清掃	縄文式土器	鉢	-	-	9.8+	ミガキ	ミガキ、磨消縄文、沈線	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	石英を含む。	良	
2	3-1 区	S239	縄文式土器	鉢	-	-	13.5+	条痕	条痕	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	長石、雲母を含む。	良好	
3	3-1 区	5283G	縄文式土器	鉢？	-	-	6.1+	条痕	網目押型文	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	長石、石英、角閃石を含む。	良	組織痕文土器。
4	3-1 区	西側トレンチ	縄文式土器	鉢	-	-	8.3+	ミガキ	ミガキ、リボン状突起、沈線	黒褐 (10YR2/2)	明黄褐 (10YR6/6)	石英、長石を含む。	良	
5	3-1 区	5281G	縄文式土器	浅鉢	-	-	10.5+	ミガキ	条痕、刻目文	橙 (7.5YR6/6)	灰褐 (7.5YR5/2)	長石、角閃石を含む。	良	表面にスス付着？
6	3-1 区	S633 No3,6,7,9,11,12,13,14,15,17,19,20,25	弥生式土器	壺	13.0	(3.8)	26.6	ハケメ	ハケメ (上部)	浅黄 (2.5Y7/4)	浅黄 (2.5Y7/4) ～ 黄灰 (2.5Y4/1)	角閃石、雲母を含む。	良好	胴部に穿孔した可能性あり。
7	3-1 区	S633 No1,2,4,5,6,8,9,10,14,16,19,23	弥生式土器	壺	15.6	4.3	41.1	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ、ナデ (口縁部)	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6) ～ 黒褐 (10YR3/1)	角閃石を含む。	良好	黒斑あり。口縁中心より最深底がずれてゆがんでいる。
8	3-1 区	S633 №25	弥生式土器	甕	20.1	-	32.4+	ハケメ後ナデ	ハケメ、口唇部ハケメ後ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4) 黒褐 (10YR3/1)	にぶい橙 (7.5YR6/4) 黒褐 (10YR3/1)	石英、角閃石、雲母、茶褐色粒を含む。	良	口縁部内面から胴部外面にかけて広範囲に黒斑あり。（内にはコゲの痕跡あり。）
9	3-1 区	S633、5078G	弥生式土器	鉢	16.4	不明	10.2	ハケメ、ナデ	ハケメを不定方向のナデにより消す。	黒 (N1.5/) 浅黄 (2.5Y8/3)	黒 (N1.5/) 浅黄橙 (10YR8/4)	角閃石、雲母を含む。	良好	内面、外面ともに全体的に黒斑が見られる。
11	3-1 区	S367、S361 №27,28,29,30,31,32	弥生式土器	甕	27.5	9.2	36.5	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1 ～ 6㎜の砂粒を含む。長石、石英、角閃石等	良好	外面の全体にスス付着、内外面に黒斑が見られる。
12	3-1 区	S361 直上№25、S361 直上	弥生式土器	甕	(28.6)	-	23.0+	ハケメ、ナデ	ナデ、タタキ後ハケメ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3) 褐灰 (10YR4/1)	長石、石英、雲母を含む。	良	胴部外面は広範囲に黒ずんでいる。胴部上位に吹きこぼれの痕跡あり。
13	3-1 区	S367、S361 №33、S36 34	弥生式土器	甕	(30.4)	-	27.9+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	角閃石、長石、雲母を含む。	良好	
14	3-1 区	S367、S361 直上№20	弥生式土器	甕	(30.0)	-	10.8+	ハケメ	ナデ、ハケメ	橙 (7.5YR6/8)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
15	3-1区	S361 直上№11	弥生式土器	甕	-	-	3.3+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	長石、石英、輝石安山岩、黒曜石 (大粒) を含む。	良	
16	3-1区	S361 直上№12	弥生式土器	壺	-	-	5.0+	ナデ	ナデ、貼付突帯	浅黄 (2.5Y7/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	雲母、石英、長石を含む。	良好	
17	3-1区	S363 直上№2	弥生式土器	壺	-	-	6.6+	ハケメ	ナデ、刻目突帯、貼付突帯、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (2.5YR6/4)	雲母、石英、長石を含む。	良好	突帯に赤彩あり。
18	3-1区	S351	弥生式土器	壺	-	-	16.3+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	灰黄 (2.5Y6/2)	橙 (2.5YR6/6)	長石、雲母、角閃石を含む。	良好	
19	3-1区	S351	弥生式土器	壺	-	7.4	7.4+	ハケメ	ハケメ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の長石、石英を多く含む。	良	内面、外面に黒斑あり。全体に土器表面の剥離が多い。
20	3-1区	S297、S299	弥生式土器	甕	(5.5)	-	11.4+	ナデ	ハケメ後ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母、長石を含む。	良好	甕棺の蓋の可能性あり。
21	3-1区	S365 №1	弥生式土器	甕	-	12.7	11.6+	ハケメ	粗いハケメ、ハケメ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、角閃石、石英、黒色粒を含む。	良	
22	3-1区	S364 2層	土師器	甕	(19.4)	-	8.5+	ハケメ後ナデ	口縁部：ハケメ後ナデ、体部：ハケメ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1～3㎜の砂粒を含む。(長石、石英、角閃石など)	良	外面にススス付着。
23	3-1区	S364 2層	弥生式土器	甕	(20.8)	-	10.3+	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、角閃石、輝石、茶褐色粒を含む。	良	
24	3-1区	S364 2層	弥生式土器	甕	(24.2)	-	7.4+	ナデ、ハケメ	ナデ、刻目突帯、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母、黒色の砂粒を含む。	良	
25	3-1区	S364 2層	弥生式土器	壺	(14.3)	-	5.4+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母を含む。	良好	
26	3-1区	S364 2層	弥生式土器	甕	-	-	8.0+	ナデ	ハケメ	灰黄 (2.5Y6/2)	にぶい黄 (2.5Y6/4)	長石、雲母を含む。	良好	
27	3-1区	S366 上層	弥生式土器	甕	-	-	4.2+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口縁端部は肉厚である。また頸部近くには突帯を有すると思われる。
28	3-1区	S366 №8 №56	弥生式土器	鉢	14.0	4.4	6.6	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	長石を含む。	良好	外面底部から口縁にかけて一部黒斑あり。
29	3-1区	S366 №17	弥生式土器	甕	(22.4)	-	14.8+	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ、突帯	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (2.5YR6/6)	長石を含む。	良	
30	3-1区	S366 №26	弥生式土器	甕	-	-	4.0+	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、雲母を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
31	3-1 区	S366、S544	弥生式土器	甕	(34.8)	-	4.3+	ナデ、ハケメ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	金雲母、雲母を含む。	良	頸部の下に突帯あり。
32	3-1 区	S366 №51	弥生式土器	壺	-	-	5.0+	磨滅のため不明	ミガキ、暗文	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤褐 (2.5YR4/8)	長石を含む。	良好	外面に暗文、赤彩あり。
33	3-1 区	S366 №25	弥生式土器	壺	-	-	14.3+	ナデ、ハケメ	ナデ、刻目突帯、沈線、ハケメ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、角閃石、カンラン石を含む。	良	
34	3-1 区	S366 №4、S229	弥生式土器	甕	-	10.2	4.8+	ナデ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	
35	3-1 区	S366 埋土 7 層	弥生式土器	甕	-	-	4.9+	ナデ	ハケメ、ナデ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、角閃石、雲母を含む。	良好	脚の欠けている部分で推定して反転 7.6cm
36	3-1 区	S366 №28	弥生式土器	壺	(25.0)	-	6.1+	ナデ	暗文、ナデ、刻目突帯	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR7/8)	長石、角閃石、雲母を含む。	良好	暗文あり。
37	3-1 区	S366 №30	弥生式土器	壺	18.4	-	4.0+	ヨコナデ	刻目文、ナデ、刻目突帯	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	長石、角閃石を含む。	良	
38	3-1 区	S366 №27	弥生式土器	壺	(15.4)	(5.2)	15.2	細かいハケメ、ナデ	細かいハケメ、ナデ	灰黄褐 (10YR6/2) 黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3) 褐灰 (10YR4/1)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	口縁部に穿孔が 1 個施されているが全体の個数は不明。外面口縁～底部にかけて部分的にスス付着。内面は肩部～底部にかけて広範囲に黒変している。
39	3-1 区	S366 №34 №35	弥生式土器	壺	(23.4)	-	24.6+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6) 橙 (5YR6/8)	長石、雲母を含む。	良好	
40	3-1 区	S366 №50 №42 ベルト 6 層 ベルト 8 層 S229、S502	弥生式土器	壺	-	9.2	32.7+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	淡黄 (2.5Y8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	金雲母、角閃石、長石を含む。	良	内外面の全体に黒斑とスス付着。
41	3-1 区	S366 №53、S229	弥生式土器	甕	(33.8)	-	34.4+	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、突帯	淡黄 (2.5Y8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	カンラン石、雲母を含む。	良	外面スス付着。口縁の歪みあり。
42	3-1 区	S541	土師器	甕	-	(10.0)	3.6+	ナデ	ナデ、ハケメ	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良好	内面スス付着。
43	3-1 区	S366 №45 №47	土師器	甕	-	(10.8)	6.0+	ナデ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良好	
44	3-1 区	S366	弥生式土器	壺	-	11.0	3.0+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	カンラン石、長石、白色の砂粒を含む。	良	底部は歪みあり。
45	3-1 区	S366 ベルト包含層	弥生式土器	壺	-	-	9.7+	ハケメ	ハケメ、ナデ、刻目突帯、突帯	にぶい黄 (2.5Y6/3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	長石、石英、雲母を含む。	良好	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
46	3-1区	S367 No1,7,8,9,14,15,16,17,18、5282G	弥生式土器	甕	26.2	11.6	35.9	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4) 褐灰 (10YR5/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4) 褐灰 (10YR4/1)	角閃石、長石を含む。	良好	焼成破裂痕が数か所あり。焼成破裂土器片が接合する。
47	3-1区	S367、S480	弥生式土器	甕	(18.2)	-	18.0+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4) 黒褐 (7.5YR2/2)	長石、角閃石、雲母を含む。	良好	外面スス付着。焼成破裂痕あり。
48	3-1区	S535 (367内)	弥生式土器	甕	(19.6)	-	17.5+	ヨコナデ、細かいハケメ	ヨコナデ、細かいハケメ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、石英、雲母、赤褐色粒を含む。	良	焼成破裂痕あり。焼成破裂土器片が接合する。
49	3-1区	S367 No.4,5,10,12,13,18,20、S535、5282G	弥生式土器	甕	23.1	-	23.2+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	1～4㎜の砂粒を含む。長石、石英、角閃石等	良好	口縁部（内面）から外面の全体と内面の一部にスス付着。焼成破裂痕あり。
50	3-1区	S367	弥生式土器	壺	-	(7.0)	12.0+	ナデ	ハケメ、丁寧なナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	橙 (7.5YR6/6)	輝石、角閃石、雲母を含む。	良	焼成破裂痕あり。
51	3-1区	S360 No.2	弥生式土器	壺	(21.6)	-	6.8+	ナデ	ナデ	明黄褐 (2.5Y7/6)	明黄橙 (2.5Y7/6)	長石、角閃石を含む。	良好	
52	3-1区	S360、S142、5484G、5283G 清掃	弥生式土器	壺	-	-	19.0+	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明黄橙 (10YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母、長石を多く含む。	良好	胴部外面にスス付着。胴部に突帯を施す。
53	3-1区	5180G X層	弥生式土器	甕	(22.0)	-	35.8+	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母を含む。	良好	
54	3-1区	5180G X層 清掃、5180G X層	弥生式土器	甕	(18.4)	-	15.3+	ハケメ、ヨコナデ (口縁)	ハケメ、ヨコナデ (口縁)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1㎜以下の角閃石、雲母を含む。	良好	
55	3-1区	5383G 2面一括	弥生式土器	甕	(30.6)	-	24.7+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4) 明赤褐 (5YR5/8)	黒褐 (10YR3/1)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良好	
56	3-1区	5283G 清掃 表土ハギ	弥生式土器	甕	27.2	-	13.3+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4) 灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4) 黒 (7.5YR2/1)	長石、石英、雲母を含む。	良好	内面、外面ともにスス付着。焼成破裂痕あり。
57	3-1区	5382G No.15 X層	弥生式土器	壺	-	-	33.8+	ハケメ、ナデ、指頭圧痕	ハケメ、ナデ、刻目突帯	橙 (7.5YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	角閃石、輝石、雲母を含む。	良好	外面胴部に黒斑あり。刻目は一定の間隔をおいてつける。
58	3-1区	5382G X層	弥生式土器	壺	-	-	4.5+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4) 明赤褐 (5YR5/6)	雲母を含む。	良好	赤彩文。天地不明。
59	3-1区	5281G X層、5381G X層	弥生式土器	不明	-	-	3.5+	ナデ	ナデ	赤黒 (2.5YR2/1)	赤褐 (2.5YR4/6)	角閃石を含む。	良好	
66	3-2区	S001 No.1 No.2 No.3 No.4、S023	弥生式土器	壺	(16.6)	-	17.4+	ナデ、ハケメ、指頭圧痕	ハケメ、ナデ	黒 (2.5Y2/1)	浅黄 (2.5Y7/4)	角閃石、長石、雲母を含む。	良好	胴部外面に黒斑あり。頸部に突帯あり。

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
67	3-2区	S001 №3	弥生式土器	壺	-	9.3	7.5+	ハケメ、ナデ、指頭圧痕	ハケメ、ナデ	黒褐 (2.5Y3/1)	にぶい黄 (2.5Y6/3) 黒褐 (2.5Y3/1)	雲母、角閃石、長石を含む。	良好	内面は黒色処理。
70	3-2区	S006 №5	弥生式土器	甕	(17.0)	-	7.6+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	黒 (10YR2/1)	長石、角閃石、雲母を含む。	良好	外面全体にスス付着。
71	3-2区	S006 №9 硬化上面	弥生式土器	甕	(26.2)	-	3.4+	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	長石、角閃石、雲母、1～3㎜の砂粒を含む。	良好	
72	3-2区	S006 №1	弥生式土器	甕	-	-	8.1+	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	内外面の一部に黒斑あり。
73	3-2区	S006 №12	弥生式土器	甕	-	(9.4)	2.9+	粗いナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、角閃石、雲母を含む。	良	
74	3-2区	S006 硬化上面	弥生式土器？	不明	-	(8.8)	5.4+	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	石英、角閃石、雲母を含む。	良	胴部の底部付近に穿孔あり。
75	3-2区	S006 №6	弥生式土器	壺	-	(6.0)	2.8+	ハケメ、ナデ	摩滅により不明	暗灰黄 (2.5Y5/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、石英を含む。	良好	
76	3-2区	S012	弥生式土器	甕	(25.2)	-	3.8+	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、角閃石を含む。	良好	
77	3-2区	S012	弥生式土器	壺	(36.4)	-	5.0+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	長石、雲母を含む。	良好	
78	3-2区	S005 №2	弥生式土器	壺	-	-	5.7+	ナデ	ナデ、貼付突帯	浅黄 (2.5Y7/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	石英、角閃石、雲母を含む。	良	
79	3-2区	S005 №2	弥生式土器	甕	-	-	13.1+	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、石英、雲母を含む。	良	
80	3-2区	S013	弥生式土器	甕	-	-	3.4+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	長石、角閃石、雲母を含む。	良	
81	3-2区	S005 №1	弥生式土器	甕	-	-	13.2+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黄橙 (7.5YR7/8)	石英、長石、角閃石を含む。	良好	内外面にスス付着。
82	3-2区	S005 №1	弥生式土器	甕	-	-	5.7+	粗めのハケメ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	黒 (2.5Y2/1) 灰黄 (2.5Y7/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	雲母、角閃石、長石を含む。	良好	
83	3-2区	S005 №1	弥生式土器	甕	-	-	6.8+	ハケメ後ナデ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	にぶい黄橙 (10YR6/3)	灰黄 (2.5Y6/2)	長石、角閃石、雲母を含む。	良	内面は広範囲に剥離している。
84	3-2区	S005 №4	弥生式土器	甕	-	-	4.4+	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、刻目突帯	浅黄 (2.5Y7/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	長石、角閃石を含む。	良好	
85	3-2区	S004	弥生式土器	甕	-	-	2.0+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英、雲母、角閃石を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文　様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
86	3-2 区	S004	弥生式土器	甕	-	-	2.7+	ナデ	ハケメ	黄灰 (2.5Y4/1)	浅黄 (2.5.Y7/3)	長石、石英を含む。	良好	
87	3-2 区	S004、S005 №3、S012、4878G	弥生式土器	甕	(22.0)	-	15.4+	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	黄褐 (10YR5/6)	黒褐 (10YR3/1)	長石、雲母、白色粒を含む。	良	

（土製品）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	色　調	胎　土	焼成	法量 (cm・g) ※（　）は現存値				備　考
							長さ	幅	厚さ	重さ	
60	3-1 区	5179G №13	土製勾玉	にぶい黄橙 (10YR6/3)	長石、石英を含む。	良	2.3	0.85	0.85	2.2	ほぼ完形だが、一部欠損。

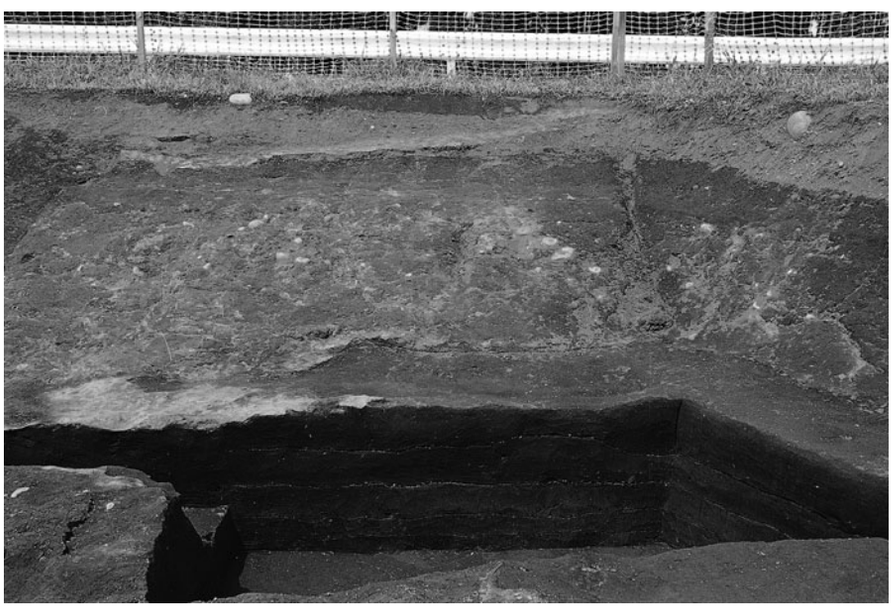
（石製品）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	法量 (cm・g) ※（　）は現存値				石材・石質	備　考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
63	3-1 区	5281G、S81 一括	石包丁	3.9	(5.1)	(0.2)	9.8	粘板岩	裏面は剥離欠損 1/2 残存。丁寧に磨いて形成。穴の横の小さい穴は故意に穿ったものか？
64	3-1 区	4979G №8	石包丁	4.1	6.9	0.7	30.7	粘板岩	本来の物が欠損の為、2 次加工で（両側面に擦痕調整あり）再び石包丁として使用したと思われる。
65	3-1 区	5281G №9	磨製石斧	(13.4)	(6.6)	3.3	441.0	蛇紋岩	刃部欠損。全面細かく研磨されている。一部に敲打痕が残存するが使用痕なのか？
68	3-2 区	S010 №1	石包丁	4.5	(8.5)	0.9	45.1	粘板岩	2/3 残存。2 個の穿孔あり。孔の直径：3.5 ～ 4.0㎜。
69	3-2 区	S001 №1	磨製石鏃	2.2	(1.2)	0.2	0.8	頁岩	側面の一部欠損。平基無頸鏃

（鉄製品）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	法量 (cm・g) ※（　）は現存値				備　　考
				長さ	最大幅	厚さ	重さ	
10	3-1 区	S633 埋土 2 層	鉄鏃	(5.2)	2.2	0.3	4.5	刃部は完形、茎の先端は欠損する。
61	3-1 区	5080G XIV 層	鉄鏃	(3.1)	2.0	0.3	4.4	刃部、茎部欠損。
62	3-1 区	5080G № 10	鉄鏃	3.9	2.0	0.2	3.5	完形で穿孔（2 個）あり。無茎三角形鏃。

1-1 区
完掘状況　北→



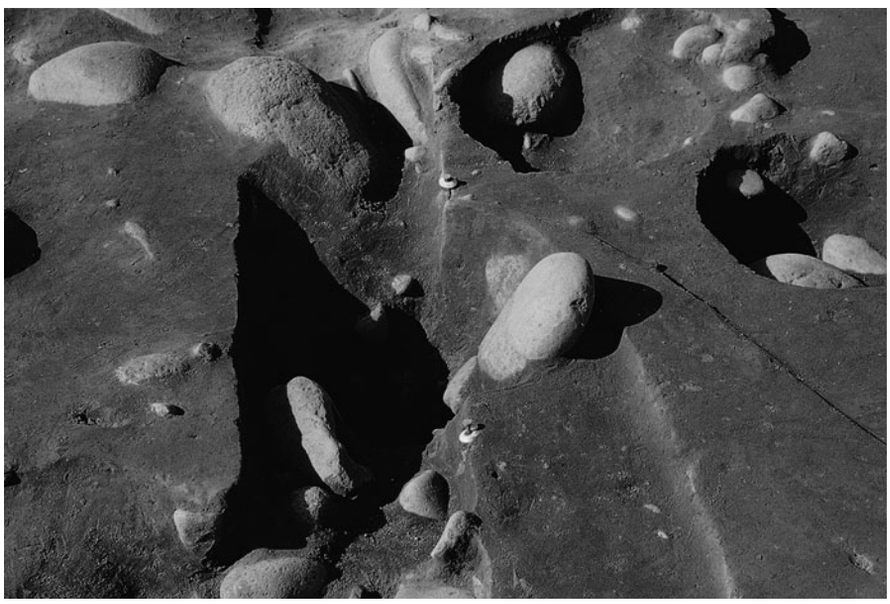
1-2 区
西壁断面状況　東→

1-2 区
北壁断面状況　南東→

図版２

1-2区　ＳＩ０１・ＳＩ０２
完掘状況　東→

1-2区　Ｐ１
完掘状況　南→



1-2区　Ｐ２
完掘状況　東→

1-2 区　ＳＫ０１
完掘状況　東→

1-2 区
完掘状況　南→

図版 4

２区
北端部断面状況　南東→

２区　杭 2-4・2-5
断面状況　南東→

２区　ＳＩ01
遺物出土状況　南東→

２区　ＳＩ01
完掘状況　南東→

２区　ＳＩ02
完掘状況　南西→

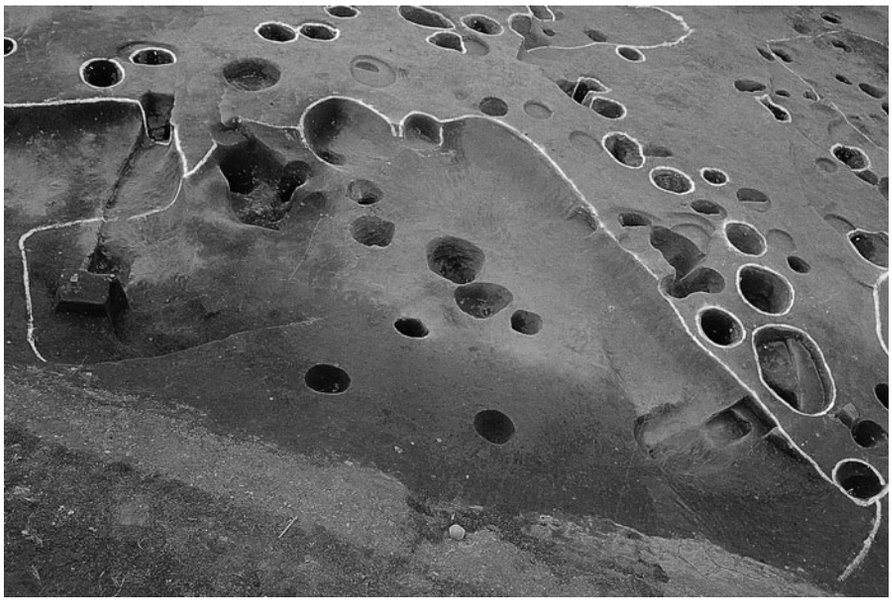
２区　ＳＩ03
完掘状況　南東→

２区　ＳＩ04
完掘状況　南西→

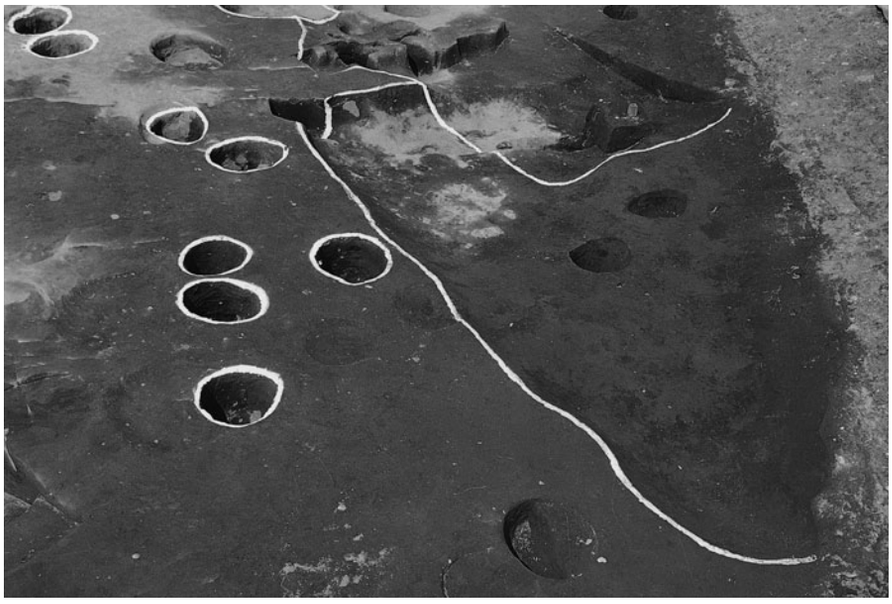
２区　ＳＩ05
完掘状況　北西→

２区　ＳＩ06
完掘状況　南東→

２区　ＳＩ 07
完掘状況　北東→



２区　ＳＩ 08
完掘状況　東→



２区　ＳＩ 09
完掘状況　南西→

２区　ＳＩ 10
完掘状況　東→

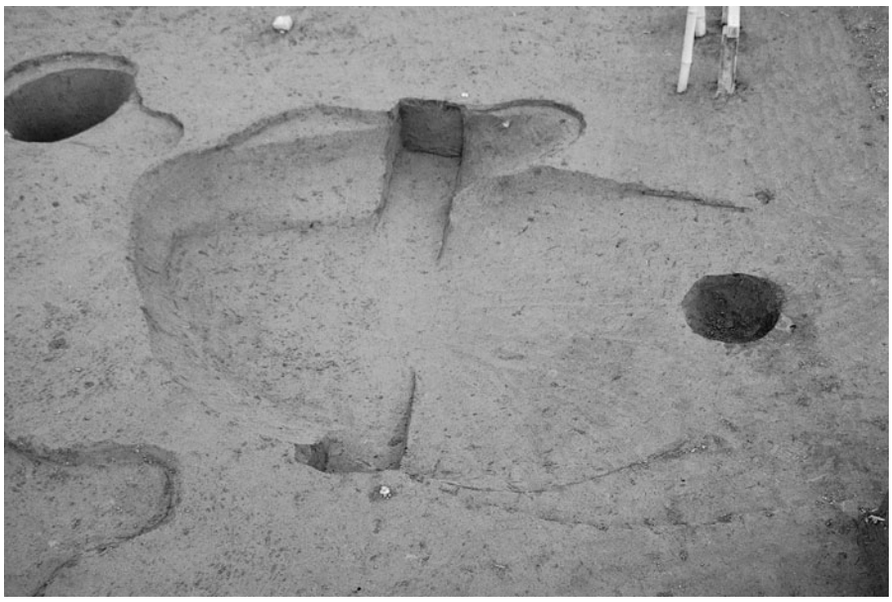
２区　ＳＢ 01
南西→

２区　ＳＢ 02
南西→

２区　ＳＢ 03
南西→

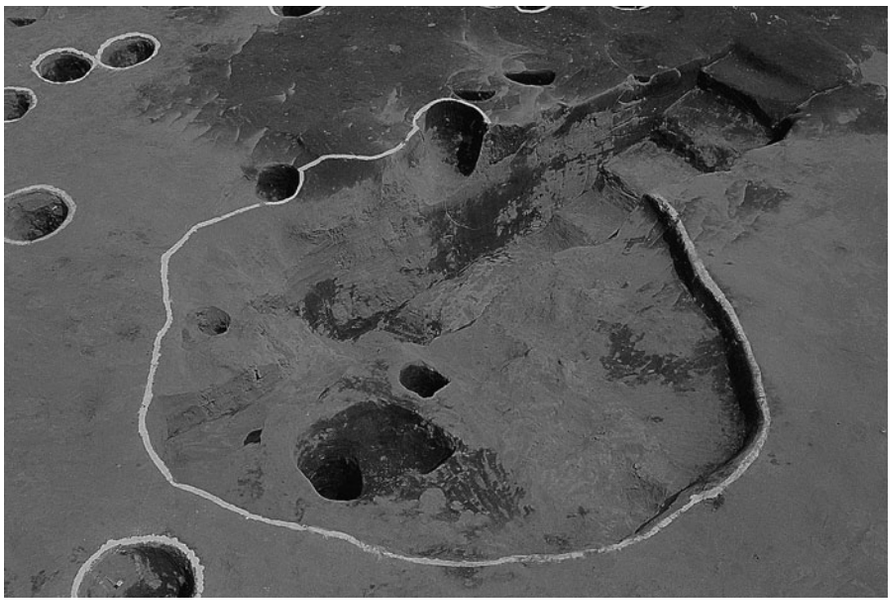
２区　ＳＢ 04
東→

２区　ＳＫ 01
完掘状況　東→



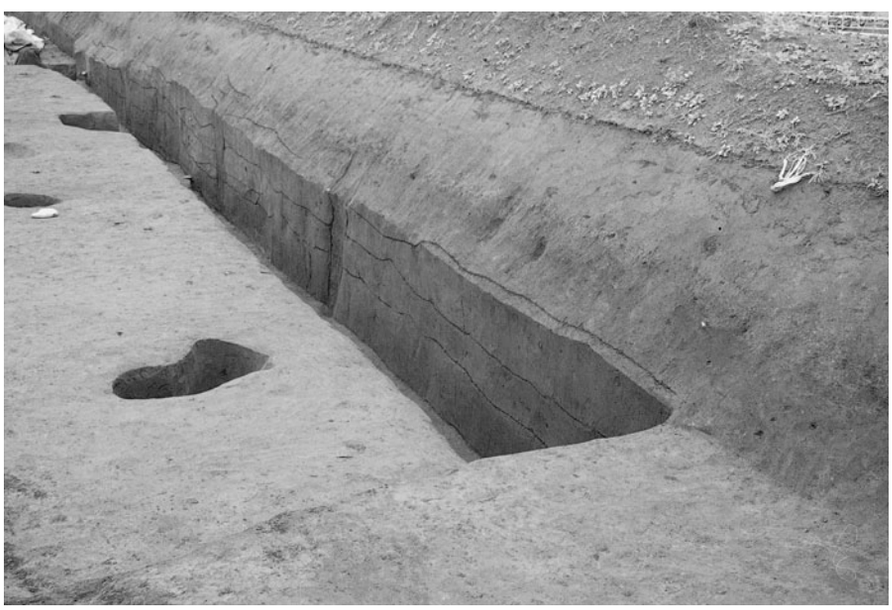
２区　ＳＫ 02
完掘状況　南→

２区　ＳＤ 01・ＳＤ 02
完掘状況　南東→



２区　ＳＸ 01
完掘状況　西→

3-1 区
西壁土層断面状況



3-1 区
調査区東壁土層断面状況

3-1 区　ＳＩ01
a-a' ベルト土層
断面状況

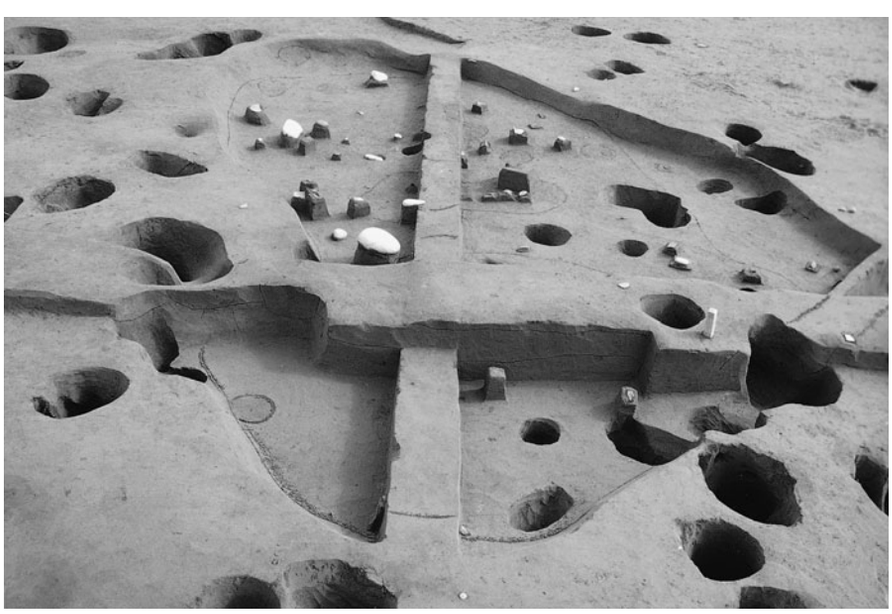
3-1 区　ＳＩ 01
遺物出土状況

3-1 区　ＳＩ 01
完掘状況

3-1 区　ＳＩ 02
完掘状況

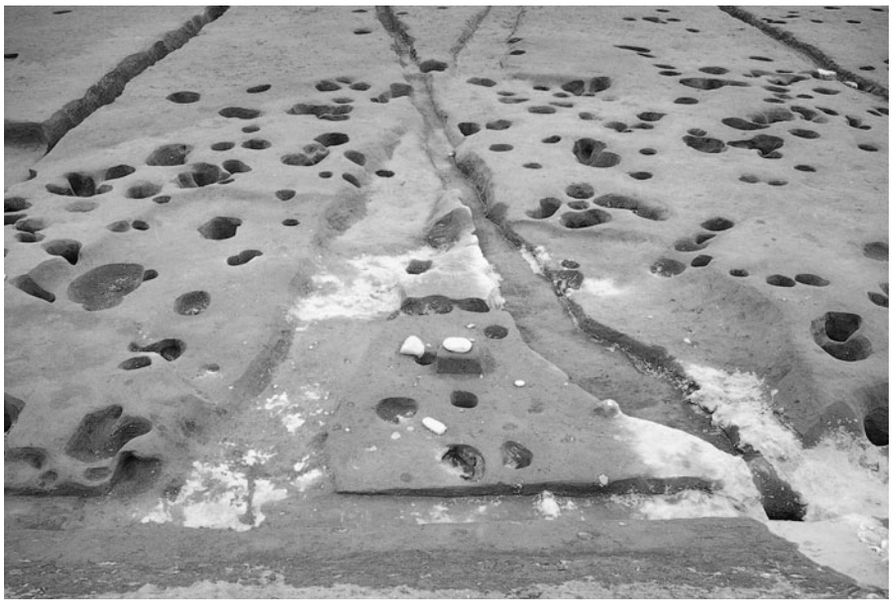
3-1 区　ＳＫ 01
遺物出土状況

3-1 区　ＳＤ 01
完掘状況



3-1 区　ＳＸ 01
検出及び遺物出土状況

3-1 区　ＳＸ 01
完掘状況



3-1 区　ＳＸ 02・ＳＤ 03
完掘状況

3-1 区　ＳＸ 03
遺物出土状況

3-1 区　ＳＸ 03
完掘状況

3-1 区　ＳＸ 04
完掘状況

3-1 区　ＳＸ 05
完掘状況

3-2 区　ＳＩ 01
完掘状況

3-2 区　ＳＩ 02
硬化部分土層
断面状況

3-2 区　ＳＸ 01・02・03
検出及び遺物出土状況

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

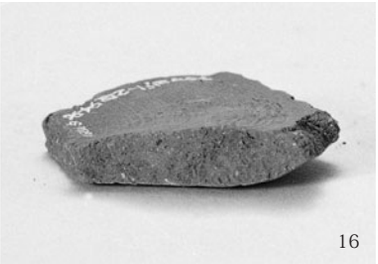
14

15

14

15

図版 18


16

17

18

16

17

18

19

20

21

19

20

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

40

41

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

73

68

68

70

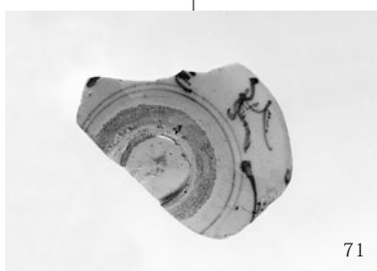
70

70

69

71

71


71

72

72

72

写 1

76

76

74

77

77

74

78

78

75

79

79

80

80

81

81

82

82

83

83

84

84

85

85

86

86

図版 24

1

2

3

4

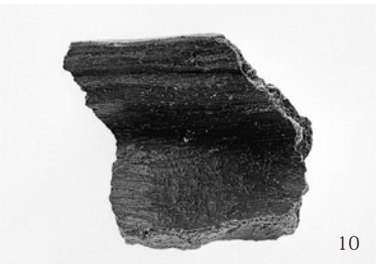
5

6

7

8

9


10

11

12

13

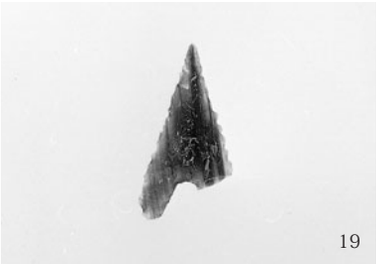
14

15

16

17

18


19

20

21

22

23

24

25

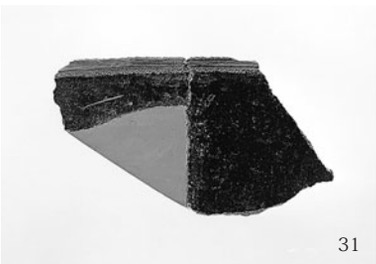
26

27

28

29

30


31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

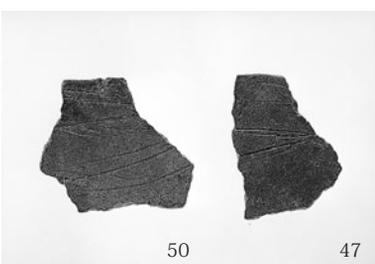
42

43

44

45

46


50 47

48

49

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

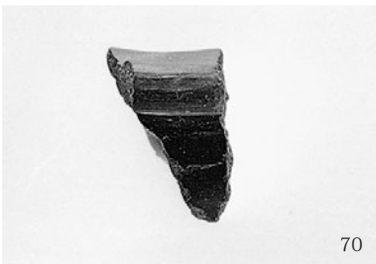
65

66

67

68

69


70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

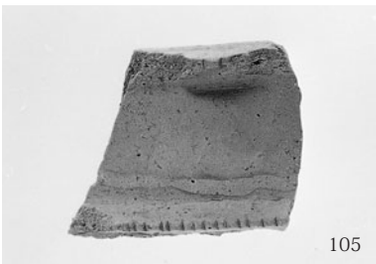
100

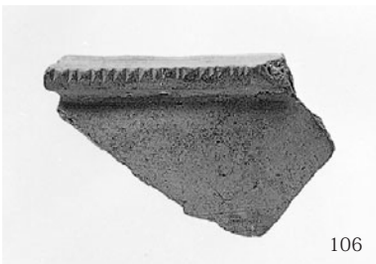
101

102

103

104


105


106

107

108

109

図版 30

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

129

127

130

131

128

132

133

134

135

136

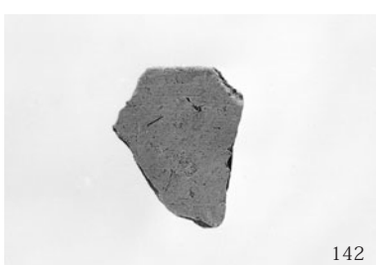
137

138

139

140

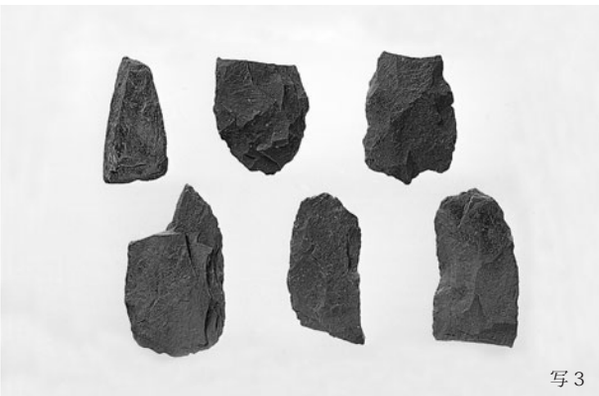
141


142

図版 32

写 1

写 2



写 3

写 4

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

図版 34

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

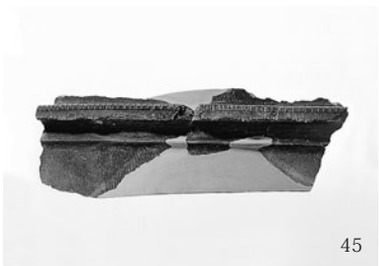
40

42

41

43

44


45

46

47

48

49

53

50

51

図版 36

52

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

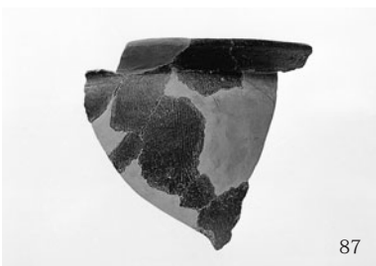
82

83

84

85

86


87

写 1

中　江　遺　跡

Ⅰ　調査の経過

Ⅱ　中江遺跡の地理的・歴史的環境

Ⅲ　調査の成果

Ⅳ　総括

Ⅰ　調査の経過

1　調査にいたる経緯

今回報告する中江遺跡については、平成 25 年 8 月 6 日の試掘調査を皮切りに計 3 回の試掘調査を実施した。その結果、今回の調査区内において、縄文時代から古代にかけての遺構と遺物の存在を確認した。この調査結果について平成 26 年 4 月 6 日付け教文第 83 号で熊本土木事務所に通知した。また中江遺跡は以前からその存在は知られていたが、遺跡地図に掲載がなかったため「熊本県遺跡地図」の修正を行い、熊本市教育委員会に通知した。

その後平成 26 年 4 月 14 日付け央土災対 4 号熊本県知事名で文化財保護法 94 条第 1 項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成 26 年 4 月 16 日付け文振発 000040 号で熊本市教育長から熊本県教育長あて進達された。工事内容と試掘確認調査の結果を照らし合わせた結果、発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を教文第 285 号で熊本市教育長、熊本県知事あて通知した。それを受け、平成 26 年 5 月 22 日付け央土災対 22 号で発掘調査の依頼通知が提出された。

2　調査の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

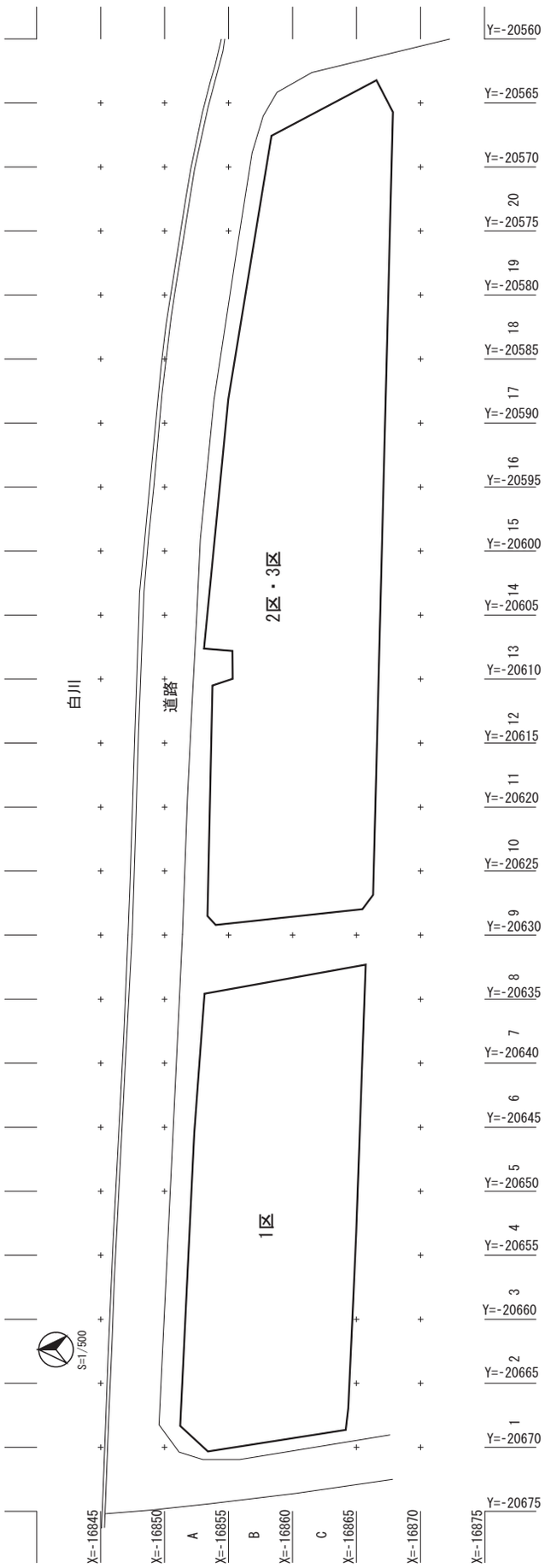
（1）　発掘調査の組織（平成 26 年度）

調査責任者　手島伸介（文化課長）
　　西住欣一郎（課長補佐）
調査総括　　岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）
調査事務局　廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）松尾康延・有馬綾子（参事）天草英子（主任主事）
調査担当
　1 区　　古城史雄・廣田静学（主幹）、山下義満（参事）
　2 区・3 区　尾崎潔久（文化財保護主事）、多賀晴司、大坂亜矢子（非常勤職員）
調査作業員
　1 区　　井手秀一、栗崎信行、白石美枝子、森本清子、米光司朗、野田昇
　2 区・3 区　緒方正明、木村崇、坂梨學、椎葉仁美、田中鳴美、塚本勇、春野宗敏、藤原英敏、
　　松井昭子、松本直美、松山誠一、森本清子

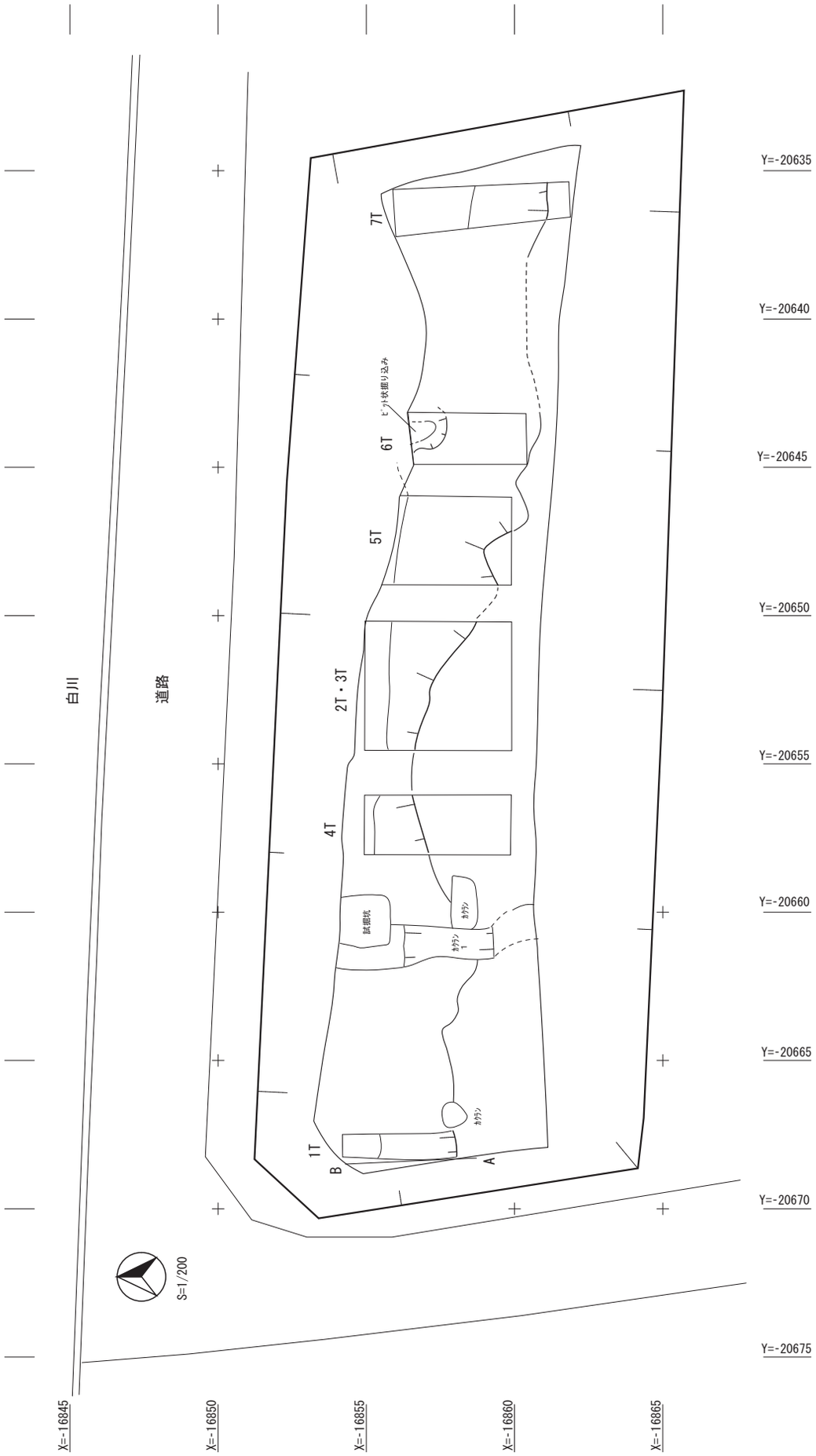
（2）　整理の組織（平成 27 年度）

整理責任者　手島伸介（文化課長）
　　村崎孝宏（課長補佐）
整理総括　　岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）
整理事務局　廣石啓哉（主幹兼総務文化係長）・有馬綾子・天草英子（参事）・坂井田端志郎（主任学芸員）
　　竹馬牧子（主事）
整理担当　古城史雄　春川香子　中川治（臨時整理補助員）
整理作業員

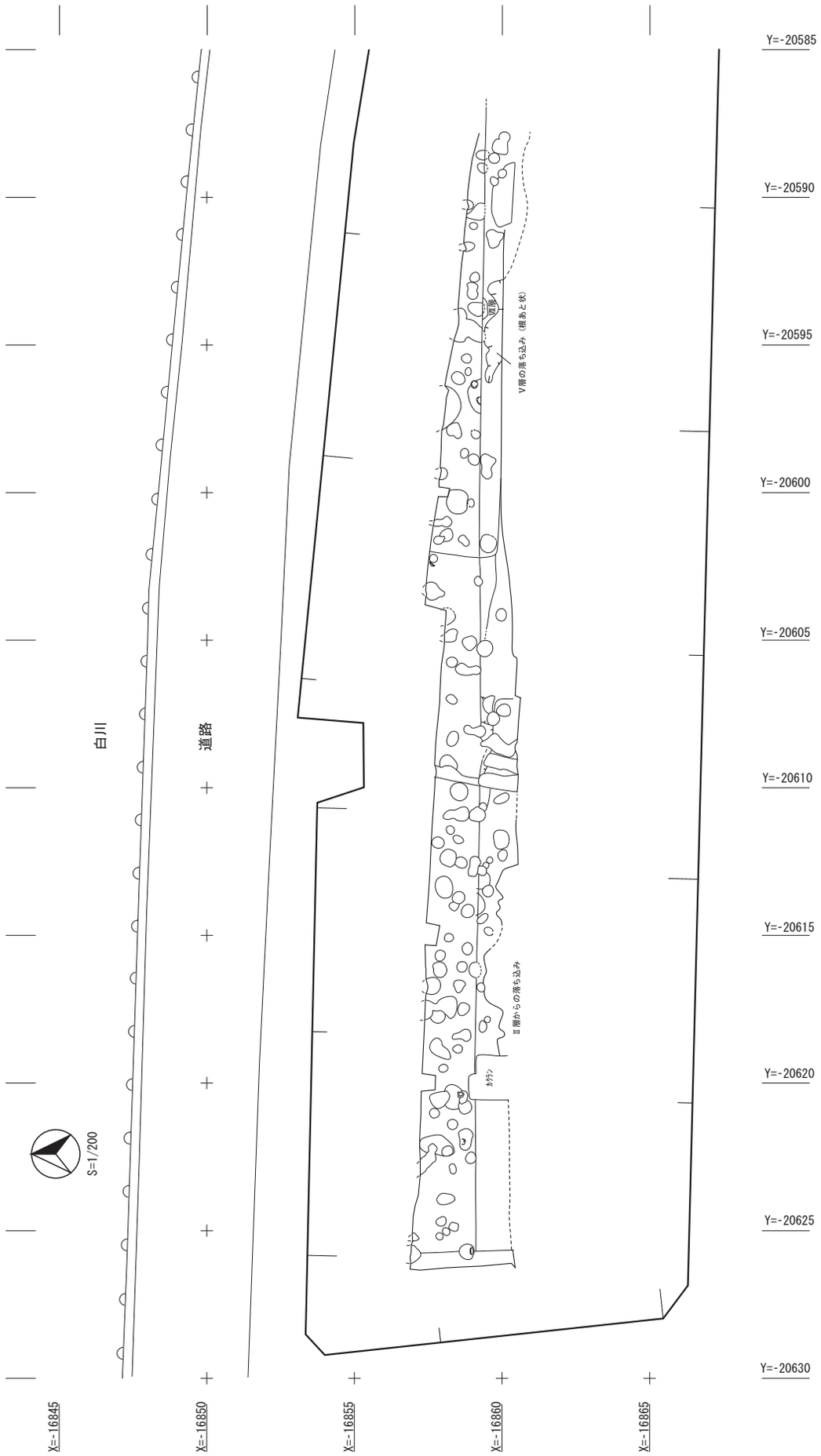
嵐英隆、井王直厳、石田敦子、伊藤智治、井上秀子、内田孝子、内村尚美、近藤広子、白木はる乃、園田智子、田中洋子、溜淵俊子、西田法子、濵﨑清子、原口美和子、平岡賢、福島典子、府内博子、松本直枝、松本裕子、丸山勉、吉岡直子、渡邊いわ子、上野栄子、松原泰子、山本邦子、結城あけみ、河津洋伶



第１図　中江遺跡１区・２区・３区平面図(S=1/500)



第２図　中江遺跡１区平面図(S=1/200)



第３図　中江遺跡２区・３区平面図(S=1/200)

Ⅱ　中江遺跡の地理的・歴史的環境

中江遺跡については、平成 25 年度の試掘調査により遺跡の存在が確認されたため、遺跡地図に新たに掲載されたものである。「昭和 46 年度熊本市東部地区文化財調査報告」には掲載がなく、また熊本県遺跡地図への記載もされていないものの、昭和 58 年３月 31 日発行の「吉原遺跡発掘調査報告書」の付論として弓削宮原遺跡とともに中江町遺跡として紹介されている。また新熊本市史に「中江町遺跡」として紹介されていた。

なお、昭和 45 年に発見された表面採集遺物には、縄文時代早期の土器、阿高式系の土器、後期・晩期の土器の他に弥生時代前期の土器、須恵器や土師器など幅広い時期の遺物が確認されている。特に縄文時代晩期の土器が多く確認され、縄文晩期については、吉原遺跡と一連のものとなる可能性が指摘されている。正式な調査はこれまでおこなわれたことがなく、今回が初めての発掘調査であった。なお、調査に至る経緯は託麻弓削遺跡群の１章を参照されたい。

Ⅲ　調査の成果

１　調査の方法と経過

調査は用地の関係で中央部分がすぐに調査が開始できなくなったため、調査面積の広い西側の調査区から開始することになった。なお白川下流側から、１区・２区・３区とした。

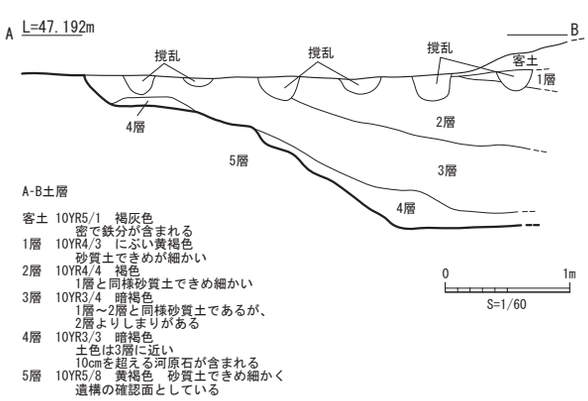
各調査区内に１辺 10 mの正方形のグリッドを平面直角座標系に合わせて設定した。第１図のようにグリッドは南北方向をアルファベットで、東西方向をアラビア数字で示した。

まず重機により表土を剥ぎ、次いで人力による遺構確認のための清掃作業、遺構検出、遺構掘削という手順で調査を進めた。その後遺構配置図や土層断面図の作成、写真撮影を行った。

１区の調査期間は平成 26 年９月８日から同じく平成 26 年 10 月７日までの１カ月であった。２区・３区は平成 27 年１月８日から同年２月 19 日であった。

２　層序

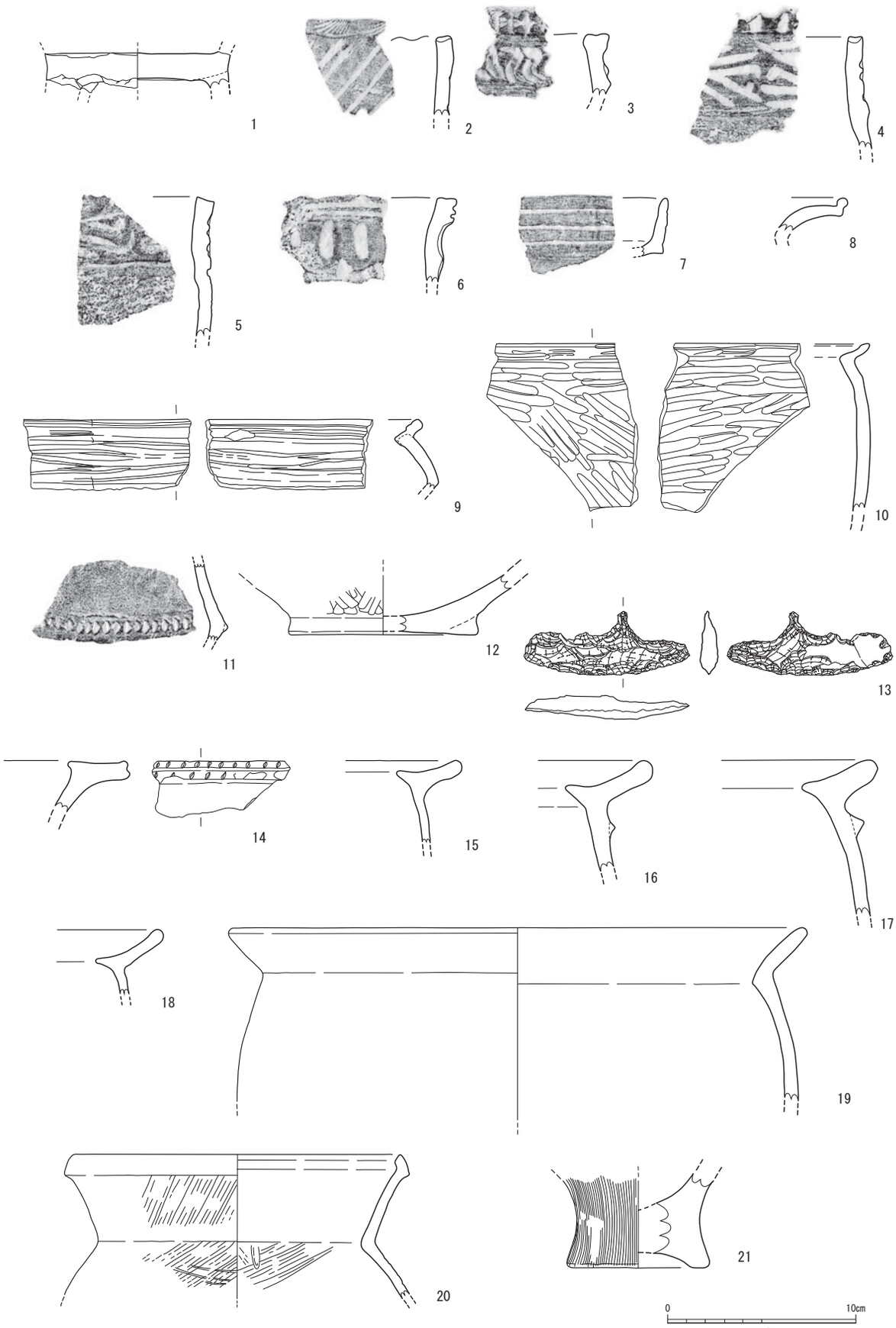
平成 24 年の熊本広域大水害による砂の堆積をはじめ昭和 28 年６月 29 日の水害の洪水層が存在している地点が存在するなど、過去の洪水による土砂の堆積も随所に見られる。ここに掲示した土層図は中江遺跡の西側壁の土層図である。現地表から１m 程は客土であり、客土及び旧田んぼの床土の下の層を１層として表示した。各層の特徴は第４図に示したとおりであるが、５層の黄褐色土が遺構の確認面で、白川に向かい傾斜していくようである。西壁では確認できなかったが、中央付近のトレンチで観察すると、５層はさらに傾斜して低くなっていき、そこには人頭大の石が多量に含まれていくようになり、この下層は礫層になると思われる。１層から４層はこの傾斜地に堆積していった層である。



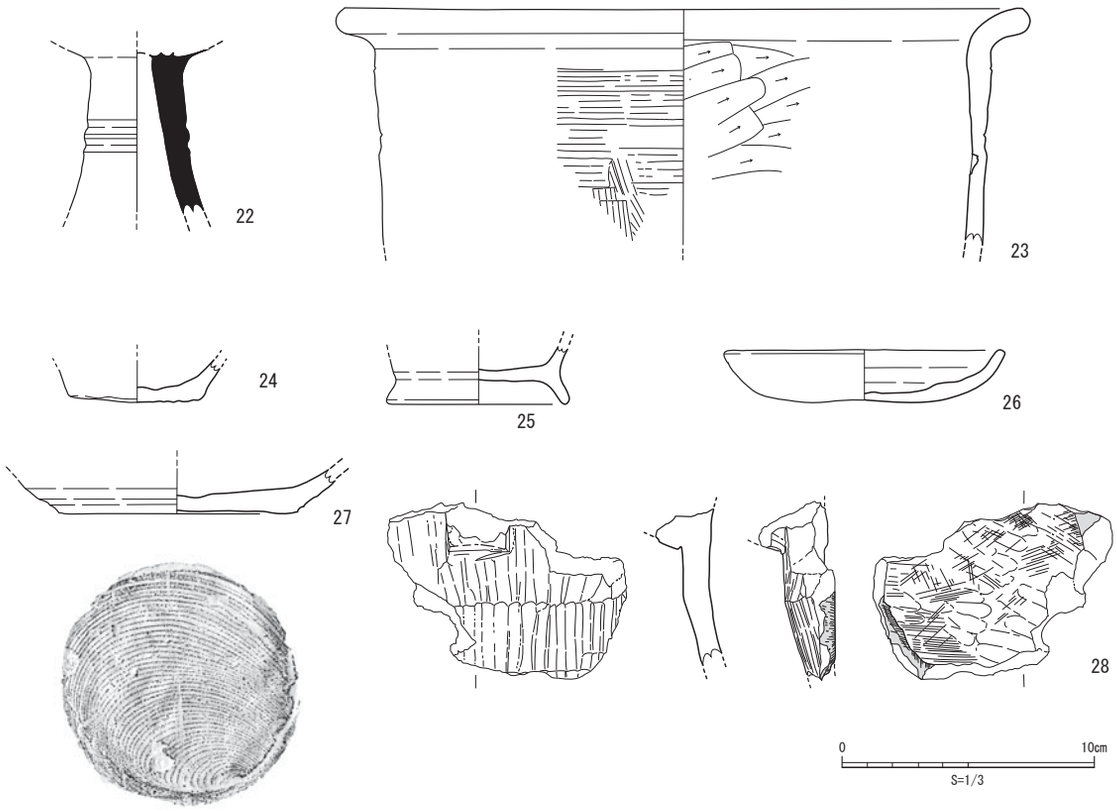
第４図　中江遺跡１区土層断面図(S=1/60)

３　調査の成果

南壁法面はそのまま築堤の法面となるため、また北・東は既存道路に影響を与えないよう、一定の傾斜角度を保ったまま掘り下げていく必



第５図　中江遺跡出土遺物実測図（１）(S=1/3)



第６図　中江遺跡出土遺物実測図（２）(S=1/3)

要があった。調査区は東に向って傾斜していき、東端では、西側より１m 程低くなっているため、２区・３区の調査面積はかなり狭くなっている。このため柱穴と思われる遺構は検出されているものの、確実に掘立柱建物になると断言できる遺構はなかった。一方１区では、平坦面は調査面積の１/４程であり、そこに遺構は確認できなかった。しかしながら遺物は縄文時代から中世まで出土しているので、遺物を中心として報告したい。

縄文時代の遺物（第５図１～13）

１は時期不明の遺物であるが、縄文土器の胎土に似ていたことから縄文土器として取り扱った。また天地も不明だが､脚の部分で６個以上の透かしがあるものと思われる。２～６は凹線で直線や曲線を施すもので、阿高式土器の口縁部片である。６を除き表土剥ぎ時の出土である。７も深鉢の口縁部片で、口縁帯に３条の沈線を施す。内外面ともヘラによる研磨が施されている。８は浅鉢の口縁部片で、口縁帯に１条の沈線を巡らす。９も浅鉢で「く」の字形に屈曲する頸部に短い口縁部がつく。口縁部端が内側に突出している箇所が部分的にあるが、調整時の変異と判断し、突出していない箇所を図化している。10 は椀形の体部に短い口縁部がつくもので、内外面ともにヘラにより丁寧な研磨が認められる。

11 は刻目突帯文土器の頸部片である。12 は円盤貼り付け状の底部片である。13 は石匙で、形状は横長で小さいつまみがつく。

弥生時代の遺物（第５図 14 ～ 21）

14 は小片で器形は不明だが高坏になるものかも知れない。「L」字形の口縁部で、口唇部には刻目が施される。15 ～ 19 は甕の口縁部片である。15 の口縁部は外に向かい水平に近く伸び、端部は内側に張り出す。16 ～ 18 もほぼ同様の形状だが、15 に比べると口縁部は外にむかって斜め上方向に伸びる。また、16・17 は口縁下に１条の突帯を巡らす。19 は頸部が「く」の字形に屈曲し口縁部は直線的に外に向かう。20 は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、「く」の字形に屈曲する頸部から、外に向かう口縁部がつく。口

縁端部が肥厚する。外面はタタキ調整のあとハケ調整、その後ナデ調整が施される。21 は底部片でわずかに上げ底である。

古墳時代以降の遺物（第 6 図）

22 は須恵器高坏の脚部片である。中位に 2 条の沈線が巡る。透かしの有無は不明である。24・26・27 は土師器の坏で、27 の底部は回転糸切り離しの痕跡が認められる。25 は土師器の椀である。28 は石鍋の破片で、断面も磨かれた痕跡があり、2 次加工品と思われる。

Ⅳ　総括

1 区だけを考えると、調査区は河川に向かって傾斜していく箇所で、北側はほとんどが傾斜部分となる。傾斜部分のより低くなっている箇所には礫が多量に含まれている。これは調査区の中央部分で顕著である。以上のことから、この調査区は河原に向かって下がっていく箇所であると結論付けた。

ところが、2 区・3 区の表土剥ぎをすると全く違った様相が現れた。1 区と 2 区の間に水路があり 5 m程間隔があるとしても、2 区の北側は傾斜地となっているはずである。ところが 2 区の西壁を観察すると、傾斜部分はあるもののその後平坦面となる。そこには 1 区で見られたような礫はなく、この面でピットが多数検出され、高低差はあるものの 3 区までつながっている。標高は 1 区の東壁の下がった箇所で、45.6 m、2 区の平坦面のレベル 45.7 m程であることから、1 区の低くなっている面と 2 区のピット等が検出された面が同じ面である可能性が高い。2 区・3 区の調査面積が狭いので断定的なことは言えないが、2 区・3 区の様相が一般的で、1 区の礫がある状況が特殊なのかもしれない。礫は 2T から 6T で顕著で西端や東端ではあまり見られない。また 1 区の東端土層には水流で土層がえぐられたと思われるところも観察される。このことから 1 区の中央部分は過去の水害等で土砂や礫が堆積した箇所ではないかとも考えたが、現在の川の流れを見る限り 1 区と 2 区・3 区に大きな変化はなく、1 区だけ被害を受けたとも考えにくい。あるいは 2 区 3 区をさらに北側に広げるとさらに下がったところで多量の礫があるのかもしれないが、現状では不明と言わざるを得ない。

しかし遺物は比較的多く出土しており、後背地には縄文時代中期から、古代・中世まで連綿と続く遺跡があったことは確実である。

（土器）

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（　）は復元値			調　整・文様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
1	西調査区	表土ハギ	縄文式土器？	台付鉢？	-	-	2.0+	工具ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	長石、石英、角閃石、輝石を含む。	良	底部内面にスス付着。脚は貼付で、数ヶ所外面より穿孔あり。
2	西調査区	表土ハギ	縄文式土器（阿高式）	深鉢	-	-	4.2+	ナデ	ナデ、沈線文、口唇部：貝殻文	褐 (10YR4/4)	褐 (10YR4/4)	雲母、角閃石を含む。	良	
3	1区	撹乱	縄文式土器（阿高式）	深鉢	-	-	3.2+	ナデ	ナデ、凹線文、口唇部：刺突文	明褐 (7.5YR5/6)	明褐 (7.5YR5/6)	石英、雲母を含む。	良	口唇部の刺突文はヨコ、タテと入っている？
4	西調査区	表土ハギ	縄文式土器（阿高式）	深鉢	-	-	6.0+	ナデ	ナデ、沈線文、口唇部：刺突文	にぶい黄褐 (10YR4/3)	褐 (10YR4/4)	雲母を含む。	良好	
5	西調査区	表土ハギ	縄文式土器（阿高式）	深鉢	-	-	7.4+	ナデ	ナデ、凹線文	褐 (10YR4/4)	暗褐 (10YR3/4)	雲母、長石を含む。	良好	
6	2区	B-11G Ⅶ層	縄文式土器（阿高式）	深鉢	-	-	4.5+	ナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、沈線２条、凹線文、押点文	にぶい黄褐 (10YR5/4)	褐 (10YR4/4)	長石、石英、角閃石、輝石を含む。	良	
7	1区	5T	縄文式土器	深鉢	-	-	3.1+	ミガキ	ミガキ、沈線３条	灰 (5Y4/1)	灰 (5Y4/1)	長石、石英、角閃石、輝石を含む。	良	
8	1区	5T	縄文式土器	鉢	-	-	1.8+	ミガキ	ナデ、ミガキ、沈線１条	明黄褐 (2.5Y6/6)	明黄褐 (2.5Y6/6)	石英、雲母を含む。	良	黒色磨研。
9	2区	P-022 Ⅶ層	縄文式土器	浅鉢	-	-	3.3+	ミガキ	ミガキ、口唇部：沈線１条	暗灰黄 (2.5Y5/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	長石、石英を含む。	良	口縁部の貼付部内面は粗雑。
10	西調査区	表土ハギ	縄文式土器	深鉢	-	-	8.2+	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐灰 (10YR4/1)	黒褐 (10YR3/1)	石英、白色粒を含む。	良	
11	3区	P064	縄文式土器	鉢	-	-	4.1+	ナデ	ナデ、刻目突帯	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石、角閃石を含む。	良好	
12	1区	B-3G 4T	縄文式土器	深鉢	-	(10.0)	3.2+	工具ナデ	ミガキ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石、石英、雲母を含む。	良好	
14	1区	清掃時	弥生式土器	甕？高坏？	-	-	2.7+	ナデ	ナデ、刻目文、沈線文	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英、雲母、白色粒、黒色粒を含む。	良	口縁の刻目文は摩滅気味である。
15	2区	BC-11G Ⅶ層	弥生式土器	甕	-	-	4.3+	ナデ	ヨコナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	角閃石、長石を含む。	良好	口縁部外面にスス付着。
16	1区	B-7G 7T	弥生式土器	甕	-	-	5.9+	ナデ、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、輝石、角閃石を含む。	良	口縁部に貼付突帯を有する。
17	3区	B-14G Ⅶ層下	弥生式土器	甕	-	-	8.3+	ナデ	ナデ、貼付突帯	明黄褐 (10YR6/6)	黄褐 (10YR5/6)	石英、雲母を含む。	良	外面にスス付着。
18	3区	P057	弥生式土器	甕	-	-	3.4+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英、角閃石、輝石を含む。	良	
19	2区	P028	弥生式土器	甕	(30.4)	-	9.2+	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄 (2.5Y7/4)	雲母、長石、角閃石を含む。	良好	
20	2区	BC-9G Ⅶ層	土師器	壺	(17.4)	-	7.4+	ハケメ後ナデ	タタキ後ハケメ後ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	長石、角閃石、雲母を含む。	良	

遺物番号	調査区	出土位置	種別	器種	法量 (cm) ※（ ）は復元値			調　整・文様		色　調		胎　土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	内面	外面	内面	外面			
21	3区	1T	弥生式土器	甕	-	(7.2)	4.6+	ナデ	ハケメ	黄灰 (2.5Y5/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	長石、石英を含む。	良	
22	2区	表土ハギ	須恵器	高坏	-	-	6.4+	ナデ	指オサエ、ナデ、沈線２条	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y7/2)	輝石、白色粒を含む。	良好	
23	3区	3T	土師器	甕	(26.8)	-	9.4+	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	黄褐 (10YR5/6)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	石英、長石、角閃石、輝石を含む。小石粒を含む。	良	
24	1区	埋土	土師器	坏	-	5.4	1.7+	ナデ	ナデ、底部：回転ヘラ切り離し後ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	長石、石英、輝石を含む。	良	底部に回転ヘラ切り離し粘土痕残存。作りが粗雑。
25	1区	5T	土師器	椀	-	7.0	2.2+	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石、雲母、石英を含む。	良好	
26	1区	B-6G 6T 埋土	土師器	坏	10.8	4.3	2.1	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	白色粒、黒色粒を含む。	良	底部に板状圧痕あり。
27	2区	表土ハギ	土師器	坏	-	9.5	1.8+	ナデ	回転ヘラケズリ、底部：糸切り離し	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	石英、雲母、茶褐色粒、白色粒を含む。	良	作りはやや雑である。

（石器）

遺物番号	調査区	出土位置	器種	法量 (cm・g) ※（ ）は現存値				石材・石質	備　考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
13	1区	B-4G 2,3 トレン (2T)	石匙	3.4	8.8	1.2	22.1	安山岩	完形。全体が細かい敲打により形成。
28	1区	清掃	石鍋 二次加工品	(7.1)	(9.5)	2.2	112.4	滑石	内面に二次加工部が見られるので、何かに転用した可能性あり。

参考文献

網田龍生　1993「古代肥後の土器」『大江遺跡群』熊本市教育委員会

網田龍生　1994a「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究　熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集』龍田考古会

網田龍生　1994b「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』日本中世土器研究会

網田龍生　2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会

網田龍生・美濃口雅朗他　2007『二本木遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会

上野辰男　1973「Ⅱ各節編 1．白川左岸地区（1）鹿帰瀬・弓削地区」『熊本市東部地区文化財調査報告』熊本市教育委員会

岡村道雄編　2008『日本各地・各時代の焼失建物跡 － 北海道・岩手県・宮城県・栃木県・石川県・愛知県・広島県・鹿児島県 － 本文・図版編』奈良文化財研究所

金田一精　2009「熊本平野における弥生文化受容期の様相」『古代文化』61 巻 2 号

亀田学　2001『梅ノ木遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告　第 199 集　熊本県教育委員会

清田純一　1998「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古第 11 号』肥後考古学会

坂田和弘　1995「第 1 章　古代」『菊陽町史』菊陽町史編纂室

勢田廣行編　2000『宮内南遺跡、芋尾遺跡、日焼遺跡、北屋形山遺跡』荒尾市文化財調査報告第 11 集　荒尾市教育委員会

白木原和美編　1991『神園山瓦窯址』新熊本市史編纂委員会

髙木正文・村崎孝宏編　1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第 166 集　熊本県教育委員会

田崎博之　2007「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」『土器研究の新視点～縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～』考古学リーダー 9　大手前大学史学研究所編　六一書房

棚田昭仁、坂梨祐子編　2000『挟間宮ノ下遺跡（遺構編）』豊前市文化財調査報告書第 13 集

栗焼憲児、棚田昭仁、坂梨祐子編　2000『挟間宮ノ下遺跡（遺物編）』豊前市文化財調査報告書第 14 集

富田紘一　1983a「付論 2 西山南麓の未紹介遺跡」『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会

富田紘一　1983b「弓削宮原遺跡」『吉原遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会

富田紘一　1983c「中江町遺跡」『吉原遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会

富田紘一　1996a「上古閑遺跡（トンノマエ（天神林）地点・イゾミテ地点）」『新熊本市史』史料編第 1 巻考古資料　新熊本市史編纂委員会

富田紘一　1996b「弓削宮原遺跡」『新熊本市史』 史料編第 1 巻　考古資料　新熊本市史編纂委員会

富田紘一　1996c「中江町遺跡」『新熊本市史』史料編第 1 巻　考古資料　新熊本市史編纂委員会

原田範昭　1999「中九州における弥生時代後期土器の編年―熊本平野部の土器にみる社会背景―」『白木原和美先生古稀記念献呈論文集　先史学・考古学論究Ⅲ』 龍田考古会

古森政次　1994『ワクド石遺跡 － 熊本県菊池台地における縄文後期集落の調査 － 』熊本県文化財調査報告第 144 集　熊本県教育委員会

松本健郎編　1980『生産遺跡基本調査報告書　Ⅱ－須恵器・窯跡・瓦窯跡・陶磁器窯跡－』熊本県文化財調査報告　第 48 集　熊本県教育委員会

三好栄太郎　2014『法王鶴遺跡Ⅰ』 熊本市の文化財第 33 集　熊本市教育委員会

山本信夫　2000『大宰府条坊跡 XV －陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会

九州縄文研究会　2000『九州の縄文住居』第 10 回九州縄文研究会　福岡大会

九州縄文研究会　2008『九州の縄文住居』第 18 回九州縄文研究会　熊本大会

1 区　西壁土層断面状況

２Ｔ・３Ｔ礫出土状況

1 区　全景

図版２

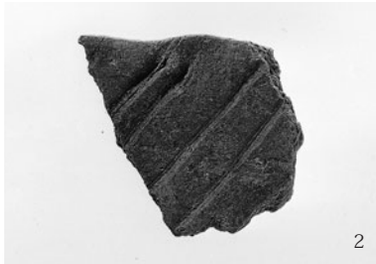
２区・３区　完掘状況

２区・３区　全景

２区　完掘状況

1

1


2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

図版 4

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

ふりがな	たくまゆげいせきぐん・なかえいせき
書名	託麻弓削遺跡群・中江遺跡
副書名	白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 (2)
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第３２１号
編著者	古城　史雄
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒８６２－８６０９　熊本市中央区水前寺六丁目１８－１
発行年月日	平成 28 年３月 25 日

フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺構番号					
タクマユゲイセキグン 託麻弓削遺跡群	熊本市	43201	６７７	32 度 51 分 14 秒	130 度 47 分 14 秒	20140723 ～ 20150303	7,930㎡	記録保存 調査
ナカエイセキ 中江遺跡	熊本市	43201	９２４	32 度 50 分 52 秒	130 度 50 分 46 秒	20140908 ～ 20150219	1,074㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
託麻弓削遺跡群	集落	縄文 弥生 古代	竪穴建物 掘立柱建物	縄文土器 弥生土器 土師器・須恵器	
中江遺跡	包蔵地	縄文 弥生 古代	ピット	縄文土器 弥生土器 土師器	

要　約	託麻弓削遺跡群は、３地区で調査を実施した。下流の１区は遺構に伴うものではないが、８世紀後半から 13 世紀にかけての土師器・須恵器・瓦・陶磁器類が出土し、村落の中心がこの付近にあった可能性を思わせる。２区では縄文時代後・晩期の竪穴建物１軒を検出している。焼失建物の可能性が高いと考えている。上流の３区では弥生時代後期の竪穴建物４軒のほか、性格不明な遺構を数件検出している。隣接地で熊本市も調査を行っているが、そこでは弥生時代中期の竪穴建物が検出されている。このように調査区で検出した時代・時期が異なっているのは興味深い。 一方中江遺跡は、調査面積が狭いため明確な遺構は確認出来ていないが、縄文時代中期から晩期にかけての遺物のほか、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。

熊本県文化財調査報告第 321 集

託麻弓削遺跡群・中江遺跡

発行年月日　平成 28 年 3 月 25 日

編集・発行　熊本県教育委員会

〒 862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印刷・製本　弘栄印刷株式会社

〒 861-8038　熊本県熊本市東区長嶺東 8 丁目 6 番 1 号

発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：平成２７年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第３２１集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：託麻弓削遺跡群・中江遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺６丁目 18 番１号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦２０１７年１０月５日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/